ISSN 2187-4441
ISSN-L 0289-8160

大学入試研究の動向

令和６年度 全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会（第 19 回）

令和６年(2024 年)12 月 独立行政法人大学入試センター 42 号

大学入試研究の動向

42 号

独立行政法人大学入試センターは，令和 6 年 5 月 23 日～25 日，大阪公立大学との共催で，令和 6 年度全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会（第 19 回）をオンラインで開催した。本報告書は，同大会における講演，討論等を当センターの文責で採録したものである。

＊本報告書で言及されている高大接続改革の進捗状況及び講演者の肩書等は，大会開催当日のものである。

目　　次

令和６年度全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会（第１９回）特集

◉ 全体会１（大学入試センターセミナー）

「大学入学者に対する追跡調査研究の現状と展望」 …… **3**

◉ 全体会２

「見過ごされがちな高大接続課題：
不本意入学，ミスマッチ入学，学力不足」 …… **89**

◉ 全体会３

「入試問題の出題・採点ミスを防止するしくみとは」 …… **167**

全体会１（大学入試センターセミナー）

「大学入学者に対する追跡調査研究の現状と展望」

司　　会：　桜井 裕仁（大学入試センター 研究開発部教授）
　　林 篤裕（名古屋工業大学 教授）

はじめに　大学入試センターの追跡調査研究プロジェクトの紹介と
　　本セミナーの趣旨説明 5
　　桜井 裕仁（大学入試センター 研究開発部教授）

報 告 ①　入学者選抜の効果検証，追跡調査を俯瞰する 12
　　西郡 大（佐賀大学 アドミッションセンター長，教授）

報 告 ②　入学直前・直後のアンケート結果を用いた追跡調査 25
　　平井 佑樹（信州大学 全学教育センター准教授）

報 告 ③　入学者選抜と大学教育とのマッチング評価に基づく PDCA サイクルの必要性
　　..... 37
　　安永 卓生（九州工業大学 理事，副学長（教育接続・連携 PF，情報担当））

報 告 ④　私立大学保育者教員養成学部における入試区分と卒業後の進路 54
　　竹内 聖彦（椙山女学園大学 教育学部教授）

報 告 ⑤　教育改善のための追跡調査の活用と課題 － 早稲田大学の事例 66
　　遠藤 健（早稲田大学 大学総合研究センター講師）

全体討論 76

内　　容：

大学入試センターでは，共通試験（大学入学共通テスト，大学入試センター試験）の妥当性検討の一環として，共通試験利用大学と協働した大学入学者の追跡調査研究プロジェクトを企画している。他方，個別大学では，入学者選抜方法や入学者に対する大学教育の改善等を目的として，各大学の事情に応じて様々なアプローチで追跡調査が行われている。後者の研究成果は，公表されないものも少なくないが，1991 年創刊の『大学入試研究ジャーナル』をはじめとして，「全国大学入学者選抜研究連絡協議会」（2006 年度以降，現在まで）やその前身である「国立大学入学者選抜研究連絡協議会」（1980～2005 年度）の大会を中心に発表されている。『大学入試研究ジャーナル』では，毎号追跡調査関連の論文が発表さ

れており，個別大学の追跡調査に関する成果だけではなく，追跡調査研究に関するサーベイ論文も発表されるようになってきている。

追跡調査で分析対象とするデータは多岐にわたり，例えば，高等学校時代，大学入試，及び大学入学後の成績，学生や教員へのアンケート調査の結果，国家試験・資格試験の合否，大学院進学や就職等の進路までもが含まれる。加えて，卒業生に対して調査が行われる場合もある。追跡調査ではこのような種々のデータが分析対象となっており，これらをどのように取り扱うかも一つのキーになっているように思われる。

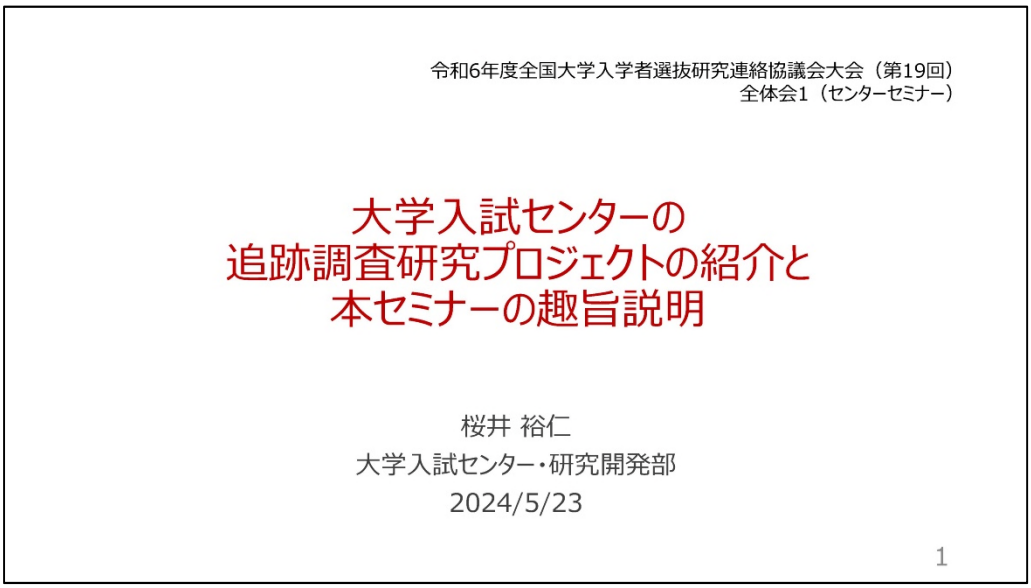
本セミナーでは，まず，大学入試センターで行われている追跡調査研究プロジェクトの準備状況を紹介する。次に，個別大学で行われている追跡調査研究について，これまでに『大学入試研究ジャーナル』に掲載されてきた追跡調査に関する論文の中から，幾つかの切り口において代表的な事例紹介を行う。事例紹介においては，各大学ではどのような目的で追跡調査を行い，それをどのように行うのか，そしてどのような成果が得られたのか，また，今後の課題としてどのようなことがあるのか等を報告いただく。これらの紹介を通して，追跡調査研究における各種の課題や今後の展望等を共有し，参加者の方々が追跡調査を計画する際のヒントにしていただくことを願っている。

全体会 1（センターセミナー）◉ はじめに

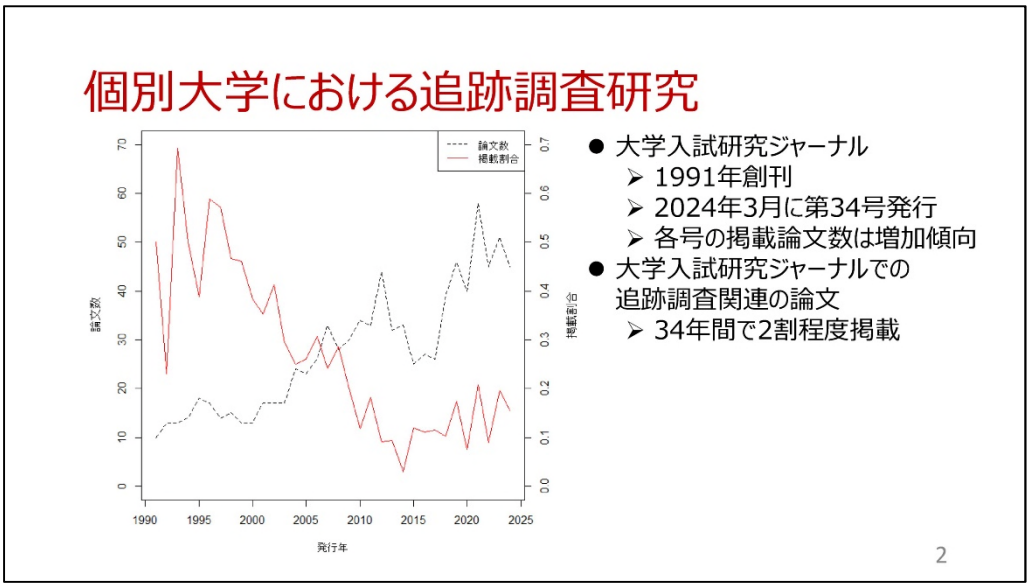
大学入試センターの追跡調査研究プロジェクトの紹介と本セミナーの趣旨説明

■桜井　裕仁（大学入試センター　研究開発部教授）

入研協大会（第 19 回）の全体会１（センターセミナー），「大学入学者に対する追跡調査研究の現状と展望」を始めます。私は本セミナーの司会を務めます，大学入試センターの桜井と申します。私からは本セミナーの趣旨説明と大学入試センターで行っている追跡調査研究プロジェクトの紹介をします。



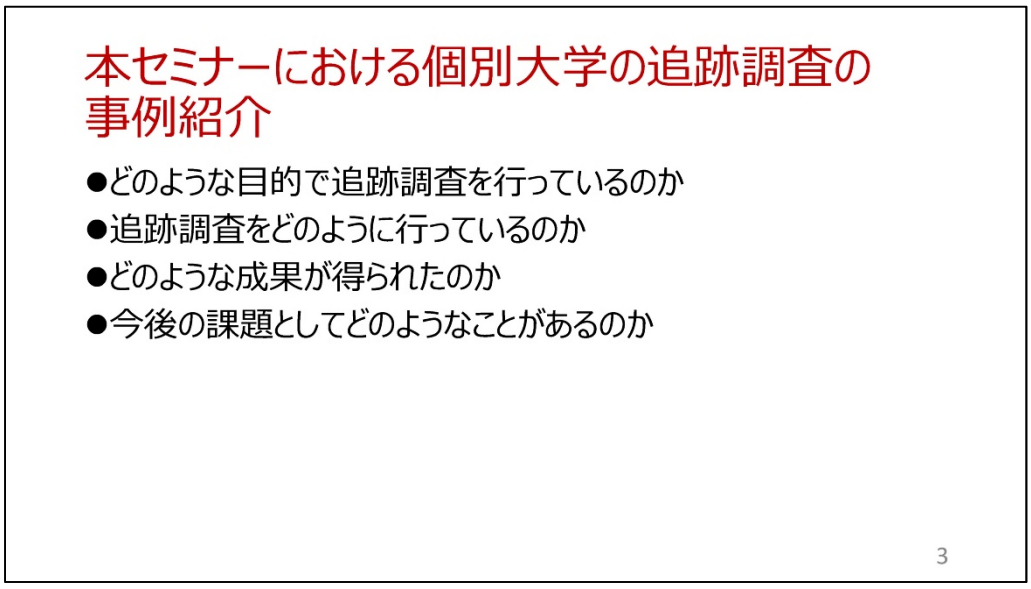
個別大学における追跡調査研究は，入学者選抜方法や入学者に対する大学教育の改善等を目的として，大学の事情に応じてさまざまな形で行われています。追跡調査研究の成果は，公表されないことも少なくないですが，入研協大会や『大学入試研究ジャーナル』を中心に発表されています。『大学入試研究ジャーナル』は 1991 年に創刊され，以降毎年発行されています。今年の 3 月には第 34 号が発行され，第 21 号以降は，J-STAGE でもご覧いただけます。



この図は，『大学入試研究ジャーナル』に掲載された毎年の論文数と，追跡調査関連の論文の掲載割合を示した折れ線グラフです。左側の縦軸は論文数を表し，図中の黒い破線と対応しています。一方，右側の縦軸は追跡調査関連の論文の掲載割合を表し，図中の赤い実線と対応しています。横軸は発行年を表しています。

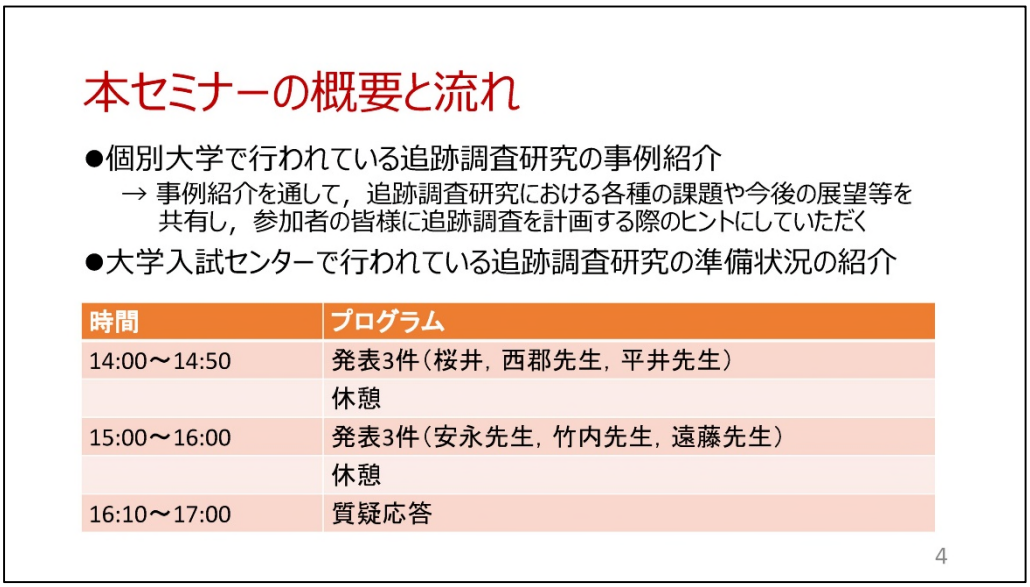
追跡調査関連の論文は，『大学入試研究ジャーナル』に毎号掲載されており，900 編以上の論文のうち 200 編ほど，全体の約 2 割強が追跡調査関連の論文です。直近の 10 年についても，1 割から 2 割程度が追跡調査関連の論文です。

また『大学入試研究ジャーナル』では，個別大学の成果だけではなく，追跡調査研究に関するサーベイ論文も発表されるようになってきています。



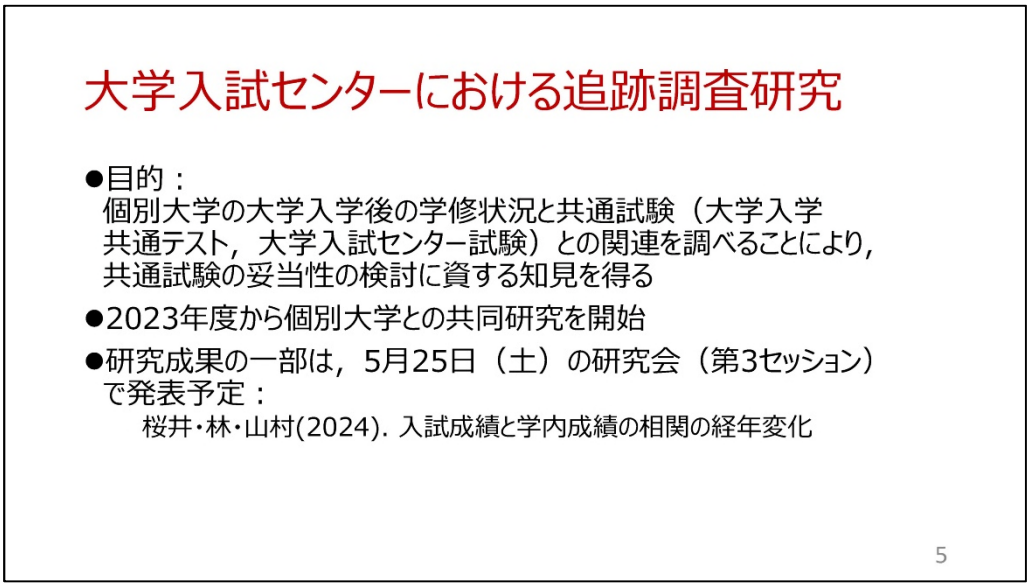
本セミナーでは個別大学の追跡調査の事例紹介を行います。それぞれどのような目的で行っているのか，追跡調査をどのように行っているのか，追跡調査を行った結果，どのよう

な成果が得られたのか，今後の課題としてどのようなことがあるのかについて，お話しいただきます。



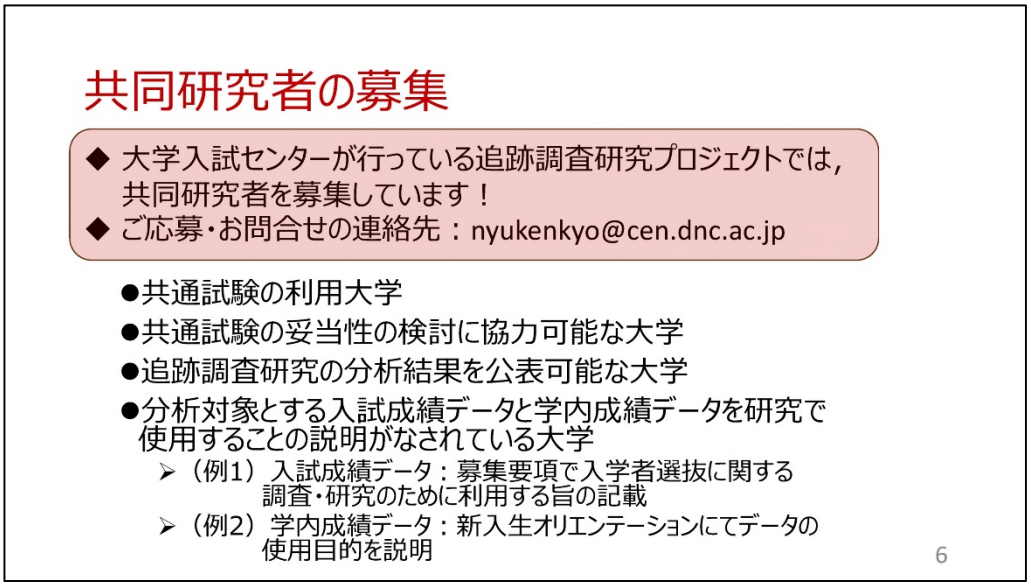
本セミナーは，事例紹介を通じて追跡調査研究における各種の課題や今後の展望等を共有し，参加者の皆さまに追跡調査を計画する際のヒントにしていただくことを目的としています。また本セミナーでは，大学入試センターで行われている追跡調査研究の準備状況を紹介します。

本セミナーの趣旨説明の後に西郡先生，平井先生の発表があり，発表終了後に 1 回目の休憩を入れる予定です。次に安永先生，竹内先生，遠藤先生の発表があり，発表終了後に 2 回目の休憩を入れる予定です。そして最後の 50 分ほどは参加者の皆さまからの質問にできるだけ回答できるようにするため，質疑応答の時間をまとめて取る予定です。



それではここで，大学入試センターで行っている追跡調査を紹介します。本調査は個別大学の大学入学後の学修状況と共通試験との関連を調べることにより，共通試験の妥当性の検討に役立つ知見を得ることを目的としています。ここでいう共通試験とは，大学入学共通テスト，大学入試センター試験のことです。

この研究プロジェクトは昨年度から行われています。この研究による成果の一部は 5 月 25 日土曜日の午前中に開催される研究会の第 3 セッションで報告する予定ですので，ご興味のある方はぜひこちらのセッションにもご参加ください。



なお，センターの追跡調査研究プロジェクトでは共同研究者を募集しています。共通試験の妥当性の検討に役立つ知見を得るという研究目的に賛同いただき，共同研究を進めていただける方がいらっしゃいましたら，ぜひ入研協事務局までお知らせください。ただし，共通テストの妥当性に関する研究を行うため，共通テストを利用している大学であることや，今後研究成果を公表していきたいと考えていますので，分析結果を公表できること，また入試成績や学内成績のデータを研究で利用できることなどの点に関しては，あらかじめご確認いただきたく，どうぞよろしくお願いします。

それではこれから本セミナーで報告いただく 5 名の先生方を紹介します。

報告①

「入学者選抜の効果検証，追跡調査を俯瞰する」
・・・・・ 西郡 大（佐賀大学 アドミッションセンター長，教授）

●大学入試研究ジャーナルの関連論文
- 入学者選抜の効果検証の在り方に関する考察 (2021)
- 個別大学の追跡調査に関するレビュー研究 (2011)

7

報告①では，佐賀大学の西郡先生にお話しいただきます。

報告②

「入学直前・直後のアンケート結果を用いた追跡調査」
・・・・・ 平井 佑樹（信州大学 全学教育センター准教授）

●大学入試研究ジャーナルの関連論文
- 信州大学インターネット出願時アンケート結果の分析(2)
  ――アンケート回答内容と入学後成績との関係―― (2023)
- 高等学校における数学および理科の履修状況に関するアンケートの分析(3)
  ――学部初年次の学業成績との関係―― (2021)
- 高等学校における数学および理科の履修状況に関するアンケートの分析 (2019)

8

続きまして報告②では，信州大学の平井先生にお話しいただきます。

報告③

「入学者選抜と大学教育とのマッチング評価に基づくPDCAサイクルの必要性」
・・・・・ 安永 卓生（九州工業大学 理事，
副学長（教育接続・連携PF，情報担当））

●大学入試研究ジャーナルの関連論文
- 九州工業大学における多面的・総合的な入試の制度設計検証
——評価結果および「ジェネリック・スキル」等の比較からの一考察—— (2021)
- 入学者選抜と各種評価法による伸びしろの分析 (2020)
- 九州工業大学における入試区分毎のPROG・GPAを用いた追跡調査と制度設計 (2019)

9

続きまして報告③では，九州工業大学の安永先生にお話しいただきます。

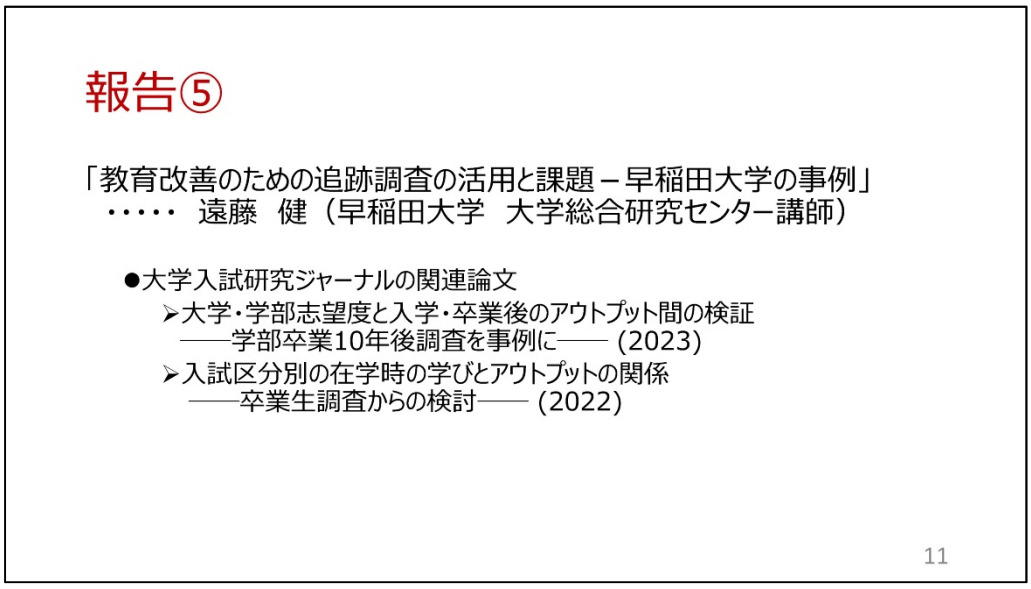
報告④

「私立大学保育者教員養成学部における入学区分と卒業後の進路」
・・・・・ 竹内 聖彦（椙山女学園大学 教育学部教授）

●大学入試研究ジャーナルの関連論文
- 私立大学保育者養成学部における入試区分と卒業後の進路との関連(II) (2021)
- 私立大学保育者養成学部における入試区分と卒業後の進路との関連 (2020)
- 私立大学教員養成学部における入試区分と卒業後の進路との関連 (2019)

10

続きまして報告④では，椙山女学園大学の竹内先生にお話しいただきます。



最後の報告⑤では，早稲田大学の遠藤先生にお話しいただきます。

それでは各先生から報告をしていただきたいと思います。最初は佐賀大学の西郡先生です。よろしくお願いします。■

全体会 1（センターセミナー）◉ 報告 1

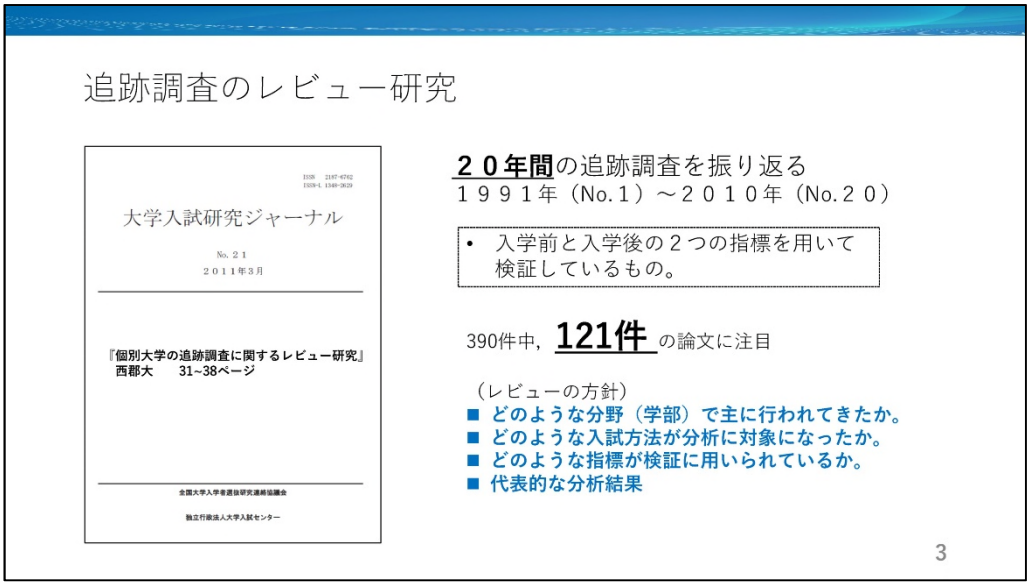
入学者選抜の効果検証，追跡調査を俯瞰する

■西郡　大（佐賀大学アドミッションセンター長，教授）

佐賀大学の西郡です。



「入学者選抜の効果検証，追跡調査を俯瞰する」というテーマでお話しします。タイトルでは「効果検証，追跡調査」という順番となっていますが，追跡調査から見ていきたいと思います。



まず追跡調査に関し，『大学入試研究ジャーナル』のレビューということで，1991 年の創刊号から，2010 年までの 20 年間の追跡調査を振り返ります。

全論文 390 件のうち 121 件の，入学前と入学後の 2 つの検証指標を用いて検証した論文に注目して整理しました。どのような分野（学部）で主として行われていたか，どのような入試方法が分析の対象になっていたか，どのような指標を用いて検証を行ったのか，そして代表的な分析結果について整理したものです。

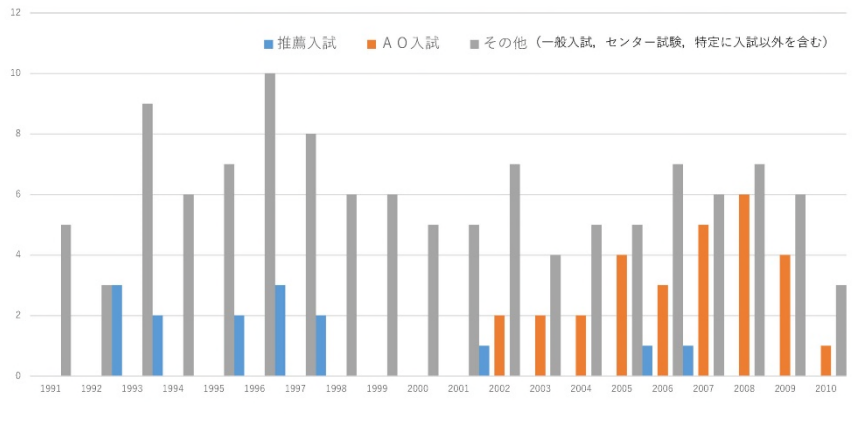
分野別の内訳

分野別	件数	分野別	件数
医学	38	体育	2
理学･工学	26	工芸･繊維	2
全学共通	19	教養	1
複数学部	16	経済	1
教育	6	歯学	1
情報	5	薬学	1
看護	2	その他	1
合計	121		

4

分野別の内訳を見ると，一番多かったのは医学系の分野です。そして理学・工学，全学共通，複数学部という順になっています。医学系が多いのは当時，例えば山梨医科大学，宮崎医科大学，佐賀医科大学などの医学系単科大学の先生方が非常に熱心に追跡調査をなされていて，そういった成果がこの論文数となっているためです。この内訳から理系分野の追跡調査が比較的多かったということが分かります。

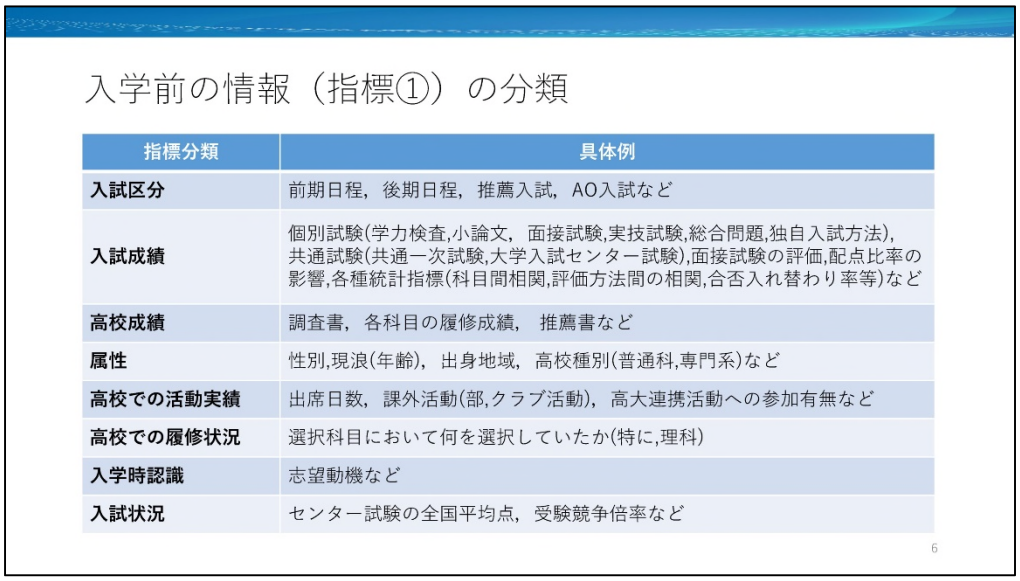
入試種別にみる傾向



5

ではどういった入試の種別，入試区分を対象とした追跡調査が多かったのかといいますと，1990 年代は一般入試やセンター試験利用入試，編入学など，さまざまな入試一般に関して，いろいろと追跡調査が行われてきました。その中で少数ですが推薦入試にも注目した追跡調査が行われています。

そして，AO 入試元年と言われている 2000 年以降，AO 入試を対象とした追跡調査が実施されてきました。2008 年には 6 件の AO 入試を対象とした追跡調査が報告されています。



入学前の情報（指標①）の分類

指標分類	具体例
入試区分	前期日程，後期日程，推薦入試，AO入試など
入試成績	個別試験(学力検査,小論文，面接試験,実技試験,総合問題,独自入試方法), 共通試験(共通一次試験,大学入試センター試験),面接試験の評価,配点比率の影響,各種統計指標(科目間相関,評価方法間の相関,合否入れ替わり率等)など
高校成績	調査書，各科目の履修成績，推薦書など
属性	性別,現浪(年齢)，出身地域，高校種別(普通科,専門系)など
高校での活動実績	出席日数，課外活動(部,クラブ活動)，高大連携活動への参加有無など
高校での履修状況	選択科目において何を選択していたか(特に,理科)
入学時認識	志望動機など
入試状況	センター試験の全国平均点，受験競争倍率など

6

では分析に用いていた指標について，まず１つ目の指標①「入学前の情報」では，大きく８つの分類に分けられます。まずは入試区分に該当するもの，そして入試に関する成績です。個別試験の成績，共通試験の成績，面接の得点や選考に用いたスコア等が対象になります。次に調査書の評定平均や，さまざまな履修の成績といった高校の成績，そして属性に関するものです。出席日数や課外活動など，高校でどういう活動をしていたのかを対象にしたものもあります。さらには高校での履修状況として，特に医学部では，理科のうち，生物，化学，物理のどれを履修していた学生が入学後にしっかりと学習ができていたのかを見ていったものが多かったです。また，志望動機などの入学時の認識と，最後は入試の状況です。全国的な状況ということで，センター試験の全国平均や競争倍率等を使っています。

入学後の情報（指標②）の分類

指標分類	具体例
入学後学業成績	教養教育,一般課程教育,専門教育等の修学状況(取得単位数やGPAの成績等),教育実習参加資格など
学生の意識・活動等の調査結果（学生対象の調査）	大学生活や課外活動等の満足度および不満,入学後の活動履歴,学生自身の自己評価,授業の理解度,留学経験,教員との交流,入学前後ギャップ認識など
医師国家試験の合否	合格率や不合格者など
卒業後進路	大学院進学率，就職先企業形態(民間,公務員など)，教員採用実績など
留年・ドロップアウト	進学率，卒業率，休学者，中途退学者，除籍者など
教員による評価	指導教員による学生の評価
卒業研究の評価	卒業論文および卒業研究の評価など
卒業後の活動状況	卒業後所属機関の担当者による評価，卒業後の所属機関での活動など
その他	大学独自指標，履修パターンや入学後コース選択，大学院入試の成績，共用試験の成績,就職面接(学内模擬面接の評価),学生のピアレビューなど

一方で，入学後の成果となる指標としては，この指標②として表にまとめています。多く用いられるのは，入学後の学業成績で，主に取得単位数や GPA に関するものです。

アンケート調査が中心になりますが，学生の意識や活動等の調査から得られる情報，医学部では国家試験の合否，主に理工系学部では卒業後の進路として大学院に進学したかといったことに関するもの，更に留年・ドロップアウトに関する情報があります。そして指導教員による学生の評価であるとか，卒業研究に対する評価というものもあります。あとは卒業後の活動状況です。これはデータを取るのは大変だと思いますが，卒業後の所属機関，つまり医学部を卒業した後の研修機関における評価が材料として使われています。その他には大学独自の指標や，学生のピアレビュー，大学院入試の成績などが含まれ，多種多様な情報が成果指標に用いられたということになります。

「指標①」と「指標②」の利用状況

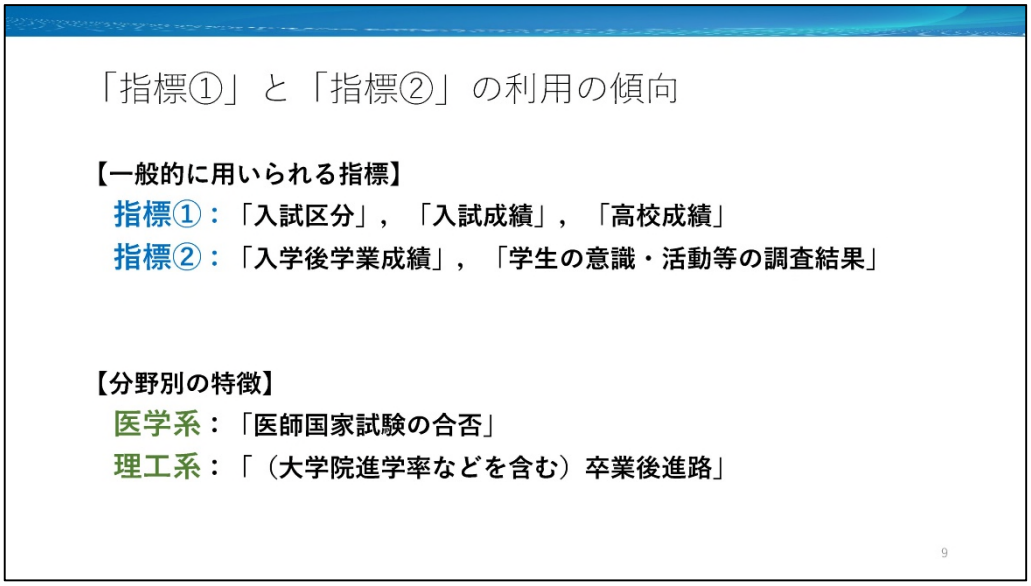
	入学後成績	学生対象調査結果	医師国家試験結果	卒業後進路	留年・ドロップアウト	教員評価	卒業研究評価	卒業後活動	その他	合計
入試区分	62	16	4	9	9	6	2		6	**114**
入試成績	55	5	8	3	9	3	3	2	6	**94**
高校成績	24	1	4	5	2	2	2	2	1	**43**
属性	10	1	3	3	3	1	1	1		**23**
高校での活動実績	7	3	2	1	2	1	1		1	**17**
高校での履修状況	4	1			2					**7**
志望動機	1	2		1			1			**5**
入試状況	1		2							**3**
合計	**164**	**29**	**23**	**22**	**27**	**13**	**10**	**5**	**12**	**305**

分野別の傾向は，論文を参照してください。

8

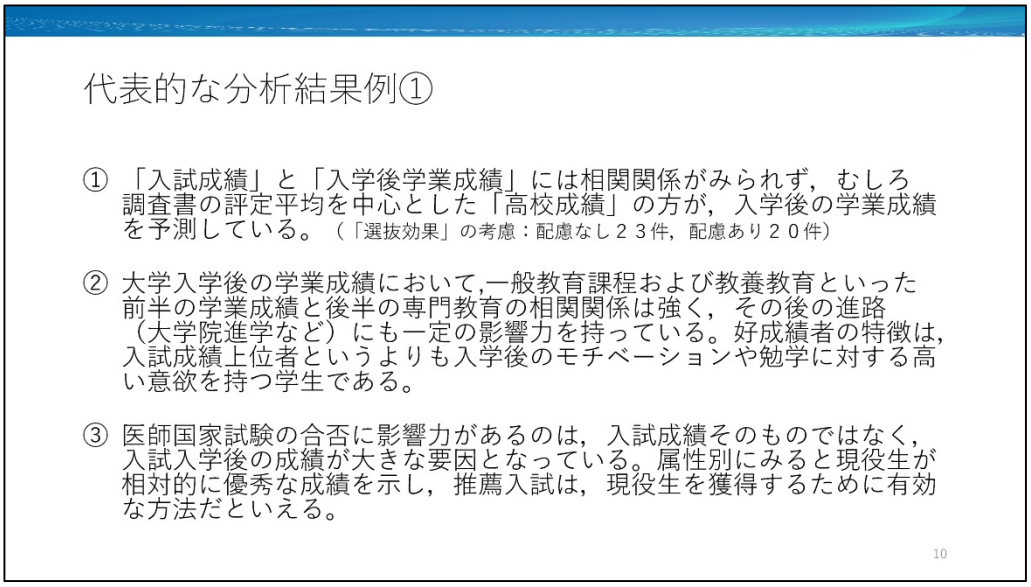
こちらは指標①と指標②の利用状況をクロス集計した表です。縦軸の緑色が指標①で，横軸の青色が指標②です。最も多く見られた組み合わせは「入試区分と入学後の成績」で，例えば推薦と前期日程と後期日程等の区分別に入学後の成績はどうだったのかということを指します。続いて，入試成績と入学後成績として，入試の得点が高かった学生は入学後どうだったのかといった，相関関係を見るようなものが比較的多く見られました。

一方でこの学生対象の調査結果に関しては，AO 入試が導入されてきた後に比較的多く見られました。学業以外の側面を見るため，学生を対象としたアンケート調査のデータを用いて，学力以外の面ではどういった傾向が見られるのかを検証したものが多く見られます。それぞれの分野別にも整理していますので，それに関しては論文をご参照ください。



①と②の利用の傾向をまとめたスライドです。一般的に用いられる指標としては入試区分，入試成績，そして高校の成績です。そして成果の②は入学後学業成績，学生の意識・活動等の調査結果の 2 つということになります。

分野別の特徴としては医学系では「医師国家試験の合否」が理工系では「(大学院進学率などを含む）卒業後の進路」がよく用いられています。これは教員養成系でも比較的多く見られました。



では追跡調査の分析結果について，代表的な例を少し紹介いたします。

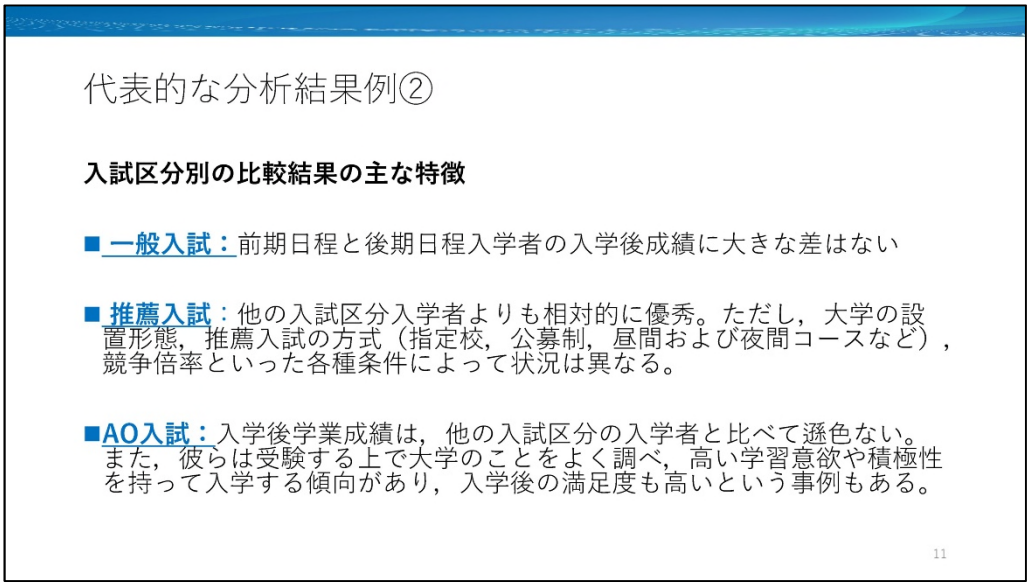
まず 1 つ目は，「入試成績」と「入学後の学業成績」には相関関係が見られず，むしろ調査書の評定平均を中心とした「高校成績」のほうが，入学後の学業成績を予測しているという結果を記述している論文です。

その際，「選抜効果」の問題があります。入試成績と入学後の成績を比較すると，入試成績は入試に直接的に用いている材料のため合格・不合格に関わらずデータが存在しますが，入学後の成績については不合格者のデータは存在しません。したがって入試成績と入学後成績の相関は見かけ上小さくなる一方で，高校成績と入学後成績の相関は相対的に大きくなるため，入試成績よりも高校成績を用いる方が良いという主張があります。この選抜効果を配慮せずにそのまま相関関係を主張している論文が 23 件，配慮した論文が 20 件ありました。

2 つ目に，入学後の学業成績において，一般教育課程および教養教育といった前半の学業成績と後半の専門教育の相関関係は強く，その後の進路にも一定の影響力を持っているということです。好成績の学生の特徴は，成績上位者というよりも，入学後のモチベーションや，勉学に対する高い意欲を持つ学生であるという知見が多く見られています。

3 つ目は医師国家試験について，医学部系において合否に影響力があるのは，入試成績そのものではなくて，入学後の成績であるということです。属性別に見ると，現役生が相対的に優秀な成績を示していて，推薦入試は現役生を獲得するために有効だという知見が得られました。

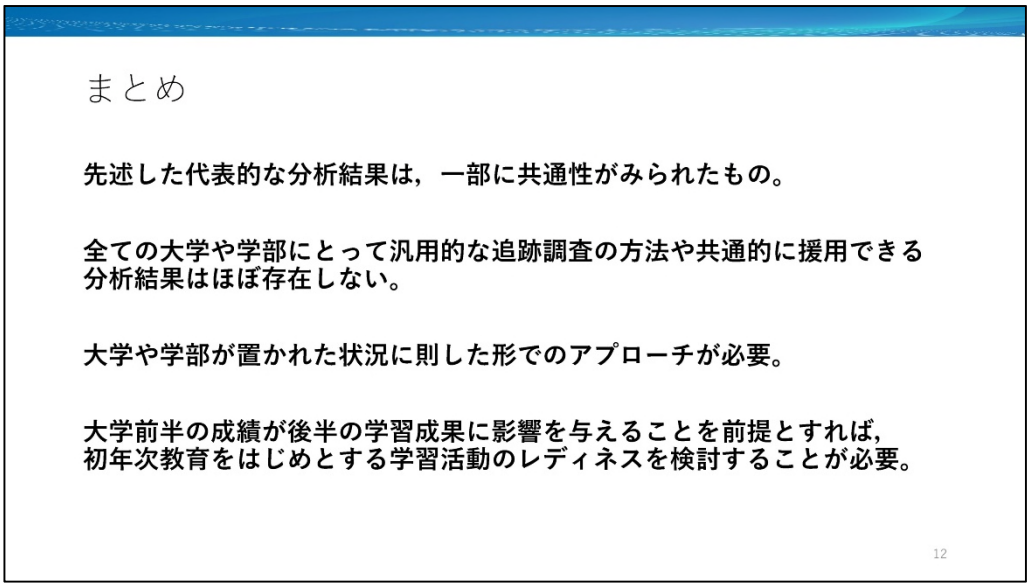
このように入学後の前半部分の成績と卒業時の成績が相関するということは，さまざまな研究で言われていることだと思います。こういった検証を通じて，共有されて，初年次教育の重要性が言われているのだと思っています。



その他には入試区分別に比較結果した主な特徴として３つ整理しています。まず一般入試では国公立大学が中心になりますが，前期日程と後期日程の入学者の入学後の成績に大きな差はないという特徴があります。

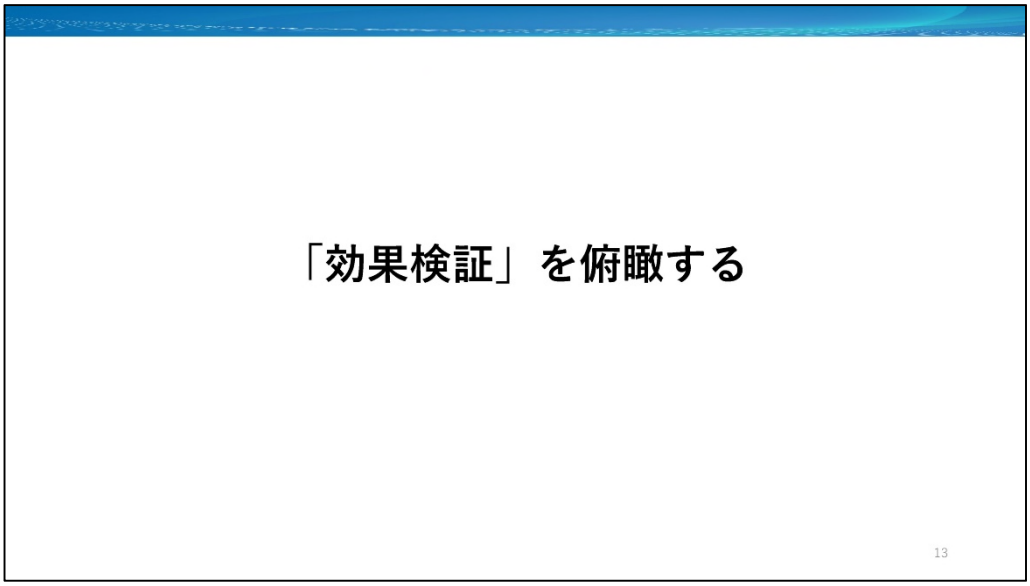
推薦入試については，他の入試区分の入学者よりも相対的に優秀ということです。ただ大学の設置形態とか，推薦入試の方式，これは私学も含め，指定校，公募制等，さまざまなものがありますが，そういった条件を加味すると，状況はさまざまです。

AO 入試については，入学後の学業成績は，他の入試区分の入学者と比べて遜色はないということです。これはあくまでピックアップした論文が導いた結果ということになります。また彼らは受験をする上で大学のことをよく調べていて，高い学習意欲や積極性を持って入学する傾向があって，入学後の満足度も高い事例があるということが，対象論文からは見受けられます。

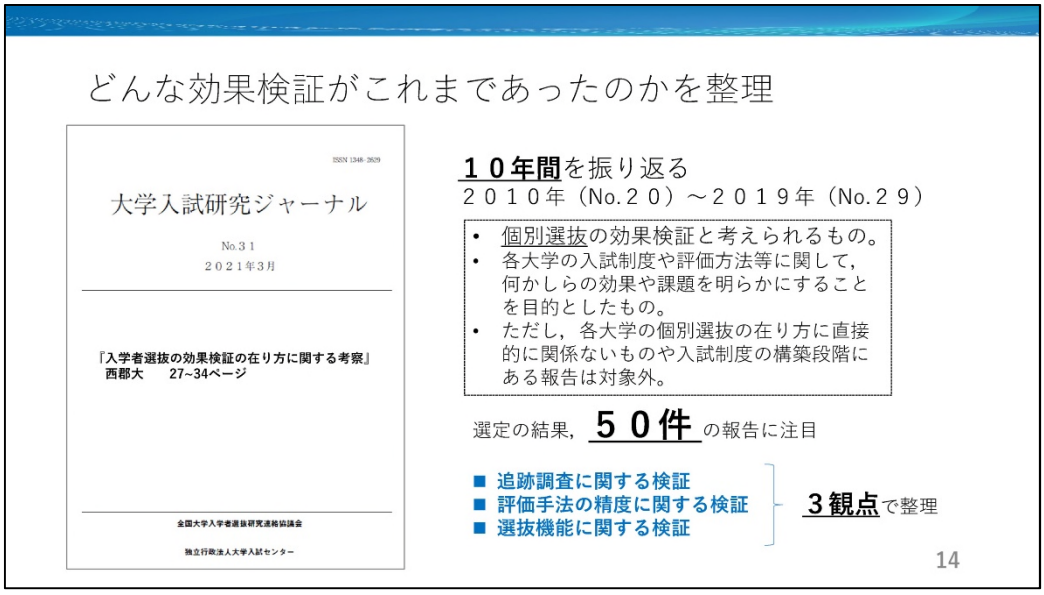


追跡調査に関するまとめです。今，幾つか代表的な分析結果をご紹介しましたが，これはいろいろとある中で，一部に共通性が見られた事例ということです。今の結果が全ての大学や学部にとって汎用的な調査の方法であるとか，共通的に援用できるようなものではありません。この方法をやれば確実に期待する効果，結果が得られるというわけではありません。

そういった意味では大学や学部が置かれた状況に即した形での追跡調査，アプローチが必要になってきます。また，そうはいっても，大学前半の成績が後半の学習成果に影響を与えているという共通する知見がありますので，そういったことを前提とすると，アドミッションポリシーにも関わってくると思いますが，やはり初年次教育をはじめとする学習活動のレディネスを検討することが必要と思われます。

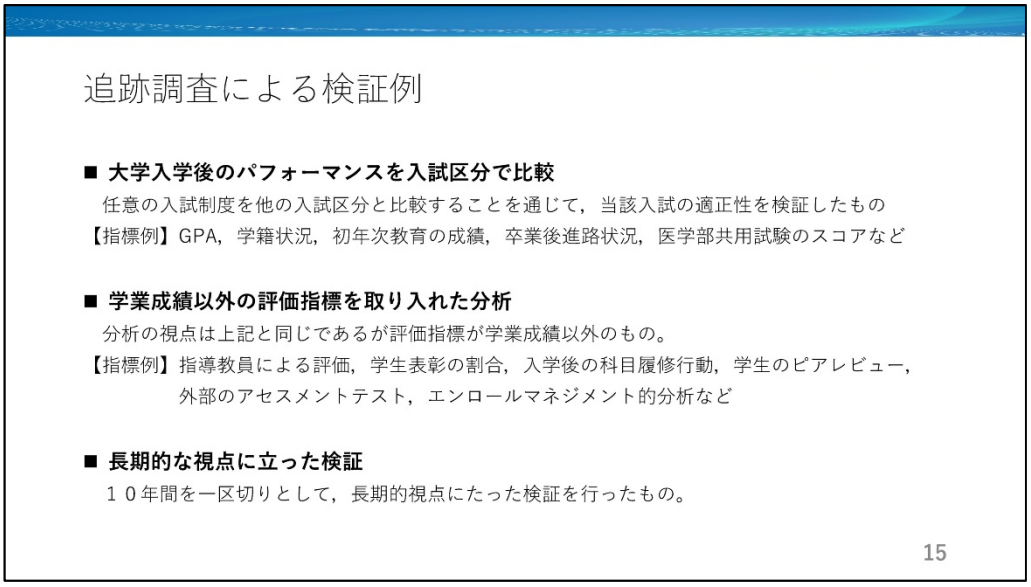


続いて効果検証です。追跡調査も含めた，もう少し広い範囲の効果検証というものを俯瞰したいと思います。



こちらは 2010 年から 2019 年までの 10 年間を振り返ってレビューした内容です。この後，ご報告をされる先生方は基本的に 2019 年以降の研究が対象になりますので，それ以前の研究がこの対象となっています。

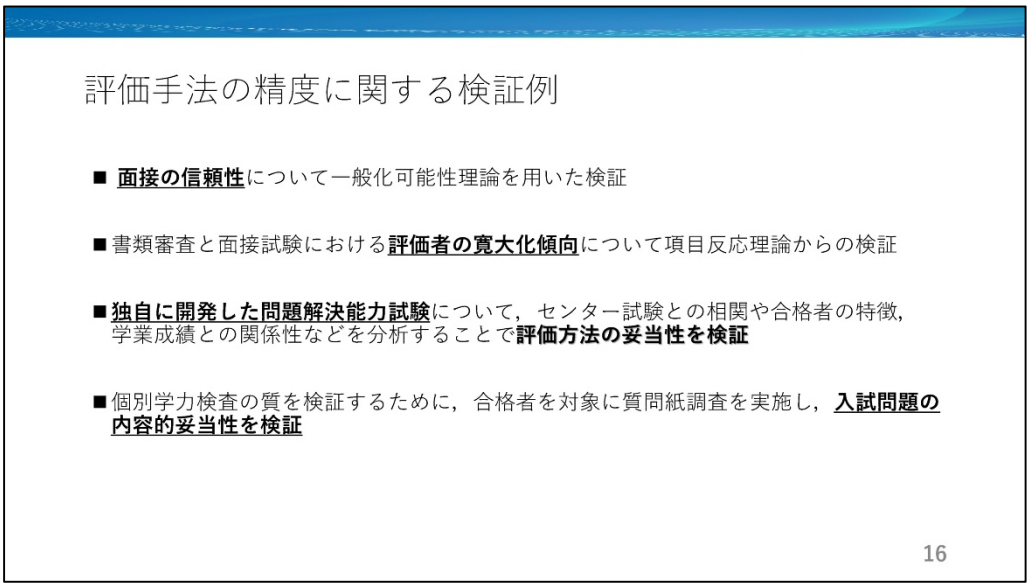
どのような視点で見たのかといいますと，各大学の個別選抜の効果検証と考えられる内容を対象としています。各大学の入試制度や，評価方法等に関して，何らかの効果と課題を明らかにする研究です。ただし，各大学の個別選抜の在り方に直接的に関係ない報告や，入試制度の構築段階にある報告は対象外としていて，50 件を整理しました。



ここにある 3 つの観点で整理しています。それぞれ順に見てみますと，追跡調査に関する検証例ということで，先ほど，「追跡調査を俯瞰する」というところで見た内容と重複する部分がありますが，大学入学後のパフォーマンスを入試区分で比較するという報告が多く見られます。任意の入試制度，例えば AO 入試であれば，AO 入試と他の入試区分の比較を通じて，当該入試の適正性を検証した報告です。使われている指標はここに並んでいるようなものです。

また，学業成績以外の評価指標です。先ほど入学後の情報（指標②）で紹介しました，学生を対象としたアンケート調査以外にも，外部のアセスメントテストや，コンピテンシー，リテラシー等に関するものなど，入学から卒業までよりさまざまな情報を学籍番号でつないでエンロールメント・マネジメント的な分析をした報告も見られるようになりました。

また，10 年間を一区切りとして長期的な視点に立った検証です。AO 入試導入から 10 年が経過してどうだったのかという検証を行ったものも見られます。



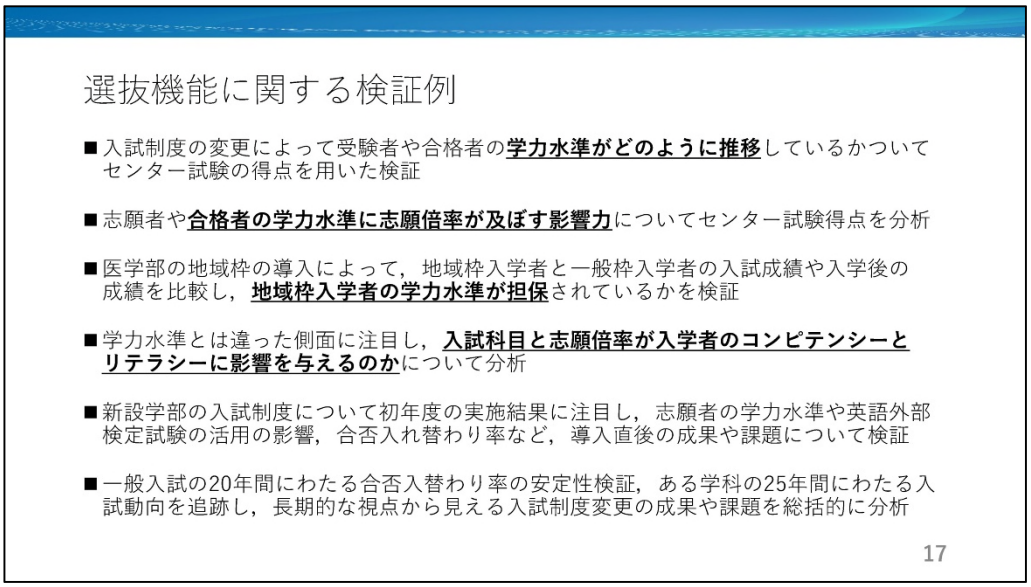
その他には追跡調査以外の評価手法です。今現在，用いている手法の精度を高めたり，改善点があれば見直したりしようというものです。

面接の信頼性について，一般化可能性理論という手法を用いてその精度を検証した事例もあります。

また，書類審査と面接試験における評価者の寛大化傾向について項目反応理論を用いて検証した事例もあります。

更に，独自に開発した問題解決能力試験というものがその大学にあるのですが，そういったものの妥当性について，センター試験の情報や，合格者の特徴などを分析して検証した事例も見られます。

そして，個別学力検査の質を検証するものとして，合格者を対象に質問紙調査を実施し，入試問題の内容的な妥当性を検証した事例も見られました。



次は選抜機能に関する検証例です。受験者や合格者の学力水準が，入試制度の変更によってどのように推移したのかをセンター試験の得点を用いて，それを比較して検証したものが見られます。

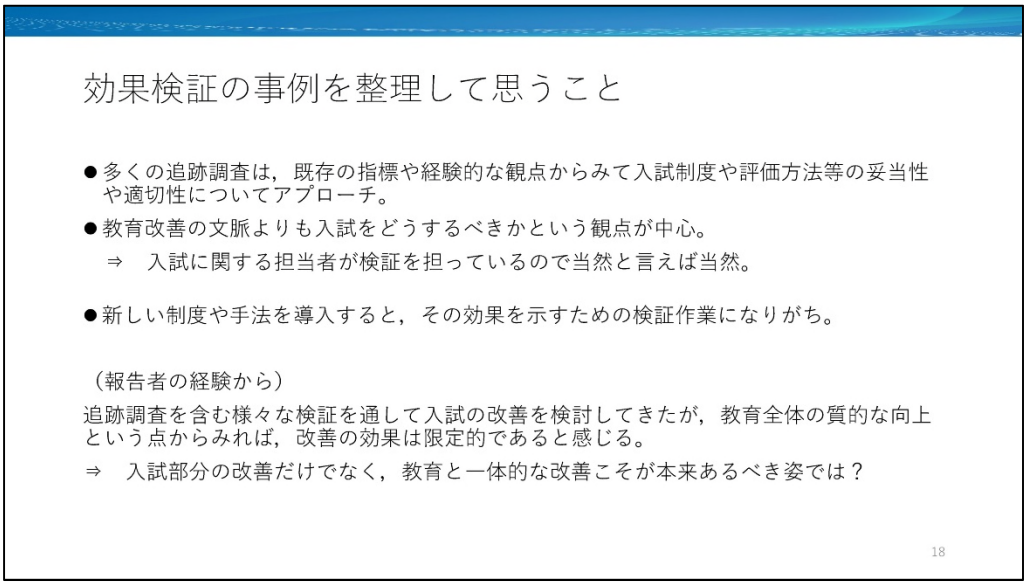
次に志願者や合格者の学力水準に倍率が及ぼす影響をセンター試験の得点を利用して分析したものが見られます。

あとは医学部の事例ですが，地域枠の導入によって，地域枠の入学者と一般枠入学者の入試成績と入学後の成績を比較し，地域枠入学者の学力はどう担保されているのかを見たものもあります。

また，学力水準とは違った側面に注目して，入試科目と志願倍率が，入学者のコンピテンシーとリテラシーにどう影響を与えるのかを見たものもあります。

あとは学部が新設された際に，入試制度の初年度の実施結果に注目して，さまざまな情報を用いた検証がなされたものもあります。

そして最後に，20 年間という非常に長期にわたるデータを使って，合否入れ替わり率の安定性検証ということで，ある学科の 25 年間にわたる入試動向を追跡し，長期的な視点からその成果や課題を見たものが見られます。

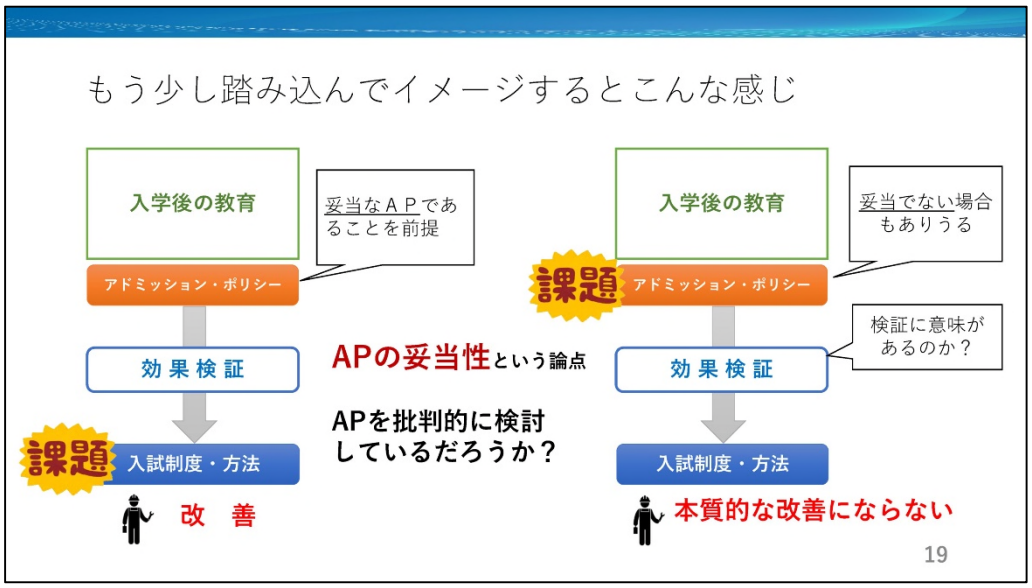


ざっくりとではありますが，こうした効果検証の事例を整理してまいりまして思うことがあります。多くの追跡調査は，既存の，これまで使われてきた指標であるとか，こういった指標が重要であるという経験的な観点をもって成果指標を設定し，入試制度や，評価方法の妥当性，適切性についてアプローチしているところがあるかと思います。

そして入試を対象にしていますので，入学後の教育プログラムとか，カリキュラムの改善という文脈よりも，今，実施している入試をどうすべきか，入試の精度をどう向上させるかという観点が中心の検証が多いです。これは，入試に関する担当者による検証だし，『大学入試研究ジャーナル』自体がそういったタイプですので，当然といえば当然なところがあります。

また，新しい制度や手法を導入すると，その効果を示すための検証作業を進めがちな面があるわけです。

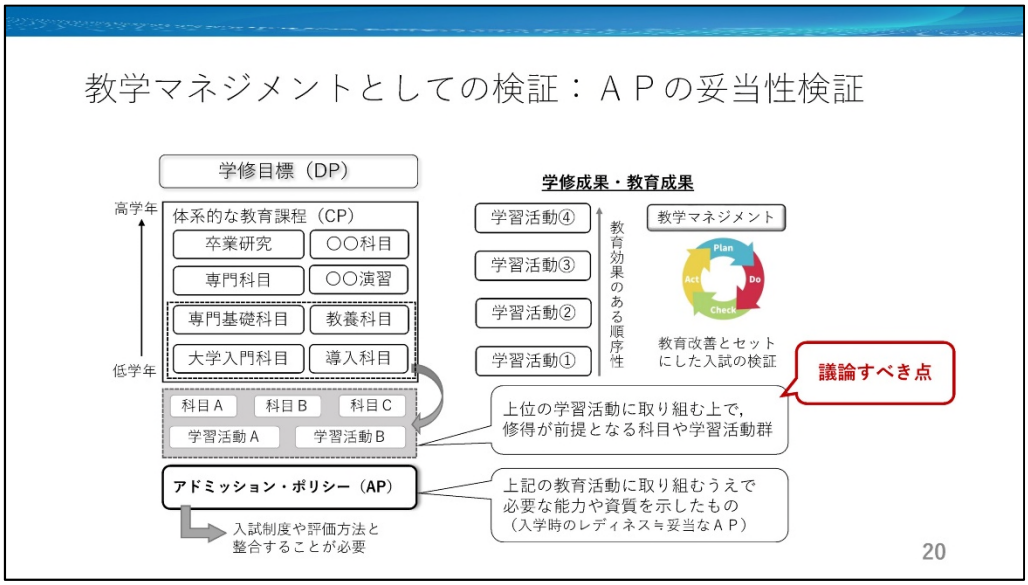
さまざまな追跡調査を含む検証を通して，入試の改善や，評価方法の精度というものを検討してきましたが，教育全体の質的な向上，学位プログラムがより効果的なものになるためにという観点からの検証はあまり見られませんでした。そういった意味では学位プログラム全体の改善の効果という意味では限定的ではあるのではないかと感じています。むしろ入試のみの改善ではなく，教育と一体的な改善こそが本来あるべき姿といいますか，効果検証のあるべきアプローチになるのではないかと思ったところです。



ではどういったところに焦点を当てればいいのかをイメージした図がこちらです。これまでの入試を中心とした検証というのは，このように入学後の教育，カリキュラムがあって，アドミッションポリシーが妥当なアドミッションポリシーであるということを前提に効果検証を行って，そのポリシーに沿った入試ができているかどうか，できていないのであればそこに課題があるということでそれを改善しようというアプローチで行われてきました。

しかし，アドミッションポリシー自体がそもそも妥当でないという場合もあり得るのではないのでしょうか。所与のものとして妥当なものと認識しているアドミッションポリシーが，本当は妥当ではなくて，もっと違った要素をアドミッションポリシーに加えたほうがいいのではないかということもあり得るわけです。

アドミッションポリシーが妥当であるということを前提にしてこうした効果検証を行っても，本質的な改善にはならないこともあるのではないかと思うわけです。そうした時にアドミッションポリシーの妥当性という論点をしっかりと考えて，批判的に検討しているかという視点が重要ではないかと思っています。



最後に，ではどのようにしていくべきかについてまとめます。このようにディプロマポリシーがあって，その達成のためのカリキュラムがあります。このカリキュラムというのは教育効果が最大限になるための順序であるとか，その体系が組まれていると思います。

そうした時に，この学習活動①といった比較的低学年時の基盤となるもの，上位の学習活動に取り組む上で習得が前提となる科目や，学習活動群といったところに注目して，これをしっかりと取り組む上で必要な能力とか，資質，入学時のレディネスというものをしっかりと検討していくことが必要になってくるのではないかと思います。それがアドミッションポリシーということで，入試で求める能力や資質に絡んでくるのだと思います。

ではどのようにできるかということなのですが，今，教学マネジメントという言葉がよく言われていますが，そういった仕組みの中で，入試の側面からだけではなく，学位プログラム全体の視点から入試というものをどのように位置付けていくのかを考えることが今後必要になってくるのではないかと思います。

以上です。どうもありがとうございました。

【桜井・司会】　西郡先生，ありがとうございました。それでは次の報告に移りたいと思います。報告②は信州大学の平井先生です。よろしくお願いします。■

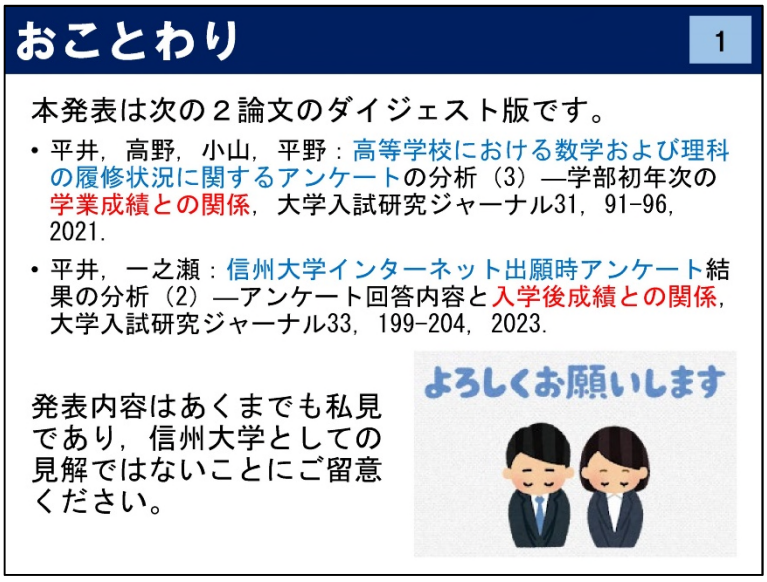
全体会 1（センターセミナー）◉ 報告 2

入学直前・直後のアンケート結果を用いた追跡調査

■平井　佑樹（信州大学全学教育センター准教授）



改めまして信州大学の平井です。どうぞよろしくお願いします。

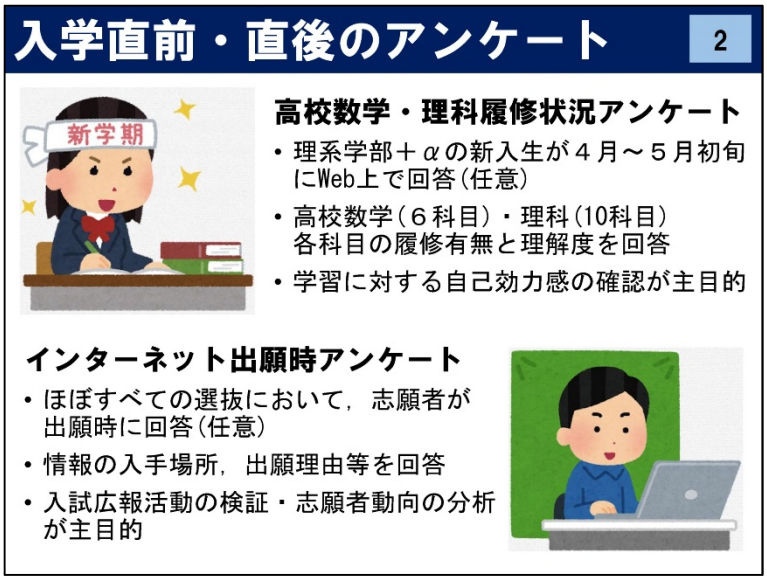


まず初めに，「おことわり」で恐縮なのですが，本発表は次の 2 論文のダイジェスト版と

なっています。私の今の所属は全学教育センターというところで，全学の共通教育を担当する部署ではございますが，こちらの 2 論文は，まだ私がアドミッションセンターに所属していた時の研究で，それに関する発表を行いたいと思います。

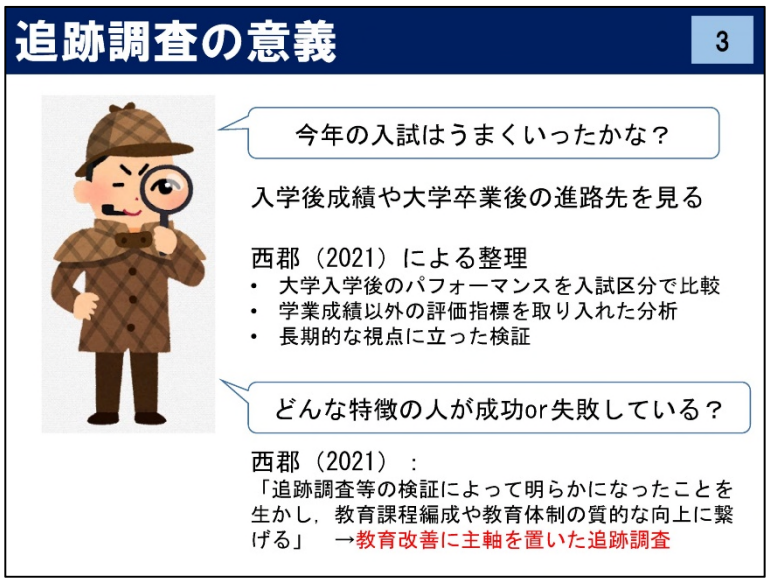
青色の部分がアンケートの部分で，赤色の部分がそれとの関係性を調べる対象のものになっています。ここをご覧いただきますと，アンケートと成績との関係を調べる研究ということになっています。

発表内容はあくまでも私の私見ですので，大学としての見解ではないことにどうぞご留意していただければと思います。



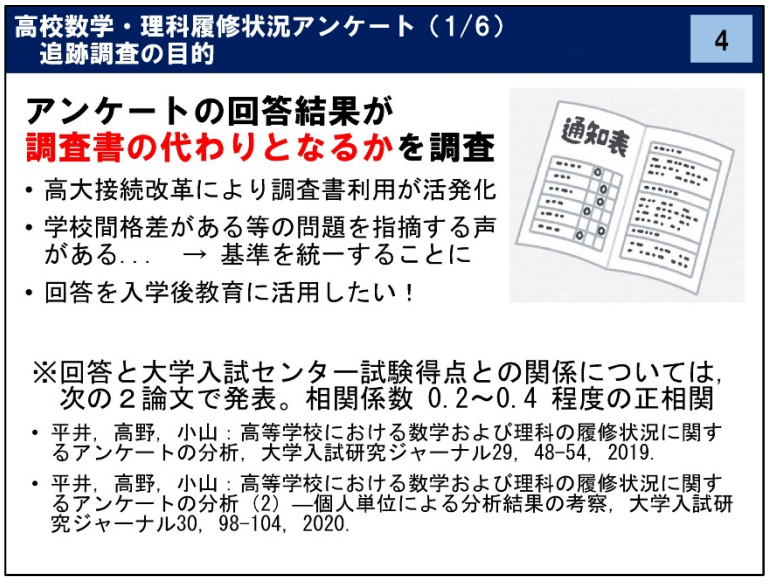
まず入学直後のアンケートです。こちらは高等学校の数学・理科履修状況アンケートで，本学の理系学部＋αの新入生が，4 月から 5 月初旬に Web 上で任意で回答します。高等学校の，今で言いますと旧課程に当たる部分ですが，数学の 6 科目と理科の 10 科目それぞれについて，その科目を履修していたかどうか，履修していた場合は，その科目に対する理解度を自己評価で回答をするものとなっています。このアンケートの実施の主な目的は，学習に対する自己効力感を確認することです。

もう 1 つは直前のアンケートです。インターネット出願時アンケートということで，本学のほぼ全ての選抜において，志願者が出願時に回答するものとなっています。この後，具体的な質問項目も示したいと思うのですが，本学の情報をどこから入手したか，あるいは本学に受験を決めた理由，出願理由等を回答してもらうものになっています。こちらの目的は，入試広報活動の検証，あるいは志願者動向の分析がメインとなっています。



この研究を始めたきっかけということで，追跡調査の意義です。こちらについては，先ほど西郡先生からご報告がありましたので，省略をさせていただきたいと思います。この上の3つも先ほどのご発表にありましたが，この中で言うと，「大学入学後のパフォーマンスを入試区分で比較」に該当し，入学時の状況を見て比較しているというものです。

こちらも先ほどのご報告にありましたとおり，教育改善に主軸を置いた追跡調査がこれから報告する発表となっています。

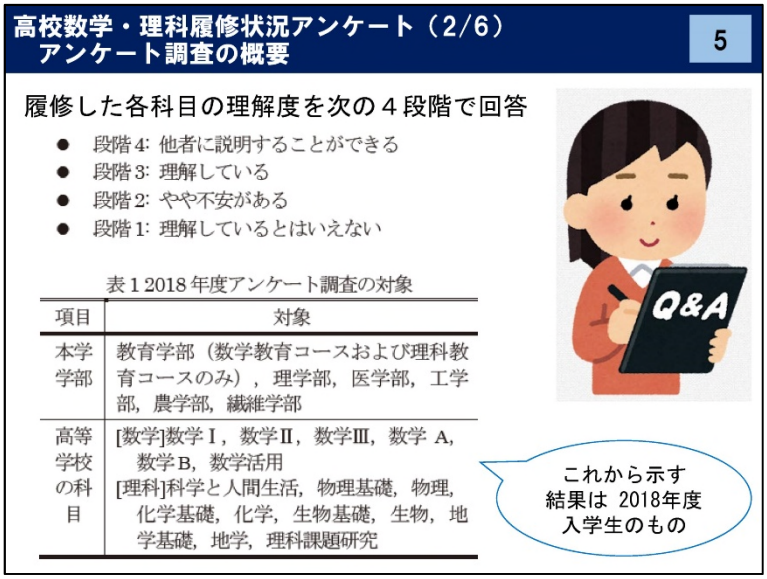


それでは，それぞれの研究の成果等について，説明をしていきたいと思います。まず高等学校の数学・理科履修状況アンケートです。まず目的です。こちらは大々的に書いてはいるのですが，もともとこのアンケートの回答結果が調査書の代わりとなるかどうかを調査することを目的として実施していました。

皆さんがご承知のとおり，現在の高大接続改革によって調査書の利用がとても活発にな

ってはいたのですが，学校間格差があるという報告や指摘が『大学入試研究ジャーナル』等でなされており，そのまま活用することが困難でした。そこで代替手段として，こちらのアンケートを利用して，入学後の成績と比較するということを考えました。主な目的はその基準を統一するということです。

この回答と大学入試センター試験得点との関係については，次の 2 つの論文で発表していますので，ご興味のある方はこちらもご参照していただければと思います。相関係数 0.2 から 0.4 程度なので，それほど相関はないのですが，やや正相関ということが明らかになりました。



こちらのアンケートの具体的な項目は，旧課程の数学 6 科目と理科 10 科目それぞれに対して，履修しているかどうかと，その理解度を 4 段階で回答していただくものになっています。3，4 がいわゆるポジティブな回答で，2，1 がネガティブな回答となっています。

下の表にはアンケートの対象学部と対象の科目を示しています。本学は 8 学部あり，その中の理系の 5 学部（理学部，医学部，工学部，農学部，繊維学部）と教育学部の理系のコースの学生を対象に実施しています。

高校数学・理科履修状況アンケート（3/6）
追跡調査の概要 6

共通科目として開講している次の(a)または(b)に該当する科目の成績と，対応するアンケートの科目の回答（４段階）の相関関係を調査

(a) 基礎科学科目で履修者が比較的多い科目

(b) 特定の学科等のみが履修対象で履修者が比較的多い科目

(a)は大学全体・学科単位の傾向，(b)は学科単位の傾向を把握できる

表２ 分析対象科目とアンケートの科目との対応関係

分析対象科目	開講時期	選定基準	アンケートの科目
微分積分学Ⅰ	前期	(a)	数学Ⅲ
線形代数学Ⅰ	前／後期	(a)	数学B／数学Ⅲ
力学	前／後期	(a)	物理
力学Ⅰ	前期	(a)	物理
物理学概論	前／後期	(b)	物理
物理学概論Ⅰ	前期	(b)	物理
一般化学Ⅰ	前期	(a)	化学
一般化学Ⅱ	後期	(a)	化学
化学概論Ⅰ	前期	(b)	化学
生物学A	前／後期	(a)	生物
生物学B	前／後期	(a)	生物
生物学概論Ⅰ	前期	(b)	生物
ヒト生物学Ⅰ	前期	(b)	生物
生化学	前期	(b)	化学／生物
地学概論Ⅰ	前／後期	(b)	地学

このアンケート結果は 2018 年度入学生に対して実施したものです。

どの科目の成績をアンケートと比較するかというと，ここにさまざまな記載がありますが，基本的には履修者が多い科目です。学部必修科目，あるいは学科必修科目となっていて，その学部学科であれば全員が取るような科目を，成績を見る対象として選択しています。

高校数学・理科履修状況アンケート（4/6）
結果：微分積分学Ⅰ（大学）と数学Ⅲ（高校）との関係 7

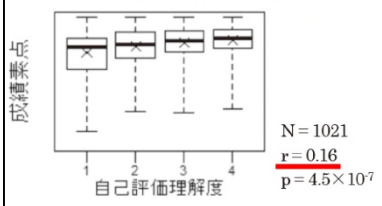


図１ 微分積分学Ⅰ成績素点と数学Ⅲ自己評価理解度との関係（大学全体の結果）

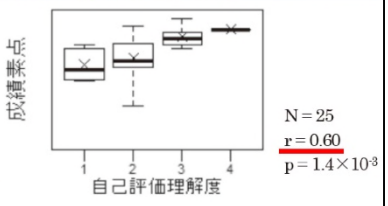


図２ 微分積分学Ⅰ成績素点と数学Ⅲ自己評価理解度との関係（有意に相関が最も強い学科等の結果）

【図の説明】・成績素点は上ほど高成績　・×印は平均点
・外れ値を示さない（ひげの上下端は最大・最小）
・成績素点０点の学生は除いている
・rはスピアマン順位相関係数，pは無相関検定結果

大学全体として見ると相関はほぼ無い。
学科等ごとだと相関が強いところもある。

こちらは結果です。大学の微分積分学Ⅰと呼ばれる科目と，アンケートの数学Ⅲの理解度の関係を見たものです。まず図の説明をしますと，それぞれ横軸に自己評価理解度が示されていて，縦軸は諸事情で目盛りを省略していますが，上ほど好成績となっています。それぞれの自己評価理解度に対して，箱ひげ図が示されていて，×印は平均点です。外れ値を示さない形の箱ひげ図になっています。図の右側にある r はスピアマン順位相関係数で，p は無相関検定の結果です。

左側は大学全体ですので，アンケート回答者全員に対して実施，分析したものです。相関係数 0.16 ですので，それほど相関が強いというわけではないということが分かりました。

いわゆる自信がない学生，理解をしているとは言えないとか，不安があるという，1，2 の回答をした人でも，かなり高い点を取っている方もいますし，逆に「他者に説明することができる」という 4 を付けた学生でも，結構低めのところに点数が来ている学生もいるという状況でした。

右側は学科ごとに調べてみた結果です。こちらは有意で相関が最も強い学科等の結果を示したものですが，一番強いところでも，相関係数 0.60 ぐらいですので，比較的強いとはいえますが，それほど極端に相関が強いわけではなかったという状況です。

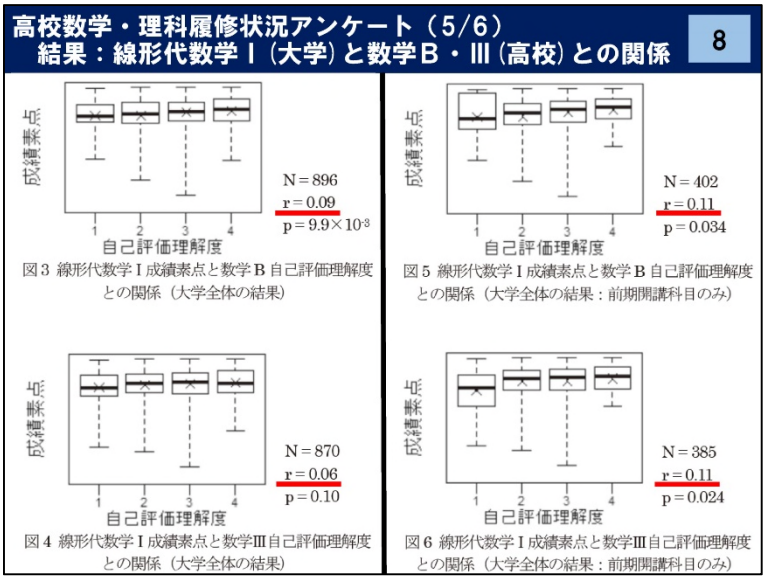


図３ 線形代数学Ⅰ成績素点と数学Ｂ自己評価理解度との関係（大学全体の結果）

図５ 線形代数学Ⅰ成績素点と数学Ｂ自己評価理解度との関係（大学全体の結果：前期開講科目のみ）

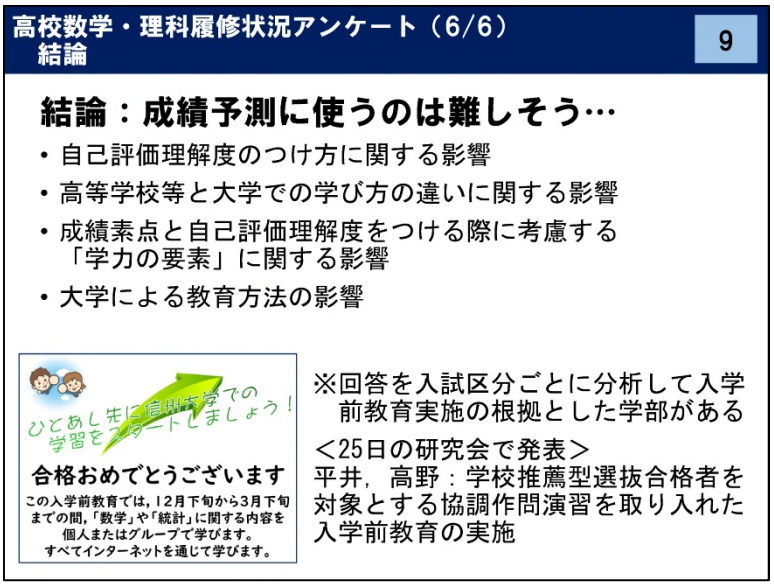
図４ 線形代数学Ⅰ成績素点と数学Ⅲ自己評価理解度との関係（大学全体の結果）

図６ 線形代数学Ⅰ成績素点と数学Ⅲ自己評価理解度との関係（大学全体の結果：前期開講科目のみ）

他の科目でも調べてみたのですが，こちらは線形代数です。線形代数は主に行列を扱います。旧課程であっても高校数学では行列は履修しませんので，それほど相関が強いわけではないということが，この結果からも分かるかと思います。

左は線形代数学Ⅰと数 B，あるいは数Ⅲの相関関係を見たもので，右側は，前期に開講している学科に絞って見てみました。こちらでもそれほど相関が強いということはありませんでした。

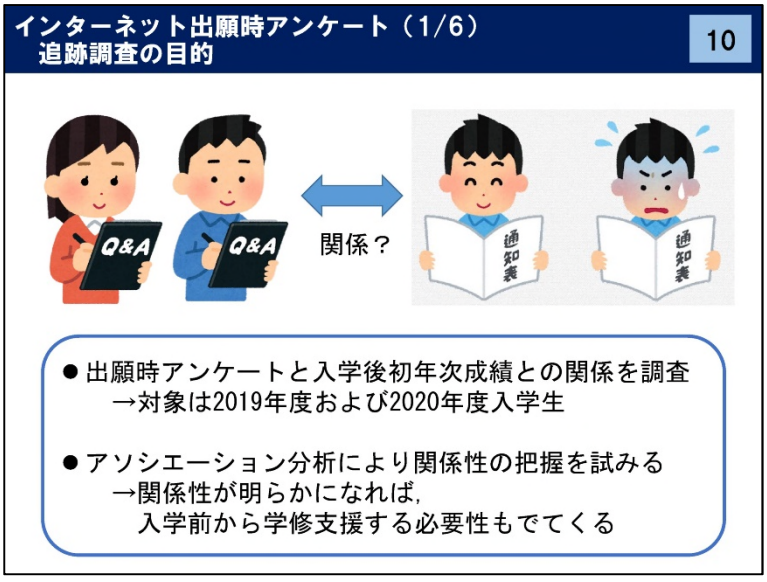
論文では理科の科目も示してはいるのですが，大学全体として見ると，そのようなに強い相関はなく，学科等で見ると，強いところもあるし，そうではないところもあるという状況です。



結論としてまとめますと，このアンケートを調査書の代わりにできるかどうかというところまで踏み込んだ結果にはなっていませんが，アンケートを成績予測に使うのは難しいのではという結論に至っています。

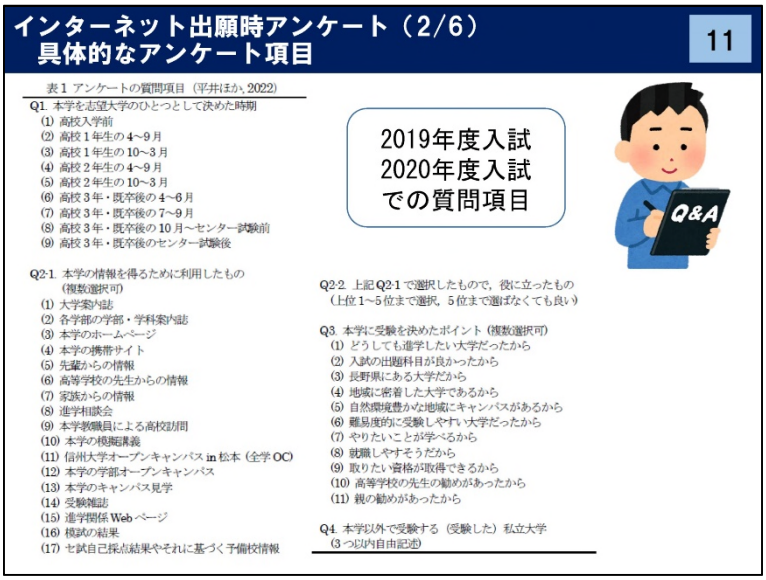
論文では，その原因等を分析しています。例えば，自己評価理解度の付け方に関する影響があるのではないか，高等学校等と大学での学び方に違いがあるのではないか，あるいは大学による教育方法との違いがあるのではないか，といったことが考えられます。

ただし，アンケート結果が入学後の成績予測にはあまり使えないということが分かりましたが，入試区分ごとに分析した結果，ある学部では学校推薦型選抜と一般選抜で比較したのですが，特に数Ⅲに対して不安に思っている学生が８割ぐらいいるということが明らかになったので，それをきっかけとして入学前教育を実施しています。こちらにつきましては，明後日の研究会で発表しますので，ご興味がある方は，ぜひこちらもお聞きいただければと思います。

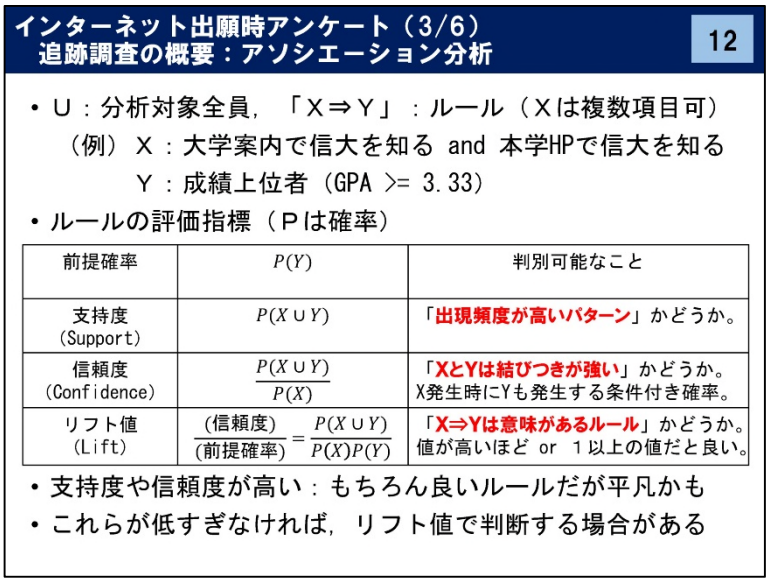


それではここで話題を変え，インターネット出願時アンケートに進みたいと思います。追跡調査の目的ですが，これも先ほどと同じです。出願時に回答した内容が入学後の成績と関係があるかどうかを見たものです。対象は 2019 年度と 2020 年度入学生です。この後，説明しますが，アソシエーション分析と呼ばれる方法で関係性の把握を試みました。

ここでもし関係性が明らかになれば，出願時アンケートで，この項目とこの項目を回答した人は入学後の成績がいいか悪いかということが明らかになりますので，入学前の段階から，学習支援をすることもできるだろうということで，分析を試みたものになっています。



少し字が小さくて恐縮なのですが，こちらがインターネット出願時アンケートの質問項目で，大きく 5 つあります。本学を志望大学のひとつとして決めた時期，本学の情報を得るために利用した媒体，その媒体のうち最も役に立ったもの上位 5 つ，それから本学に受験を決めたポイント，最後は私大の受験状況について書いてくださいという内容です。



アソシエーション分析とは，簡単に言いますと，「何々ならば何々」というルールを発見するというものです。「X⇒Y」と書いていますが，X を「出願時アンケートで回答した項目」とし，Y を「成績上位者・中位者・下位者のどれに当たるか」にしています。成績の上位か中位か下位かの分け方は，学部の初年次の GPA で分けています。

多数の組み合わせがあるので，いろいろなルールが出てくるのですが，そのルールを評価する指標として，支持度と信頼度とリフト値という 3 つの指標があります。

支持度は，全体の中でそのルールがどれぐらい出現しているかを示した物です。支持度が高いとそのルールに該当する人が多いということを示します。

信頼度は，X が発生した時に Y も発生するという条件付き確率となっていて，X と Y の結び付きが強いかどうかを示す指標になっています。

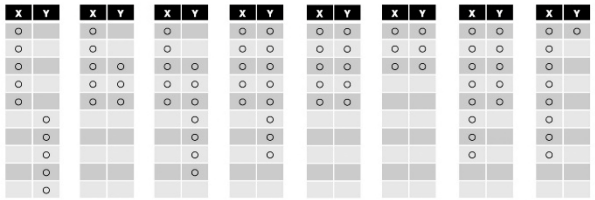
最後，こちらは少し聞きなれない言葉かもしれないのですが，このアソシエーション分析はリフト値という指標で評価していることが多く，このリフト値が高い，あるいは 1 以上の値だと良いと言われています。

リフト値が高いほど，良いルールということにはなるのですが，支持度や信頼度が低い場合は，良いルールだが，それほど出現頻度は高くないのであまり良くない可能性もあるということで，3 つの値を総合して判断することになっています。

インターネット出願時アンケート（4/6）
追跡調査の概要：アソシエーション分析での評価指標 13

・いくつかの例（ルール「X⇒Y」について）

⇒リフト値が１以上でも支持度や信頼度が低い場合は
意味があるルールとは言いにくいので，
３つの値を総合して判断する



支持度	0.00	0.30	0.30	0.50	0.50	0.30	0.50	0.10
信頼度	0.00	0.60	0.60	1.00	1.00	1.00	0.63	0.13
リフト値	0.00	2.00	0.86	1.25	2.00	3.33	1.25	1.25

こちらが幾つかの例を示した物です。今，申し上げたとおり，ここの右から 4 つ目と 3 つ目に 2.0 と 3.33 というリフト値になっているものがあります。例えば 3.33 だと，先ほどの基準で見ると 1 以上なので良いルールと判定されるのですが，全体の中では 3 割ぐらいの出現頻度なので，これが良いかどうかは分析者の判断で決めることになります。

インターネット出願時アンケート（5/6）
分析結果：成績上位者を結論とするルール 14

表 7 アソシエーション分析の結果（2.3 節で示した X が 2 項目以上のルール，リフト値 1 以上，支持度順）

対象および支持度順位		X1	X2	X3	支持度	信頼度	リフト値
成績上位者	1	Q2-1(3) 本学 HP	Q3(7) やりたい事	−	0.128	0.327	1.126
	2	Q3(1) 進学したい	Q3(7) やりたい事	−	0.086	0.324	1.116
	3	Q3(5) 環境豊か	Q3(7) やりたい事	−	0.085	0.322	1.108
	4	Q2-1(3) 本学 HP	Q3(1) 進学したい	−	0.085	0.344	1.183
	5	Q2-1(6) 高校の先生	Q3(7) やりたい事	−	0.077	0.302	1.039
	6	Q2-1(3) 本学 HP	Q3(5) 環境豊か	−	0.077	0.323	1.111
	7	Q2-1(2) 学部案内	Q2-1(3) 本学 HP	−	0.076	0.359	1.237
	8	Q2-1(2) 学部案内	Q3(7) やりたい事	−	0.076	0.353	1.215
	9	Q2-1(1) 大学案内	Q3(7) やりたい事	−	0.068	0.344	1.185
	10	Q2-1(3) 本学 HP	Q2-2(3) 本学 HP	−	0.067	0.299	1.029

下記はもともと回答率が高い。
- Q2-1(3) 本学ＨＰ
- Q2-1(6) 高校の先生
- Q3(1) 進学したい大学だから
- Q3(5) 環境豊かな大学だから
- Q3(7) やりたいことが学べる

→ これらが入るルールは支持度が高いので，組となる項目を見る

スライドでは11～25位を省略していますが…，成績上位者では，
- Q2-1(1) 大学案内
- Q2-1(2) 学部案内
- Q2-1(7) 家族情報
- Q2-1(12) 学部ＯＣ
- Q3(3) 長野県にある大学

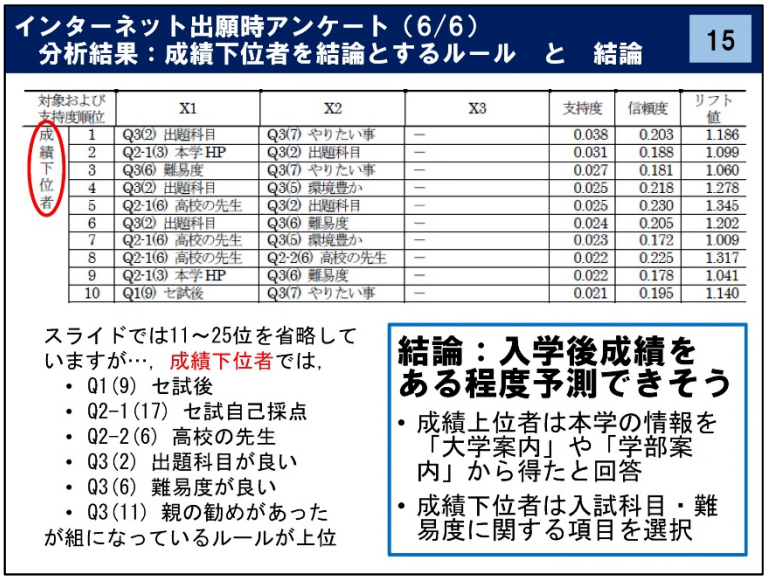
が組になっているルールが上位

分析結果です。こちらは成績上位者が結論となっているルールです。ここに X1，X2，X3 とあるのですが，これが出願時アンケートで回答した項目です。例えば一番上ですと，情報を入手した媒体として，本学ホームページを，それから出願理由として，やりたいことがあったから，ということを選択して，成績上位者になった者が全体で約 13％いたということです。このような形で，この表ではリフト値 1 以上のルールが，出現頻度の高い順に並んでいます。

本学のホームページであるとか，進学したい大学だからというのは，ほとんどの学生さん

が選んでいるため，これらを選んだ学生さんは，実は上位にも下位にもどちらにも転がりやすいことが明らかになりました。さほど回答率が高くなくても，上位になっているという観点で，これらの要素が入るルールを調べ，組となる項目を見てみました。

論文では，11 位から 25 位も出ていますが，成績上位者の傾向としては，大学案内や学部案内，家族からの情報，更には学部のオープンキャンパスなどで情報を入手したと回答している傾向が強かったです。あとは出願理由として，長野県にある大学を選択している入学生も比較的上位者になりやすかったということが分かりました。



一方で，成績下位者を結論とするルールで見ていきますと，センター試験後に出願を決めた，自己採点の結果で本学の情報を入手した，あとは出題科目や難易度がいい，親の勧めがあった，ということを出願理由としている学生が下位者になりやすいということが今回の分析で明らかになりました。

このように上位者と下位者の傾向を見る時に，それぞれ選んでいるものが違うということが明らかになりましたので，ある程度，入学後成績を予測できるのではないかと結論付けています。



では，まとめと今後の課題です。今回，入学直前・直後のアンケートと，入学後成績との関係を調査しました。一部ですが，回答を入学後教育に生かせる場合がありそうということで，こういう選択をした学生さんは，成績上位者になりやすいとか，下位者になりやすいということが，今回の研究で分かったという状況です。

あくまで研究ですので，このような分析を全学展開できればいいと感じているところではあります。気を付けなければいけないのは，このようなアンケートを取って，いい相関が見つかったとか，入学後教育に生かせそうだということが明らかになるのはいいことなのですが，はたしてアンケートばかりを取るのはいいのかというとそうではなく，学生さんもいろいろなアンケートに答えるとアンケート疲れになってしまいます。最後に記載したとおり，高校の先生方が一生懸命作ってくださった調査書を何とかしてうまく使えないかと，引き続き，研究を進めているところです。

以上で発表を終了します。ご清聴ありがとうございました。

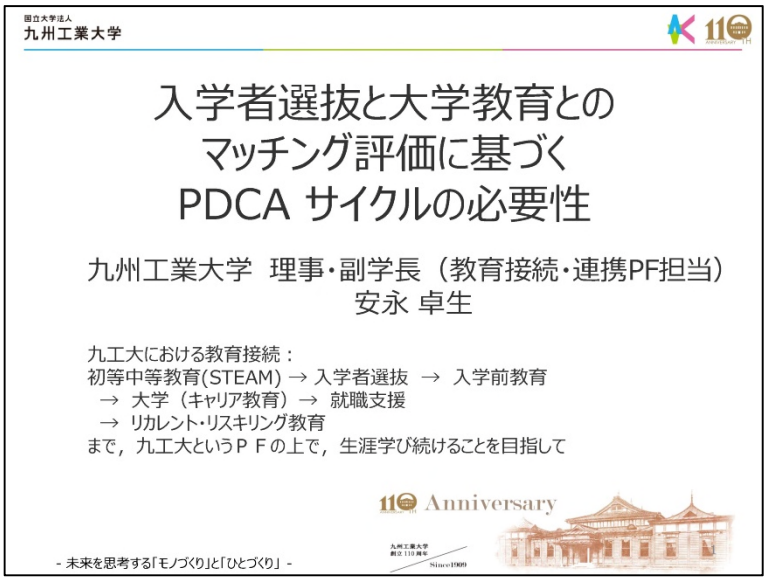
【桜井・司会】　平井先生，どうもありがとうございました。報告③は，九州工業大学の安永先生です。よろしくお願いします。■

全体会 1（センターセミナー）◉ 報告 3

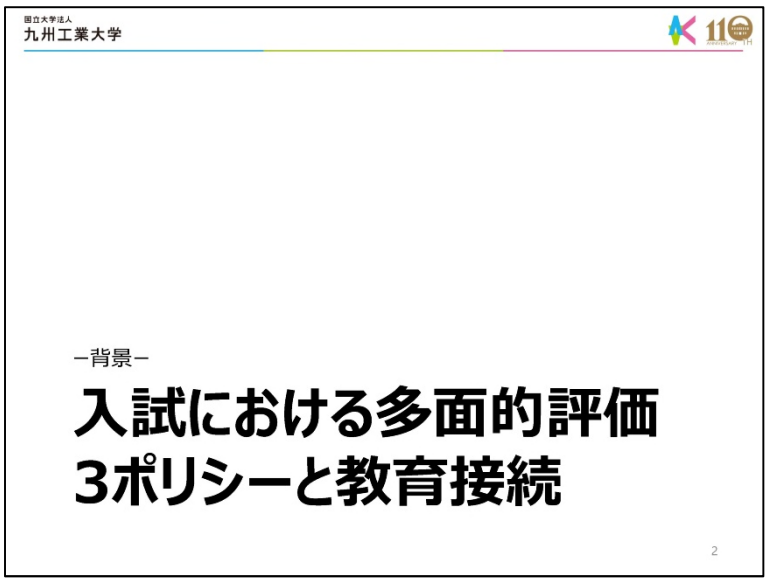
入学者選抜と大学教育とのマッチング評価に基づく PDCA サイクルの必要性

■安永　卓生（九州工業大学理事，副学長（教育接続・連携 PF，情報担当））

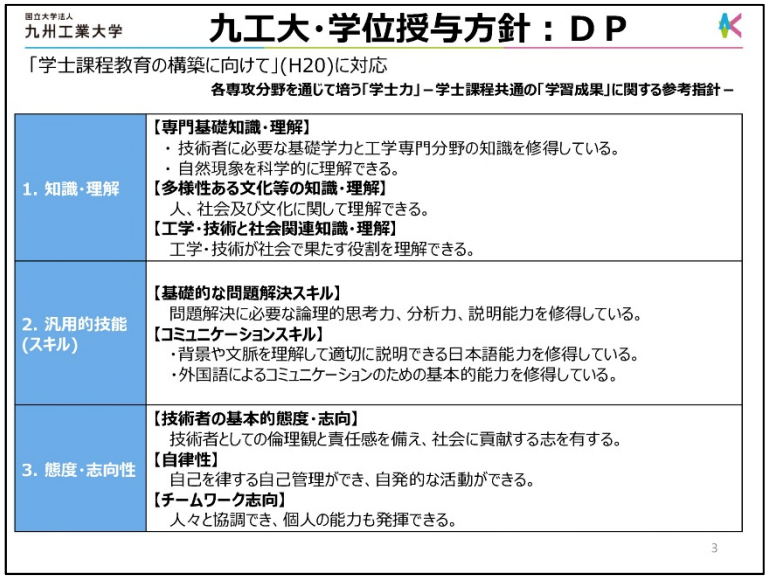
九州工業大学で教育接続・連携プラットフォームの担当理事・副学長をしています，安永と申します。



九州工業大学では，現在，教育接続という形で，初等中等教育から入学者選抜，入学前教育，キャリア教育，就職支援，リカレント・リスキリング教育まで，正課授業に加えて，一生涯にわたる学びの全体を見ていくことが 1 つのミッションとなっており，これらを担当しています。以前副学長として入試担当を 4 年間，その後学部長を 2 年間，そして現職を 2 年間努めていまして，その間に報告した内容を基に，本日は発表をさせていただきます。



それでは背景から少しお話をさせていただきます。「入試における多面的評価３ポリシーと教育接続」というところです。



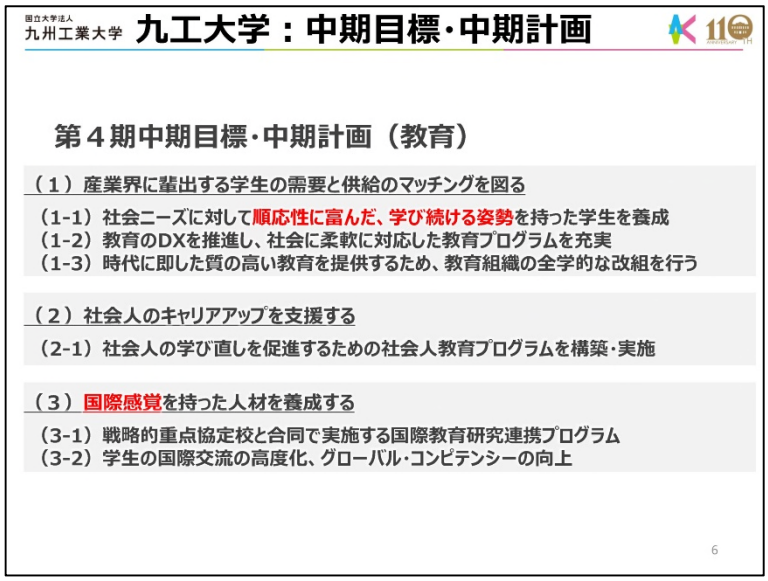
九州工業大学の現在の学位授与方針，DP はご覧のとおりです。工学系の単科大学ではございますが，一般的な意味で言う専門知識と，それから工学等に関する知識はもちろんのこと，それに加える形で問題解決スキルや，コミュニケーションスキル，そしてそれらのための基本的な態度，自律性，チームワーク等がディプロマポリシーの中にうたわれていて，これらを培っていくことを目指しています。



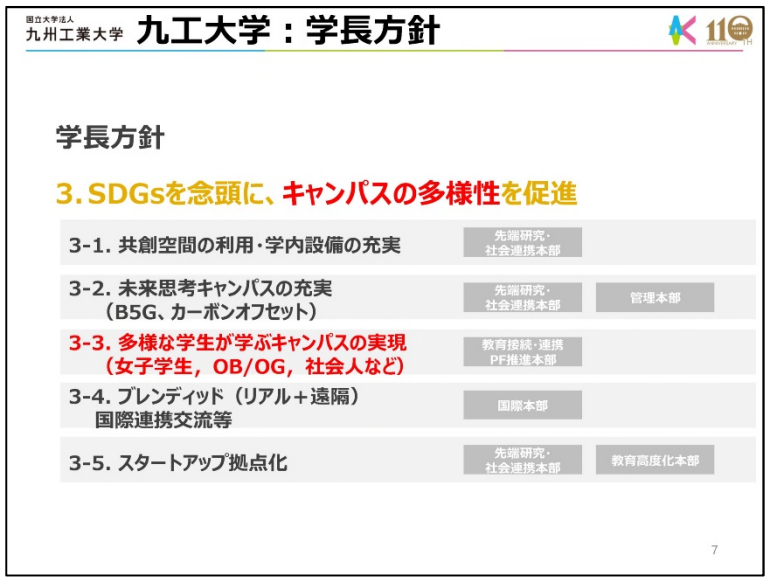
ディプロマポリシーの達成に向けた，カリキュラムポリシー，カリキュラムとしましては，専門性に関する部分を一般的に教育していくと同時に，国際交流，それからアクティブ・ラーニング等を含めた形で，先ほど来の協働的なカリキュラムを通じて学びを進めていきます。



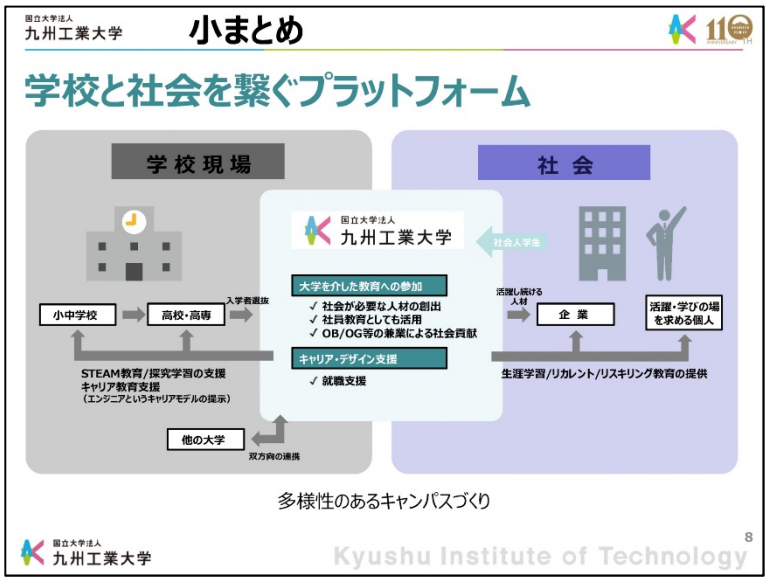
九工大は工学系の大学ですので，私どもとしては，この GCE（Global Competency for Engineer）という，グローバルに活躍できるエンジニアの素養はどういうものかということを，こちらの A から E の５つで定義しています。そしてこれらをいかに培うかということで，さまざまなプログラム，それから場を用意するような教育のシステムで進めさせていただいています。



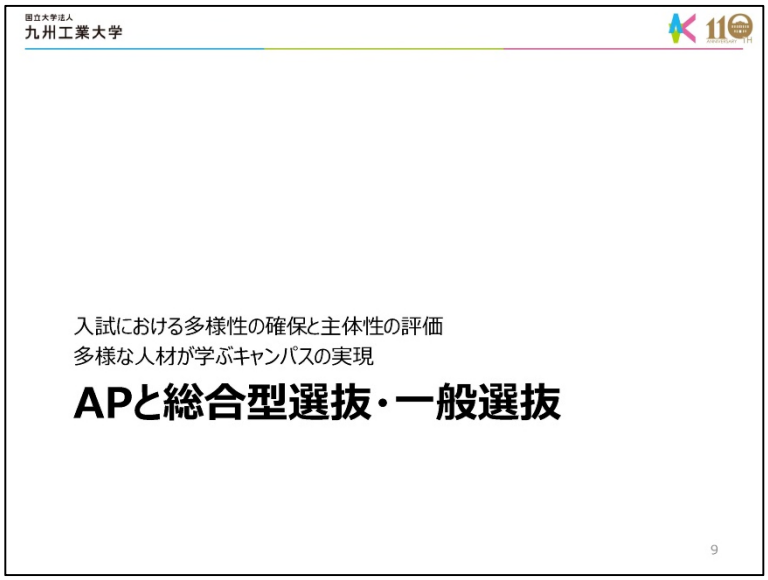
第４期に入り，この２年も過ぎたところになりますが，第４期中期目標・中期計画の中で，社会ニーズに対して順応できる，学び続ける姿勢を持った学生の養成が改めてうたわれています。また国際感覚を持った人材を育成するということで，先ほどのグローバルコンピテンシーを改めて今回，第４期の中で向上していくことがうたわれています。



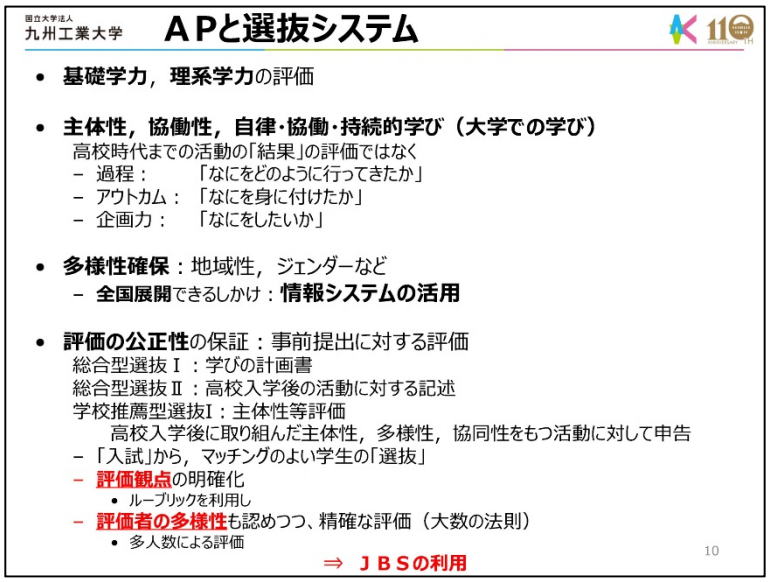
第４期に入ると同時に学長が代わり，学長方針でキャンパスの多様性を促進することが掲げられています。いかに多様な学生が学ぶキャンパスを実現するかということ自身がカリキュラムになるという方針をもって現在進めているところです。



そこで私どもとしては，学校，小中高の現場と，それから社会をつないでいくような仕掛け作りを使いながら，先ほどのようなカリキュラムおよびディプロマポリシーにつないでいきたいと考えています。



副学長だった時に，いわゆる当時の AO 入試，現在の総合型選抜を導入することとなりました。現在では，九州工業大学は一般選抜が 7 割，学校推薦型選抜と総合型選抜で 3 割という入学区分になっています。そのような形で多様な人材が学ぶというところを主体に考えていこうとしています。

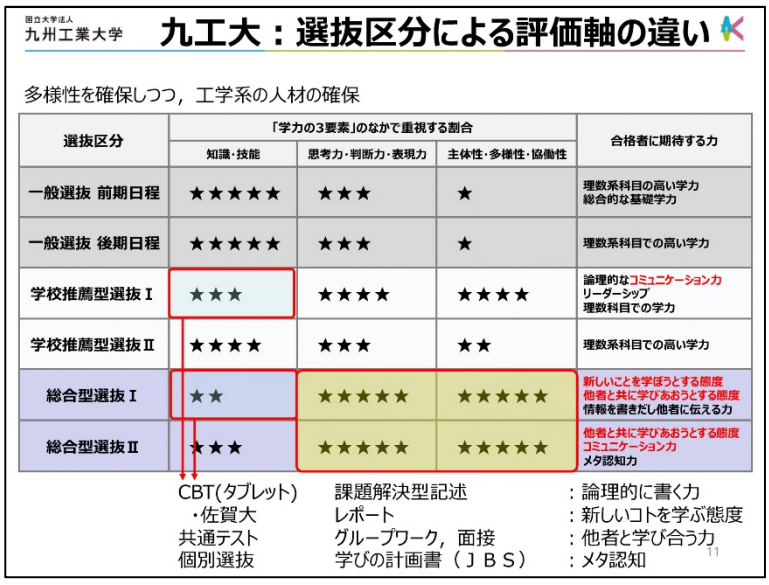


アドミッションポリシーとしましては，基礎学力や理系の学力を一定数は確保しながらも，主体性，協働性，自律・協働・持続的な学びといったディプロマポリシーにつながるような資質は身に付けてほしいということで，高校までの活動について何をどのようにやってきたかを中心に評価をしていくような入試を進めています。

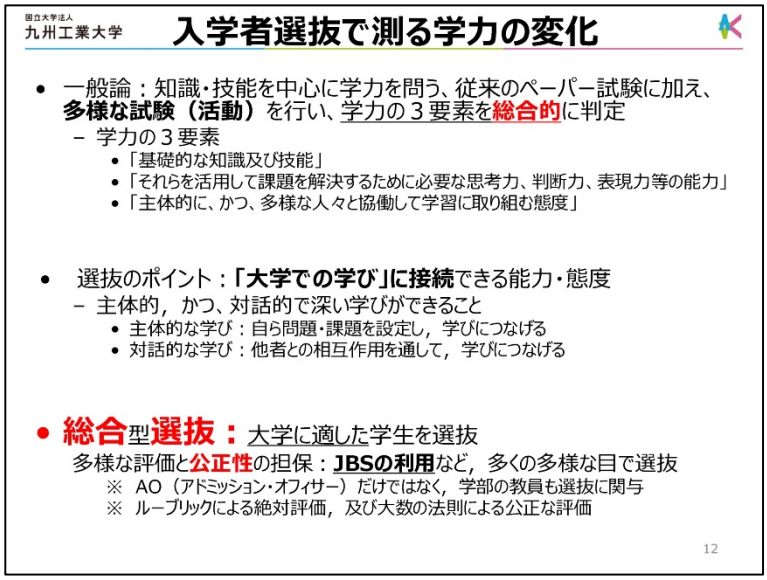
それから多様性確保としましては，地域性やジェンダーなど，いかに多様な人材がキャンパスにいる環境を作れるかかという視点で，総合型選抜，学校推薦型選抜も多様性確保の手段の１つとして，現在，検討しています。

その上で，総合型選抜と推薦型選抜等における評価の公正性をいかに担保するかという課題に対し，評価者の多様性を認めつつも精緻な評価になるように，できるだけ多くの目が入るような仕組み作りを行ってきました。

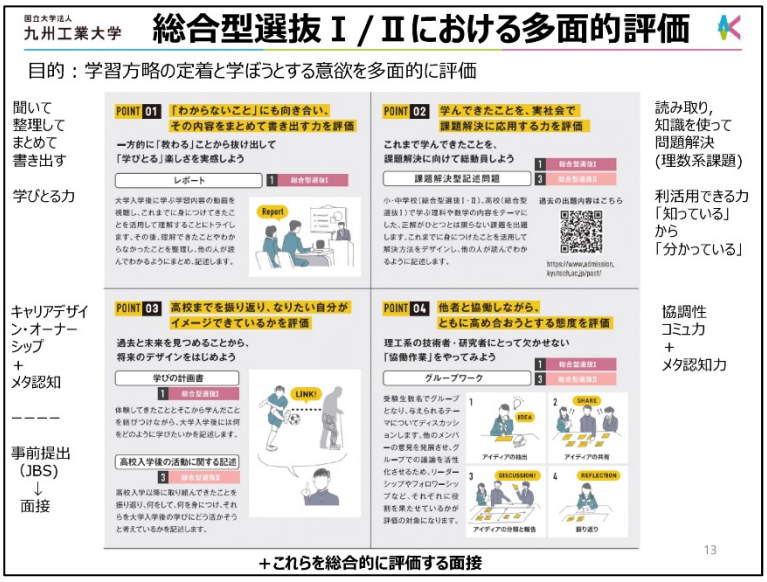
また，事前提出の書類に関する評価については，生成 AI への対応も含め，改めて評価方法等を検討しています。



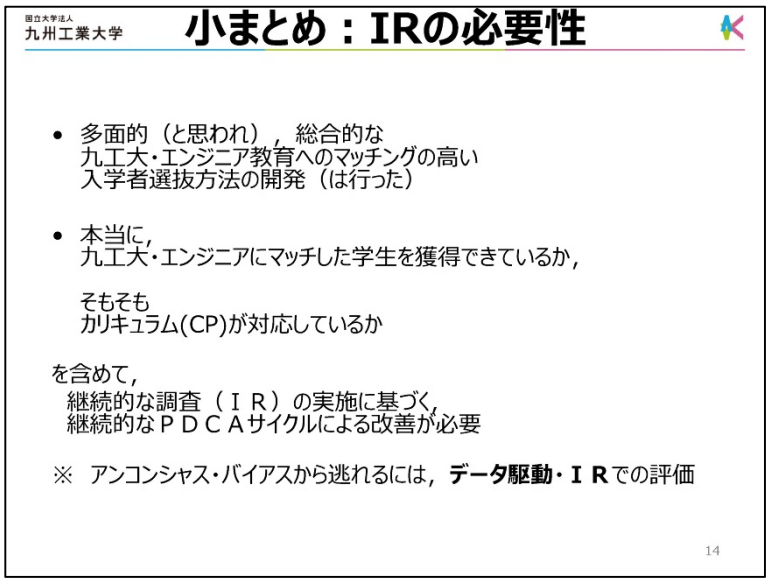
九工大では，一般選抜の前期・後期と，学校推薦型Ⅰ・Ⅱ，それから総合型選抜Ⅰ・Ⅱという６種類の入試を行いながら多様な人材を確保しています。その中では，CBT を使って教科学力に近いような知識を問うものもあれば，課題解決型記述問題という形で論理的思考力を問うもの，あるいはグループワークのような形で他者と学び合う力等を問うものもあり，それぞれの中で多様な評価軸を設けています。



入試で測る学力は時代とともに変化しており，学力の３要素という形で①知識・技能，②それを基にした思考力，判断力，表現力，③主体的に，かつ，多様な人々と協働する力が定められています。実際に彼らが卒業後に活躍する社会そのものがそういった学力の３要素を求めるように変わってきていますので，選抜のポイントとしましては，大学での学びや出口のディプロマポリシーに繋げていけるような能力や態度をどういう形で測るかということがあります。その１つの解が総合型選抜ということで，公正性を担保しながら，大学に適した学生の選抜を現在進めています。

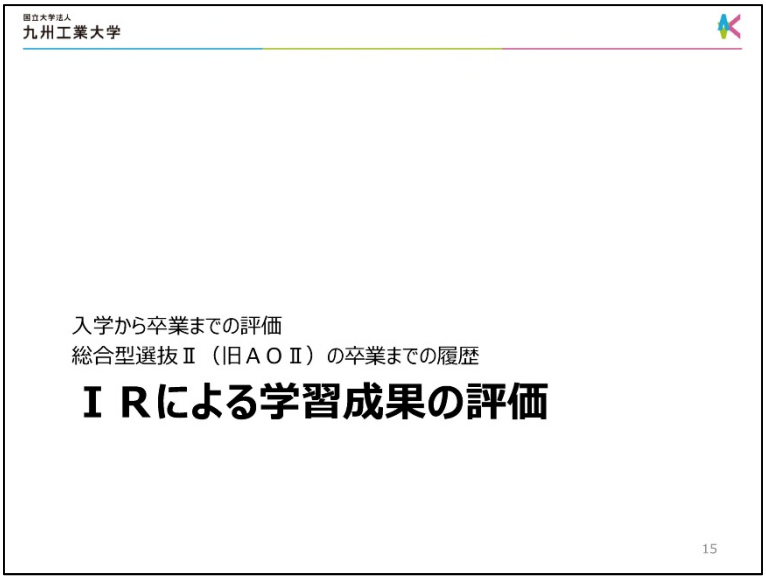


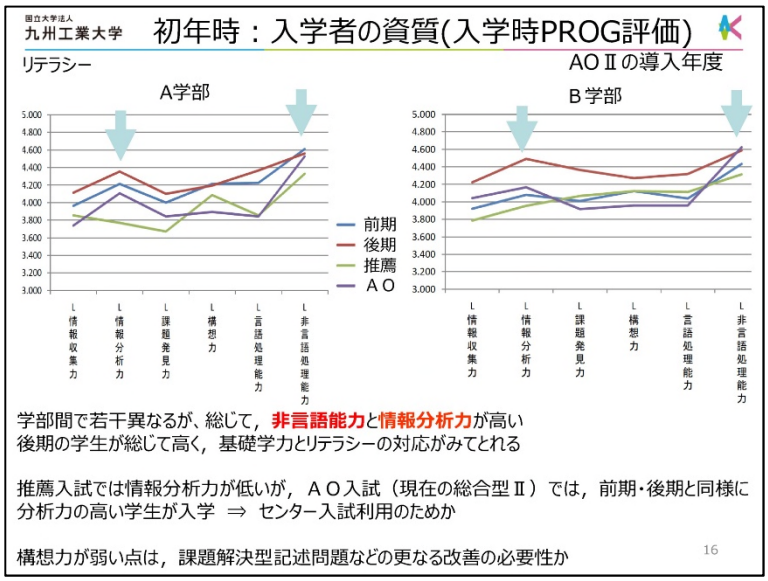
こちらに挙げるような，大学の授業を聞いてレポートを書く，それから教科を超えたような知識を使った課題解決，自分自身を理解するキャリアデザインに当たるようなメタ認知の学びの計画書，あるいは自分自身の高校入学後の活動に関する記述，更には他者と協働する態度を問うためのグループワークなどを通じて多面的に評価するような選抜方法となっています。



多面的・総合的でエンジニア教育にマッチングが高いと思われるような入学者選抜の開発を行い，実施をしてきましたが，期待どおりになっているかの検証結果を今回ご報告します。

最初の AO 入試で入学した学生が，卒業したというところもありますので，選抜方法がカリキュラムポリシーに対応していたのかを継続的に検証しながら，アドミッションポリシーの見直し，選抜方法の見直しも含め，PDCA サイクルによる改善が必要な時期になってきました。そこでデータ駆動・IR を中心に，継続的に評価しているところです。

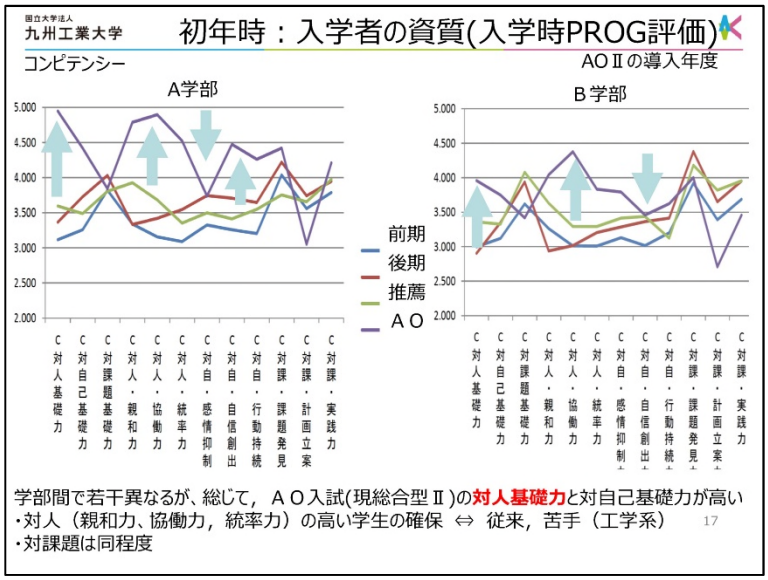




ここからは実際の評価についてご報告させていただきます。まず，AO 入試を導入した時に，どのような学生が入ってきているのかを，先ほどのような選抜を設計した上で，評価をしていこうというわけです。従来の GPA といった学力調査だけでは見えにくいので，先ほどの西郡先生のご発表の中にもありましたが，外部の評価指標ということで，PROG を使ってリテラシー評価，およびコンピテンシー評価を行いました。

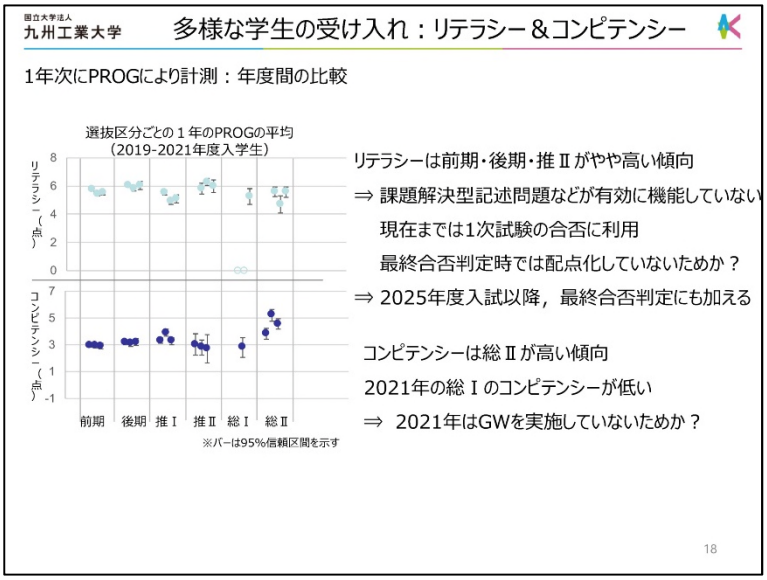
前期，後期，推薦，AO（今の総合型選抜）という入学選抜区分ごとの折れ線グラフを示しています。2 学部ありますので，2 つの学部の間で，どのような振る舞いがあるかを少し見ていきます。

AO は紫色で示していますが，特に情報分析や非言語処理能力が比較的高く，AO 入試で問えているということが分かります。また，まずはリテラシーとしても一定の評価があるような学生に来ていただけているということが分かりました。



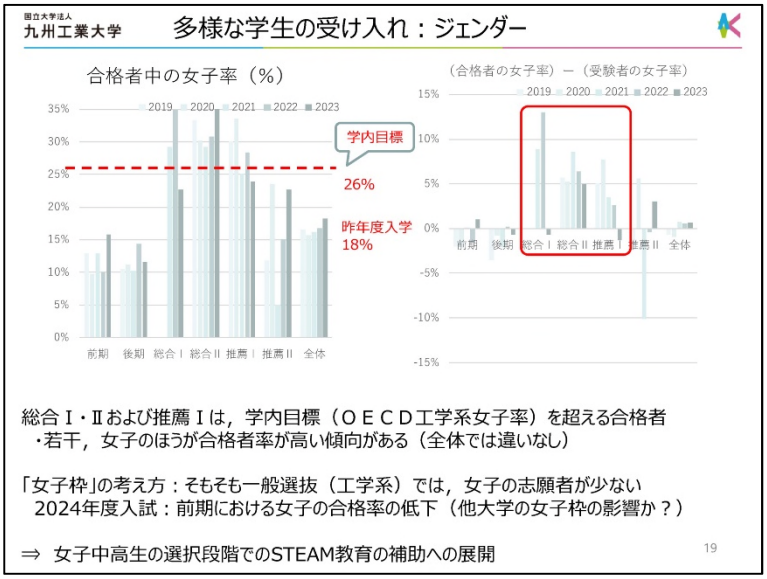
一番大きく異なるのは，このコンピテンシー評価です。これまでの学生に比べて，対人，それから対自で非常に高い数値が出るような学生が取れています。対人基礎力が非常に高く，対自，つまり自分に対するものも一定の高さを持っているような学生が入学しているということです。

確かに入試方法の手法も違い，それから最終的な合格時期も少し異なりますが，当時のAO 入試で，センター試験も使ったような形ではある中で，こういうコンピテンシーの異なる学生が取れているということが明らかになりました。



実際，多様な学生がその後も取れているかを示した図です。PROG を前期，後期，推薦Ⅰ，推薦Ⅱ，総合Ⅰ，総合Ⅱの 6 つの選抜区分ごとに，その後も継続的に計測しました。

総合Ⅰは始まって間がないところの 2001 年の 1 回目，2 回目のみではありますが，このような形で出ています。コンピテンシーに関して，総合Ⅱが比較的高いという状況はずっと維持できています。それからリテラシー的なところは，少し低めに出ているかもしれませんが，一定基準は取れているような状態で推移しているということも分かってきました。

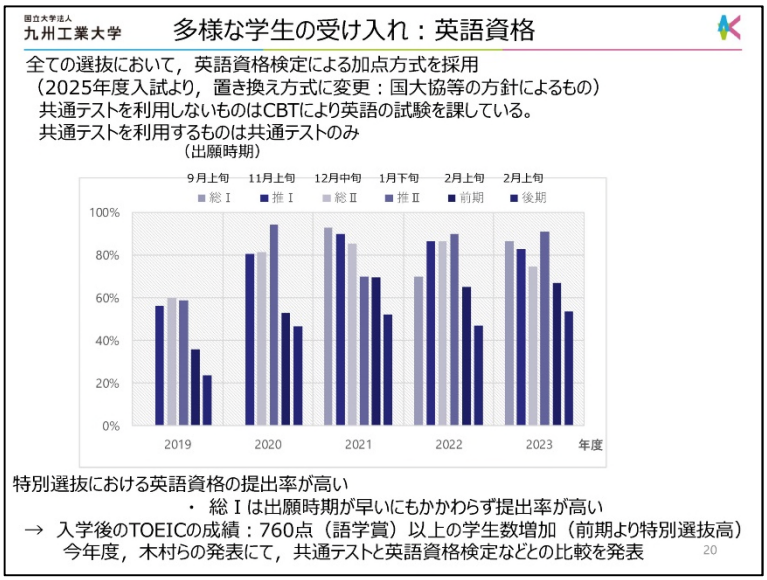


一方で，もう１つの目的はこの多様な学生の受け入れです。昨今，女子枠の話もありますが，ジェンダーという意味などで今回の総合Ⅰとか総合Ⅱとか推薦Ⅰが寄与できているかを見ていきます。

赤い点線は女子比率を 26％以上にするという学内目標で，OECD 標準の工学系の女子比率が大体 26％であることを踏まえて，現在の学長から言われている目標値です。

これを上回っているのは，総合Ⅰ，総合Ⅱ，推薦Ⅰで，あるいは推薦Ⅱも年によって一部という形です。前期・後期では本学に進んでこない学生たちの受け皿となっていることが分かります。また合格率を見ましても，特に女子枠という形は設けていないのですが，総合Ⅰ，総合Ⅱでは若干，女子の合格率が高くなっています。

問題は志願者の少なさです。既に多くの大学が女子枠を設定するなど，大きく変化してきている状況もありますので，その辺りも見直しながら対応していければと思っています。

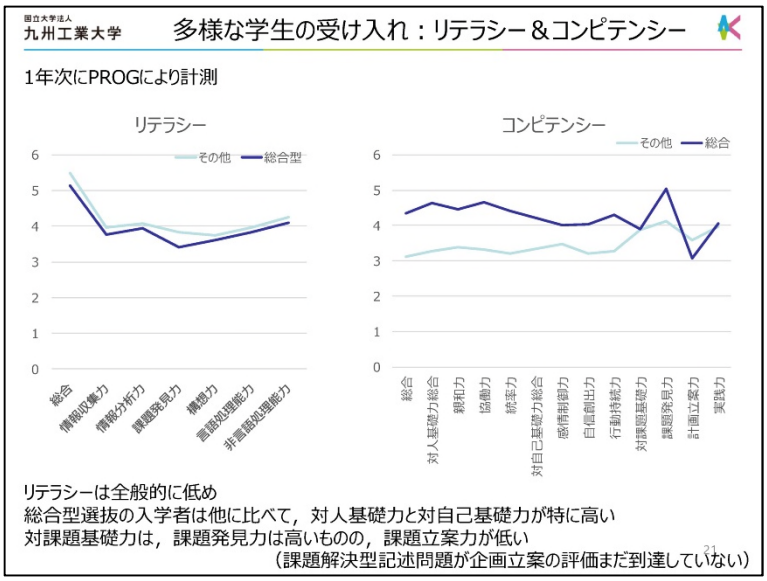


それからもう１つ多様な学生を受け入れる方法として，英語資格があります。本学は一般選抜を含めた個別選抜で，英語の入試がありません。その代わり，共通テストを利用する者は英語の割合を若干上げたり，共通テストを利用しない総合Ⅰおよび推薦Ⅰでは CBT 方式で英語の試験を課したりしています。また，全ての選抜区分において，外部の英語資格・検定試験のスコアを提出することで，加点する方式を採用しています。

令和７年度以降は，国大協の方針なども踏まえて加点方式ではなく置き換え方式に変更します。今回，本学の発表の中で，共通テストと英語資格・検定試験の比較表も用意されていますので，もしご興味がありましたら見ていただけたらと思います。

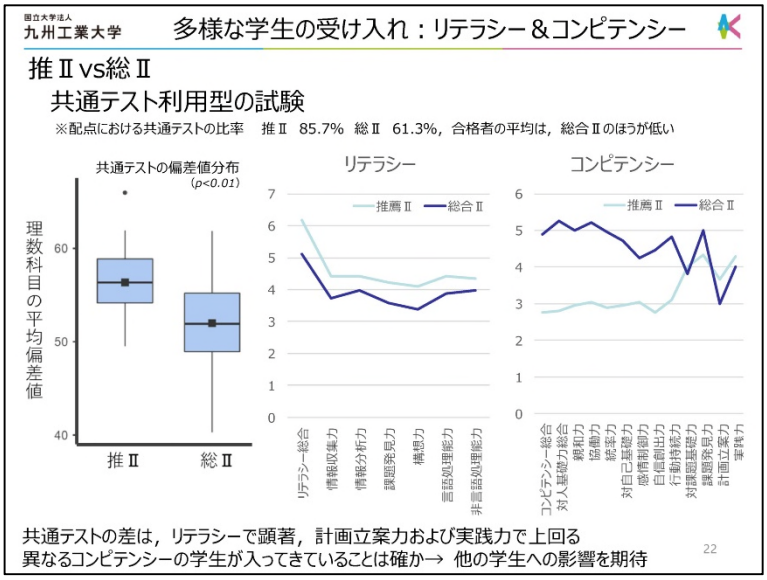
さて，戻りますと，こういう英語検定の試験というものが使われており，令和６年度までは置き換えではなく加点ですので，スコアを持っていれば加点します。推薦Ⅰ，推薦Ⅱを含め，共通テストを利用しない者に関しては，英語資格の提出率が非常に高いです。特に総合Ⅰは９月～10 月の早い時期の試験ではあるのですが，非常に提出率は高いです。

私どもとしては，高校時代に英語の学びを継続している学生さんを取っていきたいということで行っているわけですが，そこで確かにそういう学生が取れているということがここで分かってきます。



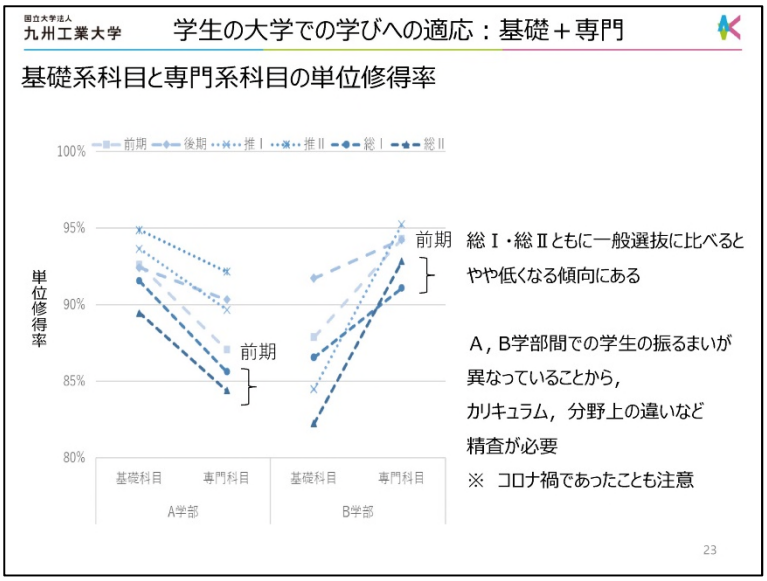
先ほどのリテラシー，コンピテンシーも継続的に計測していますので，総合型とそれ以外との比較を見ていきます。やはり総合型選抜の学生が総じてコンピテンシーが高い状態にあるということは継続的に見られます。ただ１点だけ，計画立案力という，私どもとしては課題解決型記述という問題の中で問うている力が少し低く出ています。まだここは評価がそこまで達していないのではないかと少し危惧しています。

ここは，情報Ⅰが教科として追加されることを受けて，課題解決型記述問題を，情報，数学，物理も含めて，１つの課題として教科の壁を超えたような形に見直す予定としています。



こちらは共通テスト利用型の推薦Ⅱ，総合Ⅱという２つの特別選抜で比較しています。推薦Ⅱに比べて総合Ⅱが若干やはり理数の平均点が低めになっています。それに対応するようにリテラシーも総合Ⅱが低めに出ることが分かります。

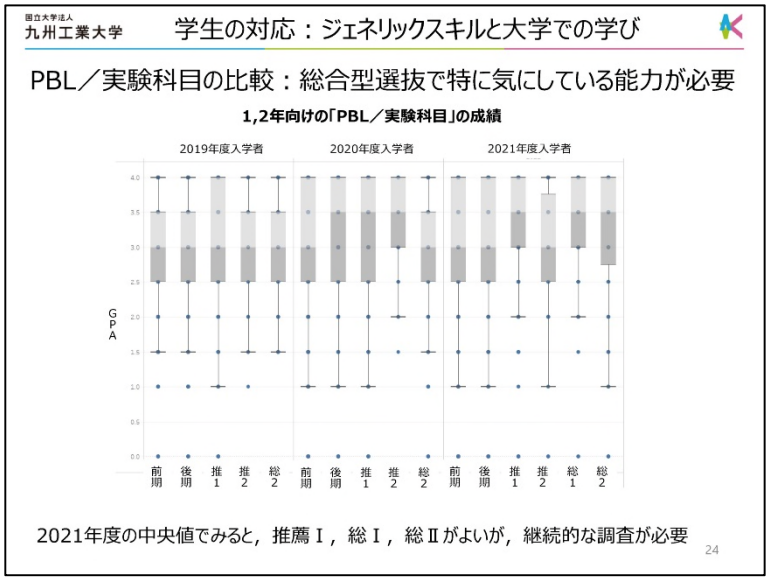
ただやはり推薦Ⅱはどちらかというと，共通テストと事前の提出物で見ていますが，それに対して，総合Ⅱはグループワーク等々を含めて見ていますので，やはりコンピテンシーは高めの学生が入学してきています。こういったところはやはり選抜としては十分見えてきているのではないかと思っています。



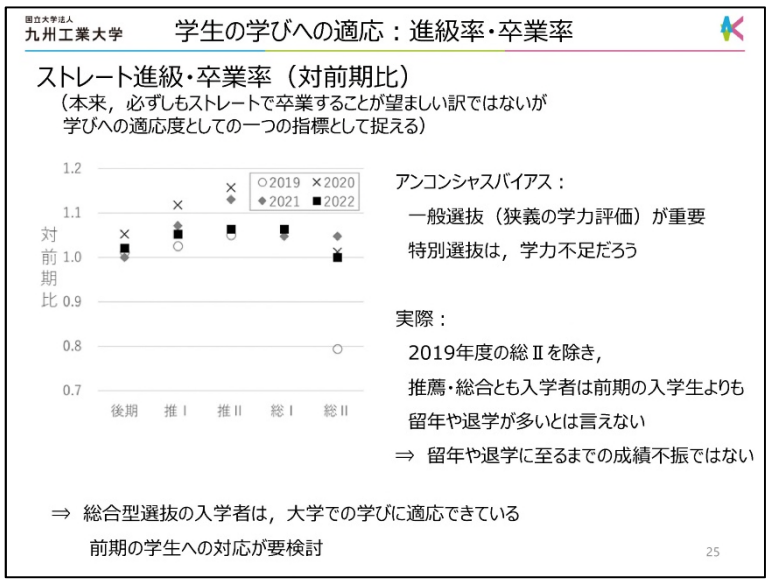
こちらが大学での学びの適応度を見たものです。入学後の単位習得率に課題があり，下にある２つが総合Ⅰ，総合Ⅱです。学部によって少し振る舞いが異なります。やはり単位の取得率で少し低めではありますが，基礎科目から専門科目になるにつれて，B 学部を中心として少し良くなってきています。

初年次を含めた科目をやはり今後対応していかなければいけません。アドミッション側としては，ここに対応できる理数系の科目の学力をもう少し問うような形に切り替えなければいけないだろうと考えています。

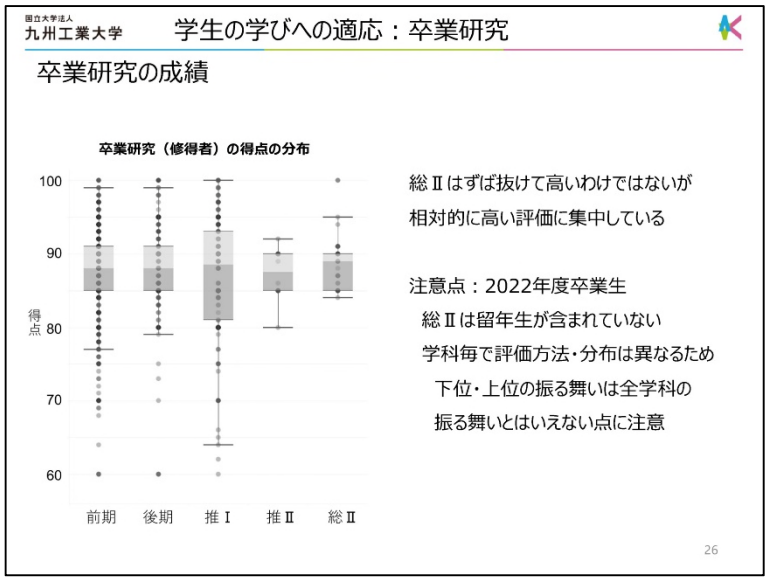
総合型Ⅰは２段階選抜にしていますが，これまでは第１段階では，このいわゆる狭義の学力を問うていませんでしたので，CBT を使った学力検査を第１段階に移行することによって，一定の学力を問うていくこととしています。



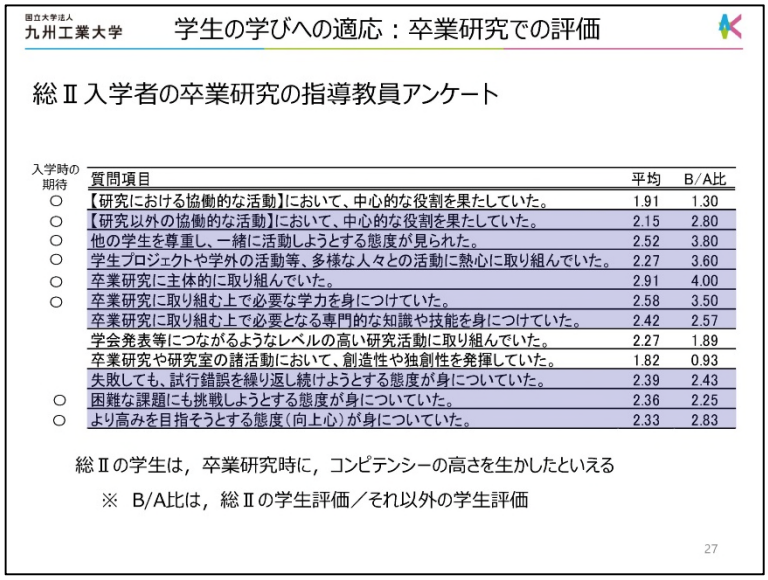
こちらは，大学に入ってから各入試区分で入学した学生が PBL（Project-Based Learning）や実験科目の中で，十分に対応できているか，あるいは良い成績が取れているかを示したグラフです。なかなか比較が難しいグラフになっていますが，縦軸が PBL の科目と実験科目の GPA です。中央値等を見ていくと，総じて，総合Ⅰ，総合Ⅱは比較的高め，もしくは同等で推移していることが見えています。この辺りは継続的に調査をしていく必要があるかと思っています。



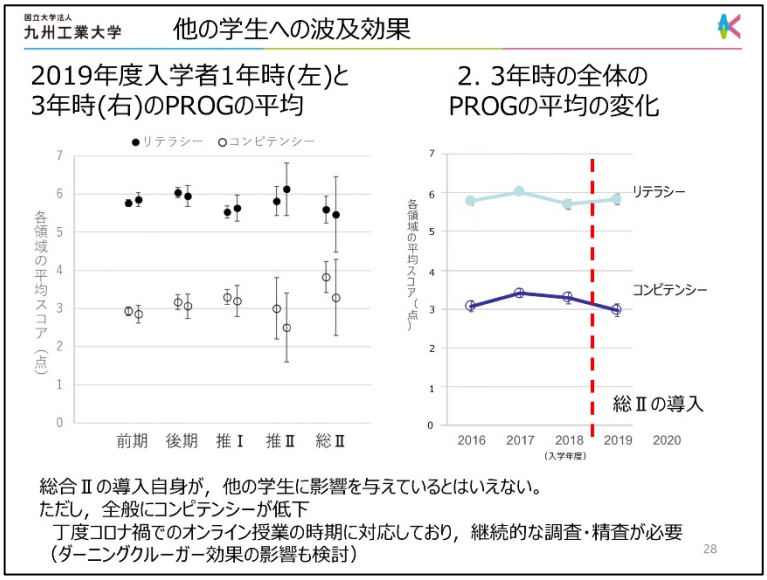
もう１つ，私たちが注目しているのは，このストレート進級率です。成績自身がとてつもなく高くなくても，ある種の大学への適応度ということで，ストレート進級・ストレート卒業ができているかを前期入試と比較したグラフです。前期入試を１としています。総合Ⅱの１年目を除きますと，総合Ⅱ，総合Ⅰともに比較的高めです。推薦Ⅰ，推薦Ⅱも高めに推移していて，留年や退学は多いとは言えないということです。留年・退学に至るまでの成績不振ではありませんが，成績面で苦労している部分があるのは見て取れます。



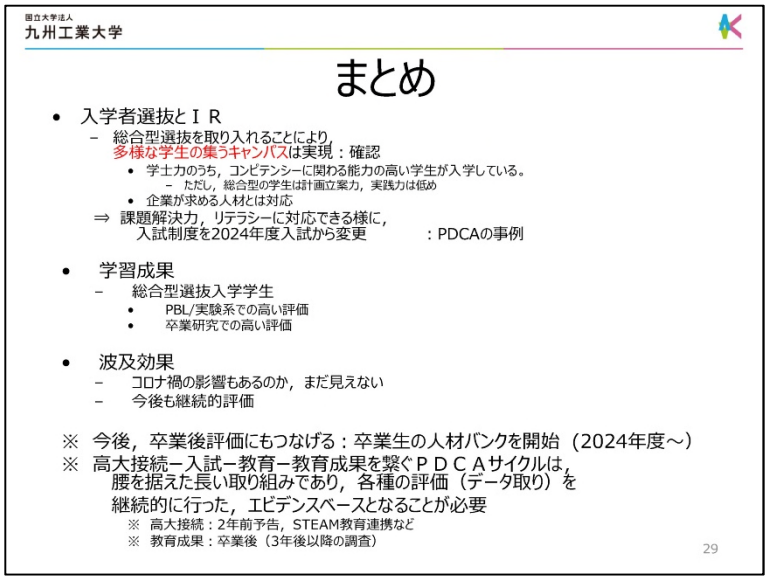
最終的には卒業研究等を含めたところで対応ができているかです。推薦Ⅱ，総合Ⅱで入学した学生が卒業研究の時期まで達しましたので測ってみますと，比較的高めに推移していて，下位者がいません。少し注意が必要なデータではあるのですが，相対的には高めに推移しているのではないかというところで，本来課題解決等で見ていきたかったところには対応できているのではないかと思っています。



総合Ⅱ入学者の指導教員に対しアンケートを実施しました。こちらで入学時に期待していた項目に丸を付けていますが，これらに対しては，一般で入ってきた学生に比べて高い評価をされていますので，コンピテンシーの高さが実際，生かせているのではないかと思っています。



ただ，他者への波及効果については，総合Ⅱが始まってから影響が出ているかを見ているのですが，多様なキャンパスの中で期待していたようには影響は出ていません。ただ，ちょうどコロナが広がった時期と重なっていることもあり，今後，継続的に見ていかなければいけないところかと思っています。



以上，入学者選抜と IR，総合型選抜等で多様な学生は集うことができるようになってきましたし，総合型選抜が PBL や卒業研究において高い評価を得ていることもありますが，

まだ継続的に考えなければならず，今後，卒業後の評価を含めて行っていければと思っています。

報告は以上です。どうもありがとうございました。

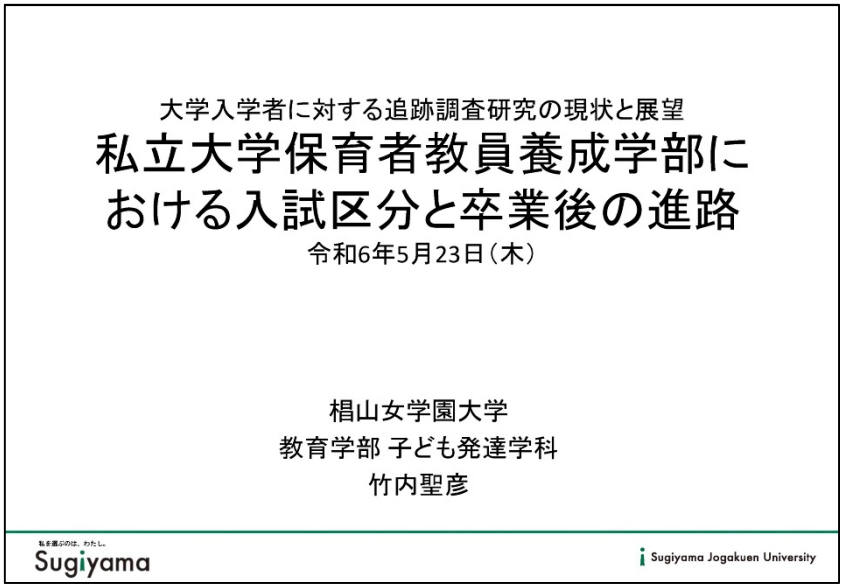
【桜井・司会】　安永先生，ありがとうございました。次の発表に移りたいと思います。続きまして，報告④は椙山女学園大学の竹内先生です。よろしくお願いします。■

全体会 1（センターセミナー）◉ 報告 4

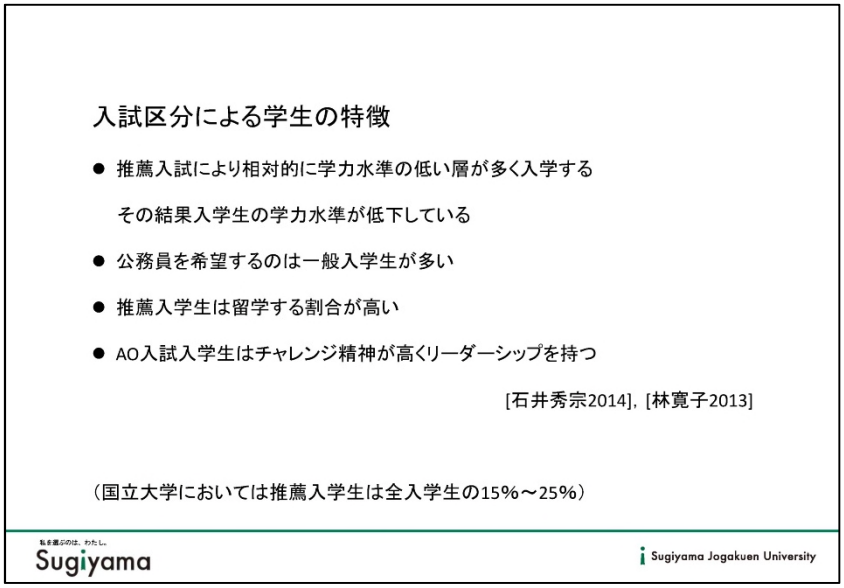
私立大学保育者教員養成学部における入試区分と卒業後の進路

■竹内　聖彦（椙山女学園大学 教育学部教授）

椙山女学園大学教育学部の竹内です。



今回，ここで発表させていただく内容は 10 年ほど前の情報を使った 2020 年前後の報告内容です。

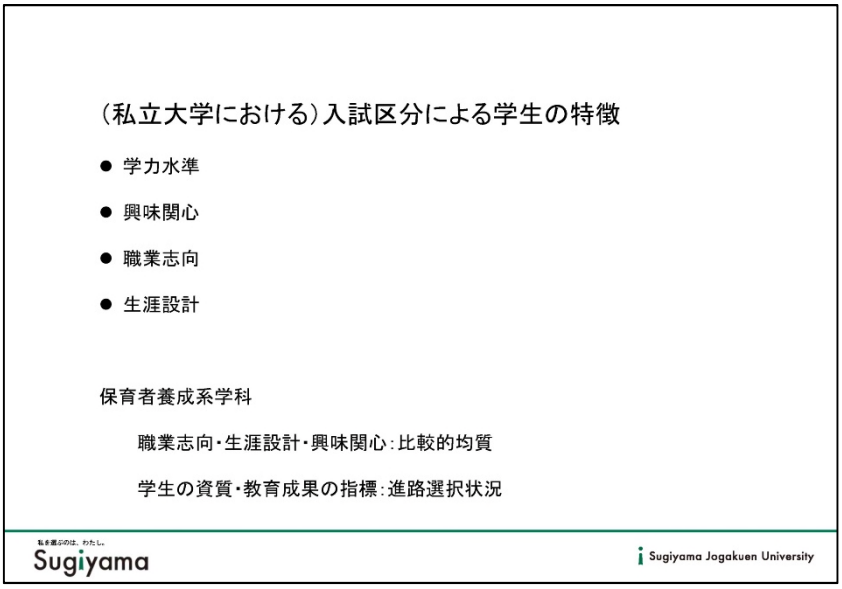


報告内容としては，いろいろな種類の入試区分について，それぞれの入試区分による学生の特徴を見ていくものです。本日，先生方により様々なご報告がありましたが，推薦入試と一般入試，それぞれによってやはり学生の質が違うのではないかということがよく言われ，実際に，そういった報告もすでになされていたわけです。

私立大学においては，推薦入試の学生が半数ほどいて，その割合が非常に大きいです。推薦入試での入学生と，それから一般入試での入学生の比率も考えるとそれぞれの特徴をきちんと出して，それぞれの学生に対応するような教育をしていかなければ，全体としてうまくもたないのではないかということで，そういったことを目標に，学部の IR で始めたものです。

その後，2017～19 年頃に，当時は情報が一元化されていなかったため，大学全体として IR 室を作るということになりました。教務の情報は教務に，入試の情報は入試に，就職情報は学生課に，とばらばらでしたので，それをまずは一元化することを目的として IR 室を立ち上げました。

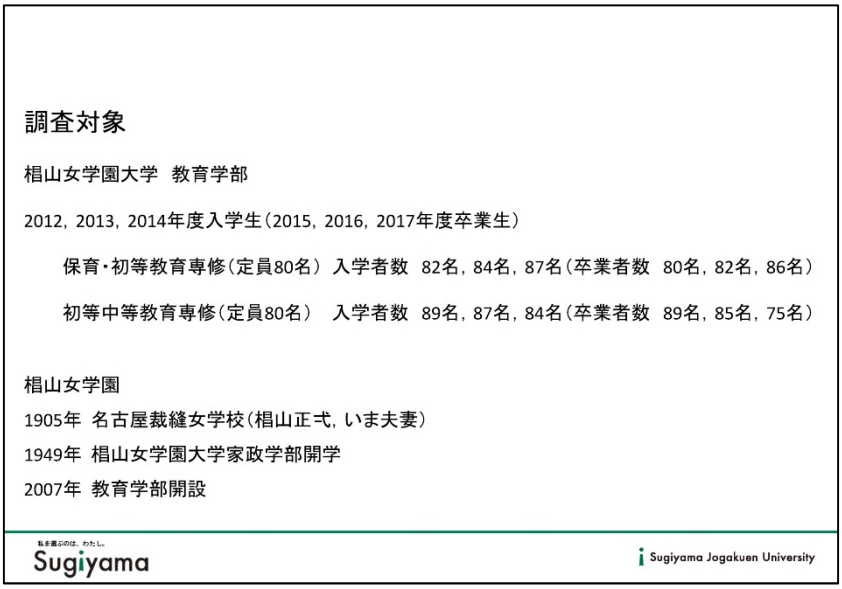
教育学部のことを調査してほしいということで私も IR 室に関わることとなり，さまざま取り組んできた中で興味深かったことを当時の報告にまとめました。それを本日ここでお話しさせていただきたいと思います。



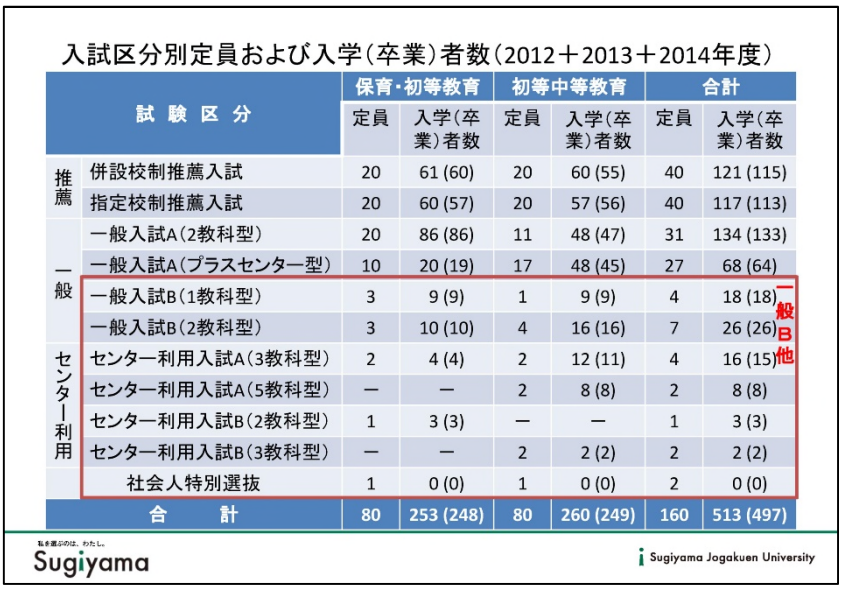
私の所属は教育学部ですが，教育学部は教員養成を目的としているため，進路が決まっています。卒業後，入学時に希望していたとおりの進路に進めるかについて，入試区分によって違いがあるのではないか，と現場で見ていると感じることがあり，それについて検証したいと考えました。

いわゆる入試区分によって学力水準や興味関心が異なるといったことはあるかもしれないのですが，それでも学生の進路の方向性は皆一緒です。それゆえに多少の違いは見えなくなってしまう可能性がありますが，その学生がどのように育っていったかを見るために，卒業時に採用試験に合格するかどうかを指標に学生の特徴を見ていこうとしました。

保育系の課程もありますが，やはり同じように進路がカギとなります。保育系の場合は，保育士になるか，あるいは幼稚園の教員になるかによって少し学生の質が異なります。それから公立か私立かによっても，やはり質が違うということがあります。現場の学生の様子を見ていると，そういった違いが見えてきますので，そういったところも注意して見ていきたいということでやってみたわけです。



対象としているのは，私の所属している椙山女学園教育学部の保育・初等教育専修という，保育士，幼稚園の教員を養成する専修と，もう１つは，初等中等教育専修という，小学校の教員になるということを目標とする専修の学生です。



試験区分		保育・初等教育 定員	保育・初等教育 入学（卒業）者数	初等中等教育 定員	初等中等教育 入学（卒業）者数	合計 定員	合計 入学（卒業）者数
推薦	併設校制推薦入試	20	61 (60)	20	60 (55)	40	121 (115)
推薦	指定校制推薦入試	20	60 (57)	20	57 (56)	40	117 (113)
一般	一般入試A（2教科型）	20	86 (86)	11	48 (47)	31	134 (133)
一般	一般入試A（プラスセンター型）	10	20 (19)	17	48 (45)	27	68 (64)
一般	一般入試B（1教科型）	3	9 (9)	1	9 (9)	4	18 (18)
一般	一般入試B（2教科型）	3	10 (10)	4	16 (16)	7	26 (26)
センター利用	センター利用入試A（3教科型）	2	4 (4)	2	12 (11)	4	16 (15)
センター利用	センター利用入試A（5教科型）	—	—	2	8 (8)	2	8 (8)
センター利用	センター利用入試B（2教科型）	1	3 (3)	—	—	1	3 (3)
センター利用	センター利用入試B（3教科型）	—	—	2	2 (2)	2	2 (2)
	社会人特別選抜	1	0 (0)	1	0 (0)	2	0 (0)
合計		80	253 (248)	80	260 (249)	160	513 (497)

一般B他

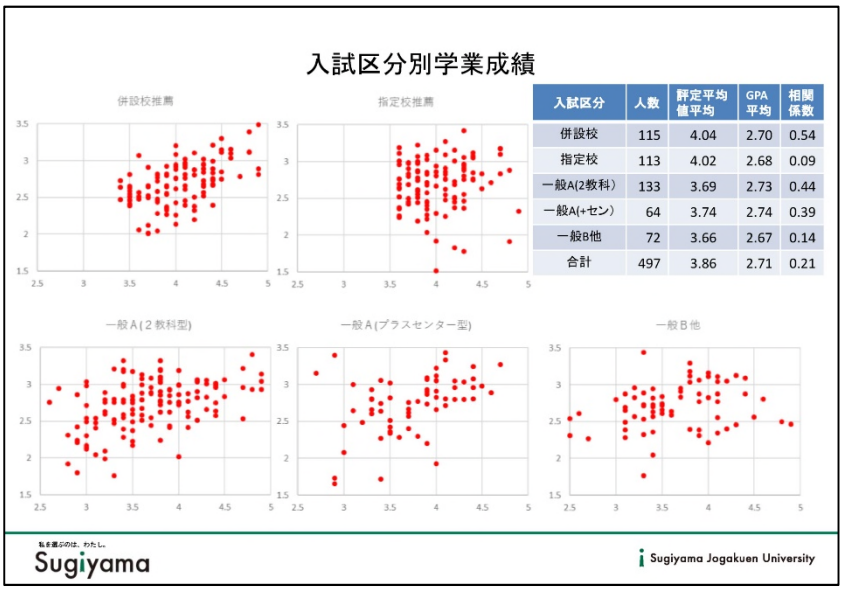
まず，入試区分について説明させていただきます。私学では多くの場合，推薦入試と一般

入試とで入学定員を大体半々に分けています。本学では，当時はどちらの専修も 80 名定員でした。保育も 80 名，それから小学校教員も 80 名として，推薦がどちらも 40 名ずつという形です。一般入試等では残りの 40 名ずつを取っています。

ただし，小学校の教員はいろいろな分野の教育を受けてきてほしい，いろいろな科目を勉強してきてほしい，たくさんの科目を受けてほしいということで，センター利用型に少しシフトして定員を分けていますので，少し後半の数字がばらついています。

一般入試 A というのは，通常の私立大学の入試時期に行われる入試で，一般入試 B というのは 3 月ぎりぎりのところでまだ進路が決まってない人たちが多く受けるものです。一般入試 B でエントリーしてくる人たちは，学力的には高いかもしれないが，希望が叶わなかった人である可能性が高いです。それからセンター入試も国立大学を目指していて，不本意な結果となった人たちが来るので，やはり学生の質が少し違うということが入学当初は見えます。

表中に赤枠で囲った箇所は少し学生の質が異なるといえます。ここは人数が少ないので全部まとめて，今後のお話では一般 B 他という形で分類して 4 つ，あるいは 5 つの入試区分でお話ししていきたいと思います。



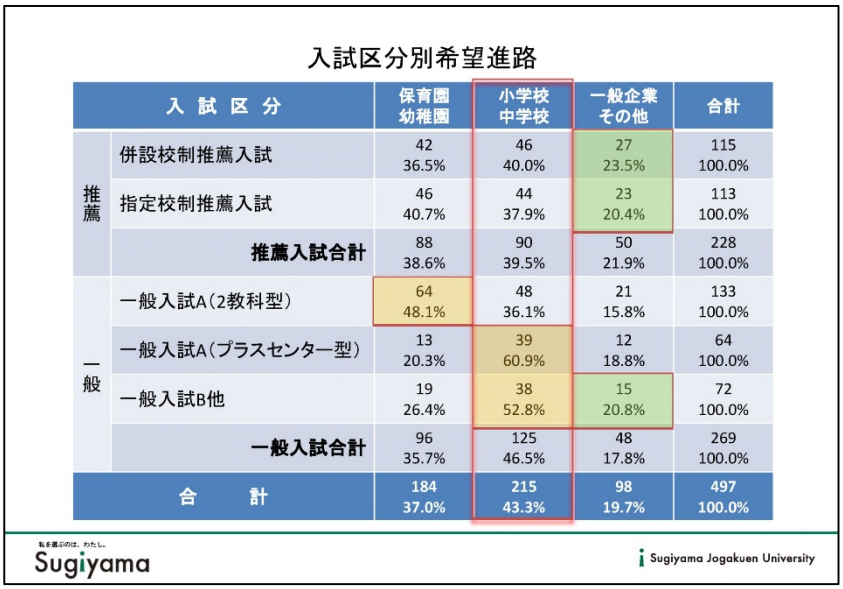
入試区分	人数	評定平均値平均	GPA平均	相関係数
併設校	115	4.04	2.70	0.54
指定校	113	4.02	2.68	0.09
一般A(2教科)	133	3.69	2.73	0.44
一般A(+セン)	64	3.74	2.74	0.39
一般B他	72	3.66	2.67	0.14
合計	497	3.86	2.71	0.21

まず高校の評定平均と大学の GPA の相関を見た全体図です。推薦入試では，評定平均に一定基準を設けて区切っていますので，評定平均が低い人はいません。そのため GPA の関係を見ると，相関はほとんどないという状況になってくるはずです。

ただし，本学は大学の下に併設校といって高校を持っています。そこから進学する学生たちを比較すると，高校の成績が良かった学生はやはり大学に来ても成績がいいということがあり，併設校推薦に関しては比較的相関があります。

それから全体として見た時も一般 A はやや相関があります。高校での成績があまり芳しくない学生さんは，大学でも，GPA があまり伸びないということはあるようです。しかしこの相関はあまり大きくありません。これまでの先生方のお話でもありましたとおり，あま

り関連性はなさそうだということは何となく分かっていました。



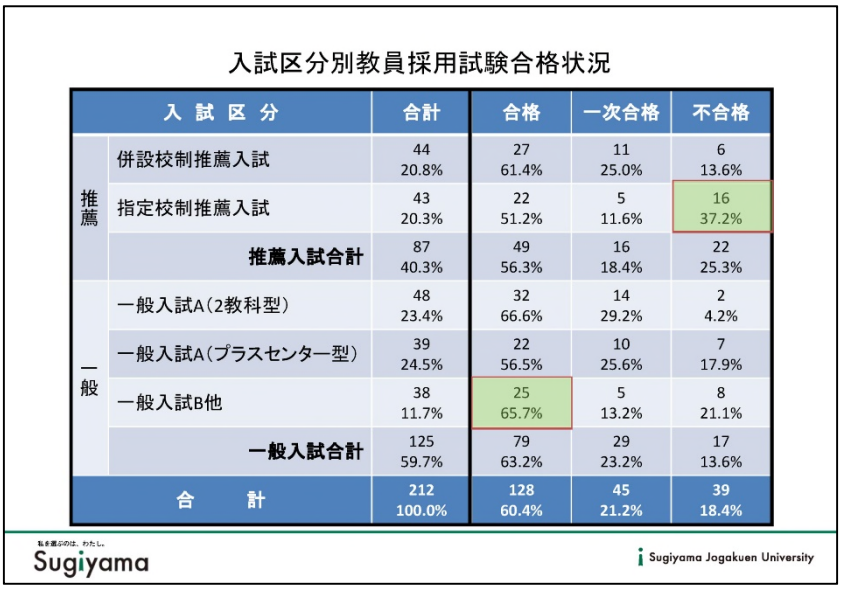
入試区分別希望進路

入試区分		保育園 幼稚園	小学校 中学校	一般企業 その他	合計
推薦	併設校制推薦入試	42 36.5%	46 40.0%	27 23.5%	115 100.0%
	指定校制推薦入試	46 40.7%	44 37.9%	23 20.4%	113 100.0%
	推薦入試合計	88 38.6%	90 39.5%	50 21.9%	228 100.0%
一般	一般入試A（2教科型）	64 48.1%	48 36.1%	21 15.8%	133 100.0%
	一般入試A（プラスセンター型）	13 20.3%	39 60.9%	12 18.8%	64 100.0%
	一般入試B他	19 26.4%	38 52.8%	15 20.8%	72 100.0%
	一般入試合計	96 35.7%	125 46.5%	48 17.8%	269 100.0%
合計		184 37.0%	215 43.3%	98 19.7%	497 100.0%

卒業後に教員になるのか，あるいは保育士，幼稚園教諭になるかといった進路について，それぞれの入試区分によってどのように分かれているかを見てみますと，このような形になっています。

黄色の箇所は人数が多いところです。保育士は一般で科目数が少ないほうで人数をたくさん取っていて，小学校は科目数が多いほうでたくさん人数を取っており，入試の仕組みから必然的にこうなっているのであり実はあまり関係ありません。

緑色の箇所を見ていただくと，教員養成なのに，保育士養成なのにそれ以外の進路を希望する人たちの割合がこの辺りだけ高いのです。やはり推薦の学生さんは，高校の先生に「ここへ行け」というように言われて進学するため，教員や保育士になる気持ちが薄いのかもしれない，あるいは最後のところでどこでもいいからとにかく大学に入りたいという人も同様のことがあるのかもしれないということが，何となくこの割合で見えてきます。そういった学生さんたちを学部としてはどのように方向付けていくかを教育の中で見ていく必要が出てきます。



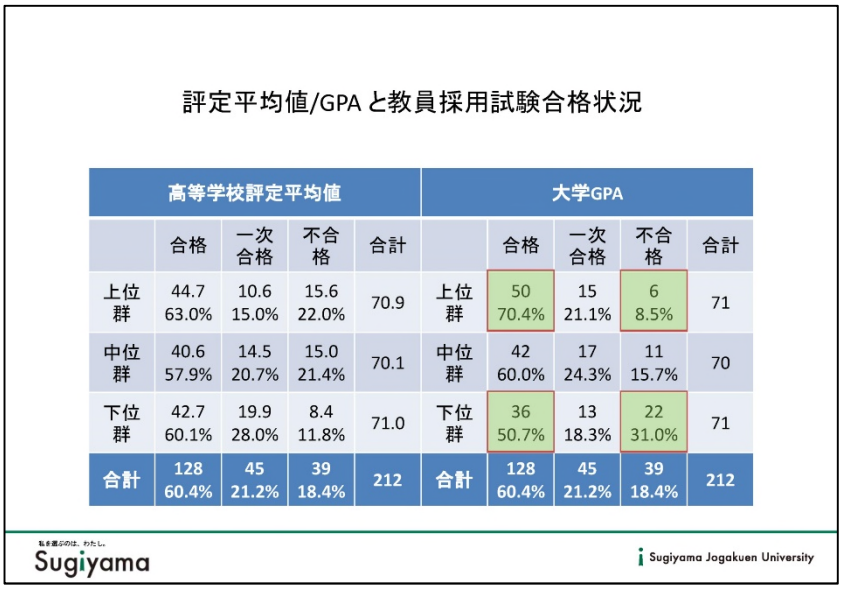
入試区分別教員採用試験合格状況

入試区分		合計	合格	一次合格	不合格
推薦	併設校制推薦入試	44 20.8%	27 61.4%	11 25.0%	6 13.6%
	指定校制推薦入試	43 20.3%	22 51.2%	5 11.6%	16 37.2%
	推薦入試合計	87 40.3%	49 56.3%	16 18.4%	22 25.3%
一般	一般入試A（2教科型）	48 23.4%	32 66.6%	14 29.2%	2 4.2%
	一般入試A（プラスセンター型）	39 24.5%	22 56.5%	10 25.6%	7 17.9%
	一般入試B他	38 11.7%	25 65.7%	5 13.2%	8 21.1%
	一般入試合計	125 59.7%	79 63.2%	29 23.2%	17 13.6%
合　計		**212** **100.0%**	**128** **60.4%**	**45** **21.2%**	**39** **18.4%**

続いて，小学校教員を志望する学生について，教員採用試験の合格状況を入試区分別にもう少し詳しく見たいと思います。これが 3 年分の人数ですが，それぞれ推薦で 87 名，一般入試で 125 名，全体で 212 名が教員を志望し，教員採用試験を受けたということですが，もともと推薦と一般とで 50％程度の割合だったものが，推薦では教員以外の進路を選ぶ学生が多くなっており，教員採用試験の受験者数は少なくなっています。

合格状況については，入試区分ごとの違いが表れています。一般 B は国公立を目指していたものの不本意な結果となったというような学生が多いため，学力が高く合格しやすいのではないか，また，指定校推薦の学生さんは，不合格率が比較的高く，一次試験の学力のところで落とされてしまうからではないかということが見えてきています。

本調査結果を踏まえ，こういった学力が少し足りない学生さんたちに対して，卒業年度の採用試験の直前時期に学力向上講座というものを開始するなど，多少なりとも教育に反映させることができています。



評定平均値/GPA と教員採用試験合格状況

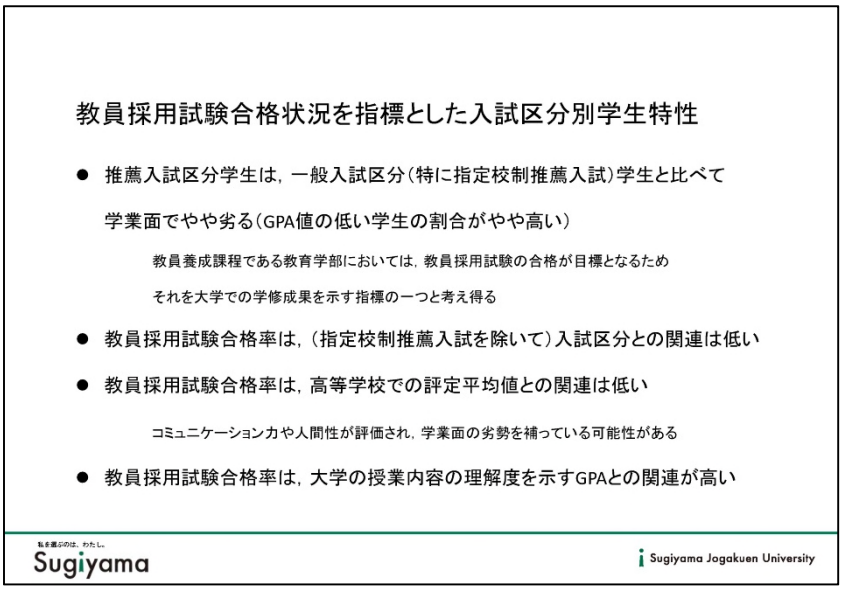
高等学校評定平均値					大学GPA				
	合格	一次合格	不合格	合計		合格	一次合格	不合格	合計
上位群	44.7 63.0%	10.6 15.0%	15.6 22.0%	70.9	上位群	50 70.4%	15 21.1%	6 8.5%	71
中位群	40.6 57.9%	14.5 20.7%	15.0 21.4%	70.1	中位群	42 60.0%	17 24.3%	11 15.7%	70
下位群	42.7 60.1%	19.9 28.0%	8.4 11.8%	71.0	下位群	36 50.7%	13 18.3%	22 31.0%	71
合計	**128** **60.4%**	**45** **21.2%**	**39** **18.4%**	**212**	**合計**	**128** **60.4%**	**45** **21.2%**	**39** **18.4%**	**212**

次に，高等学校での評価平均と大学の GPA との関係を見ていきます。高等学校の評価は上位群と中位群と下位群と 3 分割して 212 人を 70 名ずつぐらいにしています。それから GPA もやはり 70 名ぐらいずつにして分けてみました。

少しご説明が遅れましたが，当時の教員採用試験は一次試験で学力を測り，二次試験で面接などをして合否判定するというのが一般的でした。今回の表では不合格の人を，一次試験のみ合格した人と，一次試験で不合格となった人とに分けて記載しています。例えば上位群を見ますと，不合格の割合 37％のうち，一次合格が 15％，不合格が 22％とあります。最終的には不合格だったが一次は合格していた人の内訳が分かります。

このように見てみますと，左側の高等学校の成績に基づいて分割した表からはあまり有意差が無いことが分かりました。ところが大学の GPA で見るとかなり差が出ています。下位群では合格する人が半分程度にとどまる一方で，上位群では 70％が合格していて，不合格の者がほとんどいないという状況です。大学で勉強を頑張った人ほど，合格に結び付くということが分かり，この結果に学部の教員たちは非常に喜びました。

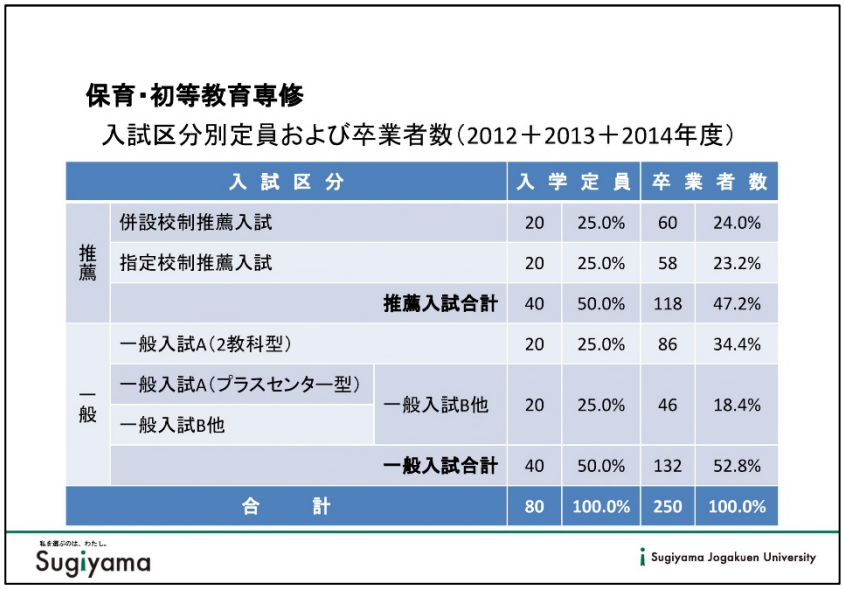
したがって高等学校での成績や入試区分とは関係なく，大学でどの程度勉強をしたかということが採用試験にそのまま反映されているという状況になっているわけです。



採用試験の結果を指標として入試区分ごとの特性を見てみますと，一般入試と比べると推薦入試は少し学業面で劣る面がありますが，教員採用試験の結果に関してはそれほど違いが見られませんでした。特に最後のほうにまとめましたが，高校での評定平均とはほとんど関係なく，大学での GPA との関係は高いことが分かりました。また，それだけではなくて，コミュニケーション力や人間性など，そういったことも評価されているので，学業面で少し足りないというような推薦系の学生さんたちもうまくいってやっていると考えられます。

確かに，教育現場，大学の中で見てみますと，推薦の学生さんはすごく活力があって良い

面が多く見られますので，教育現場に出た時に良い教員になっていくのではないかと，指導をしているこちらも思うところです。



保育・初等教育専修

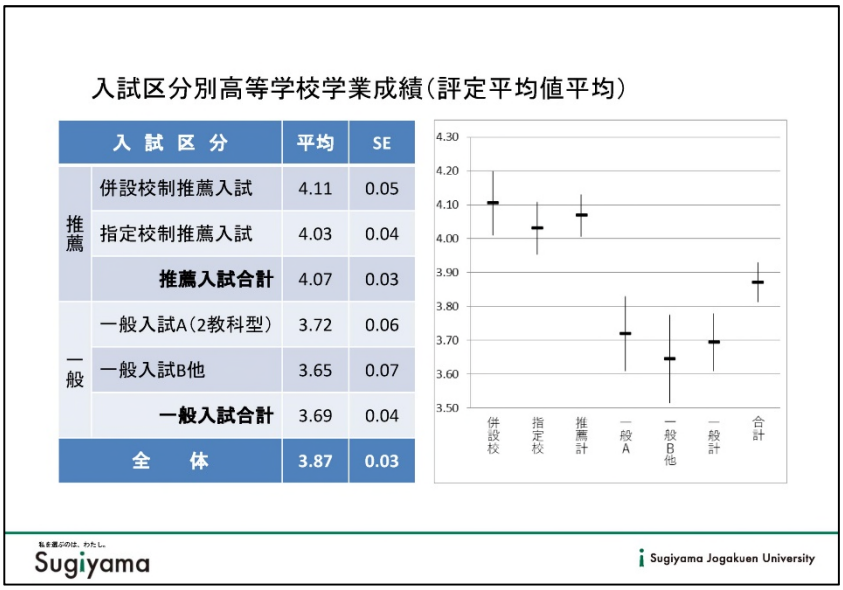
入試区分別定員および卒業者数（2012＋2013＋2014年度）

入試区分			入学定員		卒業者数	
推薦	併設校制推薦入試		20	25.0%	60	24.0%
	指定校制推薦入試		20	25.0%	58	23.2%
	推薦入試合計		40	50.0%	118	47.2%
一般	一般入試A（2教科型）		20	25.0%	86	34.4%
	一般入試A（プラスセンター型）	一般入試B他	20	25.0%	46	18.4%
	一般入試B他					
	一般入試合計		40	50.0%	132	52.8%
合　計			80	100.0%	250	100.0%

Sugiyama　Sugiyama Jogakuen University

残りの時間で保育系の分析結果についてお話ししたいと思います。先ほどの教員養成と同様に，推薦と一般入試の定員が半分ずつで，これだけの学生が保育系の課程にいるわけです。

多少，ズレがあるのは，うまく推薦の定員に収まらず，たくさん推薦を出していただいたのでたくさんいるとか，一般入試のほうがうまく集まらずに少なかったとか，そのような理由がありますが，お示ししたとおりです。



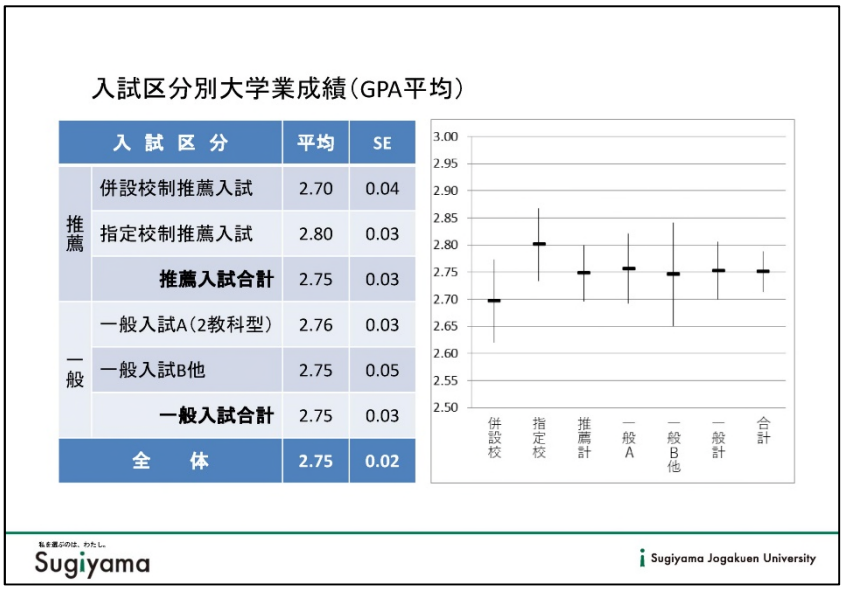
入試区分別高等学校学業成績（評定平均値平均）

入試区分		平均	SE
推薦	併設校制推薦入試	4.11	0.05
	指定校制推薦入試	4.03	0.04
	推薦入試合計	4.07	0.03
一般	一般入試A（2教科型）	3.72	0.06
	一般入試B他	3.65	0.07
	一般入試合計	3.69	0.04
全　体		3.87	0.03

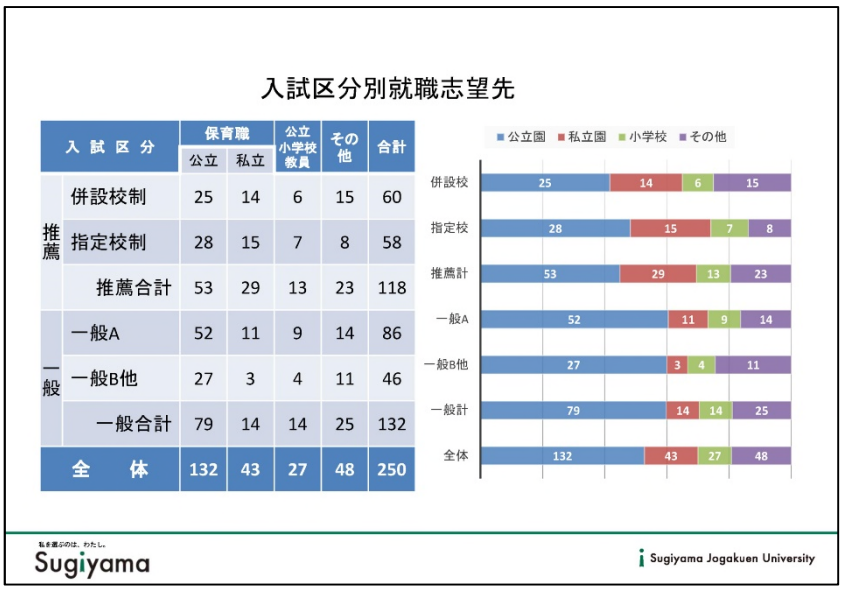
Sugiyama　Sugiyama Jogakuen University

入試区分別の学業成績については，推薦のほうは高いです。見ていただくともうかなり上のほうにあって，一般入試のほうは低く，見るからにかなり差があることはお分かりいただ

けると思います。



それが大学でどうかというと，GPA で見るとそんなに変わりません。ただ指定校のほうが少しだけ成績が良く，併設校は学業以外にも一生懸命なため成績はやや低くなっています。併設校の学生さんたちというのは，非常に活力があって，いろいろなことをやりたい学生が多いため，勉強以外のところで頑張ってしまって，大学の勉強は少しだけ弱いという状況が出ています。

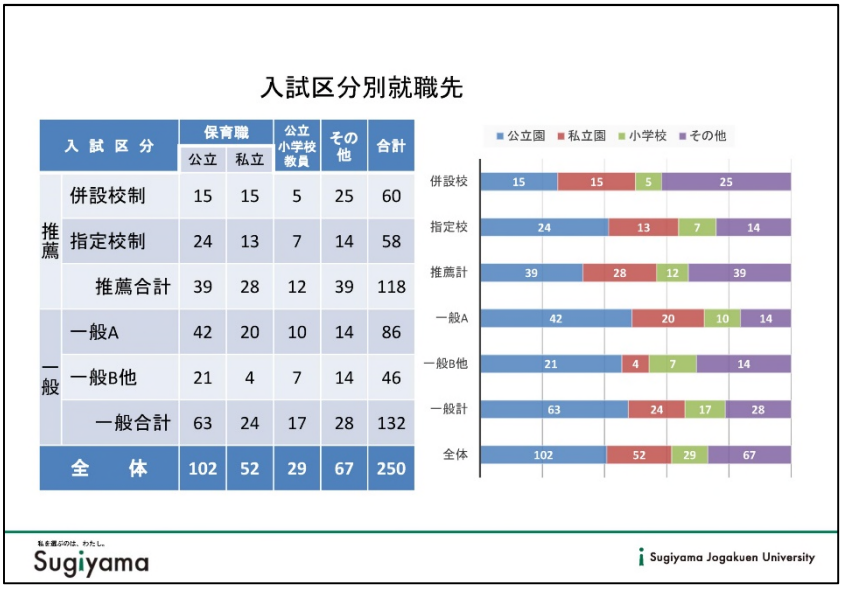


そのような学生さんの就職志望先を見ていきます。保育職というのは保育士，あるいは幼稚園教諭のことで，その中でも公立に行きたい学生さんたちと，私立に行きたい学生さんたちとでは若干カラーが違います。それは接している中で感じられることなので，実際にどのような状況なのかを見たいと思います。

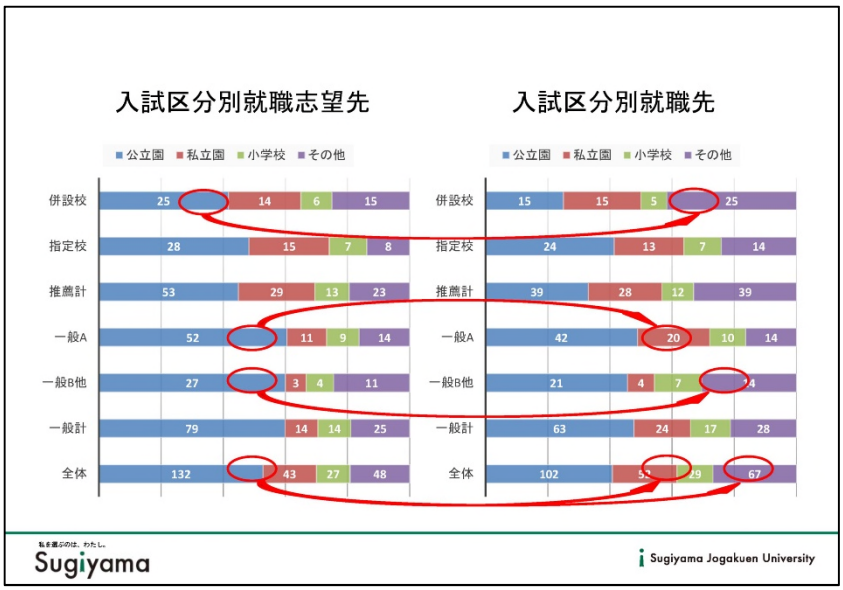
保育系の養成課程ではありますが，それでも小学校の教員を目指す人が約 10％います。その他というのは保育も小学校教員も志望せず，他を志望する学生さんたちです。そういう学生さんたちの割合が 20％ほどです。

つまり入試区分に関わらず，保育士あるいは幼稚園教諭になりたいという人が 7 割程度いるわけです。小学校教員にシフトした人たちも入れると，全体の 8 割近くが志望しているという状況です。

赤いところは私立の園で，推薦の学生は私立園志望が相対的に多いです。推薦の学生さんたちは，私立高校から来ることが多いので，公立の硬いイメージではなく，私立のにぎやかな明るいそういうものを想像して志望しているのではないかと思っています。



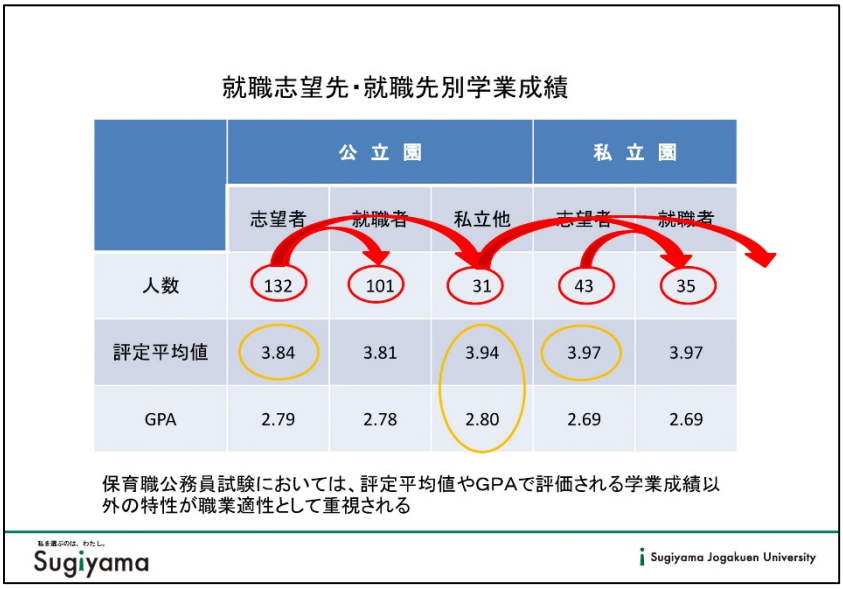
入試区分		保育職 公立	保育職 私立	公立小学校教員	その他	合計
推薦	併設校制	15	15	5	25	60
推薦	指定校制	24	13	7	14	58
推薦	推薦合計	39	28	12	39	118
一般	一般A	42	20	10	14	86
一般	一般B他	21	4	7	14	46
一般	一般合計	63	24	17	28	132
全体		102	52	29	67	250



実際の就職先について，公立園への就職が難しい学生は，その他や私立園に就職することが多いです。その変更先の違いで顕著なのが，一般 A の場合は，公立から私立に逃げますが，一般 B その他は，「もう教員は辞めます」，「幼稚園の教諭はやめます」，「保育士はやめ

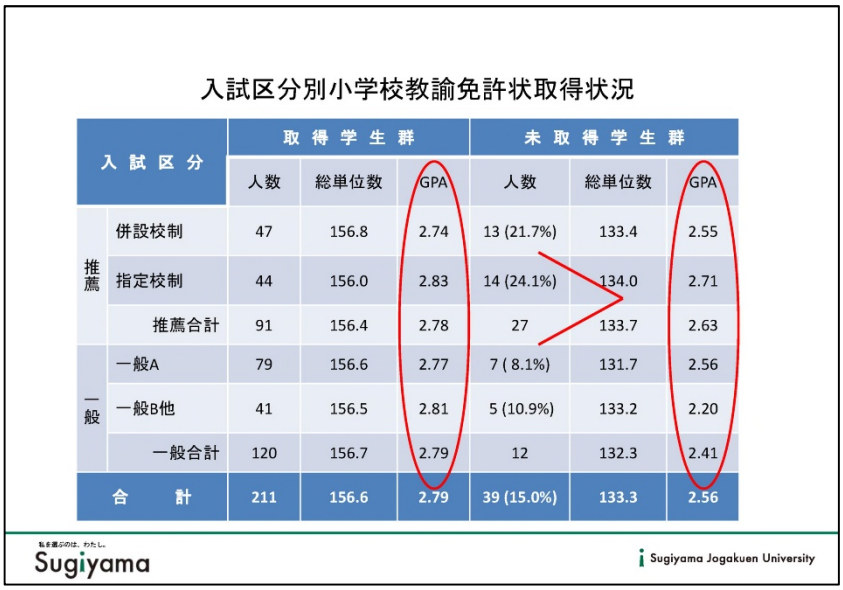
ます」ということでその他へ逃げてしまいます。

これらについては入試区分とその学生さんたちの特性ということで，学生指導に対して少し注意しなければいけない点です。

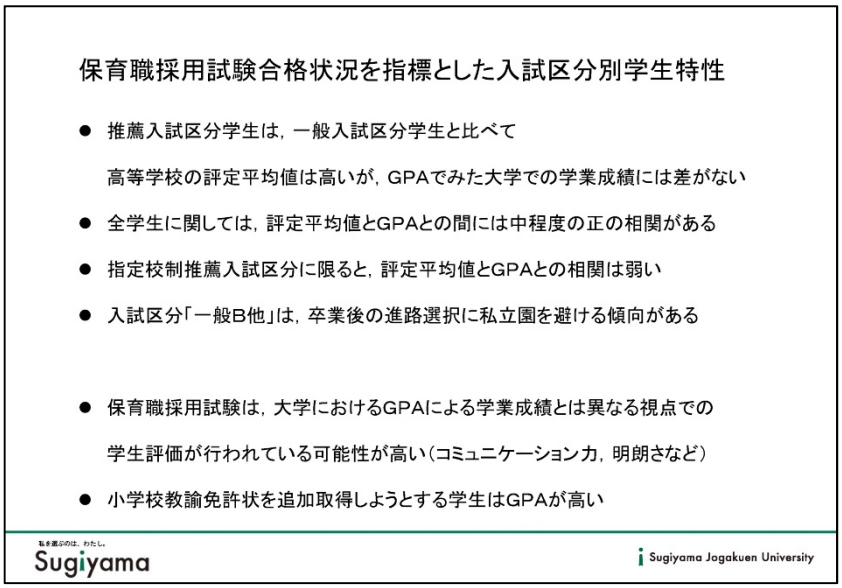


公立の幼稚園教諭，保育士になりたい人と，私立を希望する人とで比較すると，評定平均や GPA がすごく不思議な関係になっています。公立の人たちのほうが私立を望む学生さんたちよりも評定平均値は低いですし，GPA も表の真ん中を見ると残念だった人たちのほうが高いです。

残念だった人たちというのは，成績は良いが，面接で点が伸びなかった人たちではなかろうかということで，公立園が求める人材像にマッチしなかったのではないかということです。



小学校教諭の免許取得状況との関係で，小学校教諭の養成課程を受けている人のほうが学習量が多くなるので，GPA が低くなりそうですが，実際は取得者の方が成績は良いです。



こちらは保育のまとめです。推薦の学生は私立園への就職を希望する傾向があることと，それから就職先に関しては，GPA や成績とはあまり関係がないということです。コミュニケーション力といった，学力とは異なる部分を評価されているのではないかということが分かったというのがこの時の報告です。以上になります。

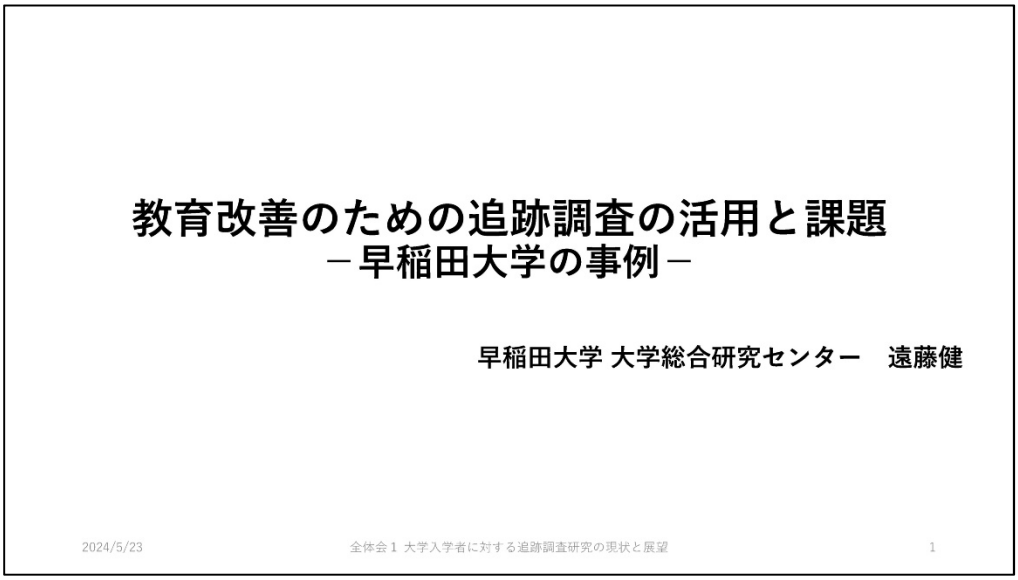
【桜井・司会】　竹内先生，どうもありがとうございました。それでは次の報告に移りたいと思います。最後の報告⑤は，早稲田大学の遠藤先生です。よろしくお願いします。■

全体会 1（センターセミナー）◉ 報告 5

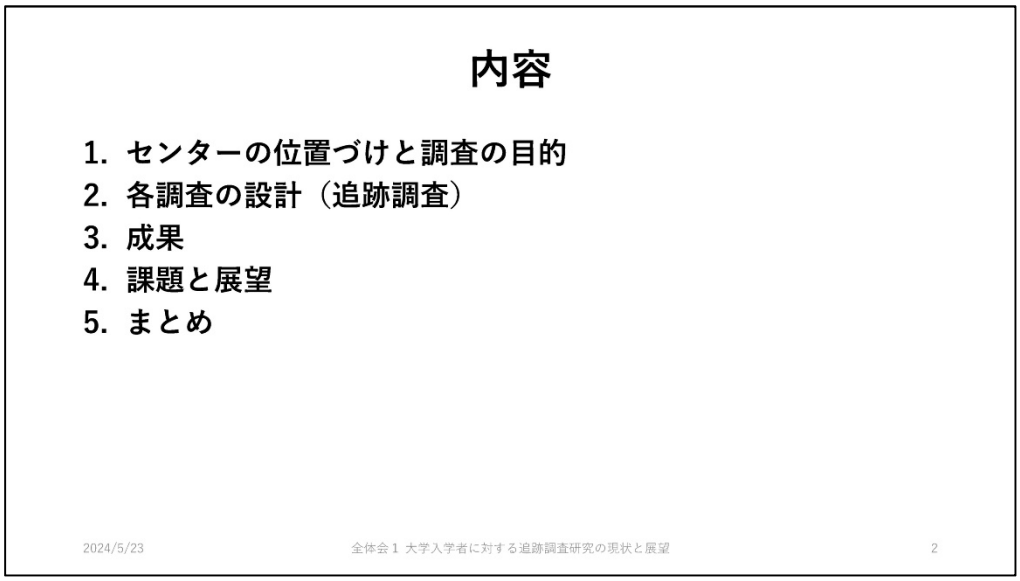
教育改善のための追跡調査の活用と課題 －早稲田大学の事例

■遠藤　健（早稲田大学 大学総合研究センター講師）

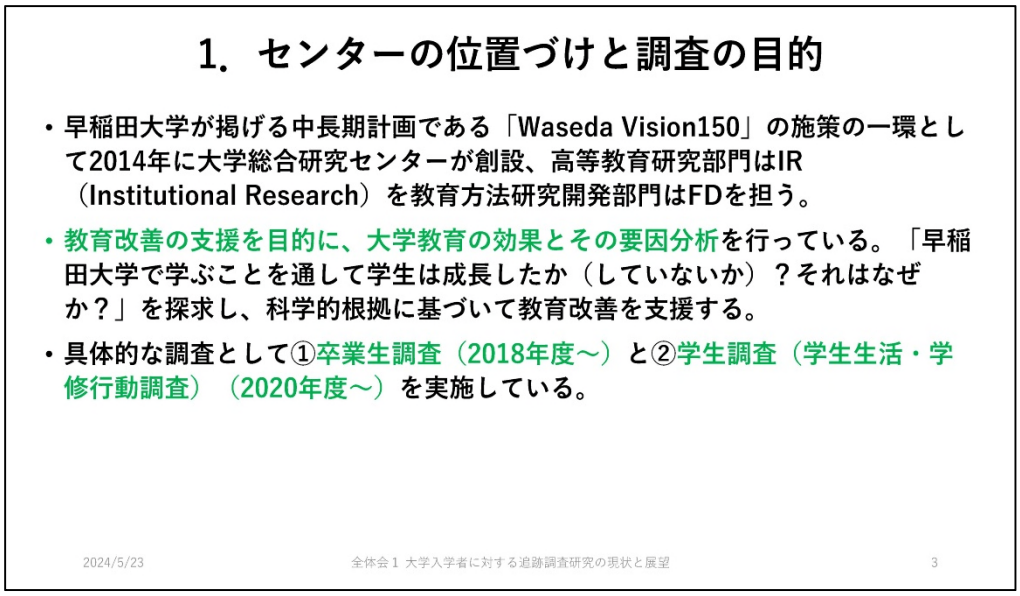
今回，報告をさせていただきます早稲田大学総合研究センターの遠藤と申します。



今回は，「教育改善のための追跡調査の活用と課題」について，全体会のテーマである追跡調査をどうデザインしてきたのかということ，そこから何が明らかになったのか，そしてどのような課題があるのかということを早稲田大学の事例を通して，お伝えしたいと思います。



今回の内容を，私の所属しているセンターの位置付けと調査の目的，追跡調査のデザイン，そしてそれらの成果や課題と展望について，順に沿ってお話しをしていきます。



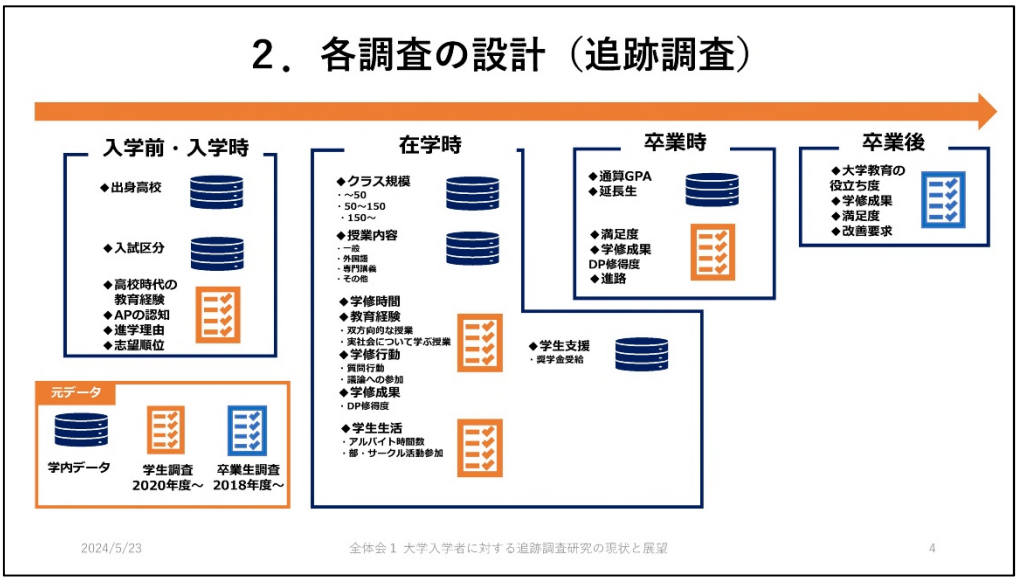
まず「センターの位置づけと調査の目的」について，私自身が入試関連，あるいは入学時点に関する業務に直接的に携わっているわけではありません。早稲田大学では大学が掲げる中長期計画である「Waseda Vision150」があります。2013 年あるいは 2014 年にできたものですが，これの施策の一環として 2014 年に大学総合研究センターが創設されました。

部門としては，私が所属している高等教育研究部門が IR（Institutional Research）を，もう 1 つの教育方法研究開発部門が FD（Faculty Development）を担う体制です。

この大学総合研究センターの高等教育研究部門に関しては，教育改善の支援を目的に大学教育の効果とその要因分析を行っています。端的に言えば，早稲田大学の入学生が早稲田大学での学びを通して成長しているのだろうか，あるいは成長していないのだろうか，成長

しているあるいはしていないのであれば，それはなぜかということを探求し，科学的根拠，データに基づいて，教育改善を支援するという機能を有しています。

科学的根拠に基づいた教育改善の支援には調査が必要なわけですが，このセンターでは具体的な調査として，卒業生調査を 2018 年から，そして学生調査，正式名称は学生生活・学修行動調査と呼びますが，そちらは 2020 年から実施しています。



こちらのスライドは各調査の設計を簡単に図にしてまとめたものです。

入学前から入学時に関するデータ，学士課程 4 年間に関するデータ，そして卒業時に関するデータに加えて，今回ご紹介する卒業生調査では卒業後の状況についても把握できるように，データを一貫して取ることができるようデザインされています。

早稲田もそうですが，教務関連のデータは調査前から当然あったわけですが，その学生たちの意識や動機，主観的な学修成果の修得度合は調査をしなければ得られない部分もあります。そのためオレンジ色の枠内にあるように，2020 年度から学生調査を通じてデータを取得しています。特に最近では，入学前の状況に関して，高校時代の経験なども取るようにしています。

学生調査から先んじて行われた卒業生調査ですが，卒業以降の状況，例えば大学教育が実際どの程度役立っているのかという学修成果や満足度，卒業後に考える大学への改善要求についても意見を求めています。

学生調査の概要

	調査時期	調査方法	調査対象数	回収数	回収率
2020年調査	11～12月	全学部生・大学院生に対してウェブ調査ツールを用いた回答を依頼。	46,309	10,665	23.0%
2021年調査	6～7月		45,884	10,835	23.6%
2022年調査	6～7月		45,587	14,535	31.9%
2023年調査	6～7月		46,112	13,175	28.6%

※回答データは暗号化した上で、①回答者の教学等データと結合が可能であり、②複数年回答している場合、各年度調査間の結合も可能（パネルデータ化）。回答者はその旨、同意した上で回答している。

各年度調査の報告書は以下大学総合研究センターのHPから閲覧ができる。
https://www.waseda.jp/inst/ches/cher/about/

- 各年度の集計結果や記述統計に加えトピックの分析結果も掲載
- 大学在学時の学修行動の規定要因分析
- アドミッション・ポリシーの習得度
- 出身高校タイプの差異など

2024/5/23　全体会１ 大学入学者に対する追跡調査研究の現状と展望　5

続いて学生調査の概要です。2020 年から実施しており，昨年度の調査で 4 回が終了しました。調査方法は全学部生と大学院生に対してウェブ調査ツールを用いて回答を依頼しています。全学部生と大学院生を合わせると非常に数が多く 4 万人以上が対象となりますが，実際の回収数は 1 万件を超えるような状況で，回収率は 20％から 30％程度の間で推移しています。

入口から出口まで一貫してデータを取るという目的に沿い，回答データは暗号化した上で，回答者の教学等のデータと結合が可能な状態になっています。もう 1 つのポイントは，複数年回答している場合，各年の調査間の結合も可能であることです。例えば 1 年生の時にも，2 年生の時にも回答した場合には，その回答自体を結合することが可能になります。パネルデータになるということになります。当然その回答者は説明に同意した上で回答をしているということになり，各報告書等に関してはホームページで公開しています。

学生調査の回答傾向

表２－２　４年間の回答パターン

No.	2020年	2021年	2022年	2023年	件数	%		通算GPAの平均
1	―	―	―	―	4,305	48.2%	48.2%	2.322
2	―	―	―	回答	480	5.4%		2.569
3	―	―	回答	―	469	5.2%	24.6%	2.538
4	―	回答	―	―	429	4.8%		2.477
5	回答	―	―	―	817	9.1%		2.524
6	―	―	回答	回答	204	2.3%		2.578
7	―	回答	―	回答	104	1.2%		2.599
8	回答	―	―	回答	182	2.0%	13.9%	2.629
9	回答	回答	―	―	389	4.4%		2.642
10	回答	―	回答	―	214	2.4%		2.661
11	―	回答	回答	―	153	1.7%		2.670
12	回答	回答	回答	―	268	3.0%		2.776
13	回答	回答	―	回答	188	2.1%	8.1%	2.706
14	回答	―	回答	回答	136	1.5%		2.774
15	―	回答	回答	回答	133	1.5%		2.770
16	回答	回答	回答	回答	463	5.2%	5.2%	2.875
					8,934	100.0%	100.0%	

出典：早稲田大学大学総合研究センター（2024）、p.7

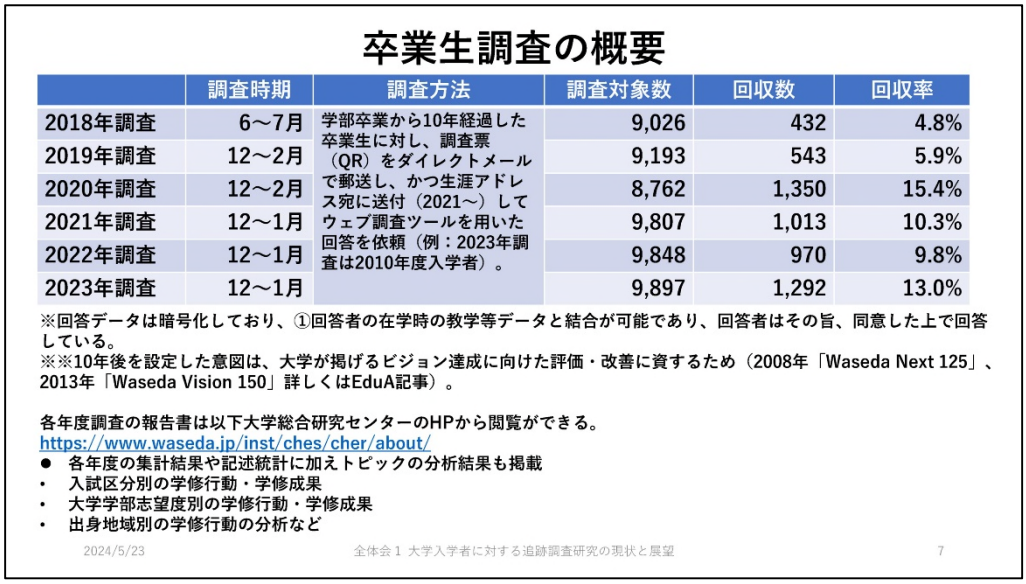
- 継続回答している群の特徴

1. 部・サークル活動の充実を期待して早稲田大学に入学している割合は相対的に低い。
2. 科目登録にあたっては、大学からのオフィシャルな情報をより参考にしていた。
3. 履修コマ数や授業出席率については相対的に多い（高い）。
4. 課外活動に所属・参加していない割合が高い。
5. 心身の健康状態は相対的に必ずしも良いとは言えない。
6. 悩みを話す対象として「友人」を選択する割合は相対的に低い。
7. 進路としては、１年次から早稲田大学を含む大学院を希望している割合が高い。

2024/5/23　全体会１ 大学入学者に対する追跡調査研究の現状と展望　6

先ほど説明したとおり，本調査は 2020 年から 4 回実施しています。最初の頃はコロナが生じた時ですが，当時 1 年生だった人たちが，その後も回答をしているケースもあるなど，こういった回答状況について整理，分析をして，今年報告書を刊行しました。まさにこの追跡調査にとって，調査そのものを検証したということになります。

少しその事についてお示ししたいと思います。まずこの調査に回答を 1 回もしなかった学生が 48.2％で，半分弱になりますが，逆に半分強はいずれの年に 1 回は回答をしています。4 年間連続で回答をしていたというのがこのナンバー16 で，2020 年度当時 1 年生だった人たちのうち 5.2％になります。右側に通算 GPA を併記していますが，これは回答回数が多くなるほど，きれいに GPA が高くなるということになります。報告書では，この群の特徴を幾つか書いています。例えば，授業など大学教育に対して真面目に取り組んでいて，全体の平均からすると，課外活動等には 2020 年の時点ではあまり参加していない傾向であるということが分かってきています。調査自体の検証なども最近行ってきたところです。



卒業生調査の概要

	調査時期	調査方法	調査対象数	回収数	回収率
2018年調査	6～7月	学部卒業から10年経過した卒業生に対し、調査票（QR）をダイレクトメールで郵送し、かつ生涯アドレス宛に送付（2021～）してウェブ調査ツールを用いた回答を依頼（例：2023年調査は2010年度入学者）。	9,026	432	4.8%
2019年調査	12～2月		9,193	543	5.9%
2020年調査	12～2月		8,762	1,350	15.4%
2021年調査	12～1月		9,807	1,013	10.3%
2022年調査	12～1月		9,848	970	9.8%
2023年調査	12～1月		9,897	1,292	13.0%

※回答データは暗号化しており、①回答者の在学時の教学等データと結合が可能であり、回答者はその旨、同意した上で回答している。
※※10年後を設定した意図は、大学が掲げるビジョン達成に向けた評価・改善に資するため（2008年「Waseda Next 125」、2013年「Waseda Vision 150」詳しくはEduA記事）。

各年度調査の報告書は以下大学総合研究センターのHPから閲覧ができる。
https://www.waseda.jp/inst/ches/cher/about/

- 各年度の集計結果や記述統計に加えトピックの分析結果も掲載
- 入試区分別の学修行動・学修成果
- 大学学部志望度別の学修行動・学修成果
- 出身地域別の学修行動の分析など

2024/5/23　全体会 1 大学入学者に対する追跡調査研究の現状と展望　7

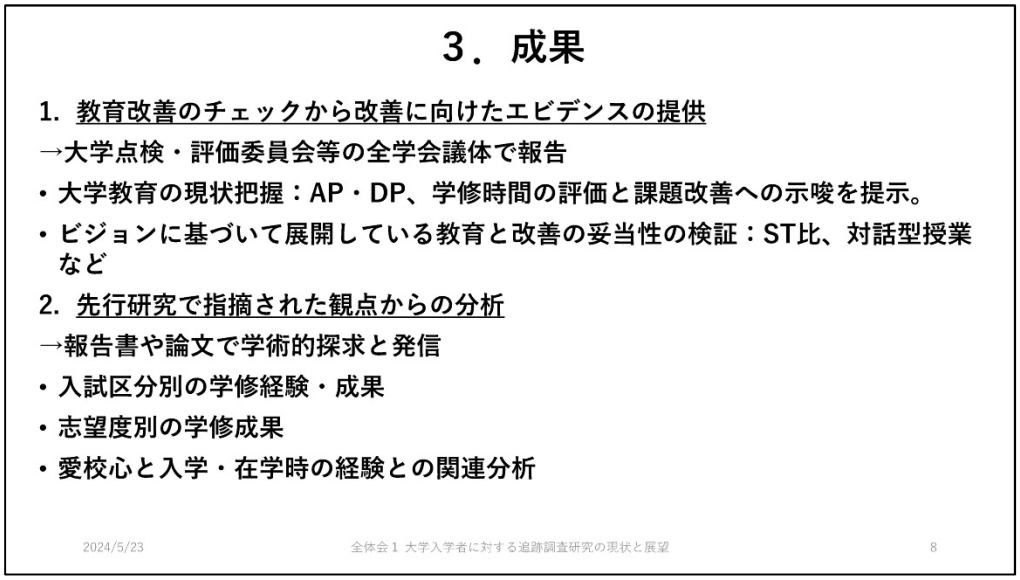
もう 1 つの追跡調査に当たる卒業生調査は，先ほどの学生調査よりも早く実施することになりました。2018 年から始め，今，2023 年調査まで終わり，6 回の実施となりました。

調査方法としましては，学部卒業から 10 年経過した卒業生に対して，調査票をダイレクトメールで郵送しており，2021 年から生涯アドレス宛てに回答案内も送付しています。こちらもウェブ調査ツールを用いた回答を依頼しています。

ストレートで進学してくる学生であれば 30 代前半の方に調査票が行くというようなイメージです。調査対象者数は 1 学年で，最初始めた時は回収率が極めて低い 5％程度だったのですが，直接メールで送るようになってからは回収率が少し高くなりました。更には，コロナの影響もあったかと思いますが，自宅にいる時間が増えたことで回答に繋がった可能性もあり，近年では 10％を超える回答を得られている状況です。

こちらも回答データを暗号化していて，在学時のデータと結合が可能です。10 年後に設定した意図というのは，大学が掲げているビジョン達成に向けた評価・改善に資するためで

す。特に 2008 年，あるいは 2013 年に公表されていました，「Waseda Next125」でありますとか，「Waseda Vision150」というものが掲げた教育改善・教育改革の検証を意図して 10 年後を想定しています。こちらも各ホームページに報告書を掲載しています。



こういった 2 つの大きな調査を踏まえた成果を簡単にまとめます。

1 つは，調査の目的は早稲田大学の教育改善支援ですが，その教育改善のチェックから改善に向けたエビデンスの提供ができているということです。全学的な大学点検・評価委員会において報告しています。具体的には大学教育の現状把握ということで，アドミッションポリシーやディプロマポリシー，あるいは学修時間の評価と課題改善の示唆を提示しています。

それから先ほども言及したとおり，早稲田大学が掲げているビジョンです。例えば対話型授業であるとか，双方向型授業の促進であるとか，ST（Student-Teacher）比を小さくするとか，国際化を進めるとか，そういったビジョンに基づいて展開をしている教育と改善の妥当性の検証を行っていることが，大学行政的観点からはそういった成果が言えるのではないかというところです。

もう 1 つは先行研究で指摘された観点からの分析を，研究センタ８８ーということもあるので進めています。こちらに関しては，報告書や論文で学術的探求と発信ということを，『大学入試研究ジャーナル』もそうですが，行っています。観点としては，例えば入試区分別の学修経験や成果の違い，それから志望度別の学修成果の違い，そして 3 番目は今回少し紹介しますが，愛校心と入学・在学時の経験との関連分析といったことを，大学行政的な観点からというよりはむしろ，学術的観点から成果を出しています。

入試区分の分析（遠藤 2022）
卒業生の在学時の学び

表 正課教育の熱心度の分布（入試区分別）

		経験しなかった	不熱心	やや不熱心	やや熱心	熱心	計	平均値の差
一般教育科目	①一般入試	1.1%	11.6%	25.8%	44.5%	17.0%	100.0%	⑤>①*
	②指定校	0.0%	1.0%	13.6%	57.3%	28.2%	100.0%	②>①***
	③自己推・ＡＯ	2.0%	3.9%	21.6%	45.1%	27.5%	100.0%	
	④附属・系属校	0.0%	4.1%	21.4%	48.0%	26.5%	100.0%	
	⑤その他	1.8%	9.1%	9.1%	38.2%	41.8%	100.0%	
専門科目	①一般入試	0.3%	8.0%	20.1%	43.2%	28.3%	100.0%	⑤>①**
	②指定校	0.0%	0.0%	14.6%	47.6%	37.9%	100.0%	②>①*
	③自己推・ＡＯ	0.0%	2.0%	9.8%	47.1%	41.2%	100.0%	
	④附属・系属校	1.0%	4.1%	15.3%	41.8%	37.8%	100.0%	
	⑤その他	0.0%	7.3%	3.6%	34.5%	54.5%	100.0%	
ゼミ	①一般入試	12.1%	8.2%	15.3%	32.2%	32.2%	100.0%	
	②指定校	12.6%	4.9%	15.5%	33.0%	34.0%	100.0%	
	③自己推・ＡＯ	2.0%	3.9%	25.5%	29.4%	39.2%	100.0%	
	④附属・系属校	5.1%	5.1%	13.3%	31.6%	44.9%	100.0%	
	⑤その他	12.7%	5.5%	9.1%	32.7%	40.0%	100.0%	
卒業論文	①一般入試	18.2%	7.2%	15.7%	33.8%	25.0%	100.0%	
	②指定校	21.4%	1.9%	14.6%	35.9%	26.2%	100.0%	
	③自己推・ＡＯ	15.7%	2.0%	17.6%	33.3%	31.4%	100.0%	
	④附属・系属校	13.3%	4.1%	15.3%	28.6%	38.8%	100.0%	
	⑤その他	23.6%	7.3%	7.3%	25.5%	36.4%	100.0%	

*p < .05, **p < .01, ***p < .001
（注）平均値の差の検定は、「経験しなかった」、「不熱心」、「やや不熱心」、「やや熱心」、「熱心」にそれぞれ０～４を割当てて分析した。
出典：遠藤（2022）、p.50

2024/5/23 全体会１ 大学入学者に対する追跡調査研究の現状と展望 9

それらの成果を３つご紹介しますが，まず入試区分に関する分析です。これまで，先生方がご報告を幾つかされているとおり，まずシンプルに正課教育の熱心度を入試区分別に見ます。

例えば一般教育や専門科目では差が出る部分があるのですが，一般入試に比べて指定校の卒業生は，一般教育科目や専門科目に対してはやや熱心であったということが明らかになっています。

その他，差は出ていませんが，附属・系属の卒業生たちは割と卒業論文に熱心な傾向などを示しています。これは自由回答のデータからも幾つか抽出できているのですが，中等教育段階で卒業論文が課される傾向がありますので，それが実際，大学でも行われ，より熱心に取り組んでいたという結果が出ていました。

大学・学部志望度の例（遠藤・山田（2023））
卒業生の志望度タイプ別の通算GPA比較

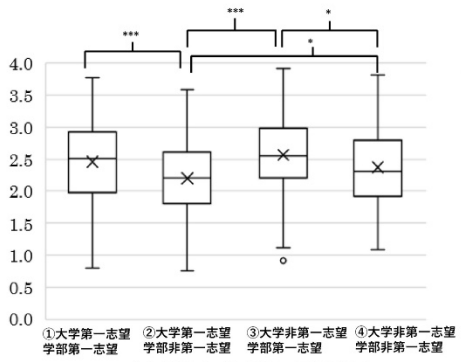


図 志望度タイプ別の通算GPA

- 図では，各タイプ間の通算GPAを箱ひげ図で比較した。前頁の在学時の「正課学習」の熱心さから予想されるように，平均値は高い順に，③大学非第一志望学部第一志望（2.563）>①大学学部第一志望（2.457）>④大学学部非第一志望（2.374）>②大学第一志望学部非第一志望（2.203）となった。

※GPはA＋（４）、A（３）、B（２）、C（１）として算出。

*p < .05, **p < .01, ***p < .001
出典：遠藤・山田（2023）、p.209を一部加工

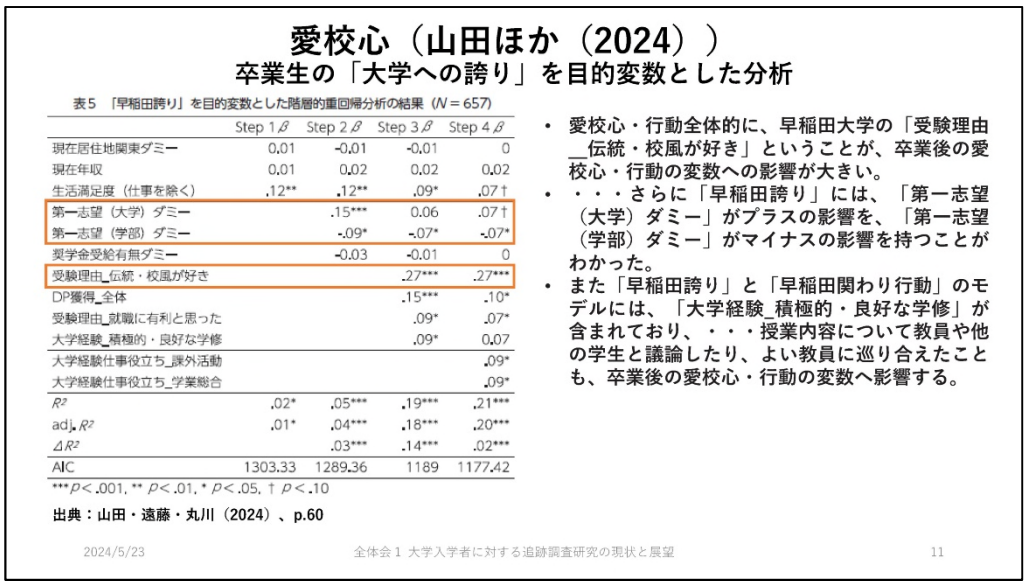
2024/5/23 全体会１ 大学入学者に対する追跡調査研究の現状と展望 10

２つ目の成果は 2023 年に『ジャーナル』で出したものですが，卒業生の志望度タイプ別の通算 GPA の比較です。これも同じく卒業生のデータを使って，実際の学修成果の 1 つ，GPA をシンプルに見て比較したものです。

志望度はどういうふうにタイプを分けたのかというと，大学が第 1 志望であったか否かということと，もう 1 つは学部が第 1 志望であったか否か，このそれぞれ 2 つのタイプを掛け合わせた 4 つのタイプを作成しました。

一番左が早稲田大学に来たかったし，入学した学部は第 1 志望だったというようなケースです。それ以外も 3 つありますが，要するに不本意入学であるとか，そういう問題・関心があって，志望度タイプ別に見た時の学修成果を見ました。

そうすると，この箱ひげ図，GPA の散らばり，平均と分散を見てみますと，必ずしも早稲田大学が第 1 志望ではないが，学部は第 1 志望であったという人が一番高く出ます。逆に早稲田は第 1 志望だったが，進学した学部は必ずしも第 1 志望ではなかったという学生の GPA を見ると，相対的に低いような状況になっていました。これが学修成果指標を GPA とした時の 1 つの分析結果になりました。



愛校心（山田ほか（2024））

卒業生の「大学への誇り」を目的変数とした分析

表5 「早稲田誇り」を目的変数とした階層的重回帰分析の結果（$N = 657$）

	Step 1 β	Step 2 β	Step 3 β	Step 4 β
現在居住地関東ダミー	0.01	-0.01	-0.01	0
現在年収	0.01	0.02	0.02	0.02
生活満足度（仕事を除く）	.12**	.12**	.09*	.07†
第一志望（大学）ダミー		.15***	0.06	.07†
第一志望（学部）ダミー		-.09*	-.07*	-.07*
奨学金受給有無ダミー		-0.03	-0.01	0
受験理由_伝統・校風が好き			.27***	.27***
DP獲得_全体			.15***	.10*
受験理由_就職に有利と思った			.09*	.07*
大学経験_積極的・良好な学修			.09*	0.07
大学経験仕事役立ち_課外活動				.09*
大学経験仕事役立ち_学業総合				.09*
R^2	.02*	.05***	.19***	.21***
adj. R^2	.01*	.04***	.18***	.20***
ΔR^2		.03***	.14***	.02***
AIC	1303.33	1289.36	1189	1177.42

***$p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

出典：山田・遠藤・丸川（2024）、p.60

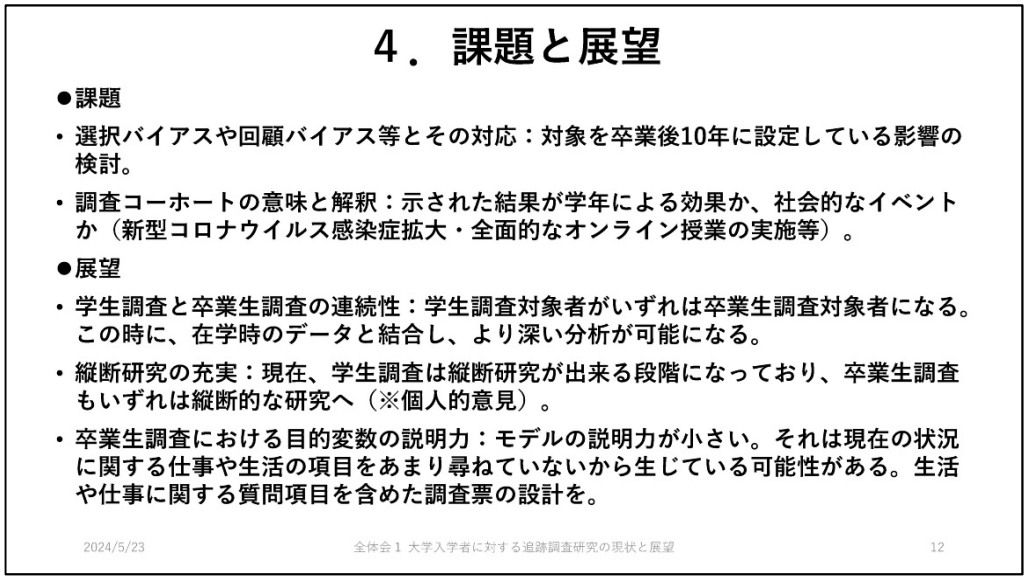
- 愛校心・行動全体的に、早稲田大学の「受験理由__伝統・校風が好き」ということが、卒業後の愛校心・行動の変数への影響が大きい。
- ・・・さらに「早稲田誇り」には、「第一志望（大学）ダミー」がプラスの影響を、「第一志望（学部）ダミー」がマイナスの影響を持つことがわかった。
- また「早稲田誇り」と「早稲田関わり行動」のモデルには、「大学経験_積極的・良好な学修」が含まれており、・・・授業内容について教員や他の学生と議論したり、よい教員に巡り合えたことも、卒業後の愛校心・行動の変数へ影響する。

2024/5/23 全体会 1 大学入学者に対する追跡調査研究の現状と展望 11

最後なのですが，一方で違うアウトカムの設定もできないかということを考えています。例えば大学教育の満足度でも結構なのですが，1 つは自大学への愛校心，早稲田大学に対する愛着，誇りといったものの分析を昨年行いました。これは今年刊行された『ジャーナル』，『紀要』に掲載されており，必ずしも学修成果とは言えないですが，アウトカムの 1 つとして，大学への愛着や誇りといったものがどのように規定されるのかを分析しています。

実際に分析をしていますと，先ほどの通算 GPA とは違う絵が見えてきます。例えば早稲田大学がそもそも第 1 志望であったということが効いてくるということと，受験理由がそもそも早稲田の伝統や校風が好きだということの説明力が大きいということです。アウトカムの設定，卒業生調査に対して，違うものを設定することで，どのような結果が出てくる

のか，少し観点を変えた分析も近年進めているところです。



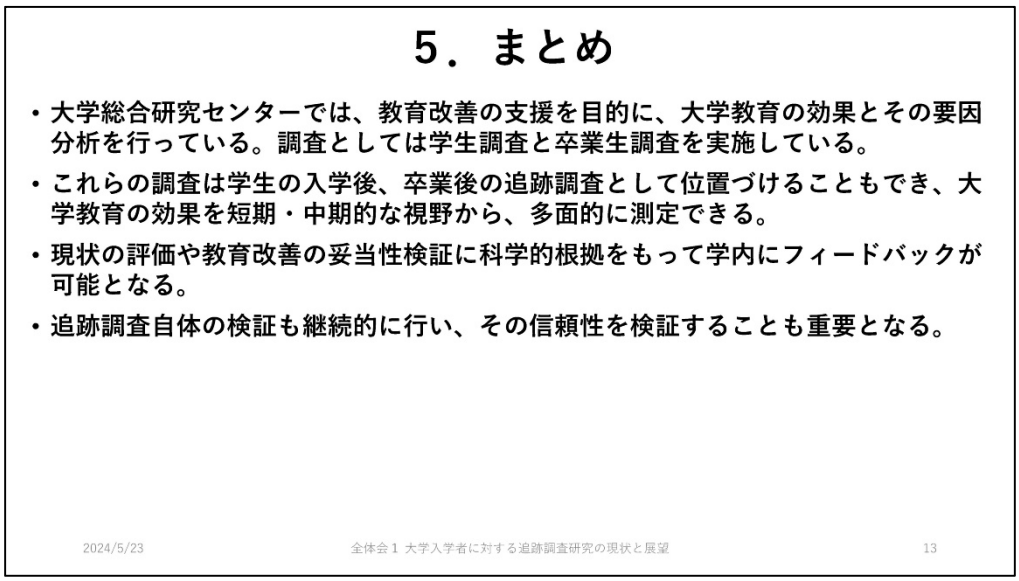
課題と展望としてまずは課題の１つ目ですが，実際に回答をしている人たちは通算 GPA が高い傾向がありますし，卒業生を対象にした場合，回顧バイアスみたいなものが生じています。その対応をしなければならないということが１つです。

もう１つは，調査コーホートの意味と解釈です。示された結果が，学年による効果，つまり学年が上がって成長した結果なのか，あるいは社会的なイベント，今回 2020 年からの調査ということが，非常にその解釈を難しくしている部分でもあるのですが，コロナウイルスによる全面的なオンライン授業実施等の影響なのかということがまだはっきりとしません。ただこれはデータが積み重なっていけば，しっかり分析ができるようになります。

展望に関しましては３点ほどありますが，まずは学生調査と卒業生調査を連続性をもって分析することです。今，実際に在学している学生調査の対象者はいずれ卒業生調査の対象者にもなりますので，その際にはより深い分析が可能になります。

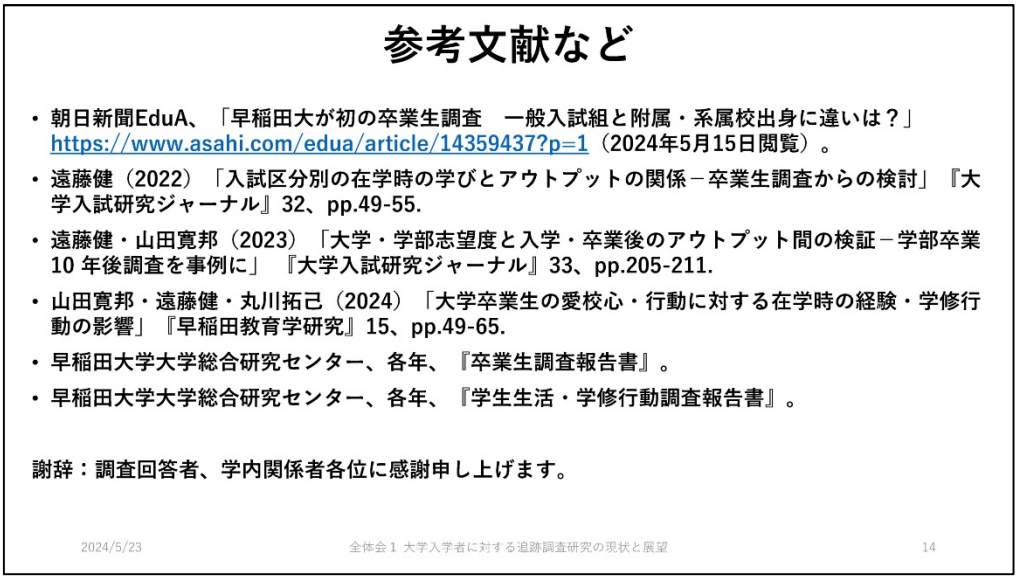
次に縦断研究です。横断というよりかは，その個々人を追っていくような縦断研究ができる段階になっていますので，卒業生調査も 30 代前半だけではなく，違う年齢の時に取ってもいいのではないかということは個人的には思っています。

最後ですが，卒業生調査における目的変数の説明力があまり高くないのです。それは現在の状況に関する仕事ですとか，生活の項目を尋ねていないからこそ生じている可能性もあります。この辺に関しては，大学教育という枠を少し超えているのかもしれませんが，生活や仕事に関する質問項目を深めた調査設計を今後していくことによって，説明力が上がっていく可能性があると考えています。



まとめとしては繰り返しになりますが，教育改善を行うことを目的に学生調査，卒業生調査を実施しています。大学教育の効果を，短期，あるいは中期的な視野から多面的に測定できます。

教育改善の妥当性検証に科学的根拠をもって，成果として学内にフィードバックができています。あとは追跡調査そのものの検証です。これは西郡先生が発表されていたとおりに，継続的に行い，その信頼性を検証することも重要となることを最後の課題に挙げています。



参考文献は以上になります。報告は以上です。

【桜井・司会】遠藤先生，ご報告をありがとうございました。■

全体会 1 ◉ 全体討論

大学入学者に対する追跡調査研究の現状と展望

■西郡　大（佐賀大学 アドミッションセンター長，教授）/平井　佑樹（信州大学 全学教育センター准教授）/安永　卓生（九州工業大学 理事，副学長（教育接続・連携 PF，情報担当））/竹内　聖彦（椙山女学園大学 教育学部教授）/遠藤　健（早稲田大学 大学総合研究センター講師）/林　篤裕（名古屋工業大学 教授■司会）/桜井　裕仁（大学入試センター　研究開発部教授■司会）

【桜井・司会】　それでは全体会１を再開します。ここからの司会は，名古屋工業大学の林先生にお願いしています。林先生，よろしくお願いします。

【林・司会】　名古屋工業大学の林です。このセッションの総合討論の部分を仰せつかっています。午前のセッションにも参加された方はご存知かもしれませんが，いろいろと活発な意見が出ていましたので，この後，意見交換ができればと考えています。

まず１つ目のコメントです。「感想ですが，現状では AP に妥当性を求めると学生募集に影響が出るので，多くの大学で「抽象的な関心・意欲・態度」の有無に特化し，その水準や学力水準については言及できない大学が多いように感じています。特に大学数の大多数を占める私立大学においては，選抜が効かず実質的にはほぼ全入状態の大学も相当数あるものと思いますので，西郡先生がおっしゃる通り，現状では検証にあまり意味はなく，教学マネジメントを学生募集～入学者選抜～入学前教育～初年次教育～学位プログラム～卒業後までを一貫したもの＝EM として捉え直して再設計しなければならない段階にまで来ているのではないか，と感じています。EM・IR の重要性が増していると思いますし，第 4 期認証評価のポイントである学修成果に重点を置いた内部質保証にも直接的に繋がるとも思います。」と，追跡に関してコメントという形で仰っています。これについて，今日の登壇者の中では西郡先生が一番近いのではないかと感じますので，まず西郡先生からどのようにお感じになっているかをお聞かせいただけますか。

【西郡】　まず感想といいますか，ご意見を頂き，どうもありがとうございます。本当にお

っしゃるとおりだと思います。私自身もそう思います。選抜性が高くて，学生を選べるような立場にあれば，学力が高くて主体的に学べるとか，興味・関心が高いということで，入試に贅沢な能力や資質を求めて，それで選抜するということである程度の学生の質を確保できると思います。

しかし今はもう選抜性がかなり低下してしまって，学力のばらつきもかなり大きくなっていますので，入試だけで学生の質を求めるというのは難しくなっています。

そうなると受け入れた学生をどう伸ばせばいいのかということで，カリキュラムや教育の仕組みを工夫していかなければいけないということを考えると，そこでどういった教育ができるのかを議論する中で，少なくとも入試では最低限，こういった能力や資質，スキルを持っている人を求めたいという議論になると思います。

つまり能力や資質において優先順位を付けることで，これだけは譲れないというものが出てきます。そういったものが今，必要なアドミッションポリシーの妥当性というところに議論が行くのではないかと思います。入試だけを見ていてはそこを議論できませんので，やはり教育のカリキュラムの中で議論する必要があるという意味では，EM・IR と書かれていますが，そういった材料を基に入口から出口までという視点の中で，教育全体を考えて，そしてアドミッションポリシーで何を求めるのかを議論する必要があると思います。

【林・司会】　ご回答をありがとうございました。やはりこの議論には AP の妥当性が非常に大きく関わってくるのだろうと，西郡先生のご講演も含めて感じていました。AP を今後どのようにすればいいのかは，悩ましい問題です。続いて順番に平井先生，これに関して何かコメント等いかがですか。

【平井】　私も西郡先生と一緒で，今，大学全入時代がもうそのとおりになってきてしまっています。入試の検証だけではなく，教育の改善に向けた追跡調査も今後必要になってくるでしょうし，エンロールメント・マネジメントとして，そのような観点で今後体制づくりをしていくということも重要になるのではないかと思います。以上です。

【林・司会】　ありがとうございました。次，安永先生，いかがですか。

【安永】　ありがとうございます。おっしゃるとおりの部分です。卒業後の部分が今まで大学のほうで抜け落ちていたというか，なかなか卒業生にリーチできなかったのですが，この辺りも大学としては，卒業生とつながり続ける形をどう作っていくかということを通して，評価に繋げていきながらフィードバックできるように仕掛けていかなければいけないのではないかと思っています。以上です。

【林・司会】　ありがとうございました。では次，竹内先生，いかがですか。

【竹内】　私どもは，卒業生の同窓会のようなものがあり，そこを通じてやりたいというこ

とを，数年前から計画をしているのですが，なかなかそれがうまくいっておらず，卒業後の学生さんたちの動向をどのように見ていくかは，今も課題となっています。

【林・司会】　ありがとうございました。女子大学は比較的 OG の活動が活発なので，その辺りの使い方もあるのでしょう。そうしたら遠藤先生，いかがですか。

【遠藤】　ありがとうございます。私も先生方や質問を頂いた方と同意見だと思います。入口から出口まで，そしてそのポリシー自体，AP と CP，DP，これらの関連性を元に一貫した分析体制であるとか，教育体制というのを整えるということが重要だと思います。

【林・司会】　ありがとうございました。では次のご質問です。「調査書を活用し選抜する場合，どのような項目を使って評価したら効果的でしょうか。評定平均値は，全国で高校ごとや私立と公立で評価が異なるような気がしており，使いにくいと感じています。」ということで，調査書の利用は非常に悩ましい問題のような気がしています。
　遠藤先生，調査書の利用の仕方について，貴学での工夫などについていかがでしょうか。

【遠藤】　調査書については現在分析の観点等は入っていません。すみません。

【林・司会】　分かりました。次，竹内先生はいかがですか。

【竹内】　調査書を入試にどのように利用するかというのは非常に難しくて，一応それを評価するような形にしようとはしているのですが，どのようにやるかがやはり人それぞれご意見があり，難しいところではあります。ですからまだ全然具体的には進んでいません。

【林・司会】　ありがとうございます。安永先生，いかがですか。

【安永】　ありがとうございます。おっしゃるように非常に難しくて，評定平均のばらつきも含めて考慮しなければいけないところはたくさん残っているところで，私どもも苦慮しているところです。
　あとは先ほどもありました高校での教科の学びの状況などは，これは逆に調査書で見させていただいていて，どの科目をどのぐらい取っているかという辺りの情報を参考にして面接等で使うケースもあります。

【林・司会】　選抜に際しての利用の仕方という意味ですね。

【安永】　そういう意味です。

【林・司会】　平井先生，いかがですか。

【平井】　ありがとうございます。皆さんがおっしゃるとおり難しいところですが，英語ができるかどうかを見るなら，英語の学習成績の状況とか，資格取得の欄を見ればいいわけですが，資格取得をそのまま使うとなると，ご家庭の経済状況などを考慮する必要があります。

あるいは自由記述の部分を使うということになった場合は，例えば国語の先生が調査書を書くとなると，書き手の文章力に左右されることもあります。そうすると，なかなかその自由記述の部分は使えないのではないか，選抜で使うのは難しいのではないかと思います。

本学では一般選抜で調査書の全体の学習成績の状況を点数化して使用しています。それにつきましては，本学のアドミッションセンターの一之瀬が研究会で報告しますので，そちらに譲りたいと思います。ご興味があればお聞きいただければと思います。以上です。

【林・司会】　ありがとうございます。最後，西郡先生はアドミッション室長でもおありですので，この辺の選抜の仕方は何か工夫とかはされていますか。

【西郡】　他の先生方がおっしゃるように，調査書を活用して，それを入試でまた直接的に点数化するというのは極めて難しいと思います。評定平均であるとか，あとは活動記録という何らかの評価尺度の下で程度を比較して順位付けするというのは極めて難しいのではないかと思います。

そう考えれば調査書単独で点数化するのではなく，他の選考資料や面接の内容を確認・補足するような，参考情報としての活用に留めるのが良いと思います。先ほど平井先生が言われましたが，記述的なところで上手，下手というのではなくて，証明機能として，例えば英検何級に合格したといったような情報しか選抜には使えないのではないかと思っています。

佐賀大学でも医学部が調査書を 100 点満点で点数化していた時期がずっと長かったのですが，一昨年から調査書の点数化はやめて，あくまで補足資料の１つというような形で入試では利用しています。以上です。

【林・司会】　ありがとうございます。大学側としては高校側に調査書を提出していただいている中で，調査書を工夫して使っていく方策を模索して行く必要があるのではないかという気はしています。

次のご質問です。「追跡調査に関して，私たちも可能であれば実施したいと常々考えているのですが，入試課・アドミッションセンターでは通常「入学まで」を調査等の対象としているので，入学後や卒業後の調査を自由に行うことが難しいです。マンパワーの不足に加え，学生支援課やキャリア就職センターといった他部局の管轄になるのでなかなか手を出しづらいといった状況にあります。皆様はどのように追跡調査を実現されていますか。」というご質問です。

これに関しては早稲田大学の遠藤先生にお聞きしたいのですが，先生のご発表をお聞きしていると，IR 部というのは結構人数がいらっしゃるのではないでしょうか。つまり単年

度で大体１万人ぐらいの卒業生に対していろいろな調査をされているということからすると，先生がご所属の IR 部門というのは結構な人数がいらっしゃるのではないかと思って拝聴していました。ご質問の中にも「マンパワー」という言葉がありますが，先生のところの高等教育研究部の IR 部門というのはどのぐらいのマンパワーでどのような業務をされているのか，その辺も含めてご紹介いただければと思います。

【遠藤】　ありがとうございます。まずマンパワーという点では，今の私の組織は分析担当者が私ともう１人の教員とで実質的に２人体制です。職員の方も３名いますが，他部署と兼任しており，100％エフォート投入をしているという状況ではありません。

職員の方々は質問紙の配信ですとか，あとは当センターのホームページにある BI ツール（Power BI を使って可視化するようなツール）の更新といった業務を担っています。教員の私ともう１名は，より詳細な分析をするというような体制で進めています。

我々もこの追跡調査をデザインするのに時間がかなりかかって，合意形成を得るのも非常に大変だったということがありますので，この質問者の意見というか，現状の課題には非常に共感します。

【林・司会】　ありがとうございました。本学でも入試課と学務課で管理するデータが異なるといったことがありますが，IR 部門の権限といいますか，各データにアクセスできるような体制が整備されているということなのですか。

【遠藤】　引き続き回答をしますと，データの権限というのは，主には教学データに関しては情報企画部というところが扱っていて，そこと連携をすることによって，より充実したデータを使えるようになっているという状況です。こういったことが可能になったのも，この調査をデザインする当初，副総長や教学担当の先生に対して，IR が重要だという説明を繰り返して理解いただいたという経緯がありました。

【林・司会】　もう１つ，すみません。遠藤先生に立て続けに質問して恐縮なのですが，データを利用する時には，学生から承諾を得なければいけないと思います。入試に関しては募集要項等にデータを利用することの一文を記載することで了解が得られているとするケースがあると思うのですが，学内成績に関してはどのように了解を取られているのでしょうか。

【遠藤】　ありがとうございます。こちらに関しては，学内の研究倫理に関し申請をして，当該研究をすることに承認を得るということと，あとは学生に対しても，こういう目的で研究をしますという説明文章をウェブ上で閲覧できるようにしています。また当然成績等に影響が出ることはないということを説明して，「回答する」あるいは「しない」という選択肢を設けているという状況になります。

【林・司会】　では逆に言うと，一部の学生さんは「いや，それは遠慮してくれ」というご意向を示されるということなのですか。

【遠藤】　そうです。数％の学生は，実際にウェブページの設問フォームにアクセスするのですが，回答に協力しないという形になります。

【林・司会】　分かりました。後でもう１つ，遠藤先生には伺いたいことがあるのですが，先にこのご質問に対して，他の先生からもご意見を伺いたいと思います。竹内先生，このデータを串刺しにする（各部署が独立して保有しているデータを統合して活用する）という点で，貴学ではどのような工夫をされているのですか。

【竹内】　それぞれの部署によってバラバラにデータを管理していましたが，つい最近，それを全部統合しました。ただそれをそれぞれの部署で今までと同じような使い方をしているので，それを活用した IR 的な処理はまだできていません。

【林・司会】　IR 部があるということではないのですか。

【竹内】　IR 室が一応あるのですが，そこは他部署と兼務している職員しかいないので，IR 業務をメインでやっている方はいらっしゃいません。

【林・司会】　ありがとうございました。次，安永先生，いかがですか。

【安永】　私は情報統括という職も担当しています。IR 室があったのですが，そこの IR 室をこちらの情報統括の情報基盤センターに移して，DX も担当するということで，DX/IR 推進室という形になりました。

データに関しても情報基盤センターでだいぶ整理できるようになってきたので，データレイクの形でデータを集める仕掛けがようやく動き始めたところです。まだそれぞれのデータをどこの権限でどう取り扱うかということが決まっていないために，まだお互いの部署で確認を取りながら動いているのが現状というところになります。

学生の承諾という部分に関しては，今のところ入試も含め，ホームページ等に大学の教育の改革に資する部分に関しては個人データにならない範囲で利用するということを記載して運用しています。

【林・司会】　ありがとうございます。平井先生はいかがですか。

【平井】　私もアドミッションセンターに着任した頃は，なかなか学部のデータを使えないということがあったのですが，地道に学部回りをして学内のコネクションを強化し，学部の先生方に「こういう分析をしたらこういういいことがある」ということを伝えることで，学

部の情報を使えるようにしました。学内広報とも言えると思いますが，学内でアドミッションセンターや，入試課の存在感を高めていくのがいいのではないかと思います。

【林・司会】　ありがとうございました。西郡先生はいかがですか。

【西郡】　私も 15 年ぐらい前は一個一個，各部署で頭を下げながらデータを提供してもらい，それらを繋げて分析していました。その後，IR 室ができ，私はそこの室長を 10 年ぐらいやっていました。その体制が整備されると，比較的全学からデータが集まりやすくなりました。

しかし，データをどう活用するかは結果的に非常に課題になっていまして，特に教学部分については，入口から出口までしっかりとやりたいということで，今は教学マネジメント推進室が新たに立ち上がっています。そこに専任 1 人，そして私がアドミッションセンターと兼任，更にキャリアセンターと兼任で 1 人の３人が入ることで，入口から出口まで一気通貫で見ていこうとしています。

【林・司会】　やはりいろいろな部署との連携が必要で，それをマネジメントする方が必要ということのようです。ありがとうございました。

では，先ほど後回しにした遠藤先生に改めてお聞きしたいのですが，生涯メールを使って卒業生にはアクセスをしていると報告がありました。生涯メールというのはどのぐらいの割合で卒業後も使ってくださるのかということと，ご説明の中で，「今後学内データとリンクできるようになるから」という将来的な言葉をお使いになったような気がします。生涯メールであれば，もともと個人が特定できているわけですから，学内のデータもやろうと思えばリンクが取れるのではないか，すでにアクセス可能ではないかと思いながら拝聴していたのですが，2 点いかがですか。

【遠藤】　ありがとうございます。まず生涯メールの稼働率に関しては，この場で確実な情報は言えませんが，少なくとも 10％強は回答をしてくれているという状況を見ると，例えばそこから Gmail などの普段使うメールに転送されている可能性はあるのではないかと思います。

2 番目のその調査の学内データとの結合は，私の言い回しがややこしくて申し訳ありませんでした。現段階で，卒業生調査を当時在籍していた方々の在学時データと結合すること自体は可能になっています。また分析もしているのですが，先ほど説明したのは，今，学生にやっている学生調査と卒業生調査が結び付くようになるには，まだ始まったばかりですので，数年後先であるという説明でした。分かりにくくてすみません。

【林・司会】　いえ，分かりました。聞いてみたいと思って少し時間を取らせていただきました。

では次に遠藤先生宛のご質問で，「継続回答している群の特徴に興味があります。部・サ

ークル活動の充実を期待しておらず，課外活動に所属・参加していない割合が高いのは勉学しか興味がないということでしょうか。進路は大学院を希望していて実際進学したのでしょうか。愛校心などはいかがでしょう。」ということです。遠藤先生，いかがですか。

【遠藤】　ありがとうございます。まずこの調査がやっと 4 年経ったところで学士課程を一貫した調査が取れたのですが，この傾向を分析したのが 2020 年次の当時の回答者の傾向です。1 年次のみ回答をした群，2 年次，あるいは 3 年次，4 年次で継続して回答した群を比較したというようなものになっています。かつこの時期がちょうどコロナもありましたので，解釈に関しては，非常に難しい部分があります。

これは今回の報告では触れていないのですが，この継続回答者に対して，昨年度から試験的にインタビュー調査を行っています。インタビューをすると，正課教育はもちろんのこと，課外活動にもかなり幅広い知的好奇心を持って活動をしている人たちが少なくないという印象を持っていますので，この結果に関してはどうなるのかを今後見ていきたいと思います。

大学院に関しては，実際に入ったかどうかというのは，まさにこれから検証することができるかと思います。愛校心に関してはおそらく高いということが予想されますが，これもデータを実際に取ってみて明らかにできることではないかと思います。

【林・司会】　ありがとうございました。続いて「調査書の信ぴょう性に関して，高大で議論の必要があるのではないですか」というご質問が来ています。これは司会としては，「そのとおりだと思います」としか言いようがないと思っています。あまり過激なことをここで言うのは適切ではないと思いますが，調査書をどういうふうに使えばいいかということも含めて，やはり高校側，大学側で一定程度，意見交換をしながら，着地する点があればいいということぐらいしかないかと思います。

ご登壇の先生方からこの信ぴょう性に関して，何かコメントがございましたらご発声をお願いしたいと思いますが，…，無いようですね。なかなか難しい問題なのだと思います。ご了承いただければ幸いです。これで現時点でお寄せいただいたご質問には全部お応えしたように思います。

ではこの際ですので，私から質問させていただきますが，今回，西郡先生，平井先生，安永先生は，ご所属が国立大学で，竹内先生，遠藤先生に関しては，私立大学ということになっています。これは意図してこうしたわけではなかったのですが，今日，改めてプログラムを拝見して，「こうなっていたのか」と先生方のご講演の途中で気が付きました。

特に私立大学のお二人の先生方のご講演を聞いていて面白いと思ったのは，高校の特性が卒業生の特性になっているということです。つまり指定校の場合はこういう特性を持って卒業まで繋がっている，といったことです。私は国立にいる期間が長かったからか，高校時代のカラーや特性というものが卒業まで繋がっているというのは，非常に面白いと思いました。と同時に，聴衆の中には高校の先生もいらっしゃると思うのですが，大学の先生方の能力は当然求められるのですが，高校の先生方が，3 年間，教育を請け負っておられる中

で，その子どもたちの特性が決まっているとすれば，大学の先生以上に，高校の先生方に頑張っていただかなければいけないと，エールを送りたいような気がしました。

そこで竹内先生，遠藤先生にお聞きしたいのですが，各学生に接している中で，入試区分や高校によって特性が異なるというふうにお感じになるものなのですか。まず竹内先生からお聞かせいただけますか。

【竹内】　やはり学生の特性というか，指定校でいらっしゃる学生というのは，高等学校の先生から「頑張ってやってこい」ということを言われてきているので，非常に前向きです。併設校からでもそうですが，「自分がやりたい」という気持ちがすごく前に出ていて，元気いっぱいいろいろやるという印象をすごく感じます。

それに引き換え，一般入試で入ってくる学生さんたちは，私どもの学部がそういう特徴を持っているのですが，国立大学を狙っていたが残念でしたという感じで入ってくる人がかなりいます。そういう人たちは，特に最初のうちは大学に対して，少し横を向いているようなところがありますが，学年が上がるにつれて，みんな同じ方向を向くようになるのではないかと思います。

【林・司会】　遠藤先生はいかがですか。

【遠藤】　指定校推薦というか，一般入試選抜以外ということがあり，本学の全体的な平均的な様子というのは，相対的に高いということになります。先ほど少し言及したように在学生に対してインタビュー調査を行ったのですが，指定校の学生は高校時代の探究活動の経験を動機にしながら，その連続性を持って大学でも学習をしているということが１つポイントとしてありました。

その探究活動が正式に授業として行われているケースであるとか，あとは先生が学外のクラブ活動で応援してくれた経験でありますとか，そういうことが少なくない影響を当人に与えているのではないかと感じた次第です。実際に，今後はより詳細な分析をしていく必要がありますが，卒業後もそういった学習を続けていくようなスタンスが中等教育の段階で身に付いているのかもしれないと感じています。

【林・司会】　ありがとうございました。今，お二人の私立大学にご所属に先生方にお聞きしましたが，国立大学におられる三人の先生方はどういう感触をお持ちなのかにも非常に興味があります。特に安永先生は高大接続のご担当ということで気になりますがいかがですか。

【安永】　ありがとうございます。いわゆる指定校推薦というのは，国立大学には枠がないので，そこを直接比較するというのは難しいです。最近は高大連携の中で，あるいは中学までを含め，探究科目にさまざまなところで関わる機会も増えてきていますが，そういうことをされている高校さんとされていない高校さんがあります。知識重視のいわゆる従来の入

試に関わる学習を中心としてされているところなど，方向も多様になってきたという印象を持っています。

実際には，今だと総合型選抜で受けるのか，一般選抜前期で受けるのか，後期で受けるのかとか，それぞれ高校さんの性質に応じて，実は選抜区分が少しずれていたりします。その辺りがこれからどのように繋がっていくのかを我々も模索しながらの状況であります。

さらに申しますと，九工大の場合は理系の単科の大学です。他県の事情は存じ上げないのですが，福岡県では高校１年生の５月にはもう理系，文系を決めなければいけないというところがあります。高校での学びと，文理選択や専攻の志望が繋がってこないという中で，入試制度がどうしても高校時代の科目の選択とそこがリンクしてしまうということがあります。その辺りも高校さんごとでその振る舞いが少し違っていますので，少し意見がずれているかもしれませんが，各高校さんの進学に対する考え方の違いというのはそのまま大学に繋がってきているのではないかというところでは高大でいろいろ検討していきたいと思います。

いろいろな意味で繋がりを広げていきながら検討できればと思っています。少しずれているかもしれません。すみません。

【林・司会】　いえ，ありがとうございます。文理の選択時期というのは，日本全国高校の１年生で行われることが多いようです。それがいいか悪いかという議論は，これだけで別のセッションができるぐらいの話題になるのだろうとは思います。

次，平井先生はいかがですか。高校からの教育がカラーとして分かる，もしくは違うということが，国立大学としてそういうことをお感じになるということはありますか。国立大学の場合は，学生に「あなたはどこの出身か。どの選抜で入学したのか」と聞くことがあまりない気もしますが。

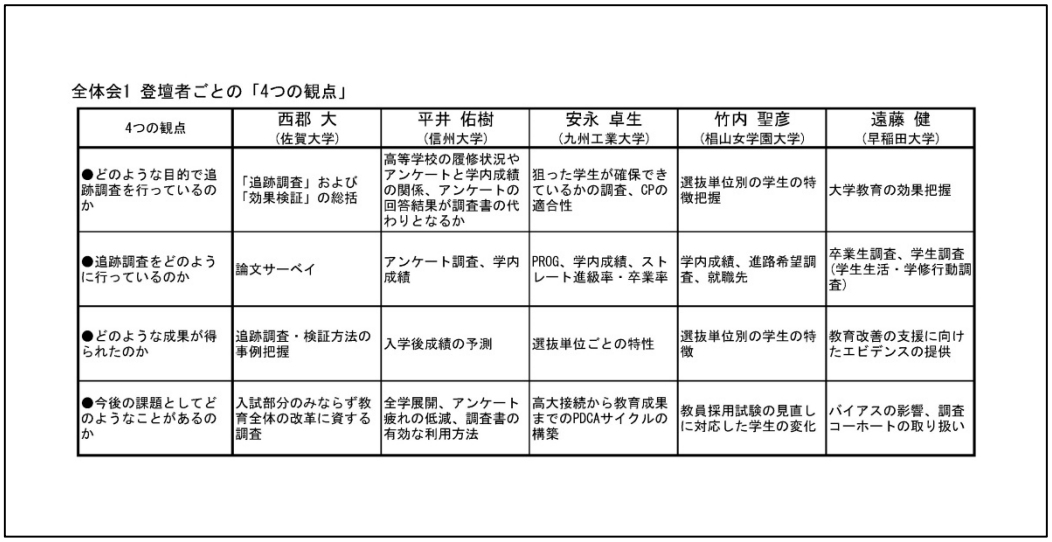
【平井】　ありがとうございます。本学は県内シェアが 25％，県外シェアが 75％という形で，本当に全国から集まってきますので，高校ごとのカラーというものを逆にいうと，出しづらいというところがあります。本学ではどこから来たのかということは特には気にしていないという感じです。皆さんがそれぞれいろいろな高校でいろいろなことをされてきていると思いますので，それを生かして学んでくれればと，そういう感じで受けています。

【林・司会】　苦しい回答を要求してしまいすみません。西郡先生はいかがですか。

【西郡】　私もあまり高校の特性を意識することはないかと思います。特に都市部の大学と我々のような地方の大学では，中高一貫校も一部の地域に限られますし，そういった違いはかなりあるのではないかと思います。逆に付属校とか指定校からの学生の特別性というものを聞けて，「なるほど，見方が違うのだな」と思いました。

むしろ私たちの大学では，専門高校系から来た学生がどういった特性を持っているとか，そういったところに比較的注目しているというところがあります。

【林・司会】　ありがとうございました。そういう意味では，私もお 2 人の私立大学にご所属の先生のご発表を聞いていて，「なるほど」と思った部分でした。



全体会1 登壇者ごとの「4つの観点」

4つの観点	西郡 大 （佐賀大学）	平井 佑樹 （信州大学）	安永 卓生 （九州工業大学）	竹内 聖彦 （椙山女学園大学）	遠藤 健 （早稲田大学）
●どのような目的で追跡調査を行っているのか	「追跡調査」および「効果検証」の総括	高等学校の履修状況やアンケートと学内成績の関係、アンケートの回答結果が調査書の代わりとなるか	狙った学生が確保できているかの調査、CPの適合性	選抜単位別の学生の特徴把握	大学教育の効果把握
●追跡調査をどのように行っているのか	論文サーベイ	アンケート調査、学内成績	PROG、学内成績、ストレート進級率・卒業率	学内成績、進路希望調査、就職先	卒業生調査、学生調査（学生生活・学修行動調査）
●どのような成果が得られたのか	追跡調査・検証方法の事例把握	入学後成績の予測	選抜単位ごとの特性	選抜単位別の学生の特徴	教育改善の支援に向けたエビデンスの提供
●今後の課題としてどのようなことがあるのか	入試部分のみならず教育全体の改革に資する調査	全学展開、アンケート疲れの低減、調査書の有効な利用方法	高大接続から教育成果までのPDCAサイクルの構築	教員採用試験の見直しに対応した学生の変化	バイアスの影響、調査コーホートの取り扱い

質問が途切れましたので，参考にしていただけるかは判りませんが，1 つ話題提供させていただきます。桜井先生がスライドの 3 ページ目に載せておられた追跡調査をどのように実施しているかという 4 つの観点について，ご登壇の先生方のスライドを事前に拝見して，分類したものが上の表のようになりました。

追跡調査というのは，いろいろな観点や手法があって，もしくは部局もいろいろと横断しなければいけないということがあり，様々なご苦労というのか，方策が要るのだろうということを，この表にまとめていて感じた次第です。

本日は IR という話もありました。いろいろな観点で追跡が行われているということが分かっていただけたのではないかという気がしています。加えて言えば，高大接続をどういうふうに進めていけば良いのかについて，調査書の利用に関する話題も出てきました。これらが皆さんの参考になれば幸いです。

新たな質問が届きました。「アサーティブ入試というものがありますが，育てる入試というものについてどのようにお考えですか」ということです。

アサーティブ入試は追手門学院大学が先駆的に行っているものですが，これについて先生方のご感想などお聞かせいただけますか。では今度は，西郡先生からお願いします。

【西郡】　やはりこういう大学の大衆化と言いますか，全入時代と呼ばれている時代においては，選抜を考えれば，こういった方法というものは非常に重要な入試の 1 つの形ではないかと思います。

もちろんこのアサーティブ入試を実施されている方から話を聞きますと，非常に手間暇と言いますか，丁寧にやられているため，継続性という面を考えると非常に大変だと思いま

すが，この視点というのは，今の大学入試を考えれば，あるべき１つの形だと考えています。

【林・司会】　ありがとうございました。では次に平井先生はいかがですか。

【平井】　ありがとうございます。このような育成型の入試ができると，その学生さんに対して，愛校心というようなものを育てられます。確かに入学後のモチベーションにつながるのでいいなとは思ってはいるのですが，本学は全国から集まるような状況ですので，なかなか対応ができないというのが正直なところです。しかしこのような入試でファンを集めているというのは大事なことではないかと思います。

【林・司会】　ありがとうございました。安永先生はいかがですか。

【安永】　ありがとうございます。まさに高大接続というところではとても重要なポイントではないかとは思っています。ただやはり平井先生からもありましたが，うちは大体今，福岡県出身者率が 45％ぐらいです。とはいえ，外からやってきているという中で，ここをどう捉えていくのかは非常に難しいところではあります。一緒に教育プログラムを作っていくということで，広くやっていくことは適切ではないかと思いながら今は進めているような状態です。

【林・司会】　ありがとうございました。竹内先生はいかがですか。

【竹内】　連携校みたいなものが作られてはいるのですが，まだなかなか具体的に何をするというところまでは行っていません。大学の授業を聞いて，入学した時に，それを単位化できるようにしたいとか，そういったことは進めてはいるのですが，まだなかなか実態としてうまく動いていないというか，まだ始まったばかりなので，何も進んでいないというのが現状です。

【林・司会】　ありがとうございました。では遠藤先生はいかがですか。

【遠藤】　このアサーティブ入試にすごく詳しいわけではないのですが，入試を通して育っていくということは非常に有効だと思います。指定校であれば大学入学前にまとまった時間があるので，その大学について詳しく調べたり，自分はどういうことを学べるのかということを考えたりするということが，学生からのインタビューの中でもありました。こういった入試制度や時期の問題もありますが，非常に有効ではないかと思いました。

【林・司会】　ありがとうございました。入試というのは，本当にいろいろなことを考えながら実施していかなければいけないという意味では，このアサーティブ入試も１つなのだ

ろうという気がしています。

特色ある入試というのは，丁寧，時間がかかる，ロードが高いといった言葉が出てくるのは仕方がないというか，当然だと思っていますが，これは私個人の意見ですが，丁寧にした分，魅力的な受験生が選抜できるという観点を持つ必要があるのではないかと思います。手間がかかるからというだけで排除するのは，寂しいような気が私はしています。

他にご質問もないようですのでこの辺で締めたいと思います。追跡調査というのはいろいろな切り口がありますし，どのようにすれば良いのかは，各大学の先生方，ご所属の私学だとか，国公立だとか，それから規模だとか，加えて言えば専門性でしょうか。工科なのか，文系の何かということもあります。先ほど，信州大学からは全国から来ることに対してのいろいろなケアをされているということで，各大学の特性に応じて，追跡調査というのはいろいろと考えていかなければいけないのだろうということをご紹介いただいたように感じています。

他にも高校と意見を擦り合わせて運用していかなければいけない部分もあるのだということが分かったというか，最初から分かっていたのかもしれません。あまりきれいなまとめにはなっていないと自己嫌悪に陥っていますが，この辺でほぼ時間になりましたので，桜井先生に返そうと思います。

ご登壇していただきました 5 名の先生方と質問を寄せてくださいました聴衆の皆さんに感謝申し上げます。何かの参考になる部分が多少なりともあったのであれば幸いです。ありがとうございました。

【桜井・司会】　林先生，どうもありがとうございました。それではちょうど 17 時になりますので，以上で全体会を終了したいと思います。ご登壇していただいた先生方，それから司会の先生，どうもありがとうございました。■

全体会２

「見過ごされがちな高大接続課題：
不本意入学，ミスマッチ入学，学力不足」

司　　会：　竹内 正興（香川大学 アドミッションセンター長）
　　山地 弘起（大学入試センター 試験・研究統括官）

趣旨説明　全入時代の高大接続で表立って語られない重要課題 …… 91
　　山地 弘起（大学入試センター 試験・研究統括官）

報 告 ①　置き去りにされてきた大学進学者たち …… 98
　　朝比奈 なを（元高校教員，教育ジャーナリスト）

報 告 ②　ミスマッチ入学の実態と，高･大に求められる改善策 …… 108
　　倉部 史記（追手門学院大学客員教授，高大共創コーディネーター）

報 告 ③　農業高校に入学してきた学力不足･不本意入学者を，
　　四大には本意入学者へ変えていく取組み …… 124
　　宮田 晃宏（熊本県立鹿本農業高等学校 進路指導部長）

報 告 ④　学生の成長を最優先する大学へ：
　　入学前教育，自校教育，初年次教育の包括的な取組み …… 141
　　杉森 公一（北陸大学 高等教育推進センター長，教授，教務部長）

全体討論 …… 157

内　　容：

近年，大学教育改革や高校教育改革が精力的に進められてきたが，その一方で高校間格差，大学間格差は厳然として存在し続けており，しかも社会経済的背景による進路格差は増大しつつある。少子化が急速に進行し，異次元の子ども支援策が矢継ぎ早に打ち出される中，「置き去りにされた高校生たち」（朝比奈，2019）の課題はなお十分顧みられることがない。学生の多様化がいわれて久しいが，全入時代の高大接続における個別最適化は，学生自身のキャリア形成に資するだけでなく人材育成・人材確保の観点からも大幅に進展させることが必要ではないだろうか。

上記の問題意識に立って，本シンポジウムでは，学生の不本意入学，ミスマッチ入学，学力不足に焦点を当て，こうした課題に長く取り組んでこられた専門家からの問題提起と高

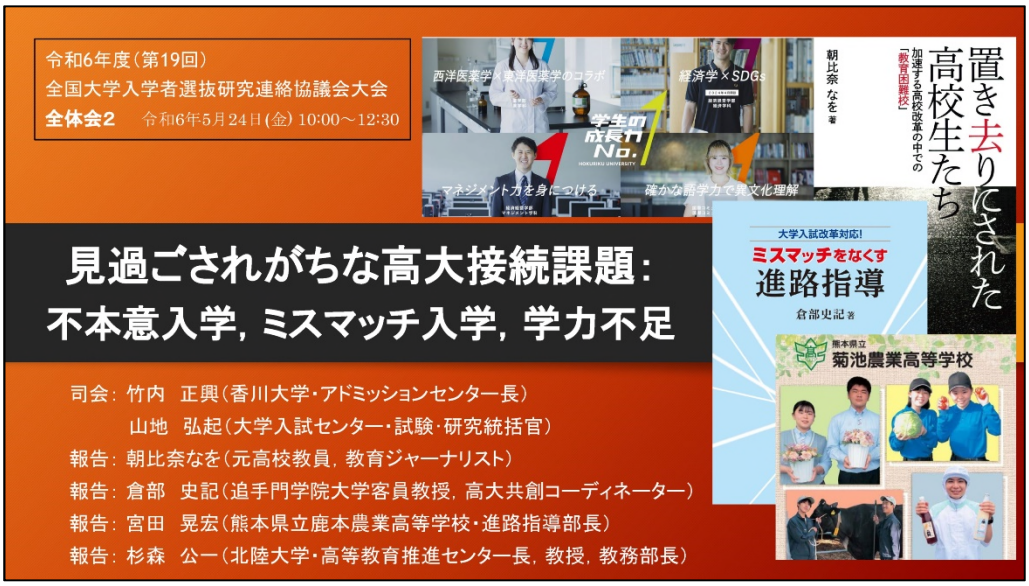
校・大学の現場からの実践報告を行う。それらをふまえたパネルディスカッションを通して，高大接続の現状を問い直し，社会的・制度的に疎外されがちな若者に対してよりインクルーシブなケアを提供できる高大接続のあり方を探りたい。

全体会２　◉ 趣旨説明

全入時代の高大接続で表立って語られない重要課題

■山地　弘起（大学入試センター　試験・研究統括官）

【山地・司会】　皆さん，おはようございます。大学入試センターの山地弘起です。平日の朝，午前中ではありますが，この全体会２にご参加いただき，誠にありがとうございます。



本セッションは，今，共有画面でお示ししていますように，「見過ごされがちな高大接続課題」というものをテーマとしています。

考えてみますと，約 5,000 ある高校，それから 800 ほどある大学，そして毎年 60 数万人の四大進学者がいるという中で，標準的な高校生や大学生をイメージして，高大接続を議論するというのは，時には空虚なものになりがちです。実際には高校間の格差や，大学間の格差は厳然として存在し続けていますし，しかも社会経済的背景による進路格差は増大しつつあるという状況です。すでに全入時代と言われていますが，この全入時代には義務教育段階のつまずきをクリアできないまま，大学に入ってくるという学生もいるわけです。

そうしたことで，今回このようなテーマを設定させていただき，４人の登壇者をお招きしました。最初に朝比奈なを先生です。朝比奈先生は，公立高校の地歴・公民科の教諭として約 20 年間勤務された後に，教育相談や大学教育に携わる一方で，教育ジャーナリストとして，特に教育困難校の取材・発信を広くなさっておられます。ご著書は幾つもあるのですが，ここでは今回のテーマに直結するものとして，『置き去りにされた高校生たち』をお示しし

ています。それでは朝比奈先生，ごあいさつをお願いします。

【朝比奈】　皆さん，おはようございます。朝比奈です。本日はよろしくお願いします。

【山地・司会】　ありがとうございます。続きまして，倉部史記先生です。倉部先生は私立大学の職員，それから予備校の研究所での研究員等をなさった後で，「高大共創」のアプローチで高校生の進路開発に取り組んでおられます。現在，追手門学院大学ほかの客員教授もなさっています。ご著書のうち，やはり今回のテーマに直結するものとして，『ミスマッチをなくす進路指導』をお示ししています。倉部先生，ごあいさつをお願いします。

【倉部】　倉部です。今日はよろしくお願いします。

【山地・司会】　よろしくお願いします。後半は現場での実践をされておられるお二方です。まず宮田晃宏先生です。宮田先生は地歴公民の専修免許もお持ちということなのですが，熊本県で長く農業教育に携わってこられ，現在は，県立鹿本農業高等学校で進路指導部長をなさっています。今，お示ししているものでは県立菊池農業高等学校となっていますが，本日のご報告は，「心の幹」と書いて，「心幹」を育む「書かせる教育」のご実践について，この菊池農業高校におられた時の実践を紹介していただくことになっています。宮田先生，ごあいさつをお願いします。

【宮田】　宮田です。本日はよろしくお願いします。

【山地・司会】　よろしくお願いします。そして最後に杉森公一先生です。杉森先生はもともと化学がご専門と伺っていて，しかも，かつて高校教員を志しておられたということなのですが，石川県の金城大学，金沢大学を経て，現在は北陸大学の高等教育推進センター長，また教務部長もなさっています。本日はこの北陸大学のビジョン，「学生の成長力 No.1」に向けた包括的な学修支援について，ご紹介いただきます。杉森先生，ごあいさつをお願いします。

【杉森】　北陸大学の杉森です。よろしくお願いします。

【山地・司会】　よろしくお願いします。ちなみに杉森先生にご登壇をお願いしたのが，能登半島地震からあまり日を置かない時期だったかと思いますが，今現在，影響はいかがですか。

【杉森】　しばらくは能登出身学生の安否確認がすごく大変でした。現在は安否確認が取れ，生命等は安全だということは確認していますが，職員，教員も含め，ご家族，ご実家が大変な状況にあるということは続いています。また大学コンソーシアム石川でも，１月より能登

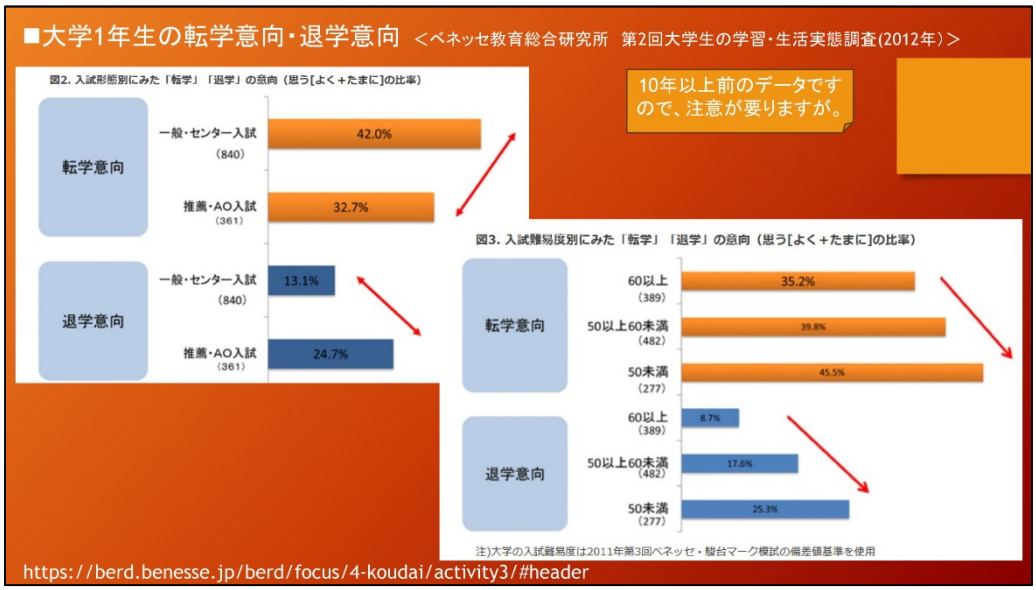
の緊急支援セミナーを開催して，各地の情報発信をしています。私は大学コンソーシアム石川の FD/SD の部会長としても，役割を担っていますので，できましたら，そちらにも目を向けていただけたらと願っています。

【山地・司会】　そのような中でご登壇いただき，本当にありがとうございます。ひょっとすると，本セッションにも能登半島地震で被害に遭われた方，影響を受けた方がご参加くださっているかもしれません。復旧がまだ十分でないという報道もありますし，仮設住宅の完成にまだ時間がかかるというところもあるようですので，心からお見舞いを申し上げるとともに，今回，ご参加くださったことに感謝申し上げます。杉森先生，ありがとうございました。

そして最後に，私と一緒に今回，司会を担当する香川大学アドミッションセンター長の竹内正興先生です。竹内先生は，不本意入学に関する研究もなさっているということでしたので，本日のモデレーターには適任であると考え，お願いした次第です。竹内先生，ごあいさつをお願いします。

【竹内】　おはようございます。香川大学の竹内です。本日，後半の全体討論の進行を担当させていただきます。よろしくお願いします。

【山地・司会】　以上の布陣で，本日の全体会２を進めてまいりたいと思っています。

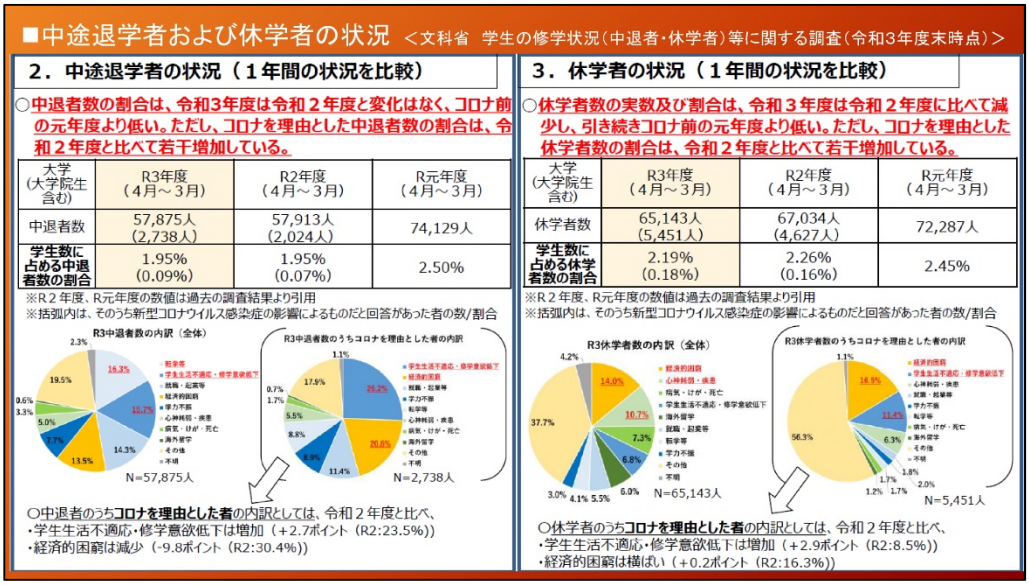


それではここからは，簡単に私から趣旨説明をさせていただきます。まずこの図をご覧ください。これは少し前の 2012 年の調査データですが，大学 1 年生に転学意向や退学意向を聞いてみたというものです。恐らく現在もあまり変わっていないだろうと思われます。

比率を見ますと，大学 1 年生の段階では数十％の人たちが転学意向を持っています。それよりも比率は低くなりますが，退学意向も持っているということで，左上の図を見ますと，推薦・AO 入試で入ってきた場合では転学意向は少ないのですが，退学意向のほうはむしろ

一般入試よりも多くなっているという傾向がうかがわれます。

それから右下です。これは入試難易度別に見たものです。入試難易度が高いほど，転学意向，退学意向は低いのですが，この入試難易度の易しい方向に行くにつれて，この意向が高まっていくということで，これまた数十％のほうに向いていくということです。大学によって，このような傾向というのはかなり違うということが想像されるわけです。



もう１つの図をご覧ください。これは昨年，文科省が出した「中途退学者および休学者の状況」という調査結果です。もちろん中途退学あるいは休学にはポジティブな理由もあり，例えば留学であるとか，あるいはいったん長期的に働いてみるとかといったこともあるのですが，多くの場合には，やはり学業を続けるのが難しくなったという理由が表れてきます。

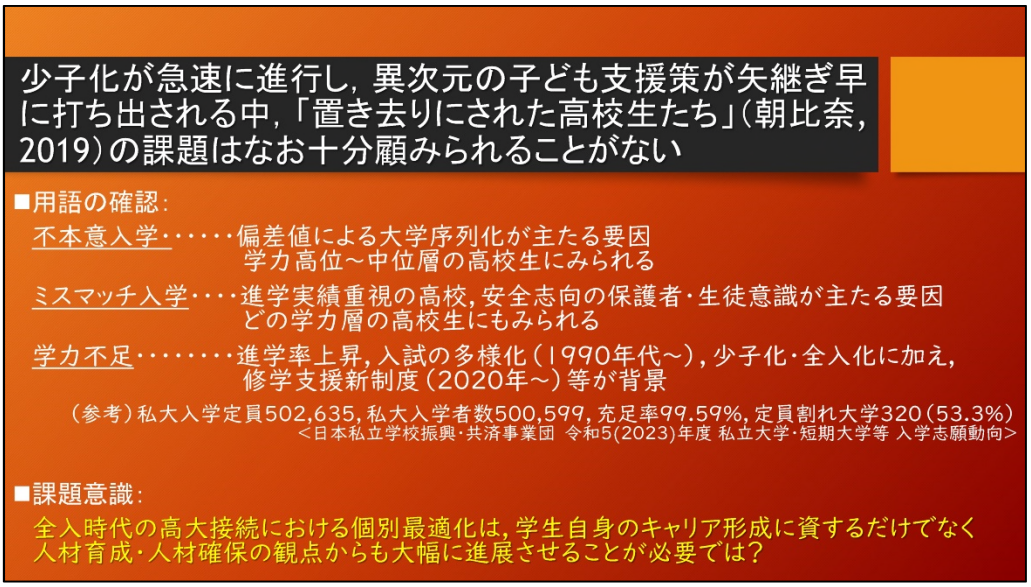
例えばこちらは中退者の理由を示している図ですが，左側をご覧になりますと，転学等というのが比較的多く 16％となります。これは制度的な転学というものもあるでしょうし，あるいは非制度的という意味では，日本の特有の現象と言われる仮面浪人，これにより他の大学に再入学するということも入っているかと思います。

ただ，このすぐ次にある 15.7％というのは学生生活不適応・修学意欲低下，次に多い就職・起業等はポジティブな方と考えることもできるかと思います。次に経済的困窮が続きます。右側にはコロナを理由とした者において調べたものですが，ここでは学生生活の不適応や修学意欲の低下，経済的困窮が約半数を占めてくることが分かります。

実際には調査によって，どのような理由で中退していくかということは若干違うわけです。例えば労働政策研究・研修機構が行っている調査では，学業不振あるいは意欲低下といったものが主たる原因として出てきます。これは調査によって違うのですが，いずれにしても不適応とか，無関心とか，修学意欲の問題というのは無視できない要因として挙がってきます。

こうしたことから考えますと，冒頭で触れましたように，大学，専門，入試区分によって，先ほどの数値もだいぶ変わってくるということがあります。高校も大学も極めて多様化しているという状況で，全入時代の大学入学者というのは，学力や適性，能力，関心などにお

いて誠にさまざまであるということです。現在のところ，異次元の子ども支援策が矢継ぎ早に出てくるのですが，これはいわば高等教育へのアクセスのハードルを低くするということになります。実際にはその内側にいる高校生・大学生の学習意欲や学力などについては，手つかずのままになっていないかということです。これが朝比奈先生の表現されている「置き去りにされた高校生たち」が「置き去りにされた大学生たち」になっていないかということです。

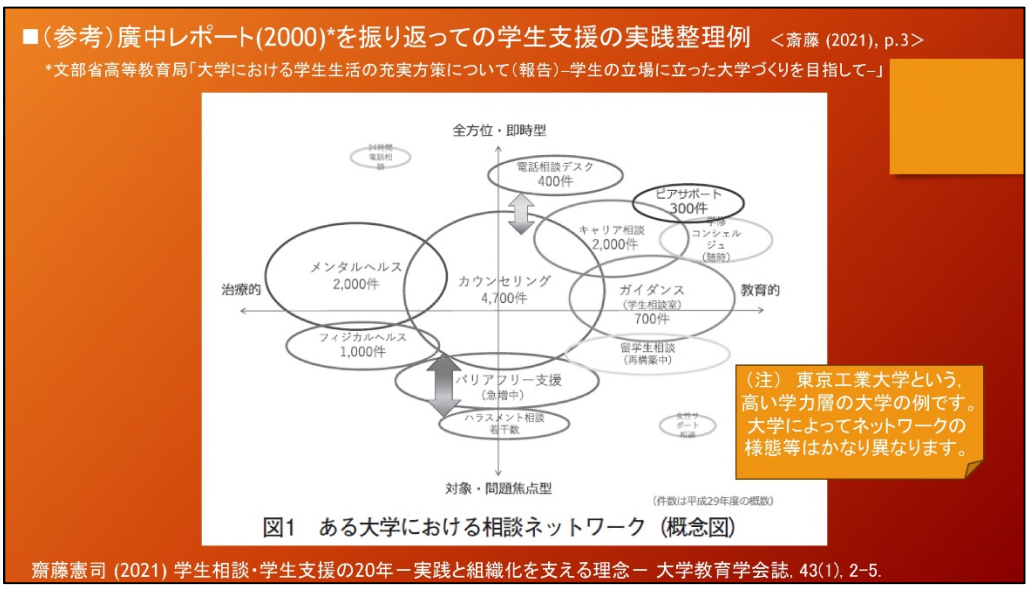


ここで用語の確認なのですが，今回，テーマに副題として挙げています不本意入学，ミスマッチ入学，学力不足です。不本意入学というのは，多くは学力の高位から中位層に見られるものと言ってよいかと思います。偏差値によって大学が序列化されているために，多くの場合は第 1 希望に行けなかったということで，不本意ながら別の大学に入っているというケースです。

それからミスマッチ入学ですが，これはどの学力層にも見られるでしょう。これは進学実績重視の高校で行われる進学指導とか，それから安全志向の保護者・生徒意識といったものが主たる要因になるであろうと思われます。

学力不足ですが，これは先ほどの不本意入学，ミスマッチ入学とは少し概念レベルが違うのですが，ユニバーサル化した高等教育の中では，これはもうある意味では必然的に表れてくる問題であります。背景にあるのは進学率の上昇，入試の多様化，あるいは少子化・全入化に加えて，2020 年から始まっています修学支援の新制度等があると考えられます。

ここで，ご参考で示していますのは，日本私立学校振興・共済事業団の令和 5 年度の入学志願動向の調査で，今や定員充足率が 99.59％ということで 100％を切っており，事実上全入ということが確認できます。令和 5 年度につきましては，定員割れ大学が 320，全体の半分を超えていたという状況です。



そのように極めて多様化した高大接続の在り方ということを考えますと，課題意識に示しましたとおり，こうした全入時代の高大接続における個別最適化，学生それぞれに対するケアというものは，学生自身のキャリア形成に資するだけでなく，現在，よく話題になりますが，人材育成・人材確保の観点からも大幅に進展させることが必要ではないだろうかと考えた次第です。

このようなことをお伝えしますと，ご参加の方々はひょっとすると 2000 年の廣中レポートを思い出す方もおられるのではないでしょうか。そこでは，大学の重点は多様な学生に対するきめ細かな教育指導に置かれるべきということで，「学生の立場に立った大学づくりを目指して」ということがこの提言の副題になっていました。

これは教育相談体制の充実に向かう契機ともなりました。今，お示ししているのは，これは数年前に大学教育学会で，廣中レポートの 20 周年と言いますか，20 年後に改めてこのレポートの意義を振り返ったセッションが持たれた際の資料の一部です。その時に基調講演をされた東工大の齋藤憲司先生は学生相談学会の元理事長で，東工大の学生相談をずっと続けておられる方ですが，「相談ネットワーク」というものがやはり必要であって，東工大の場合には，このような相談ネットワークがあるということでした。これはかなり広範囲にわたって，メンタルヘルスであるとか，ガイダンスであるとか，留学生相談，バリアフリー，電話相談，ピアサポート等々といった学内外のリソースをうまくつなげながら，まさに個別最適化に向けたケアを行っていくという試みを示しておられました。

もちろん，これは東京工業大学という極めて高い学力層の大学の例でありますので，大学によってこのネットワークの様態等はかなり異なると思われます。このためにはかなりお金も人も手当てしなければいけないということがありますから，そのようなリソースが十分でないところはこのようなネットワークをなかなか整備できません。

それから東工大の場合には前面に出てきませんが，やはり学修支援です。学力が不足していて，学修をサポートしなければいけないというところが重点化されている大学もあるでしょう。あるいは，転部・編入学等の制度的な堅さを何らかの形で工夫して，もう少し柔軟

にしたいというところもあるかもしれません。そういったことで，大学によって求められるネットワークの様態はかなり違ってくるであろうと思われます。

先ほどの廣中レポートはその後，2018 年のグランドデザイン答申であるとか，それを踏まえた教学マネジメント指針等につながっていて，現在の学修者本位の教育への転換というところにつながっていると考えることができるかと思います。

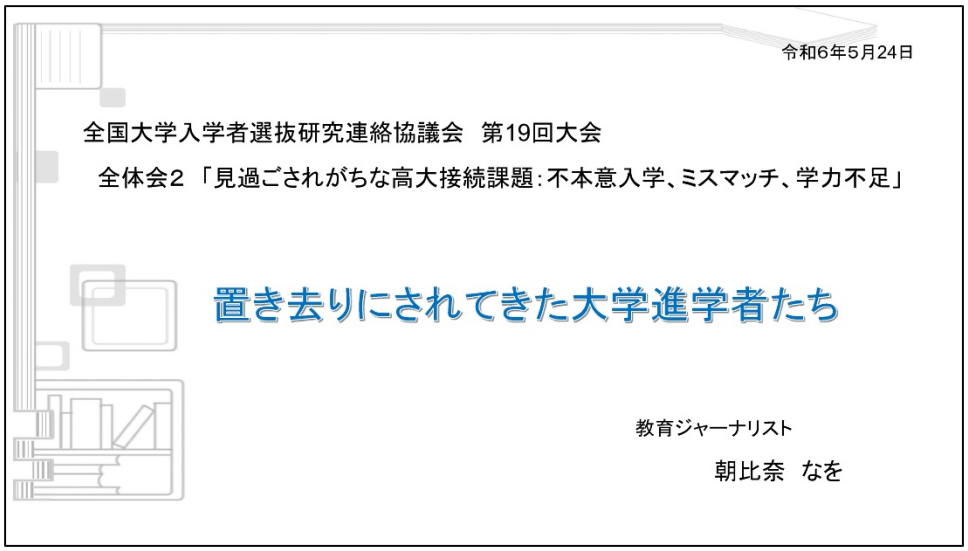
以上を踏まえまして，この全大会では社会的・制度的に疎外されがちな若者に対して，若干オーバーな印象を持たれるかもしれませんが，大学によってはこうしたことが極めて重要な課題となっていますので，よりインクルーシブな，置き去りにしない働きかけや支援，つまりケアを提供できる高大接続の在り方を探りたいと考えています。

それでは朝比奈先生，ご報告をお願いします。■

全体会 2　◉ 報告 1

置き去りにされてきた大学進学者たち

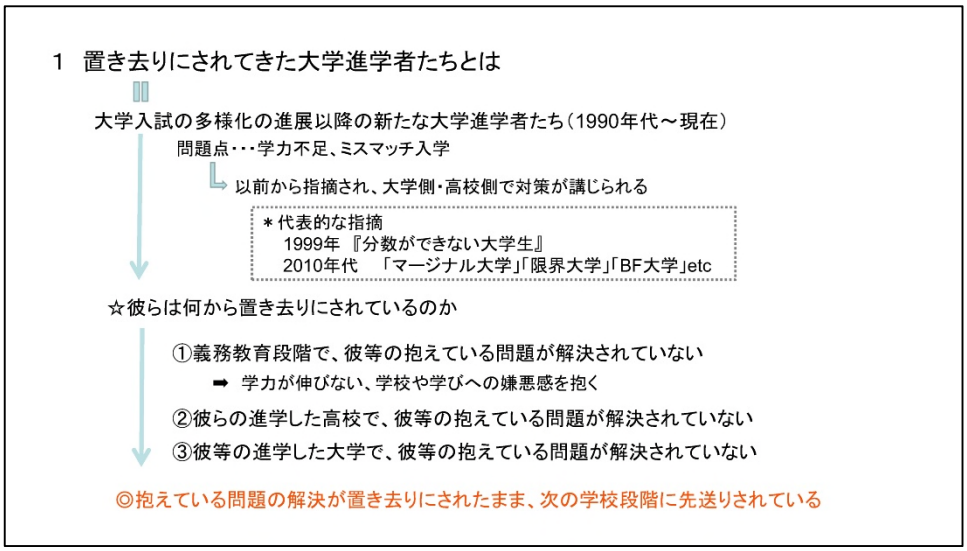
■朝比奈　なを（元高校教員，教育ジャーナリスト）



先ほど，山地先生から非常に詳しい紹介をしていただきましたが，改めて簡単な自己紹介をさせていただきます。私はもともと，公立高校の教員でした。公立高校には転勤がありますので，それを通して同じ高校と言っても，生徒の学力により，あらゆる面で大きな差が存在することに気付き愕然としました。

そしてその後，早期退職し，入試選抜性の高くない大学で，初年次教育を，そしてある自治体の教育支援センターで教育相談などを担当しながら，特に困難を抱えている高校生の実態，その進路について執筆や講演活動を行っています。

その活動の１つである『置き去りにされた高校生たち』が山地先生のお目に留まり，そして今回，発表の機会を頂くことになりました。本日の私の発表は「置き去りにされてきた大学進学者たち」です。それでは発表の内容に移らせていただきます。



「置き去りにされてきた」という表現はどのような人たちのことかと言いますと，大学入試多様化の進展以降の新たな大学進学者たちであると私は考えています。彼らが大学入学後に抱く問題点としては，特に学力不足とミスマッチ入学であると思っています。これらに対しては大学入試多様化が始まった 90 年代以降から気付かれていて，そして対策が練られていると見ることもできます。代表的な指摘についてはそこに書いてあります。

ちなみに私は 2010 年代に『高大接続の“現実”』という本を出しており，新たな層の大学進学者たちの実態を世に問うてきました。そのようなことをやってきたのですが，今回，この大会で学力不足などが改めて取り上げられているということは，この問題が未だに解決されていないということの証明になると思います。では彼らは何から置き去りにされているのでしょうか。スライドをご覧いただきます。

彼らが抱えている問題が義務教育での学びをつまずかせます。そしてそのつまずきが学びや学校への嫌悪感を生み出してしまうということが多くあります。そして彼らの問題は解決されないまま，②，③に先送りにされていきます。つまり抱えている問題の解決が置き去りにされたまま，次の学校段階に先送りされているという状態なのです。このスライドには書いていませんが，彼らは社会の関心からも置き去りにされていると，私は長年思っています。

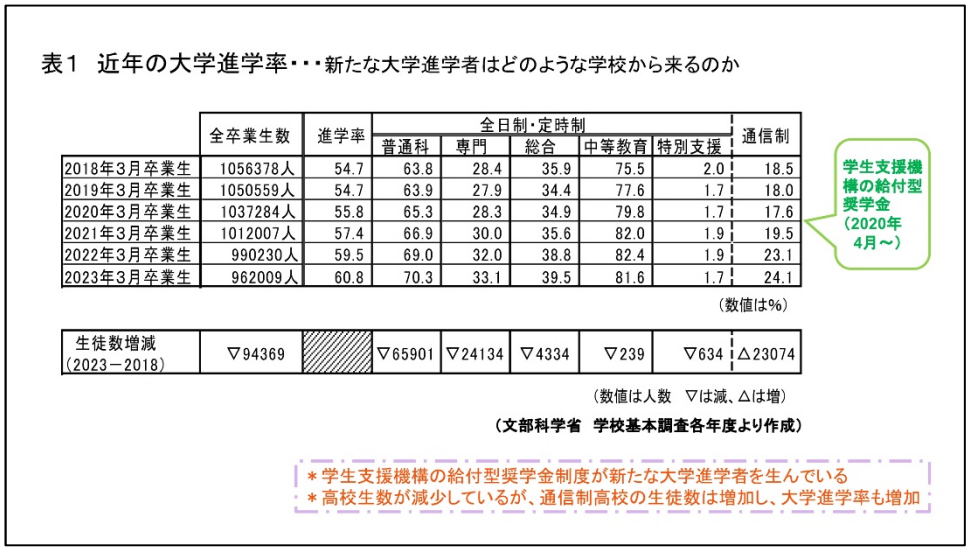


表１　近年の大学進学率･･･新たな大学進学者はどのような学校から来るのか

	全卒業生数	進学率	全日制・定時制					通信制
			普通科	専門	総合	中等教育	特別支援	
2018年3月卒業生	1056378人	54.7	63.8	28.4	35.9	75.5	2.0	18.5
2019年3月卒業生	1050559人	54.7	63.9	27.9	34.4	77.6	1.7	18.0
2020年3月卒業生	1037284人	55.8	65.3	28.3	34.9	79.8	1.7	17.6
2021年3月卒業生	1012007人	57.4	66.9	30.0	35.6	82.0	1.9	19.5
2022年3月卒業生	990230人	59.5	69.0	32.0	38.8	82.4	1.9	23.1
2023年3月卒業生	962009人	60.8	70.3	33.1	39.5	81.6	1.7	24.1
生徒数増減（2023－2018）	▽94369		▽65901	▽24134	▽4334	▽239	▽634	△23074

学生支援機構の給付型奨学金（2020年4月～）

（数値は%）

（数値は人数　▽は減、△は増）

（文部科学省　学校基本調査各年度より作成）

＊学生支援機構の給付型奨学金制度が新たな大学進学者を生んでいる
＊高校生数が減少しているが、通信制高校の生徒数は増加し、大学進学率も増加

ではここで近年の大学進学の動きを見てみます。表１をご覧ください。2018 年から 2023 年の高校卒業生数と大学進学率を示すデータです。大学進学率の右側の横軸には，高校の種別を書きました。この全ての高校から現在，大学進学が可能になっているわけです。

この他に大学に進学する方法として，高等学校卒業程度認定試験があります。こちらは近年，毎回 8,500 人前後が受けているということですが，今回はこちらに関しては省略させていただいています。

またこの表にはありませんが，日本の大学進学率を概観しますと，多様な入試方法が導入され始める 1990 年には 24.6%，そして分数が分からない大学生が指摘され始めた頃の 2000 年には 39.7％，そしてマージナル大学などが話題となった頃の 2010 年には 50.9％です。2010 年から数年間は微減の年もありましたが，2015 年からは再び上昇するもその上昇率は鈍くなっています。この表は 2018 年からになっていますが，進学率を見ていただきますと，やはり上昇しているということが分かると思います。

私は 2010 年代に，ある大学教員から聞いた言葉が非常に印象に残っています。少し過激な言葉なのかもしれませんが，学生募集を担当していたその大学教員は，当時，「地引網で海底にいる魚を集めて，大学を受験させているような感じがする」と私に嘆いたのです。その教員はすでにもう退職されていますが，その方から見れば，近年は海底に潜り込んでいる魚を掘り起こして受験させているとでも言えるような状況かもしれません。

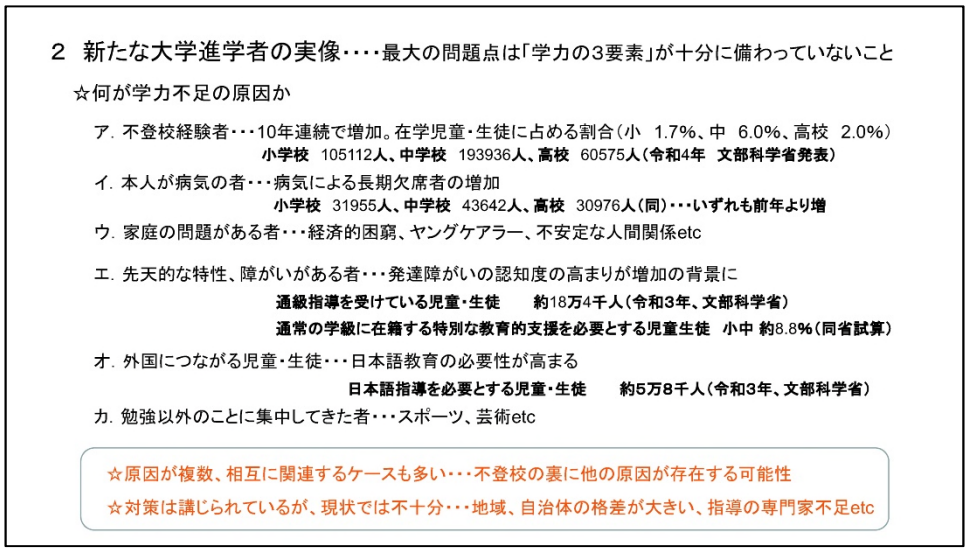
冗談のような話はさておいて，表１を見る時に注意していただきたい点は次の諸点です。まず右側に緑色でお示したとおり，日本学生支援機構の給付型奨学金の新設が大きな影響力を持つと思われます。実際にこの進学率の表などを見ますと，進学率に，この給付型奨学金の新設がさほど大きな変化を与えていないように思われるかもしれませんが，それは高校の内部を知っている私から見ますと，ちょうどコロナ禍に重なって，情報が保護者や生徒に伝わりにくかったという理由があります。現在，じわじわと認知度が上がっていますので，この大学進学率の上昇率はさらに加速するのではないかと予測できます。

それから２点目ですが，大学進学率の増加は 2020 年 4 月で，ここのラインから給付型奨学金の新設が関わってくるわけですが，全日制，定時制の中で，普通科，専門学科，総合学科，それぞれの進学率が上昇しているという点です。当然だろうと思われる方が多いかもしれませんが，専門学科や総合学科では，職業教育も行われているため，国語などの教科の内容，授業の実施時間数も普通科とかなり異なります。また普通科についても留意するべき点があります。こちらでも私は 2022 年に『進路格差』という新書を出しており，高校生の学力グループ別の進路を検証しています。そして学力が標準以上，俗に偏差値 50 が標準とされますが，それ以上の生徒が通う普通科高校では，すでに 2010 年代に進学率 100％の状態になっているということが分かりました。

そうなるとそれ以降の大学進学率の増加分は，学力が標準以下の高校生たちと推測できます。高校でも多様な学びをしている人たち，そして新たに学力が低い層の人たちが入っているということは，もう当然気付かれていることだと思いますが，彼らを迎える大学側はこれらの点を十分に知っておいてほしいと考えています。

そして最も注意すべきは，この一番右側の通信制なのです。表１で大学進学率の上昇は明

らかですが，さらに表１のこの下の部分をご覧ください。こちらは，2023 年と 2018 年の卒業生数を比べた物です。全卒業生数も，通信制以外の全ての区分でも減少しているのに，通信制だけは人数も増加しています。通信制は最近では私立の広域通信制高校が主流なのですが，毎日学校に行く習慣が付いていない生徒が，大学進学で増加しているということを大学の関係者の方々にぜひ知っておいていただきたいです。このスライドのまとめになりますが，右の下のほうにありますので，また後でぜひご覧ください。



それでは，先ほど新たな大学進学者たちが問題を抱えて，それが解決されていないと言いましたが，簡単にお話をしたいと思います。その最大の問題点は，「学力の 3 要素」が十分に備わっていないことです。

学力の 3 要素が十分に備わっていないということは，学力不足と言い換えることもできますが，それはなぜなのかという原因をこのスライドでは併記しています。

一つ一つが非常に重要なのですが，まず不登校経験者があります。そこに細かい数値が出ていますが，実態はこの数値以上に深刻です。統計上，不登校は年間 30 日以上の欠席者となっています。しかし現実には，教室に入れず，校内の別の場所にいて，放課後に担任にあいさつをするだけでも登校とされているのです。そのため，この統計上の数値以上に，学校で授業に参加できていない児童・生徒は存在していると考えています。

次にイです。本人が病気の者です。これも増加しているのですが，特に最近は中高生にメンタルの病気が増えています。例えば起立性調節障害です。これは大学生にも多いはずですが，小学生のうちに診断されて病欠となり続けているという生徒もいます。

次のウ，家庭の問題がある者です。経済的困窮，ヤングケアラーは，最近ずっと話題になっています。不安定な人間関係というのは，DV やネグレクトが代表的です。

次に先天的な特性，障害がある者です。この中で発達障害は，認知度が高まりどんどん増加しています。発達障害の場合，通級指導というものを受けている生徒が多いのですが，こちらも非常に増加しています。

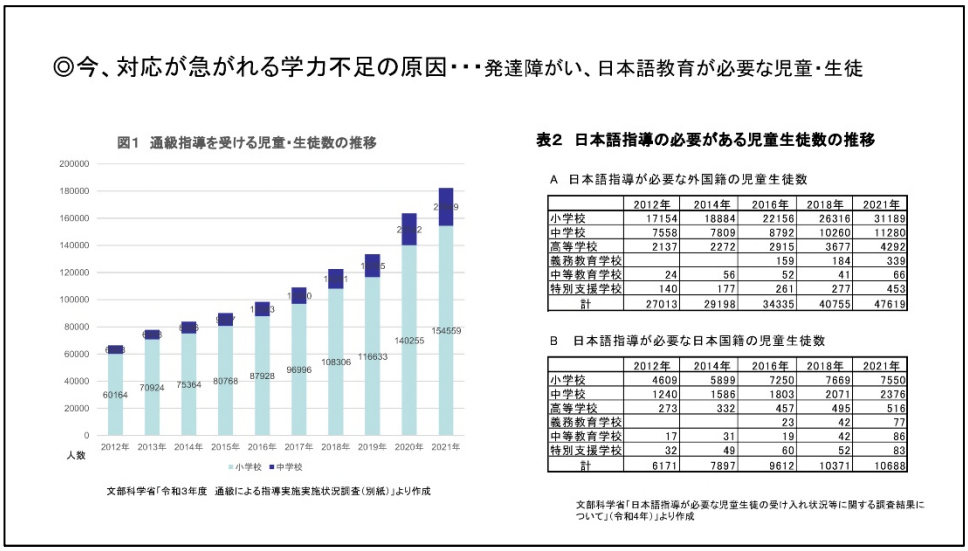
その次にオ，外国につながる児童・生徒です。「日本語教育の必要性が高まる」とあります。この日本語教育の必要性と先の先天的な特性，障害がある生徒については，次に少しお

話をしたいと思いますので，ここでは省略します。

そして最後が勉強以外のことに集中してきた者です。こちらはスポーツや芸術などに集中してきた生徒です。

このスライドでは，学力不足の原因を併記して書いていますが，複数の原因が相互に関連している場合が多いです。例えば外国につながる児童・生徒で，発達障害の特性を持つなどのケースには，2 つの原因への対策が必要となります。特に不登校となる子どもたちの背景を探ると，虐めなどによって不登校になることが多いと思われるかもしれませんが，よく探してみると，他の原因が存在する可能性が高いです。これは私の体験上から言えることになります。

もちろんこの学力不足の原因に対しては，さまざまな対策が行われています。とはいえ，結局，地域・自治体の格差が大きいと思われます。これは地域・自治体の意欲や経済力の問題などが関わってきます。そして指導の専門家が不足するなどの状況で，なかなか十分な成果が上げられていないのが実情なのです。



先ほど挙げた 5 つのさまざまな原因があるわけですが，先の複数の原因の中で，私が注目しているのはこのスライドの 2 点です。左側の図 1「通級指導を受ける児童・生徒数の推移」です。通級指導とは，先ほど簡単に言いましたが，これは通常の教室と異なる別の場で，主にソーシャルスキルトレーニングの指導を受けている生徒たちになります。

実は高校も 2018 年度から通級を置くことが制度化されていますが，まだ拡大には至っていません。そこで推移を見るために，ここでは小学校，中学校の物だけにしてあります。この簡単なグラフの細かい数字は省略するとして，一気に急増しているということが読み取れます。

そして表 2，こちらは「日本語指導の必要がある児童生徒数の推移」ですが，こちらに関しては，地域によって対応が非常に進んでいます。先進的な地域もあります。また，現在の時点では，この日本語指導の必要性の高さが，これも地域によって非常に異なっています。しかし今後は外国人労働者の受け入れが拡大されるでしょうから，そうなると必要性の高まりは必定となります。

この２点はどちらも今，喫緊の課題なのですが，その一方で，どちらも教育関係者の努力で何とかなる問題と言うこともできます。継続的な指導が必要でもありますので，大学も含めた教育関係者が協力していく対応が今後，望まれていくと思います。

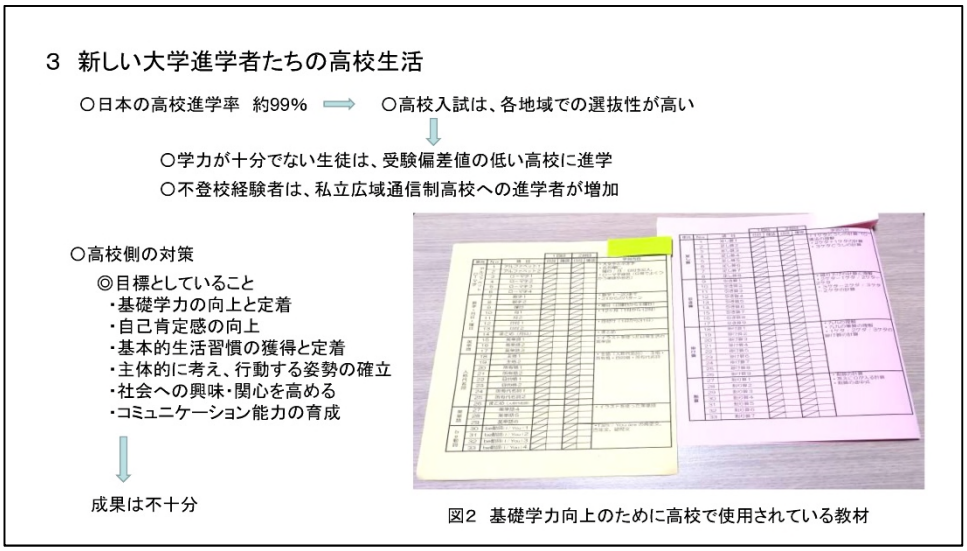


図2 基礎学力向上のために高校で使用されている教材

そこで，新しい大学進学者たち，つまり今日の私の発表の中心である，「置き去りにされた大学進学者たち」の高校生活の特徴を見ていきたいと思います。日本では高校は義務教育化しており，どのような問題を抱えている中学生も必ずと言っていいほど高校に進学しています。しかし高校入試は各地域での選抜性が非常に高いので，結果としてこのスライドにあるようなこういう高校に進学していくようになるのです。

彼らを受け入れている高校も，当然彼らの学力を伸ばすべく努力しています。高校側は大体スライドにあるようなことを目標として，非常に熱心に対策を練っています。その対策の中で，最も重要視されているのは，やはり何といっても基礎学力の向上と定着なのです。

ここで基礎学力の向上と定着を言うこと自体，高校としてはある意味，恥ずかしいことなのかもしれませんが，最近では自校の社会的存在意義を考えた高校が覚悟を決めて，小学校からの学び直しを学校の目標として掲げているという高校もあります。

そのような高校は，全国にたくさんあるのですが，その高校の１つで実際に現在使用されている教材がこの図２の写真なのです。参加者の方々はどうぞ後で拡大して詳しく見ていただければと思います。左側の黄色は英語の学習内容のスケジュールで，この最初には「アルファベット，ローマ文字」と書いてあります。

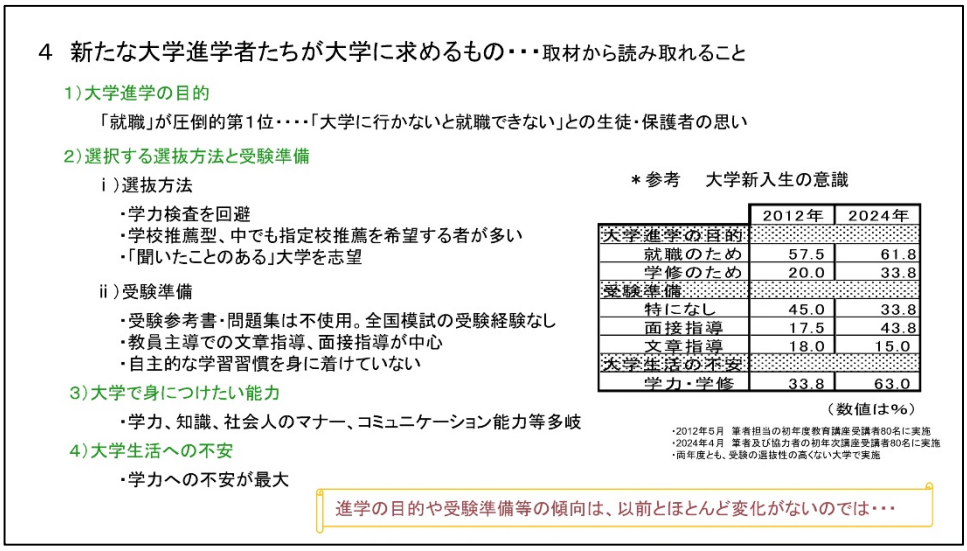
右のピンクの教材は，数学です。数学の最初は「足し算」と書いてあります。「生徒は１つの項目の練習問題をやって，指導員のチェックを受けます。内容の理解が十分でないときには，同じ作業を繰り返し何度も行います。学力不足の高校生たちが通っている高校では，このような学びが現在行われているのです。

実はこの図 2 に示しましたこの教材を使っている高校の卒業生を，私は大学で何人も教えています。私が今，皆さんにお見せしているスライドは非常にシンプルです。これは私の作成スキルが高くないということもあるのですが，自分が教えている学生，あるいは話をする時の高校生を意識して，シンプルさを心掛けているということでもあるのです。

私が接する学生たちは，発達などの障害を持つ者がかなりいます。そういう特性を持つような彼らの中には，脳と目の動きが連動しないということから，例えば動画とか，あるいは急に出てくるイラストに反応できない，見ることが苦手という子もいます。それから多くの色が使われていると文字が埋没してしまうという子たちもいます。

そしてダブルタスク，トリプルタスクができないなどのさまざまな特性を持っています。図 2 のプリントも非常にシンプルではないですか。このような学力不足に取り組んでいる高校では，シンプルで分かりやすい教材や指導を心掛けています。

左側の「目標としていること」を見ていただきますと，主体的に考え，「行動する姿勢の確立」，「社会への関心」，「コミュニケーション」など，多岐にわたっていることが分かると思います。しかし高校が一生懸命努力をしても，どうしても成果は不十分です。「9 年間の積み残しを 3 年だけで全てカバーをすることは無理」と，このような生徒たちを指導している教員や学習支援員からしばしば耳にすることがあります。



それでは今，お話ししたような高校生たちが大学に進学する時に，大学に求めるものは何なのかということにお話を進めます。こちらは取材から読み取れることをまとめてみました。

まず大学進学の目的ですが，こちらは就職が圧倒的な 1 位です。実際には近年は高卒の求人倍率が非常に高いのですが，大学に行かないと就職ができないとの強迫観念にも近いものを生徒や保護者から感じます。

では，彼らが考える就職は何なのかと言いますと，それはまともな会社で，ホワイトカラー的な仕事に就くことを意味しているようなのです。そういう就職を目的として，大学進学をします。その時に選択する選抜方法と受験準備に関しては，スライドに書いてありますので，ご覧ください。

「指定校推薦を希望する者が多い」とあるのですが，その理由は合格の可能性が一番高いということです。今は学校推薦型，総合型なども合格の可能性が高い大学が多いと思うのですが，指定校推薦が合格の可能性が一番高いという思い込みがあるので，希望する者が多い

ようです。

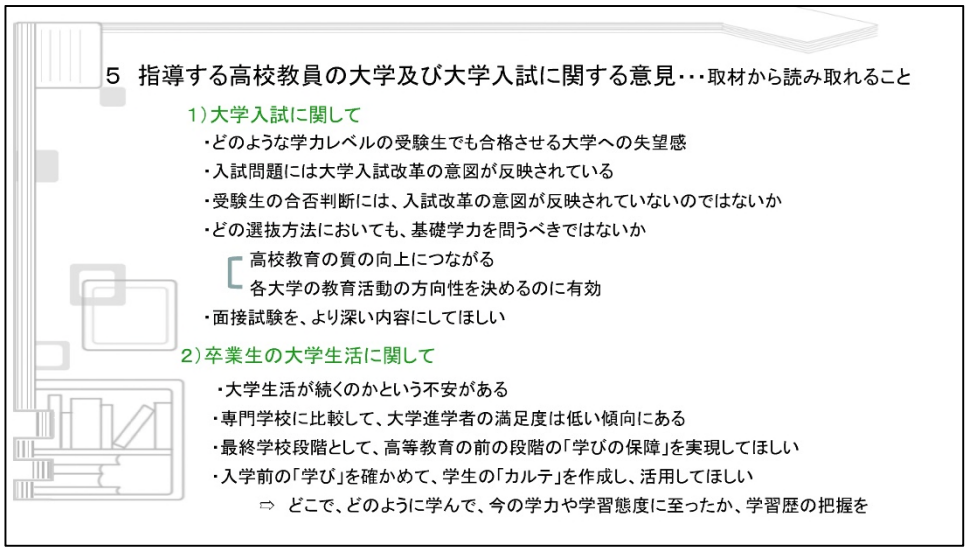
そして次に，「『聞いたことのある』大学」と書いてあります。「聞いたことのある」大学というのは，いわゆる大学の知名度とイコールではないのです。生徒も保護者も大学受験の情報を積極的に集めるというタイプではありません。それよりも彼らの限られたコミュニティーや人間関係の中で聞いたことがあるというものです。

例えば「知り合いのお兄ちゃんが行った」とか，「先輩が行った」という大学を選んで行くというのが，この「『聞いたことのある』大学を志望する」という特徴になります。

それから受験準備に関してもご覧ください。一般の学力試験を受けて，大学入試をクリアしてきた者からみれば，とても信じられないような受験準備を行っています。それから大学で身に付けたい能力は，スライドにあるように非常に多岐にわたります。

そして大学生活への不安は，学力への不安が最大になっています。右側に「参考」と書きましたが，こちらを見ていただければと思います。私は 2010 年代から，入試の選抜性が高くない大学の初年次教育を担当しているのですが，毎年新入生にこれまでの学習についての簡単なアンケートを行っています。2012 年と 2024 年はどちらも入学の選抜性が高くない大学で実施しました。進学の目的は就職で変わりません。受験準備に関しては，2024 年は面接指導を受けたとの回答が多くなりました。これは高校が新しいタイプの選抜方法に対して，組織的に面接指導を行うようになってきたことの表れだと思っています。

しかしより注目したいのは，大学受験者なのに，特に何もしていないという回答が多いということです。そして大学生活の不安は学力・学修ということです。もちろん差はありますが，全体的な傾向としては，この 10 年間ほど，ほとんど変わっていないのではないかと私は考えています。



最後は新たな大学進学者たちを実際に教えている高校教員の大学および大学入試に関する意見です。これも取材からまとめてあります。

まず大学入試に関してですが，「どのような学力レベルの受験生でも合格させる大学への失望感」です。高校教員には，大学教育は，向学心としかるべき適性がある者が受けるべき

だという考えが根強くあります。そのような思いが失望感を生むのかもしれません。

そして 2020 年からの共通テストなど，大学入試の改革については，「入試問題には大学入試改革の意図が反映されているが，その一方，合否の判定には，何ら影響がない」というシビアな意見が随分とありました。また「どの選抜方法においても，基礎学力を問うべきではないか」という意見もありました。こういう意見が出るのは意外と思われるかもしれませんが，かなりあります。その理由として，まず大学に進学したいのなら，高校の勉強を頑張らないといけないというように生徒のモチベーションを上げて，高校教育の質を上げたいという意図があるためです。

それから受験偏差値が 40 台前半のある公立高校の英語の教員は私に，「共通テストを進学希望者全員に受けさせてみてはどうか」と提案をしてきました。その教員に，「もしあなたの学校の生徒が共通テストを受けたとしたら何点ぐらい取れると思いますか」と訪ねたところ，「多分 20 点ぐらい」と答えたのです。

しかし問題のでき方や間違い方，どの問題ができて，どの問題には手を付けていないかといった事実は大学の教育に生かせるのではないかという意見でした。私もこの意見に基本的には賛成です。本来，今回の大学入試改革は，高校教育の質の向上も一体として考えられていたはずなのです。

文科省の「高校生のための学びの基礎診断」という測定ツールもありますが，民間委託で料金もかかるため，高校側では利用する意欲はあまり高まっていません。だからこの基礎学力をどのような形で問うか，問うてほしいという高校の先生方の意思はぜひ汲み取ってもらいたいという思いもします。

そして面接試験をより深い内容にしてもらいたいという意見があります。こちらは大学入試で試験官になられた方は，受験生の答えが定型化していることに気付かれているはずです。どのような質問が出るかを高校が把握して指導をしているからです。これでは本来の人間性や学習意欲などを聞き出すことはできません。個人情報の問題もあるので，聞けない問題もあると思いますが，より深い質問で生徒の向学心や，いろいろなもの，彼らの本当の姿を見てほしいと考える教員は少なくないのです。

面接試験に関連して，最近プレゼンテーションを行う試験が随分と多くなっています。これについて，高校の教員からは結構疑問に思われているところがあるのです。どういうことかと言いますと，まずプレゼンテーション試験の準備は事前に教員の指導が相当入っています。その結果，見栄えの良いスライドが作れる，人前で話せるなどのスキルがその内容や，本人の特性，適性よりも前面に出てしまいがちなのではないかという高校の教員からの疑問です。これも少し心の中に留めておいていただけるとありがたいです。

それでは最後ですが，卒業生の大学生活に関しての高校の教員の意見です。大学進学後，大学生活が続くのかという不安は，新たな大学進学者層を送り出している高校の教員にはとても強くあります。卒業から半年後，今の生活の満足度についてアンケート調査している高校があります。その高校の方からお話を聞いたのですが，それによると大学進学者の今の生活の満足度は専門学校進学者の満足度よりも低くなっているそうです。大学進学者たちは，放っておかれているようで不安という類の感想が多いです。それに対して専門学校進学

者からは「面倒見がいい。自分を気にかけてくれている感じがする」といった感想が多いのです。

成人年齢が 18 歳となった今，大人である彼らが放っておかれることに不満があること自体が問題だと私も考えます。しかし大学入学までに自立性や主体性が確立していない学生が多く入学していることを大学側はもっと踏まえるべきではないかと思います。

そして教員に共通する思いです。最終学校段階として，高等教育の前の段階の「学びの保障」を実現してほしいという声があります。「学びの保障」ができる最後の場である大学が，それまで積み残してきた，置き去りにしてきた学習の保障をしてほしいという悲願のようなものを多くの先生方から感じます。

そのためには，入学してきた者たちの真の姿を知ることです。どこでどのように学んで，今の学力や学習態度に至ったのかといった学習歴の把握，医療機関のカルテのような物を作成し，そして活用してほしいという声があります。

実際に小学校から中学校に進む時，同じ地域の公立校の場合には，書類には書かれていない物も含め，生徒の情報交換をしています。また問題を抱えている生徒が多く入学する高校では，出身中学に行って生徒の情報を入手します。どちらもより良い学校教育を実現するための努力なのです。大学でも，学生のこれまでを知る努力，そして個々の学生への個別の対応をより深く考えるべき時期に来ているのかもしれません。

高校の先生方の熱い大学への思いをお話ししたところで，私の発表は終わりにしたいと思います。ご清聴いただき，ありがとうございました。

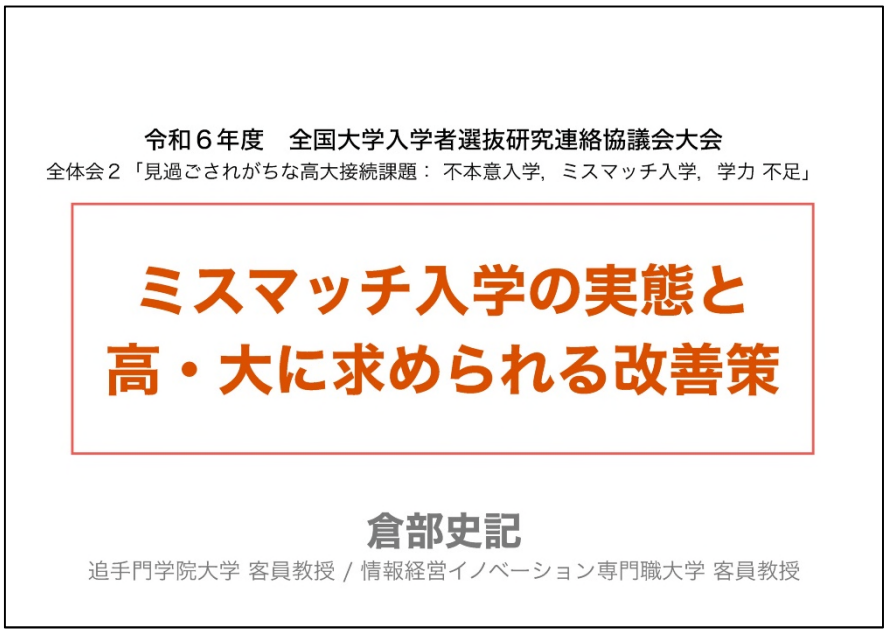
【山地・司会】　ここで問題提起された事柄というのは，朝比奈先生の高校の教員としてのご経験を踏まえて，いろいろな方に取材をされて，これまでのご本に詳しく表現してこられた内容のエッセンスかと思います。朝比奈先生，ありがとうございました。

続きまして，倉部先生，ご用意をお願いします。■

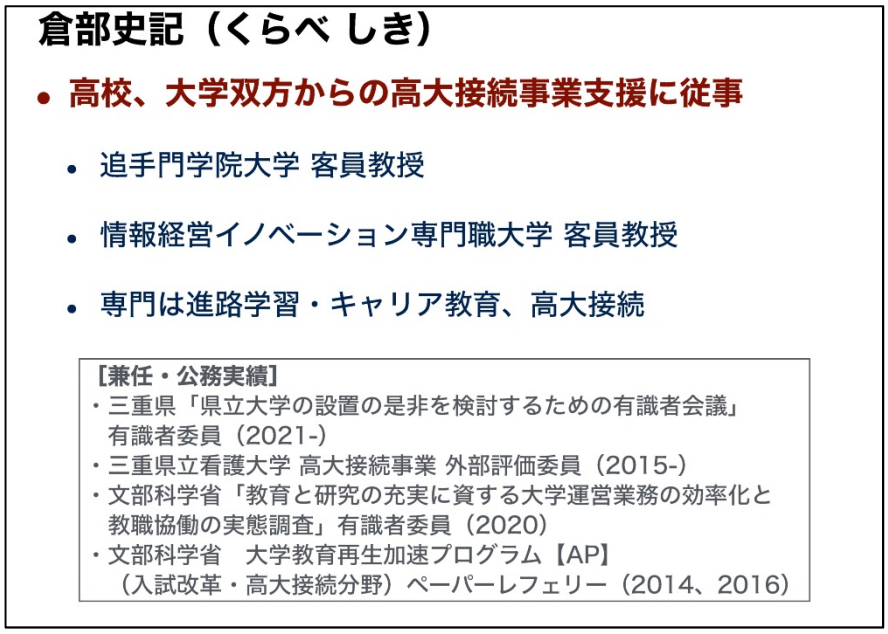
全体会２　◉ 報告２

ミスマッチ入学の実態と，高大に求められる改善策

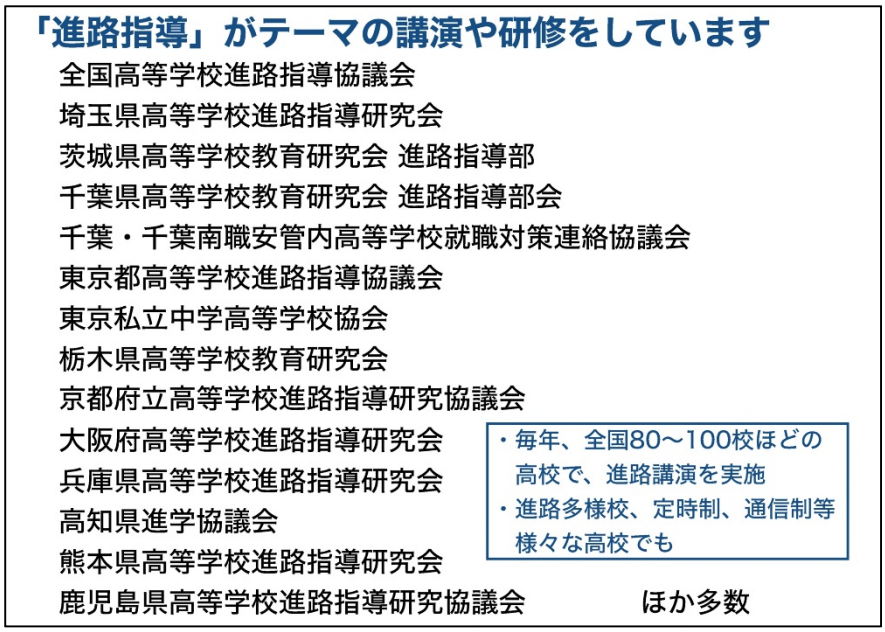
■倉部　史記（追手門学院大学客員教授，高大共創コーディネーター）



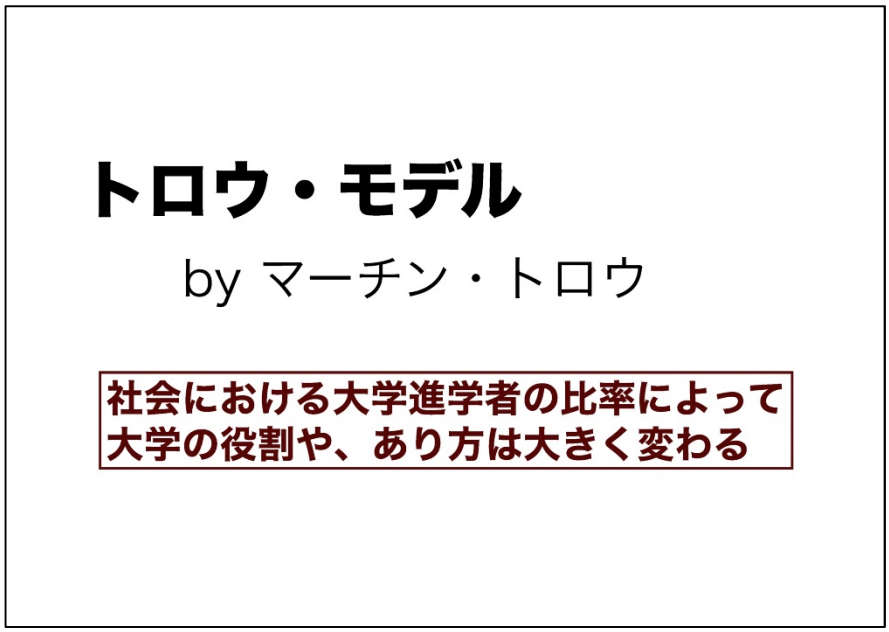
本日の登壇者の方々，大学関係者の方，高校の先生方，そして朝比奈先生のようなジャーナリストの方とそれぞれいらっしゃいます。私の報告内容は，その高大の間で起きている問題についての内容です。



先ほどの朝比奈先生は元高校教員でしたが，私は元大学事務職員です。工学院大学という私立大学の教務部で学生の支援を行っていました。その後，予備校に転職して，高校生の進路指導のようなものに関わり，現在は独立した立場で高大接続のお手伝いをしています。

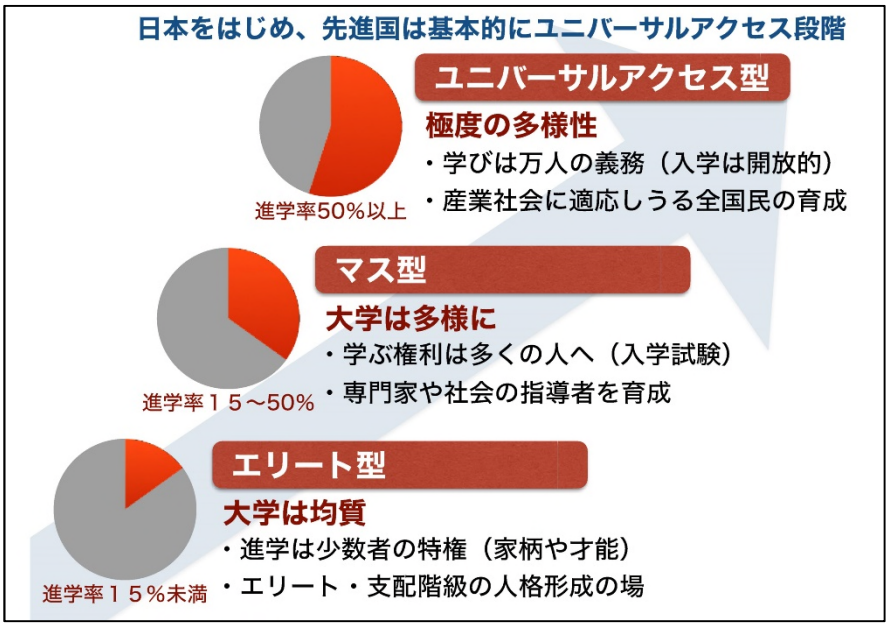


スライドにあるように全国に高校の進路指導の先生方の自主的な協議会があります。そのようなところで現状の進路指導の課題を話したり，毎年全国の 100 校ぐらいの高校で，高校生や保護者と直接お話をしたりしています。その中には，放っておいても東大や京大にどんどん合格するような学力の高い高校もあれば，朝比奈先生のお話に出てきたような学力に課題を持っている高校もあります。進路多様校，定時制，通信制とさまざまです。



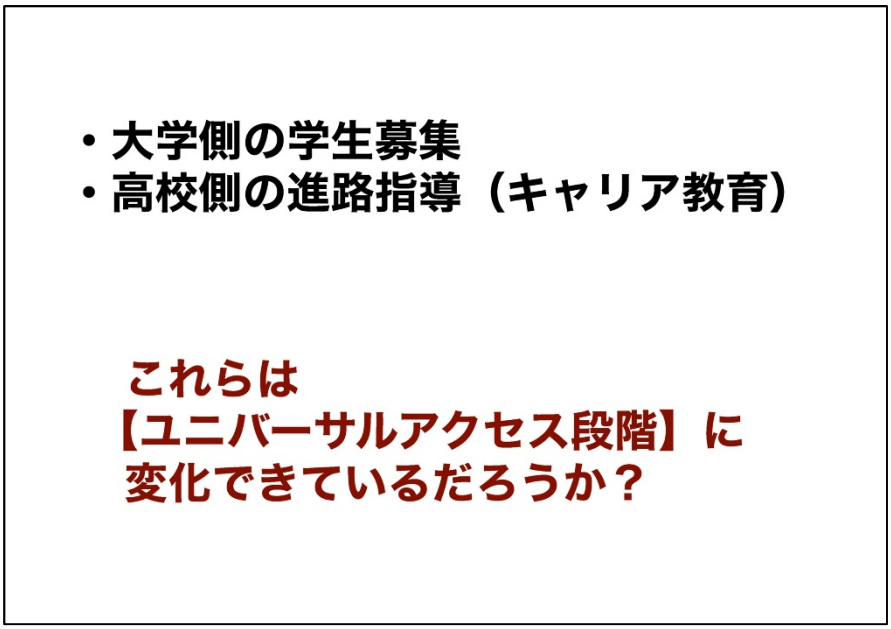
ご存じのとおり，18 歳人口はどんどん減っていきます。それはそれで大変気になりますが，今日のテーマはどちらかというと，大学進学率が上がっているというところに関わりが深いと思います。実際にこれまでなら大学に来なかった層も大学に来ています。今後はますますそれを受け入れていくことになると思うわけです。

大学の皆さまであれば，トロウ・モデルという言葉を聞いたことがあるかもしれません。大学進学率が上がっていくと，大学の役割だとか，在り方も当然変わっていきます。大学を取り巻くいろいろなインフラも変わっていくはずだというモデルです。

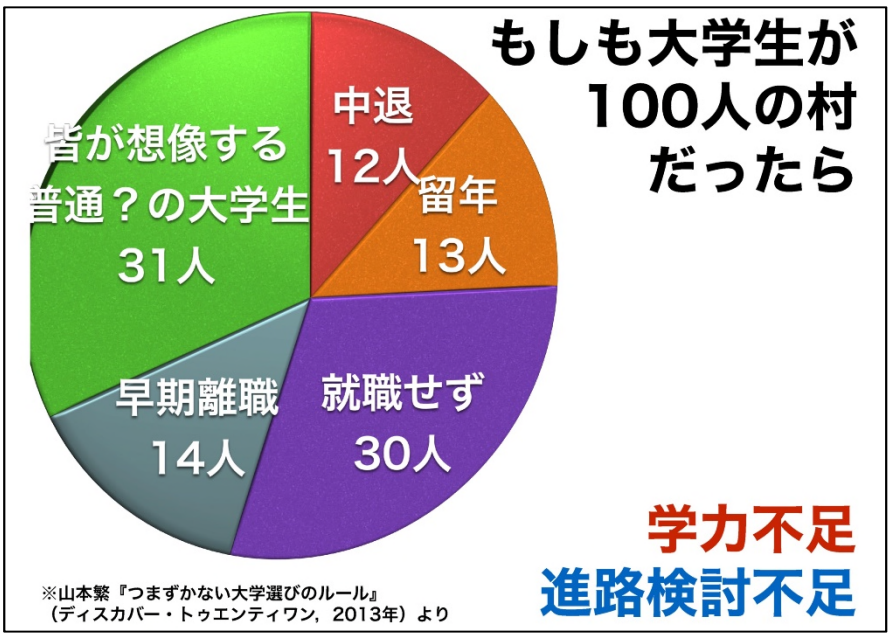


現在，日本でも進学率は 50％を超えています。このマーチン・トロウが言うユニバーサル段階に移行しているのです。こうなってくると，一言で「大学はこうだ」などとは言えません。先ほど，朝比奈先生のご説明で，高校の先生は大学にはこうあってほしいという思い

もあるということでしたが，とはいえ今は本当に多様です。四則演算が怪しいから大学に行く，就職ができないから大学に行く，周りの人が行くから大学に行くという子もいるわけです。



これ自体，私は悪いとは思いません。むしろ多くの方が誰でも高等教育にアクセスができるというのは素晴らしい社会だと思うのです。しかし，当然ながら進路指導であるとか，学生募集であるとか，もちろん皆さまが関わっている入試もユニバーサル段階に合わせて変えなければいけないわけです。でも，本当に変わっているだろうかというのが，私が日々感じていることです。



これは 2013 年に出版された本のデータなので，少し古いのですが以前，『世界がもし 100 人の村だったら』という本がありました。あれに合わせて，「大学 1 年生が 100 人の村だっ

たら」というデータをまとめたものです。

100 人中 12 人は中退，13 人は留年をします。ここまでで 4 分の 1 です。30 人は 4 年で卒業しますが就職はしません。14 人は 3 年以内に離職します。残ったのは 31 人です。これがいいか悪いかは人によると思います。先ほども山地先生がおっしゃっていましたが，海外留学をして留年したなどというのは，むしろ勧めたいぐらいです。しかし高校生や保護者，あるいは高校の先生は，大学入試に受かりさえすれば，この最後の 31 人になると本当に信じているということが問題なのです。このグラフを高校生や保護者，先生に見せると皆さん驚かれます。

大学	学部系統	退学率	一般	AO	指定校	公募制	付属	留学生	他
B大学	経済	15.4	12.7	27.1	10.3	10.1	66.7	0.0	40.0
B大学	経営	13.9	14.1	16.1	11.2	10.1	22.2	10.0	21.7
C大学	農	4.3	4.3	33.3	-	3.8	0.0	9.1	-
D大学	経営	17.9	8.3	40.0	18.2	0.0	18.8	18.2	9.5
E大学	理	9.2	8.0	47.1	9.7	3.0	×	0.0	×
F大学	看護	18.8	16.0	-	28.0	15.4	-	-	-
G大学	芸術	19.0	8.1	24.4	31.8	8.7		100	
H大学	理工	25.2	11.2	40.4	32.1	23.1	47.2	0.0	-
I大学	薬	20.8	14.6	-	50.0	26.7	-	-	-
J大学	スポーツ	11.9	9.7	13.2	57.9	0.0	-	-	-
K大学	薬	48.1	42.2	52.6	81.8	33.3	×	-	0.0
L大学	経営	28.3	32.1	34.7	16.3	50.0	×	50.0	-
M大学	国際	27.7	29.4	26.3	24.4	100	-	-	-
N大学	福祉	16.8	38.9	7.7	10.7	10.7	33.3	25.0	0.0
O大学	国際	27.7	100	42.9	9.1	0.0	25.0	100	66.7

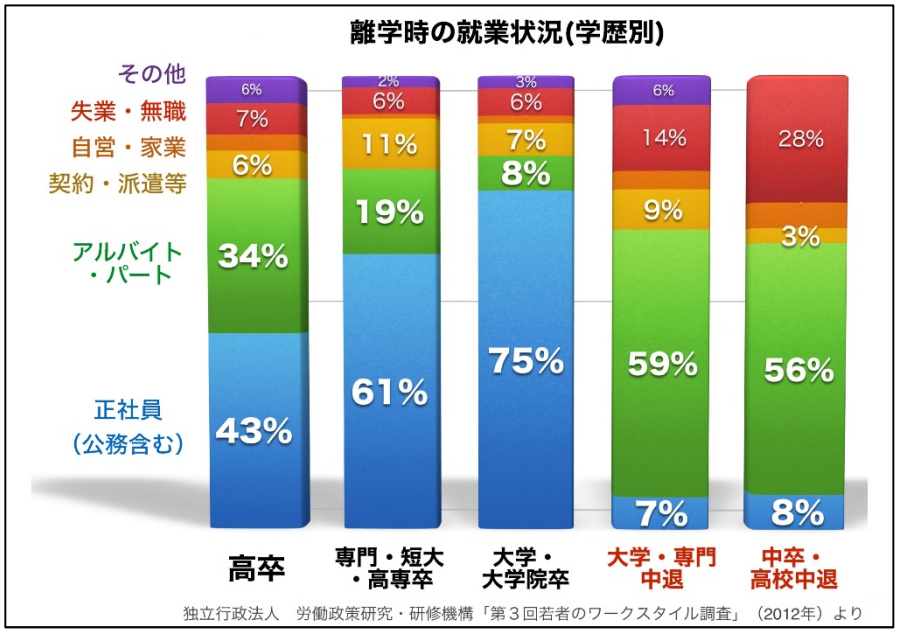
※読売新聞教育ネットワーク事務局『大学の実力2019』より

読売新聞社が 2019 年まで「大学の実力」という調査を行っていました。全国の大学の標準年限の卒業率だとか，中退率だとかをしっかり調べたという物です。こうして見てみると，結構中退率の高い大学や学部が身の回りに普通にたくさんあったということに，高校側が本当に驚かれるのです。例えばこちらの表にある，K 大学薬学部です。

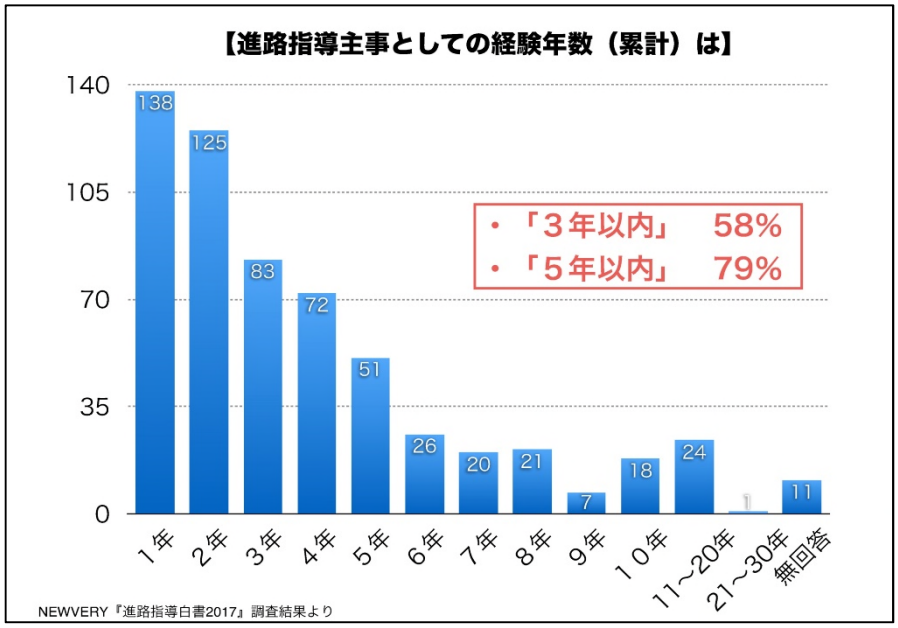
指定校推薦入試で入った人の 81.8％が退学をしています。この大学が存在する県の進路指導協議会で，私が「こういうデータを知っていますか」と言ったら，会場の先生方がものすごく驚かれていました。「聞いたことがない，高校訪問でもこういう話は聞いたことはない」とのことです。指定校というのは，高校が大学に生徒を推薦する入試です。しかしこういう情報は大学からは出てこないのです。

これを見ていると，どの入試が悪いとも一概に言い切れないということも分かります。世間では，総合型選抜あたりが結構悪者にされがちですが，実はその入学者が進学後に一番伸びているとか，一般選抜で入った人が一番中退しているなどという大学もあるわけです。

大学の職員の方は，このような情報を日常的に扱っています。大学と高校の間で，情報が途切れてしまっています。別に中退が悪いと言うつもりはありませんが，事実としてこういうデータもあります。

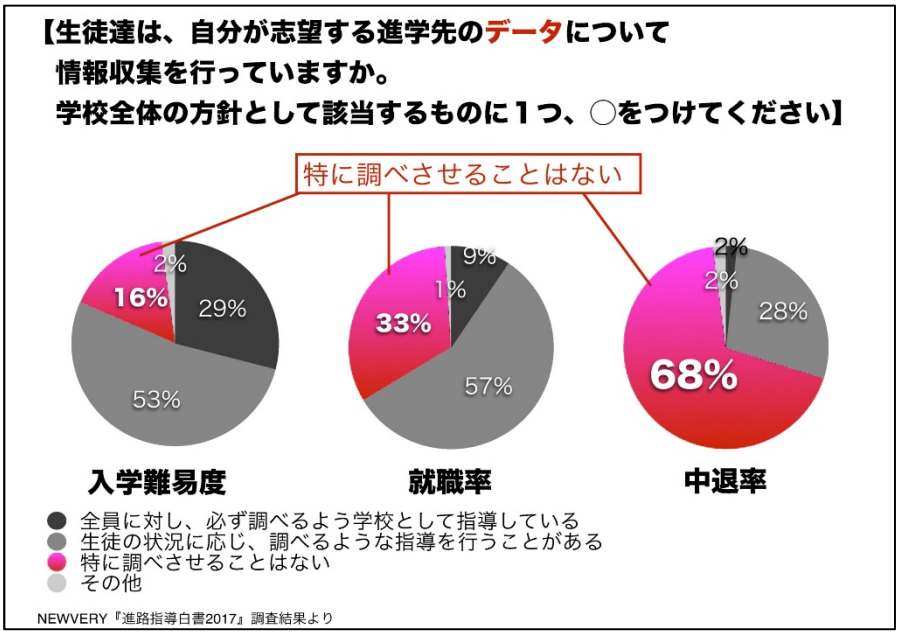


大学や専門学校を中退した方に，日本の社会は残念ながら冷たいです。少し社会の仕組みが良くないです。さらに進学者の過半数は今，貸与型奨学金だとか，経済支援を受けて進学します。しかし留年や中退が決まってしまうと，これらの給付が止まることが多いのです。中退の場合は，4 カ月後ぐらいから返済が始まったりします。これも高校の先生や保護者は知りません。多くの方は知らないのです。なぜならば，中退などはほとんどないことだと思っているからです。

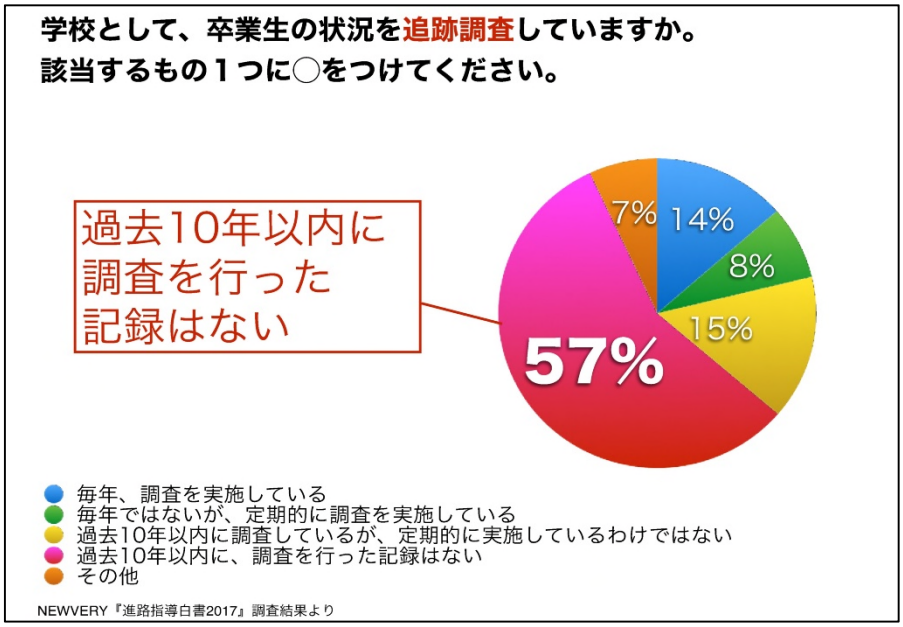


私は以前，NPO の理事として，『進路指導白書』を作りました。全国の進路指導の先生方にお力添えをしていただいたのです。ここで分かったことは，進路指導の先生も進路指導についてものすごくキャリアが長いわけではないということです。進路指導主事をやって 3 年以内という方が 6 割，5 年以内で 8 割ぐらいでした。中高一貫の高校などですと，中 1 に受

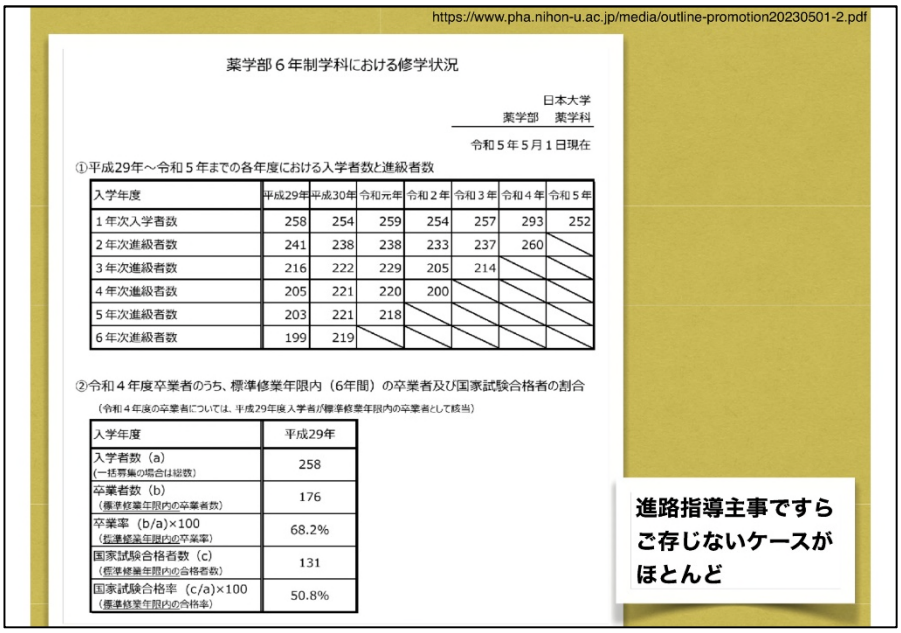
け持った学年が高 3 まで上がる間に 6 年です。6 年もあったら大学入試の在り方は相当入れ替わっています。



「進路指導の中でどういうデータを生徒に調べさせますか」と聞いた時に，入試難易度だとか，就職率は多くの高校で調べなさいと指導をします。しかし中退率はほとんどの高校で調べさせることはありません。



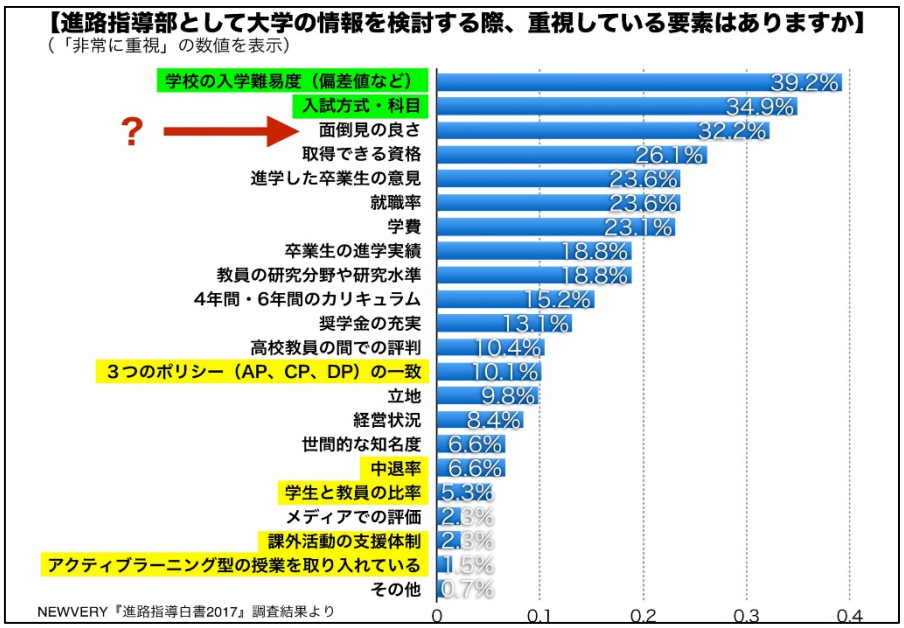
さらに卒業生の追跡調査を高校はやっていないのです。就職をした子たちのことは結構気にかけています。何なら職場を訪ねて行ったりします。しかし大学や専門学校については，「もう預けました。多分大丈夫ですよね。中退などないようですね」という感覚です。



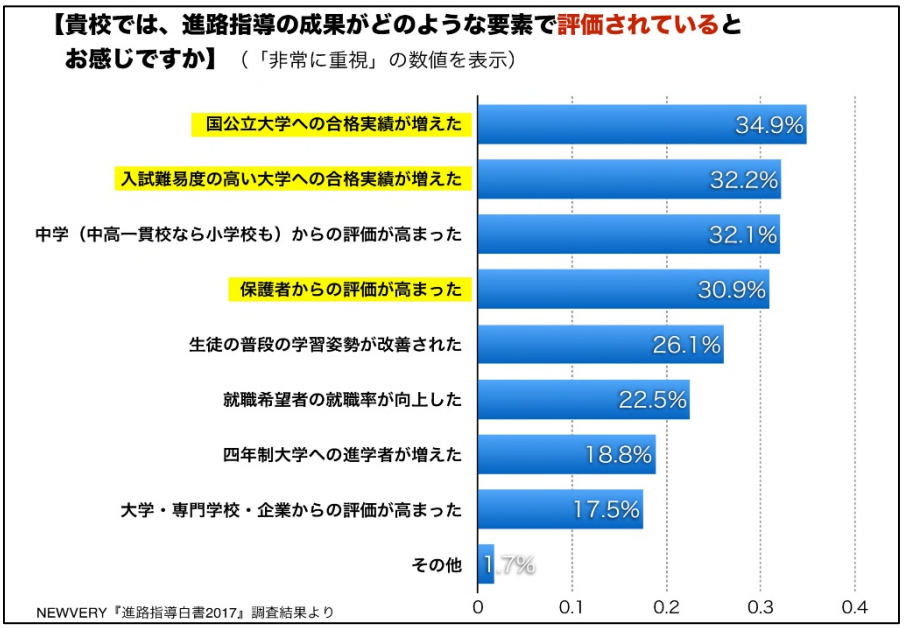
ちなみに薬学部や歯学部，6 年制のこういった学部では，今，就学状況をかなり詳細に公表することが義務付けられています。これは薬学部の例です。1 年生の時，258 人だった子たちが，2 年生，3 年生，4 年生になるにつれてどんどん減っていきます。これによるとこの大学の場合，6 年間で卒業して薬剤師の国家試験にそのまま合格したのは半分ぐらいだというデータが出ています。進路指導を行う上ではすごく有用なデータだと思うのですが，進路指導主事ですら知りません。

こういったデータを初めてご紹介した時に，先生方は「教えてほしかった」と言うのです。もちろん「こんなに低いのだったら，ここはうちの生徒には勧めない」という人もいるでしょう。しかし多くの場合はそんなに単純ではないです。結局，行くのです。自分のなりたい職業に就くために地元で行けるのはここだけだ，この大学だけだとなれば行きます。その時，「なぜ中退するのかという理由が分かっていたら，高校でできることがあったはずだ」というのが先生方がよく言われることです。

薬学部だったら，化学とか，生物とか，恐らくそういう基礎学力も大事でしょう。それがある種の留年や中退の原因になっているのだとしたら，「それを先に言ってほしかった。それであれば指定校で送り出す時にもちゃんとその事実を伝えた上で，3 年生の卒業までにできることがあるはず」ということです。逆に言えば，変えられる余地が結構たくさん残っているということです。



同じく進路指導白書のデータですが，「進路指導部として大学の情報のどういうところを重視していますか」というものです。トップ 2 に入試のデータが出るのは仕方がないと思います。問題はこの黄色いところです。3 つのポリシー，中退率，学生と教員の比率などです。大学が学生のために一生懸命整備をして力を入れていることを，進路指導の先生はほぼ見ていません。もしかしたらこの辺りもお互いの努力や課題を伝えてきれていないのかもしれません。不思議なのは，「面倒見の良さ」は常にトップのほうに来るのです。この「面倒見の良さ」というのは何でしょうか。私からすると中退率だとか，学生と教員の比率だとか，そういった物はものすごく「面倒見の良さ」の重要な要素だと思うのです。しかしこの辺りも何だか印象が先行するような広報だとか，進路指導のあたりで課題があるのかもしれません。



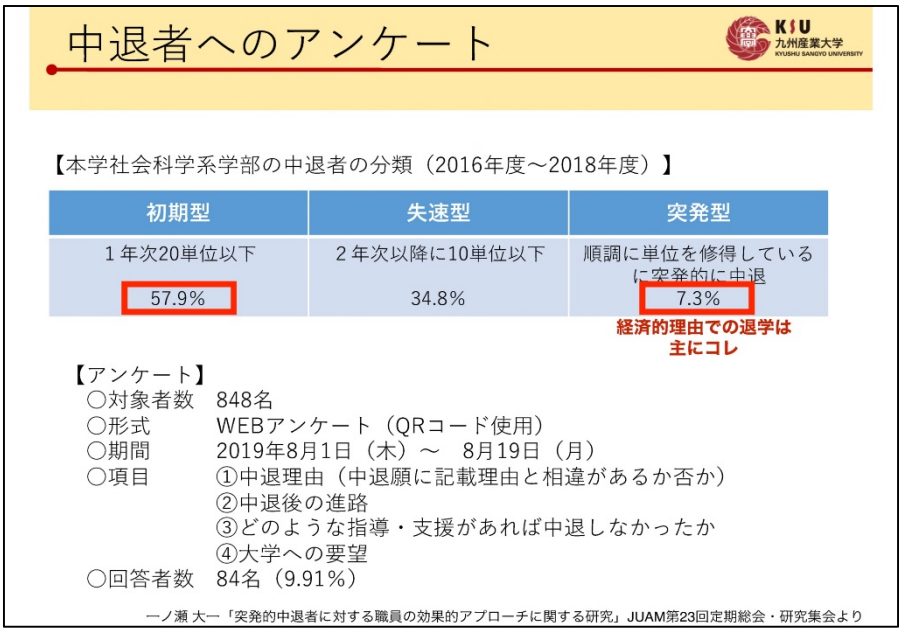
高校の先生にも悩みがあります。「進路指導主事の先生としては，どういうことを大事に

していますか」と聞くと，「本人の興味関心や特性に合った進路のマッチング」などが上位に来ます。

一方で，「入試難易度の高い大学に受からせることは，私にとって重要ではない」というお話が出ます。なるほどと思います。しかし聞き方を変え，「先生の進路指導はどこで評価されていますか」と問うと，皆さんの予想どおり，逆転するのです。「国公立大学にどれだけ合格させたかが私の評価になります」ということです。

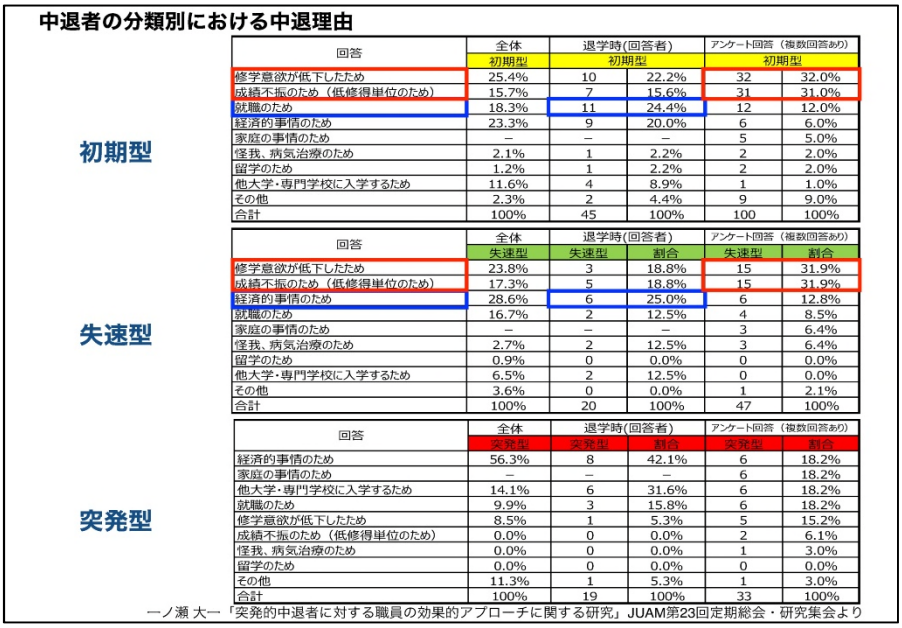
先生方もやりたくてやっているわけではなかったりするのです。別に国公立大学の合格を狙わせることが悪いと言うつもりはありません。ただし，これが行き過ぎてしまうと，学校の中に大学の関係者を呼んでイベントをする時に，国立，公立大学の方しか呼ばず，地元の私立大学の関係者を意識的にシャットアウトするなどという指導が起きたりするのです。

できるだけ第 1 志望の国立大学の方に目を向けさせたい，地元の私大にうっかり魅力を感じて，推薦などで入ってしまったら困る，という意見が出てくるのです。ここまで来ると少し大人のエゴのような気もします。しかし先生もこういう事情を抱えています。何だか生徒や学生たちにそのしわ寄せが行っている気がします。



こちらはとても重要なデータだと思うのでご紹介します。福岡県にある九州産業大学の一ノ瀬さんという職員の方なのですが，その方が九産大の中退者の分析をされたのです。ここに初期型，失速型，突発型というものがあります。突発型というのは，順調に単位を取っていたのですが，ある時，急に中退してしまうという人です。経済的な理由で中退する人はこのパターンが多いのです。

しかしこの大学の社会科学系学部では，突発型は 7.3％だけです。圧倒的に多いのは初期型で，最初から単位が取れていないのです。つまりお金だけが原因ではないわけです。失速型も結構多いです。初期型と失速型を合わせるとこれで 9 割以上です。



中退者の分類別における中退理由

初期型

回答	全体 初期型	退学時(回答者) 初期型		アンケート回答（複数回答あり） 初期型	
修学意欲が低下したため	25.4%	10	22.2%	32	32.0%
成績不振のため（低修得単位のため）	15.7%	7	15.6%	31	31.0%
就職のため	18.3%	11	24.4%	12	12.0%
経済的事情のため	23.3%	9	20.0%	6	6.0%
家庭の事情のため	–	–	–	5	5.0%
怪我、病気治療のため	2.1%	1	2.2%	2	2.0%
留学のため	1.2%	1	2.2%	2	2.0%
他大学・専門学校に入学するため	11.6%	4	8.9%	1	1.0%
その他	2.3%	2	4.4%	9	9.0%
合計	100%	45	100%	100	100%

失速型

回答	全体 失速型	退学時(回答者) 失速型	割合	アンケート回答（複数回答あり） 失速型	割合
修学意欲が低下したため	23.8%	3	18.8%	15	31.9%
成績不振のため（低修得単位のため）	17.3%	5	18.8%	15	31.9%
経済的事情のため	28.6%	6	25.0%	6	12.8%
就職のため	16.7%	2	12.5%	4	8.5%
家庭の事情のため	–	–	–	3	6.4%
怪我、病気治療のため	2.7%	2	12.5%	3	6.4%
留学のため	0.9%	0	0.0%	0	0.0%
他大学・専門学校に入学するため	6.5%	2	12.5%	0	0.0%
その他	3.6%	0	0.0%	1	2.1%
合計	100%	20	100%	47	100%

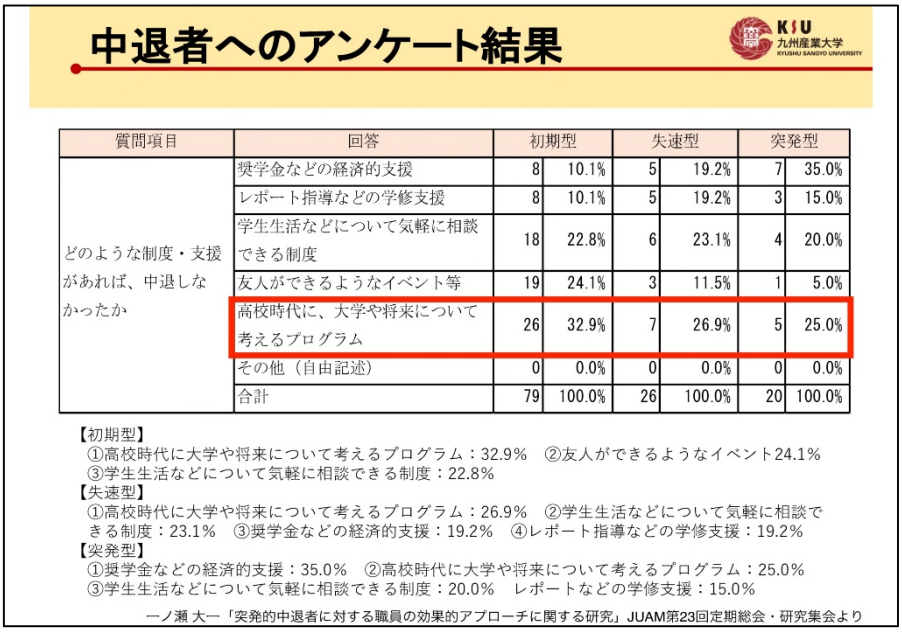
突発型

回答	全体 突発型	退学時(回答者) 突発型	割合	アンケート回答（複数回答あり） 突発型	割合
経済的事情のため	56.3%	8	42.1%	6	18.2%
家庭の事情のため	–	–	–	6	18.2%
他大学・専門学校に入学するため	14.1%	6	31.6%	6	18.2%
就職のため	9.9%	3	15.8%	6	18.2%
修学意欲が低下したため	8.5%	1	5.3%	5	15.2%
成績不振のため（低修得単位のため）	0.0%	0	0.0%	2	6.1%
怪我、病気治療のため	0.0%	0	0.0%	1	3.0%
留学のため	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
その他	11.3%	1	5.3%	1	3.0%
合計	100%	19	100%	33	100%

一ノ瀬 大一「突発的中退者に対する職員の効果的アプローチに関する研究」JUAM第23回定期総会・研究集会より

中退理由についても一ノ瀬さんたちは調べたそうです。退学する時には多くの大学が，学生と面談をします。その面談の時に本人が挙げた理由は「就職のためです」とか，「経済的事情のためです」と言うのだそうです。しかし 5 年後ぐらいに「本当はなぜ中退したのか」と，もう 1 回聞いたそうです。そうすると学生たちが言う理由が全然違う「修学意欲が低下した」，「成績不振だった」だそうです。

実態としては複合的なのだと思います。興味が持てない内容だし，単位も取れていない，こういうことだったら授業料を払って通う意味もないだろうといって辞める方も多いのかもしれません。だからいろいろなところで紹介をされている中退の理由の分析データというのは，必ずしも実態を反映していない可能性もありそうです。



中退者へのアンケート結果

KSU 九州産業大学 KYUSHU SANGYO UNIVERSITY

質問項目	回答	初期型		失速型		突発型	
どのような制度・支援があれば、中退しなかったか	奨学金などの経済的支援	8	10.1%	5	19.2%	7	35.0%
	レポート指導などの学修支援	8	10.1%	5	19.2%	3	15.0%
	学生生活などについて気軽に相談できる制度	18	22.8%	6	23.1%	4	20.0%
	友人ができるようなイベント等	19	24.1%	3	11.5%	1	5.0%
	高校時代に、大学や将来について考えるプログラム	26	32.9%	7	26.9%	5	25.0%
	その他（自由記述）	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
	合計	79	100.0%	26	100.0%	20	100.0%

【初期型】
①高校時代に大学や将来について考えるプログラム：32.9%　②友人ができるようなイベント24.1%
③学生生活などについて気軽に相談できる制度：22.8%
【失速型】
①高校時代に大学や将来について考えるプログラム：26.9%　②学生生活などについて気軽に相談できる制度：23.1%　③奨学金などの経済的支援：19.2%　④レポート指導などの学修支援：19.2%
【突発型】
①奨学金などの経済的支援：35.0%　②高校時代に大学や将来について考えるプログラム：25.0%
③学生生活などについて気軽に相談できる制度：20.0%　レポートなどの学修支援：15.0%

一ノ瀬 大一「突発的中退者に対する職員の効果的アプローチに関する研究」JUAM第23回定期総会・研究集会より

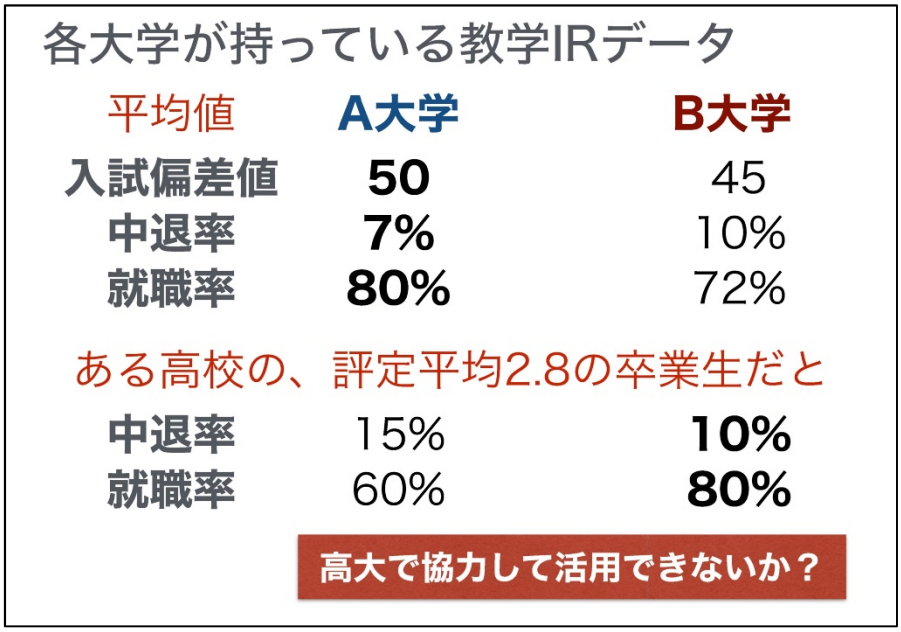
さて，一ノ瀬さんのグループが，「どのような制度・支援があれば，あなたは中退しなか

ったと思いますか」と中退者に聞きました。最多は，「高校時代に大学や将来について考えるプログラムがあれば自分は中退しなかったと思う」です。これがすごく多いです。

ここから分かるのは，大学だけで頑張っても恐らくミスマッチや中退を完全に減らすことはできないということです。高校だけでも難しいと思います。大学と高校で連携しなければ，こういったものはなかなか発見することも難しいです。問題の原因は高校のうちに発生しており，それが大学に入ってから顕在化する構図です。

このような中で，先ほど朝比奈先生のお話にもあった指定校推薦で大学に進学する方は増える一方です。私立大学に関して言えばもはや最多です。絶対にそれが悪い，と言うつもりはありませんが，中退や留年の実態も分からないまま，それを防ぐ理由も知らないで，高校側として十分な施策が行われず，大学も進学後の実態を明かさず，指定校だけが増えていくというのは果たして大丈夫なのでしょうか。ユニバーサル段階に必要な施策など，見直さなければいけないことがあるのではないかと私は思うわけです。

私は NPO で長く仕事をしてきました。高校側に立っていて思うのは，例えば入試難易度がそんなに高くない大学の中にも，社会でものすごく重要な位置，役割を担っている大学はあるのですが，入試難易度が高くない大学の中で，ここはちゃんと教育力がある大学なのか，そうではないのかという違いが外からは全く分からないということなのです。せっかく努力をしている先生方もいらっしゃるのにもったいないです。



NPO としてやってきたことの中で，少し手応えを感じたものを最後にご紹介します。教育力の違いを伝える方法はざっくり言えば，私はこの２種類なのではないかと思いました。データで分かる教育力とデータでは伝わりにくい教育力です。

データに関して言えば，大学の皆さまは教学 IR というお言葉をご存じかもしれません。学生の入学前から卒業後までのいろいろなデータを分析して，中退予防の施策を打たれていたりします。これを入試の開発につなげていたりもします。

例えば，A 大学，B 大学のこういうデータがあります。平均値だけを見ると A 大学のほう

が何となく勧めたい大学のように思えます。しかし，ある特定の高校の特定の学力層の卒業生だけを抽出すると，B 大学のほうが伸ばしているということはよくあることです。

しかしこれは大学の方々でも多分，気付いていないこともあります。また教務部の人は気付いていても入試広報の人は全く知らないなどということもよくあります。ですが，ものすごく重要なデータであると思います。大学がこれから学生を持続的に集めていこうと思った時にも，ここに活用の余地はないですか。高校にとってもすごく聞きたいところだと思います。





そしてもう 1 つ，実際の教育を体験してもらうということも NPO でやってきました。「WEEKDAY CAMPUS VISIT」といって，普段の大学の授業を学生が受けているところに高校生を混ぜてもらうプログラムを 2013 年からずっとやっています。コロナが始まる前ぐ

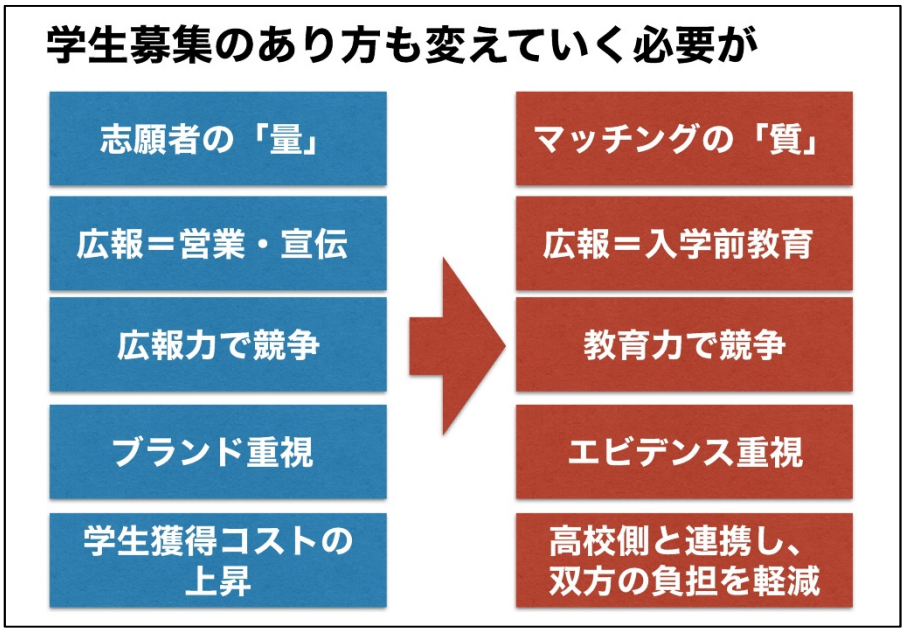
らいまで，２万人近い高校生が参加しました。



ただいきなり普段の授業の途中の第３回目などに突っ込んでも分からないことが多いので，きちんと気付きを引き出すようなワークを入れたりしました。これをやってみて分かったことは，こういったものをきちんとやっていくと，最終的にその大学に進学した時に，中退率を抑制する効果が確認できたということです。先ほどの九州産業大学でもそうでした。

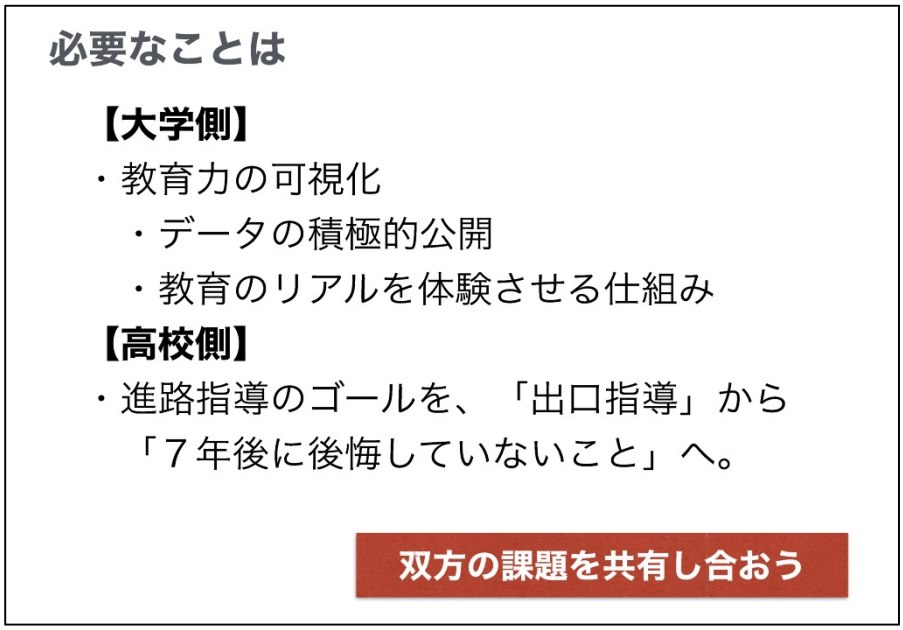
もう １ つは，入学手続き率にかなり大きな影響を与えていました。幾つかの大学に受かった場合，最終的に入学しようと思うのは，実際の授業を体験した大学のほうだったのです。いろいろな理由があるのだと思います。これはあらゆるケースで万全のプログラムというわけではありません。ただ，意識したのは，オープンキャンパスのように，「お客様・消費者」として扱うことはやめよう，「学習者」として迎え入れようとしたことです。

授業はちゃんとノートを取らせるし，最後に発表もさせます。振り返りワークを高校生同士でやらせることでお互いの気付きを共有させました。学問の中身についての理解もですが，アクティブラーニングなどの教育の特色をはじめとする，大学の理解，あと「自分がもし大学生になったら，どういう態度でこの授業を受けるのだろう」という，自分に対する理解を深めることにもなっていたのです。単純に模擬授業のように学問の中身を説明するだけではない，少し違うところに触れていたのが良かったのかもしれません。



別にこのプログラムのことをお話ししたいわけではないのです。皆さまも全国の大学，高校で，探究学習を取り掛かりにして，いろいろな連携をされていると思います。そういった大学との接点を，何かお見合いの場だとか，お客さまとして吟味する場ではなく，学びの場にする工夫はあるかもしれないと思うのです。

大学側のほうも恐らくお金をかけてオープンキャンパスだとか，広告をやっていても，そのうち頭打ちになる状況がやってくると思います。18 歳人口が減っていますから，費用対効果とか，労力対効果は絶対に下がっていきます。そうなった時に，数も大事ですが，いかにしてマッチングの質を高めるかという発想もそろそろ必要な気がするのです。広報は営業とか宣伝ではなく，入学前教育だとか，できるだけ先ほどのデータのようなものも伝えていくことが重要です。



この後のパネルセッションでもまたいろいろと議論ができたらと思いますが，私が見ているのは，大学側の教育の中身がやはり伝えてきれていないということです。何とかそれを，高校側から見えるようにしてほしいと思います。

国としてやってほしいこともありますが，それぞれの大学でできることもあります。高校側もそういったデータが見えてくると，恐らくは単に進学を決めるところだけではなく，その後，辞めないできちんと卒業できるかと指導の軸足を移せるのだと思うのです。お互いに力を合わせる余地はあるのではないでしょうか。

最後に，今日，お集まりの皆さまは，国立大学や公立大学の方々も多いようです。国公立大学には高校側はすごく期待をしています。例えば先ほどの「WEEKDAY CAMPUS VISIT」ですが，これまでで一番，私が感動したのは，とある県にある国立大学からのお問い合わせでした。その県には離島がたくさんあるのです。その国立大学の方は，「本学で授業公開を積極的にやっていきたい。誰に一番やりたいかというと，離島で学んでいる高校生だ。この子たちはオープンキャンパスなど，気軽に大学に行けるような環境ではない。しかし今はオンラインでいろいろと授業を見ることができるから，本県の離島の高校生のために，国立大学である自分たちが何かをやらなければいけない」というお問い合わせだったのです。

公立はなおさらそうかもしれません。皆さんの大学の進学する層だけを見ていれば，やらなくていいことかもしれませんが，せっかくなら地元の高校生と大学をつなぐようなことを，国公私立の垣根を超えて模索していきたいと私は思う次第です。

ご清聴いただき，ありがとうございました。

【山地・司会】　倉部先生，本当にありがとうございました。時間もほぼぴったりに終えてくださいまして，ありがとうございました。続きまして，宮田先生，ご準備をお願いします。

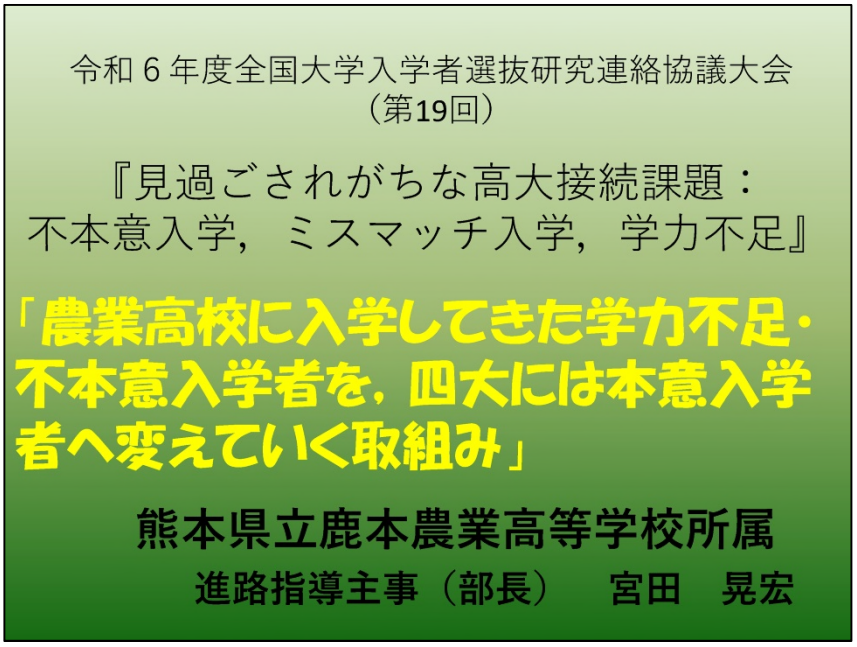
■

全体会 2　◉ 報告 3

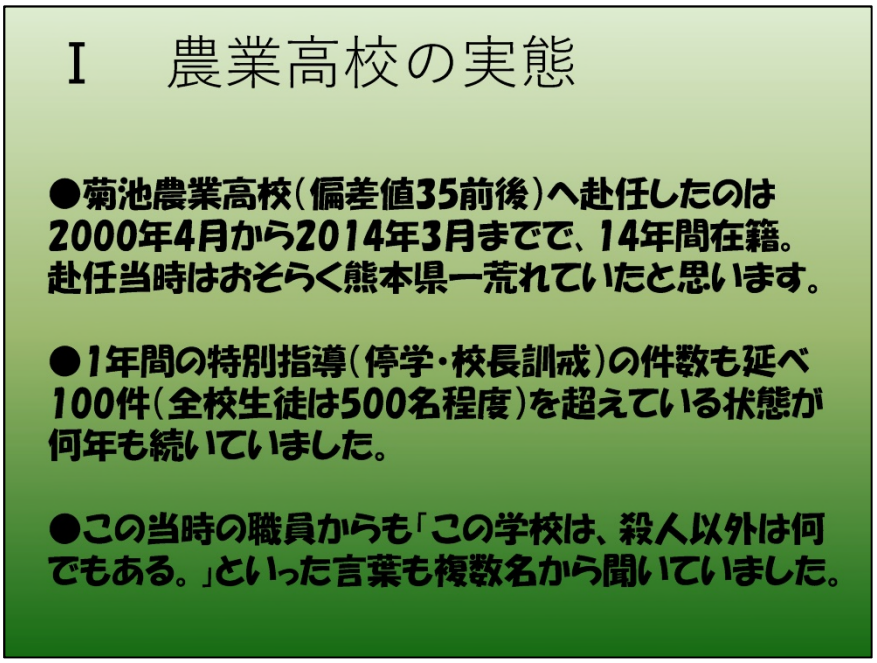
農業高校に入学してきた学力不足・不本意入学者を，四大には本意入学者へ変えていく取組み

■宮田　晃宏（熊本県立鹿本農業高等学校　進路指導部長）

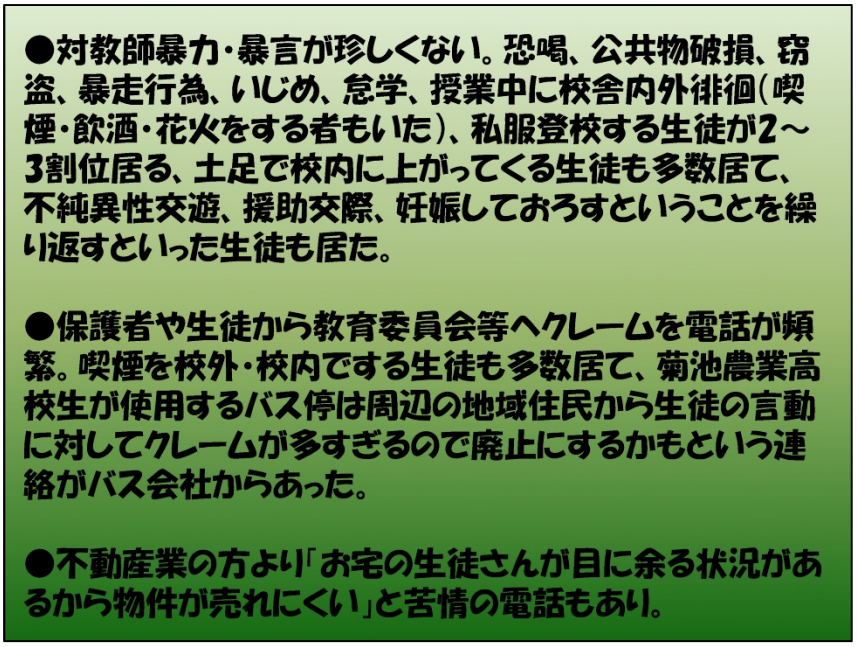
先ほど，ご発表されたお二方が，グローバルな広い視野でお話ししていただきましたが，私は現在，高校で進路指導をしていますので，現場の視点でお話をさせていただきたいと思います。



流れとしては，「農業高校の実態」，「私の本来の専門」，そして「心幹」について少しお話ししたいと思います。「心幹を育む指導の効果」という流れでお話ししていきたいと思います。



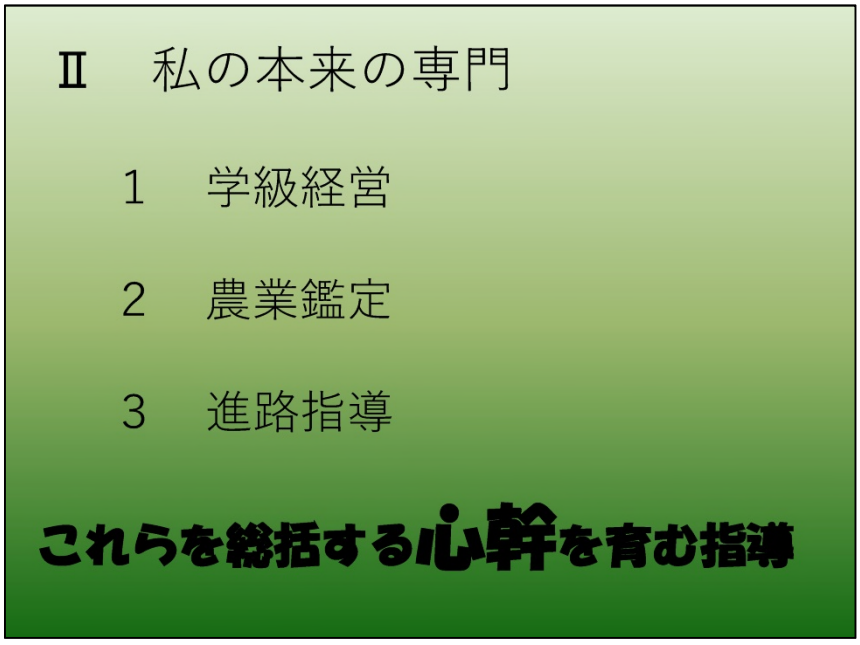
私の担当教科は農業で，採用は「食品製造」です。これは，私が 2000 年 4 月から 14 年間在籍していました熊本県立菊池農業高校です。恐らく当時，熊本県で一番荒れていたのではないかと思います。1 年間の特別指導（停学・校長訓戒）の件数は全校生徒 500 名に対し，100 件ぐらいありました。同時に職員からも，「この学校は殺人以外は何でもある」という言葉をよく耳にしていました。



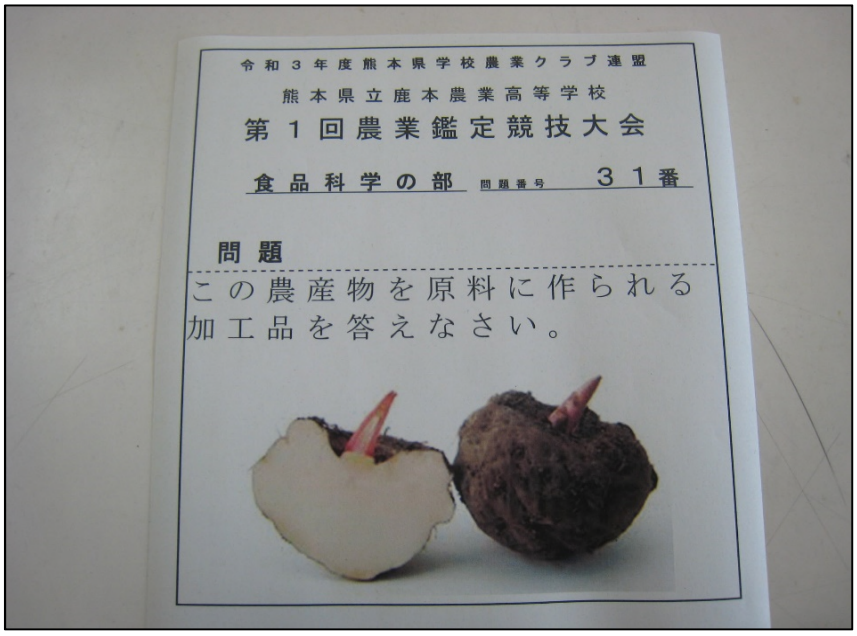
指導理由は，対教師暴力・暴言，恐喝，公共物破損，窃盗，暴走行為，いじめ，怠学，授業中の校舎内徘徊です。ほかにも喫煙，飲酒，花火などをする生徒や私服登校や土足で校内に上がる，不純異性交遊などあらゆるものがあったのではないかと思います。

保護者や生徒から教育委員会等へのクレームの電話が頻繁にありました。校外・校内で喫

煙し，たばこのぽい捨てをするのでバス停の周辺，地域住民から，「火事なるだろう」という苦情や，不動産業者から「お宅の生徒さんが目に余るから物件が売りにくい。価値が下がる」などということも言われました。



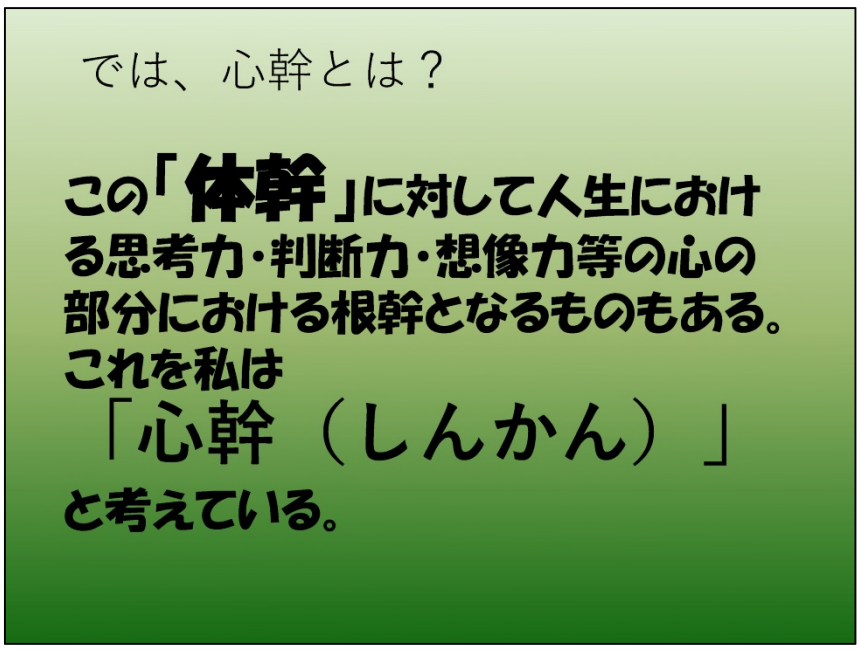
このように各中学の最底辺の学力層の生徒が入学してくる高校です。冒頭で私の担当教科は農業と申しましたが，本当の専門は学級経営，農業鑑定，進路指導の３つだと思っています。一応，自分で少し勉強をして博士号なども取りましたが，これも経営学に近いもので，担当教科とはほとんど関係ありません。それから教員免許も 10 種類持っていますが，６つは社会科学系，２つは理科系で１種「農業」の免許以外は本来，不要の教員免許です。また，授業でせざるを得ないということで，去年は１種「情報」の免許も取りました。





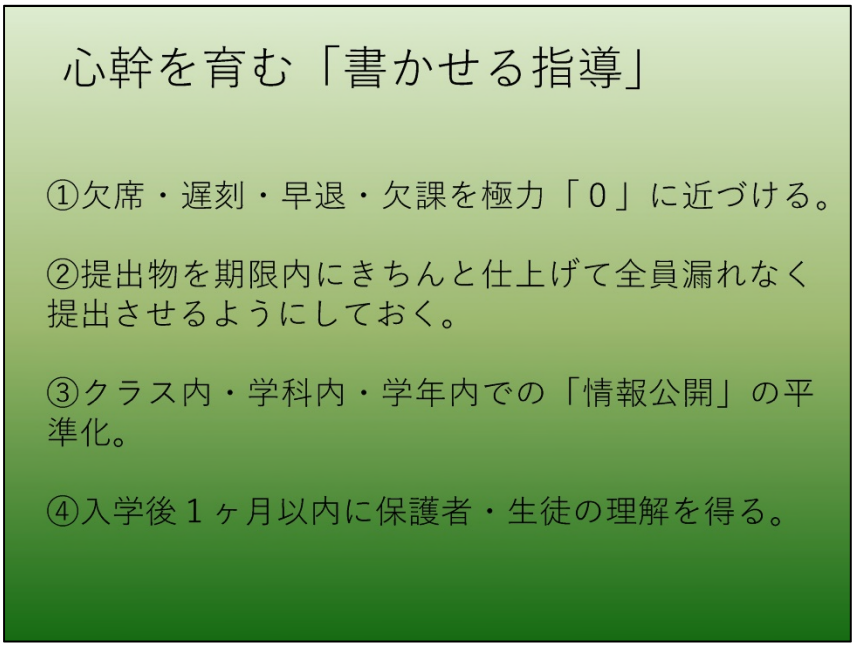
前述の農業鑑定ですが，これは農業高校で，３年間の専門科目，技術などを実物鑑定方式で競う大会であります。この農業鑑定は，「全国大会実施基準」という全国統一の範囲で競技を行い，校内大会，県大会，全国大会と実施されるものです。一部ですが，写真で紹介させていただきます。

この写真はコンニャクイモです。最近，なかなか見かけないものではあります。（※写真なし：HACCP の図の問題と作物を見て種子が有胚乳かを問う等の問題も紹介）また，次の写真の正解はクリームセパレーターという機械です。農業鑑定ではこのような問題が出題されます。これらはある年の県大会の問題です。このような指導もやっています。

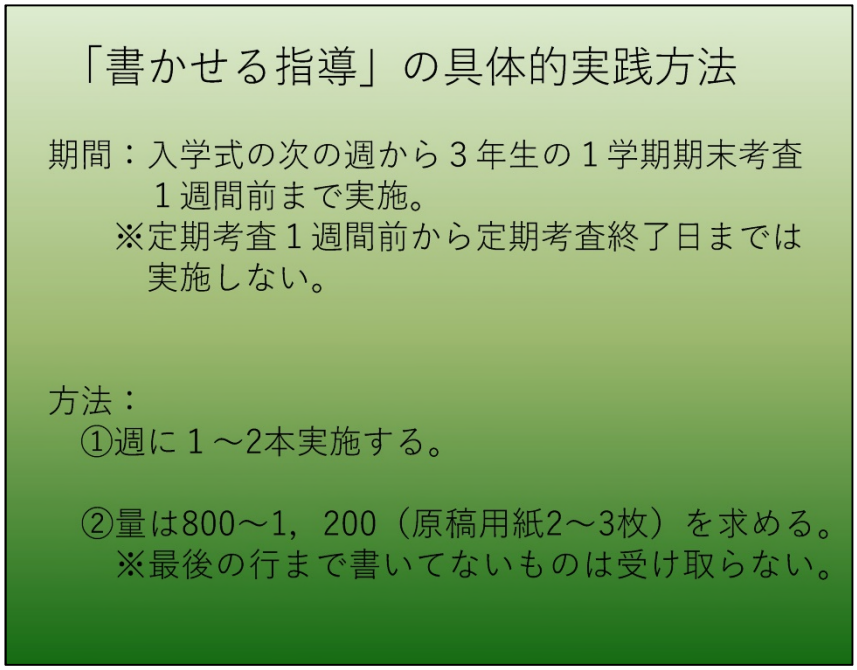


さて，ここから本題ですが，「心幹」というのは心の幹という意味です。これは私が勝手

に作った造語です。体幹を鍛えることで，いろいろなスポーツの根本とするということをよく聞かれると思います。私はこの体幹に対して，思考力，判断力，想像力など，心の部分における根幹となるものを，「心幹」として捉えています。その心幹を育むための取り組みとして「書かせる指導」を，特に 11 年間みっちりやってきました。

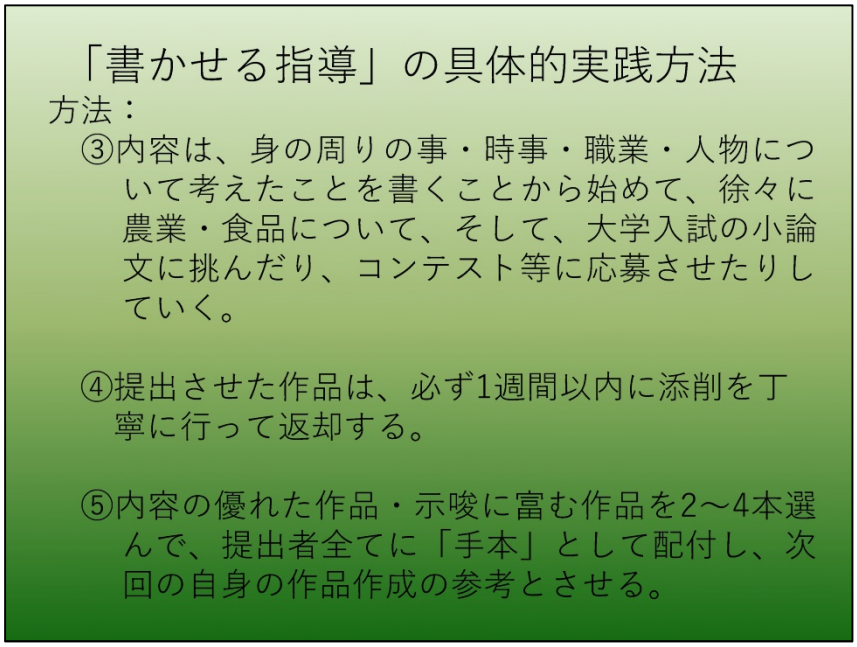


ただ，「書かせる指導」を実践するためには事前指導が必要で，このスライドにあるように，四点を重要視して取り組んできました。

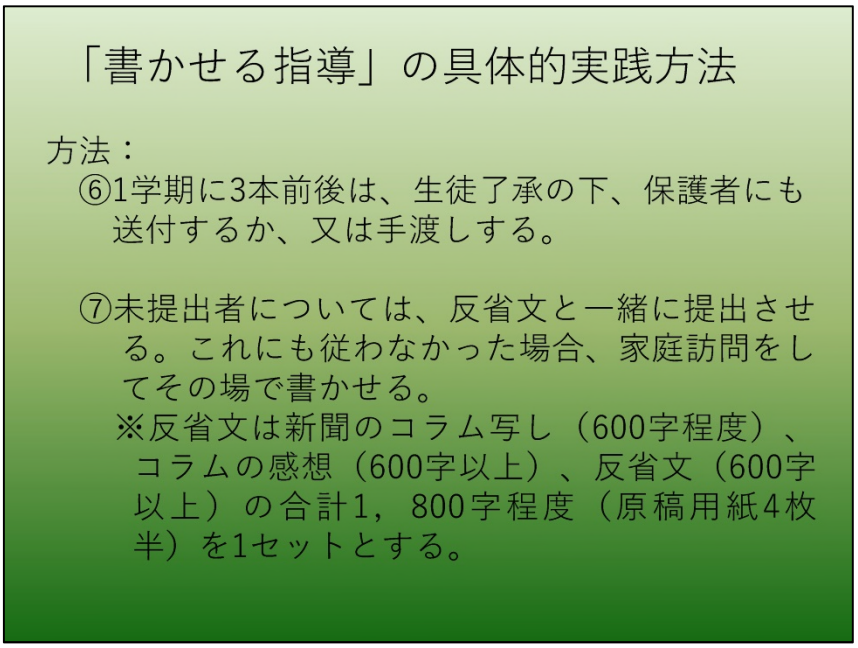


では「書かせる指導」とは実際，どのようなことなのか具体的にいいますと，毎週 1～2 本，文字量は 800 字から 1,200 字で身近なことから時事問題まで自分の思っていること

を クラス全員に書かせることです。期間は入学式の翌週から 3 年生の 1 学期までです。



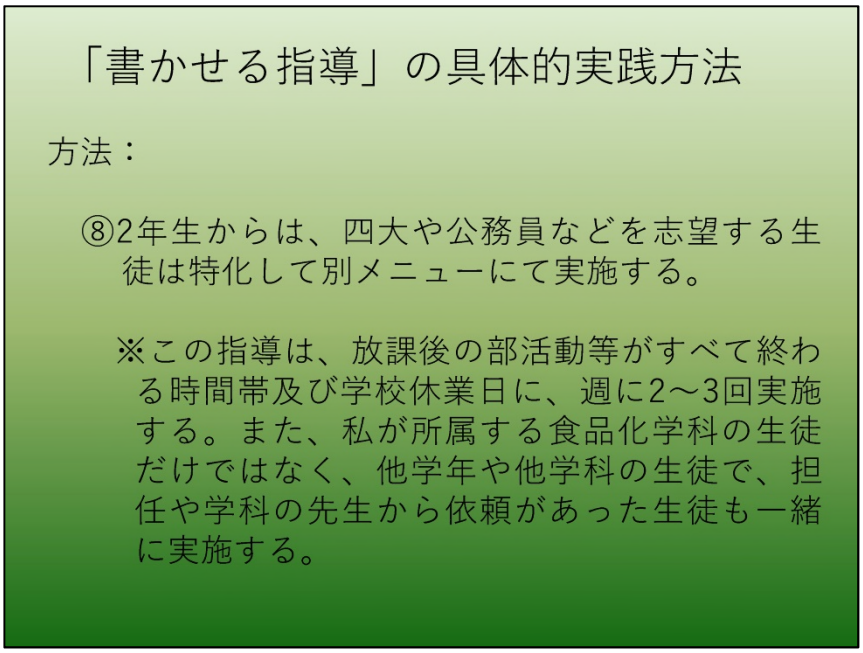
提出させた作品は，私が必ず 1 週間以内に添削して返します。文通のイメージを持っていただければよいと思います。内容の優れた作品は，2～4 本を選び，提出者全員に手本として配布していました。



1 学期に 3 本前後は，生徒了承の下，保護者に成績等と一緒に郵送していました。

この指導で大事なことは，真面目な生徒だけが，取り組むのではなく，クラス全員に漏れなく徹底して書かせるということです。もともと，小・中学校時代に学力面で置き去りにされてきたという生徒が多いものですから，ここでも置き去りにしたら意味がありません。徹底して，40 人のクラス全員を指導し，その結果，未提出者は 11 年間で 0 人でした。具体的

な実践方法についてはスライドをご覧ください。



２年生になると，生徒の進路希望がそれぞれに違ってきますので，四大への進学や公務員等，高い志望を持つようになった生徒にはクラスでの指導に加えて別メニューでも実施するようになりました。最初からいきなり書くといっても，非常に難しいので，最近の身近で起きた出来事などを５行ぐらいで書かせ，それに対して，私が返信するといった形です。

また，全員ではなかったのですが，特に大学に進学した生徒には，振り返って，自分史などを書かせたりもしました。筑波大学や九州大学に合格した生徒にも自分史を書かせ，これを志望理由などにもつなげていきました。この指導は今でもよくやっていて，現在の勤務校である鹿本農業高校では，３年生の専門学校・短大希望者も含めて進路希望者全員に対してまずは 3,300 字程度で，自分史を書かせて提出させ，その後にアドミッションポリシー等に沿った志望理由を専門学校・短大は 2,000 字以上で，四年制大学は 4,000 字以上で書かせるようにしています。

資料６

担任したクラスの出欠統計一覧表（平成8年度～平成21年度）

番号	年号（年度）	勤務校	学科学年	「書かせる指導」の有無	在籍数	授業日数	出席率（欠席数）	遅刻	早退	学校内出席率順位（3位内のみ記入）
1	平成8年度	苓明	食品科学科１年	全く無し	40	215	98．9%（98）	76	27	18クラス
2	平成9年度	苓明	食品科学科２年	全く無し	39	216	97．6%（200）	60	33	18クラス
3	平成10年度	苓明	食品科学科３年	全く無し	37	204	99．4%（42）	55	6	18クラス
4	平成11年度	苓明	食品科学科１年	週3回実施	42	215	99．9%（13）	9	1	1位／18クラス
5	平成12年度	菊池農業	食品化学科１年	週1回実施	41	214	99．4%（52）	84	16	1位／15クラス
6	平成13年度	菊池農業	食品化学科２年	週1回実施	40	211	99．1%（71）	56	21	1位／15クラス
7	平成14年度	菊池農業	食品化学科３年	週1回実施	40	183	99．0%（73）	73	55	1位／15クラス
8	平成15年度	菊池農業	食品化学科１年	週2回実施	40	195	99．4%（44）	13	6	1位／15クラス
9	平成16年度	菊池農業	食品化学科２年	週2回実施	39	187	99．6%（31）	31	6	1位／15クラス
10	平成17年度	菊池農業	食品化学科３年	週2回実施	39	179	99．6%（29）	32	14	1位／15クラス
11	平成18年度	菊池農業	食品化学科１年	週2回実施	40	193	99．9%（8）	4	0	1位／15クラス
12	平成19年度	菊池農業	食品化学科２年	週2回実施	39	194	100．0%（2）	3	1	1位／15クラス
13	平成20年度	菊池農業	食品化学科３年	週2回実施	39	183	99．9%（4）	5	3	1位／15クラス

この「書かせる指導」をクラスでやり始めてから，校内では出欠状況が常に一番良いクラスになるという効果がありました。私が担当していたクラスは 11 年間連続で校内一でした。

「書かせる指導」をやっていて気づいたのですが，この指導はクラス全体の全科目指導そして全学校生活指導であり，「心幹」を育む指導と捉えるようになりました。

資料１２－１

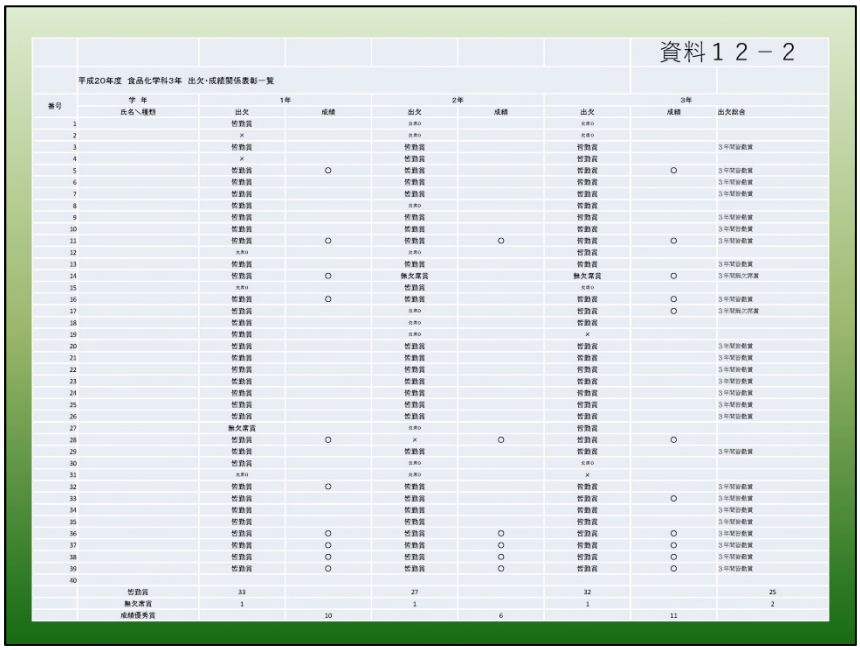
平成２０年度　３年食品化学科　部活動・特別活動　記録表
（自立心の記録でもある。）３/３現在

4	友誼・放送	① 両陛化学物取得者 ② 乙種第4類危険物取得者、ボイラー取扱技能講習修了、食品衛生責任者、第31回菊池こころのネットワークフェア参加、JRC国際文流参参加、皆勤賞受賞 ③ 第12回日本農ジュニア大会フース9位入賞、第13回全九州・日本大会ジュニアコンクール出場、熊本県高等学校調理技能認定員、皆勤賞受賞
5	プロジェクト発表	① 農業クラブ本部役員（クリーン活動）両陛化学物取得者、くまもと型「安心の日」フース2006実習製品販売参加、第23回菊池こころのネットワークフェア参加、くまもと物産フェア実習製品販売参加、熊本農高青学校祭　　実習売フェア本校実習製品販売参加、PTAクリスマスケーキ作成講師、食品化学科販売用クリスマスケーキ製造参加（2日間）、第23回菊池市「わんぱくひろば」参加、平成18年度熊本農学校農業クラブ連盟プロジェクト発　表最優秀賞受賞、農業クラブ校内プロジェクト発表大会区分「食料」2位優秀賞受賞、農業クラブ校内プロ　ジェクト発表大会区分「食料」2位優秀賞受賞、皆勤賞受賞、研鑽奨励賞 ② 農業クラブ本部役員（クリーン活動）ボイラー取扱技能講習修了、食品衛生責任者、菊池農生園実習製品販売参加、第38菊池こころのネットワークフェア参加、くまもと物産フェ　ア実習製品販売参加、農業教育フェア本校実習製品販売参加、食品化学科販売用クリスマスケーキ製造参加、平成19年度熊本農学校農業クラブ連盟プロジェクト発表最優秀賞受賞、農業クラブ校内プロ　ジェクト発表大会区分「食料」2位優秀賞受賞、皆勤賞受賞、研鑽奨励賞 ③ 農業クラブ本部役員（クリーン活動）実用英語技能検定3級、全農ワープロ実務検定4級、福祉農生園実習製品販売参加、花と食の祭典2006実習製品販売参加、日中友援事業祭かっせ参加、第1回「スモビア旨かっ」　実習製品販売参加、内閣府主催大会林業13回全国ジュニアゲートボール大会出場、3年間皆勤賞受賞、成績優秀賞受賞
10	意見発表	① 生徒会役員（議長）くまもと型「安心の日」フース2006実習製品販売参加、くまもと物産フェア実習製品販売参加、農業クラブ校内意見発表大会区分「食料」優秀賞受賞、第26回全国高校農業選手権大会、第28回全国高校農業選手権甲子園、平成19年度熊本県学校農業クラブ連盟意見発表大会区分「食料」）　役員優秀賞受賞、平成19年度九州学校農業クラブ連盟意見発表大会区分「食料」2位優秀賞受賞、平成19年度農業研究者育成強化委託事業発表研究会、平成19年度「熊本県高等学校非営利大会」部門67回大　州高等学校非営利大会農耕予選会2位優秀賞受賞、第67回九州高等学校非営利大会農耕部門受賞、2007年度日農業記録賞高校生活門賞正入賞、皆勤賞受賞 ② 生徒会役員（体育委員長）バリコンスピード選定試験第4級・花と食の祭典2006実習製品販売参加、平成20年度熊本県高等学校総合文化祭芸術の祭典（熊本県代表2名）、第28回全国高等学校総合文化祭弁論科　門太化連盟賞受賞（3年間皆勤賞受賞
11	パソコン・農業情報処理関係	① 農業クラブ本部役員（パソコン広報）・緑地管理技能検定3級、日本漢字能力検定3級、全農ワープロ実務検定4級、両陛化学物取得者、全農ワープロ実務検定2級、パソコンスピード選定試験1級、日本漢字能力検定準2級　　花と食の祭典2006実習製品販売参加、くまもと型「安心の日」フース2006実習製品販売参加、くまもと物産フェア実習製品販売参加、熊本農高等学校産業教育フェア本校実習製品販売参加、PTAクリスマスケーキ　作成講師、食品化学科販売用クリスマスケーキ製造参加（2日間）花と食の祭典2006実習製品販売参加、平成18年度熊本農学校農業クラブ連盟農業鑑定競技大会（食品科学の部）11位、平成19年度熊本農学校農業クラブ連　盟農業情報処理競技大会17位、第35回全国高校農業選手権大会、第38回菊池国際農業祭参加、第38回菊池こころのネットワークフェア参加、第22回第24回日本高等学校農業研究発表大会、第18回卓越技能検定試験合格（文書作成）、第12回卒業研究論文提出選手権、第13回全国高校農業選手権大会、第28回全国高校農業選手権甲子園、平成19年度熊本農学校農業クラブ連盟農業情報処理競技大会4位　　花と食の祭典2007実習製品販売参加、くまもと物産フェア実習製品販売参加、食品化学科販売用クリスマスケーキ製造参加、体験講師「酵母チョコ作り（2日間）」第38回菊池　高校農業展示参加、平成19年度熊本農学校農業クラブ連盟農業情報処理競技大会4位　　花と食の祭典2006実習製品販売参加、平成19年度全国学校農業クラブ連盟農業情報処理競技大会出場、皆勤賞受賞、成績優秀賞受賞 ② 農業クラブ本部役員（パソコン広報）・乙種第4類危険物取得者、実用英語技能検定4級、日本漢字能力検定2級、ボイラー取扱技能講習修了、食品衛生責任者、実用数学技能検定3級、福祉農生園実習製品販売参加、花と　　食の祭典2007実習製品販売参加、くまもと物産フェア実習製品販売参加、食品化学科販売用クリスマスケーキ製造参加、体験講師「酵母チョコ作り（2日間）」第38回菊池　高校農業展示参加、平成19年度熊本農学校農業クラブ連盟農業情報処理競技大会4位　　花と食の祭典2006実習製品販売参加、平成19年度全国学校農業クラブ連盟農業情報処理競技大会出場、皆勤賞受賞、成績優秀賞受賞 ③ 農業クラブ本部役員（書記・リーダーシップ養成員）実用英語技能検定3級、同郷ワークキャンプ参加大阪2008参加（1泊2日）、内閣府主催第13回全国ジュニアゲートボール大会出場、平成20年度熊　　本農学校農業クラブ連盟農業情報処理競技大会1位最優秀賞受賞、平成20年度全国学校農業クラブ連盟農業情報処理競技大会優秀賞受賞、3年間皆勤賞受賞、成績優秀賞受賞

次に「部活動・特別指導　記録表」ですが，これは，いつも定期考査や通知票の成績等送付時に，学業成績だけではなく，部活動や特別活動など，生徒が行った活動の記録を常に更新して最新のデータを一覧表にして送っていました。出欠状況や「文章を書く」という事だけではなく，いろいろな分野で頑張って活躍してくれるようになったということで，参考までに載せています。



「部活動・特別指導　記録表」の中で，特に出席番号 36 番の生徒は，驚くほど多岐にわたり活躍し，他に例がないくらい頑張ってくれた生徒であります。結局，筑波大学に進学し，現在，高校教員になり，私の「書かせる指導」も継承してくれています。また，39 番の生徒は一般入試において，最下位で入ってきたのですが，琉球大学に進学し，今は沖縄県で高校教員になっています。このようにクラスの生徒ひとりひとりが非常に多岐にわたって頑張ってくれました。

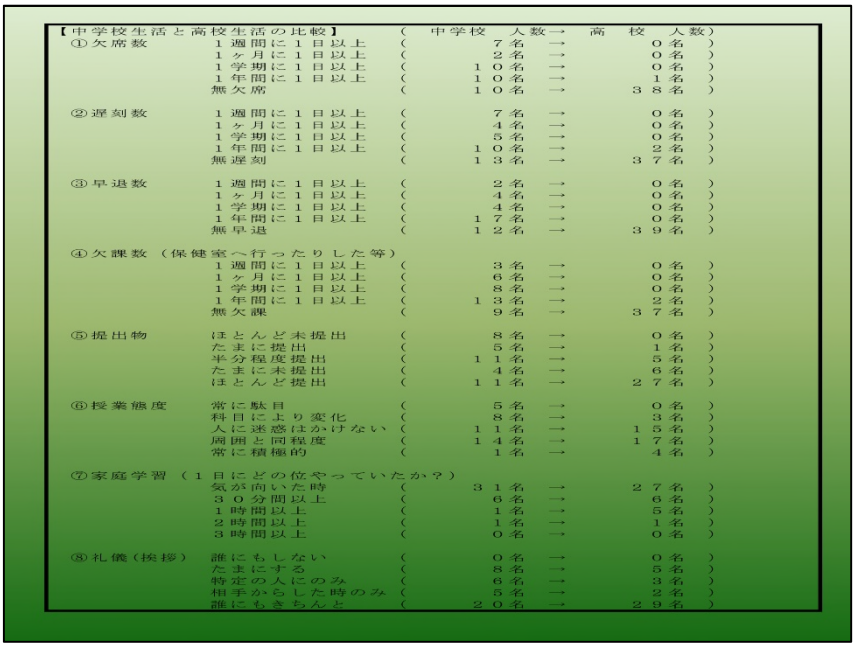


資料１２－２

平成20年度 食品化学科3年 出欠・成績関係表彰一覧

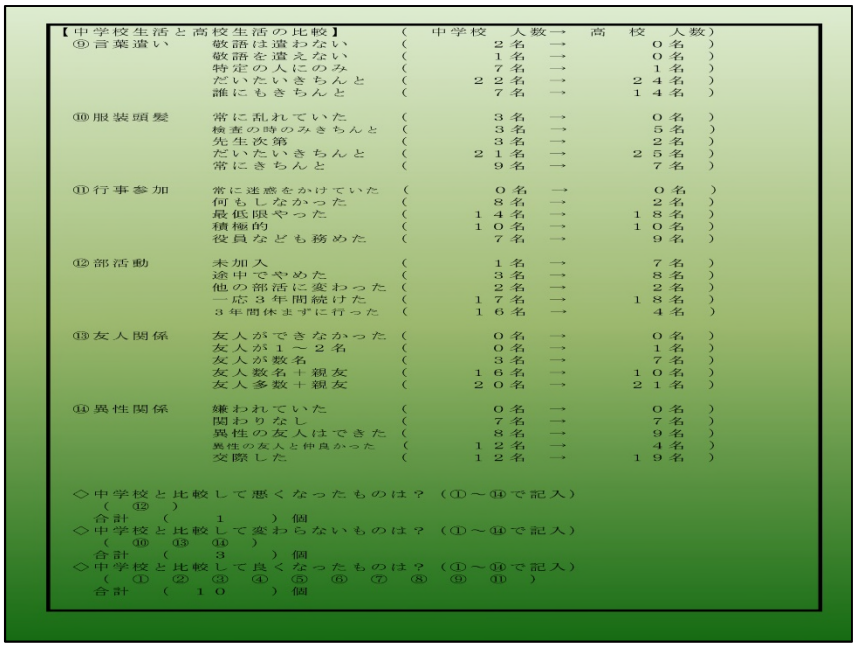
番号	学年 氏名、種別	1年 出欠	1年 成績	2年 出欠	2年 成績	3年 出欠	3年 成績	出欠総合
1		皆勤賞		出席0		出席0		
2		／		出席0		出席0		
3		皆勤賞		皆勤賞		皆勤賞		3年間皆勤賞
4		×		皆勤賞		皆勤賞		
5		皆勤賞	○	皆勤賞		皆勤賞	○	3年間皆勤賞
6		皆勤賞		皆勤賞		皆勤賞		3年間皆勤賞
7		皆勤賞		皆勤賞		皆勤賞		3年間皆勤賞
8		皆勤賞		出席0		皆勤賞		
9		皆勤賞		皆勤賞		皆勤賞		3年間皆勤賞
10		皆勤賞		皆勤賞		皆勤賞		3年間皆勤賞
11		皆勤賞	○	皆勤賞	○	皆勤賞	○	3年間皆勤賞
12		出席0		出席0		皆勤賞		
13		皆勤賞		皆勤賞		皆勤賞		3年間皆勤賞
14		皆勤賞	○	無欠席賞		無欠席賞	○	3年間無欠席賞
15		出席0		皆勤賞		出席0		
16		皆勤賞	○	皆勤賞		皆勤賞	○	3年間皆勤賞
17		皆勤賞		出席0		皆勤賞	○	3年間無欠席賞
18		皆勤賞		出席0		皆勤賞		
19		皆勤賞		出席0		×		
20		皆勤賞		皆勤賞		皆勤賞		3年間皆勤賞
21		皆勤賞		皆勤賞		皆勤賞		3年間皆勤賞
22		皆勤賞		皆勤賞		皆勤賞		3年間皆勤賞
23		皆勤賞		皆勤賞		皆勤賞		3年間皆勤賞
24		皆勤賞		皆勤賞		皆勤賞		3年間皆勤賞
25		皆勤賞		皆勤賞		皆勤賞		3年間皆勤賞
26		皆勤賞		皆勤賞		皆勤賞		3年間皆勤賞
27		無欠席賞		出席0		皆勤賞		
28		皆勤賞	○	／	○	皆勤賞	○	
29		皆勤賞		皆勤賞		皆勤賞		3年間皆勤賞
30		皆勤賞		出席0		出席0		
31		出席0		出席0		×		
32		皆勤賞	○	皆勤賞		皆勤賞		3年間皆勤賞
33		皆勤賞		皆勤賞		皆勤賞	○	3年間皆勤賞
34		皆勤賞		皆勤賞		皆勤賞		3年間皆勤賞
35		皆勤賞		皆勤賞		皆勤賞		3年間皆勤賞
36		皆勤賞	○	皆勤賞	○	皆勤賞	○	3年間皆勤賞
37		皆勤賞	○	皆勤賞	○	皆勤賞	○	3年間皆勤賞
38		皆勤賞	○	皆勤賞	○	皆勤賞	○	3年間皆勤賞
39		皆勤賞	○	皆勤賞	○	皆勤賞	○	3年間皆勤賞
40								
	皆勤賞	33		27		32		25
	無欠席賞	1		1		1		2
	成績優秀賞		10		6		11	

次にクラス生徒ひとりひとりの出欠状況でありますが，皆勤賞（欠席・遅刻・早退・欠課がすべて「０」）がずらりと並んでいます。他のクラスでは皆勤賞を取るのは大体 5〜6 名でしたが，私が担任して指導したクラスは皆勤賞が当たり前というような状況になっていました。



【中学校生活と高校生活の比較】		（中学校 人数→	高校 人数）
①欠席数	１週間に１日以上	（ ７名 →	０名 ）
	２ヶ月に１日以上	（ ２名 →	０名 ）
	１学期に１日以上	（ １０名 →	０名 ）
	１年間に１日以上	（ １０名 →	１名 ）
	無欠席	（ １０名 →	３８名 ）
②遅刻数	１週間に１日以上	（ ７名 →	０名 ）
	１ヶ月に１日以上	（ ４名 →	０名 ）
	１学期に１日以上	（ ５名 →	０名 ）
	１年間に１日以上	（ １０名 →	２名 ）
	無遅刻	（ １３名 →	３７名 ）
③早退数	１週間に１日以上	（ ２名 →	０名 ）
	１ヶ月に１日以上	（ ４名 →	０名 ）
	１学期に１日以上	（ ４名 →	０名 ）
	１年間に１日以上	（ １７名 →	０名 ）
	無早退	（ １２名 →	３９名 ）
④欠課数（保健室へ行ったりした等）			
	１週間に１日以上	（ ３名 →	０名 ）
	１ヶ月に１日以上	（ ６名 →	０名 ）
	１学期に１日以上	（ ８名 →	０名 ）
	１年間に１日以上	（ １３名 →	２名 ）
	無欠課	（ ９名 →	３７名 ）
⑤提出物	ほとんど未提出	（ ８名 →	０名 ）
	たまに提出	（ ５名 →	１名 ）
	半分程度提出	（ １１名 →	５名 ）
	たまに未提出	（ ４名 →	６名 ）
	ほとんど提出	（ １１名 →	２７名 ）
⑥授業態度	常に駄目	（ ５名 →	０名 ）
	科目により変化	（ ８名 →	３名 ）
	人に迷惑はかけない	（ １１名 →	１５名 ）
	周囲と同程度	（ １４名 →	１７名 ）
	常に積極的	（ １名 →	４名 ）
⑦家庭学習（１日にどの位やっていたか？）			
	気が向いた時	（ ３１名 →	２７名 ）
	３０分間以上	（ ６名 →	６名 ）
	１時間以上	（ １名 →	５名 ）
	２時間以上	（ １名 →	１名 ）
	３時間以上	（ ０名 →	０名 ）
⑧礼儀（挨拶）	誰にもしない	（ ０名 →	０名 ）
	たまにする	（ ８名 →	５名 ）
	特定の人にのみ	（ ６名 →	３名 ）
	相手からした時のみ	（ ５名 →	２名 ）
	誰にもきちんと	（ ２０名 →	２９名 ）

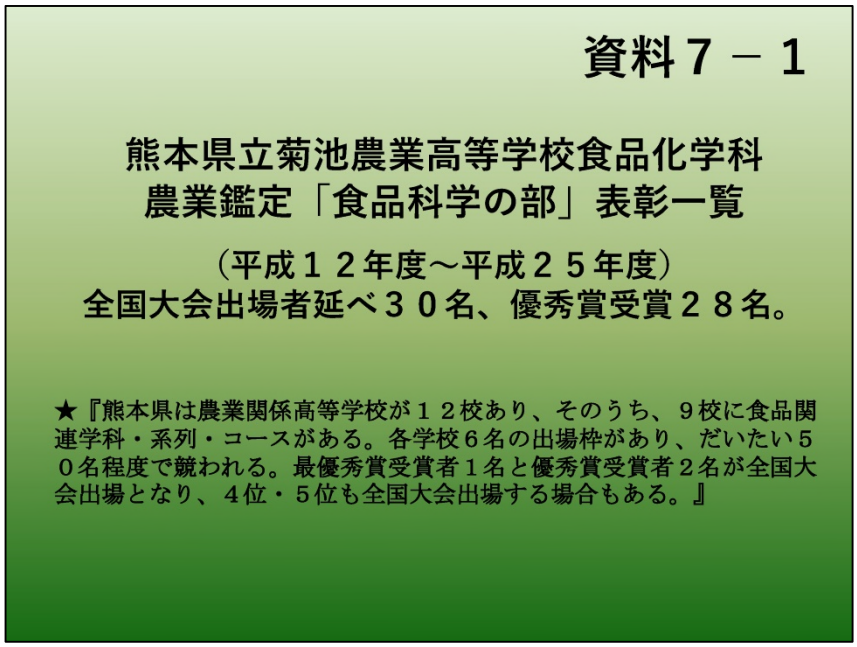
次に高校２年生の３学期に，クラス全員に対して「中学校時代と比べてどうだったか？」というアンケートの回答結果です。少し見にくいですが，例えば中学校の時には週に 1 回欠席していた生徒が７名いましたが，高校入学後は０名になっております。



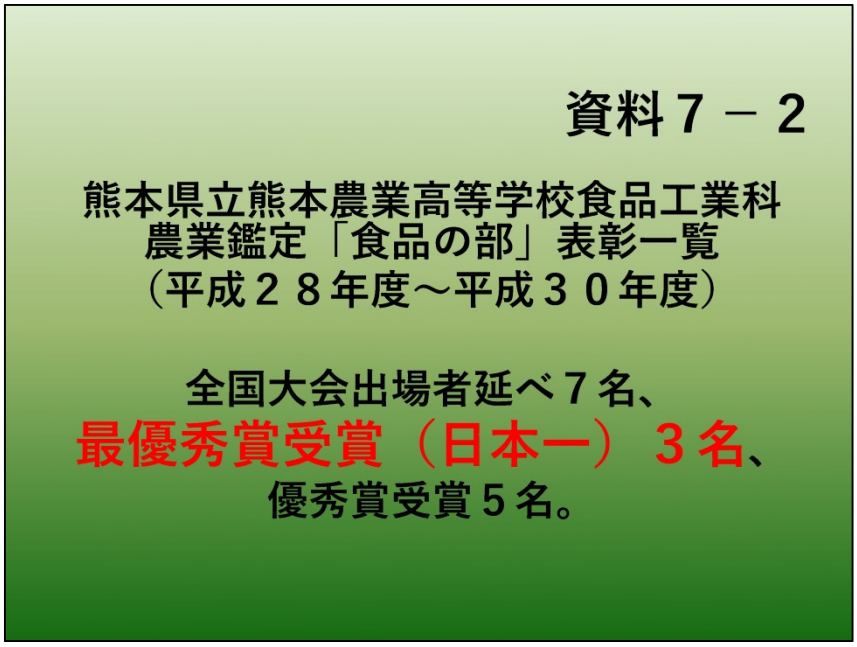
【中学校生活と高校生活の比較】		（中学校 人数→	高校 人数）
⑨言葉遣い	敬語は遣わない	（ ２名 →	０名 ）
	敬語を遣えない	（ １名 →	０名 ）
	特定の人にのみ	（ ７名 →	１名 ）
	だいたいきちんと	（ ２２名 →	２４名 ）
	誰にもきちんと	（ ７名 →	１４名 ）
⑩服装頭髪	常に乱れていた	（ ３名 →	０名 ）
	検査の時のみきちんと	（ ３名 →	５名 ）
	先生次第	（ ３名 →	２名 ）
	だいたいきちんと	（ ２１名 →	２５名 ）
	常にきちんと	（ ９名 →	７名 ）
⑪行事参加	常に迷惑をかけていた	（ ０名 →	０名 ）
	何もしなかった	（ ８名 →	２名 ）
	最低限やった	（ １４名 →	１８名 ）
	積極的	（ １０名 →	１０名 ）
	役員なども務めた	（ ７名 →	９名 ）
⑫部活動	未加入	（ １名 →	７名 ）
	途中でやめた	（ ３名 →	８名 ）
	他の部活に変わった	（ ２名 →	２名 ）
	一応３年間続けた	（ １７名 →	１８名 ）
	３年間休まずに行った	（ １６名 →	４名 ）
⑬友人関係	友人ができなかった	（ ０名 →	０名 ）
	友人が１～２名	（ ０名 →	１名 ）
	友人が数名	（ ３名 →	７名 ）
	友人数名＋親友	（ １６名 →	１０名 ）
	友人多数＋親友	（ ２０名 →	２１名 ）
⑭異性関係	嫌われていた	（ ０名 →	０名 ）
	関わりなし	（ ７名 →	７名 ）
	異性の友人はできた	（ ８名 →	９名 ）
	異性の友人と仲良かった	（ １２名 →	４名 ）
	交際した	（ １２名 →	１９名 ）

◇中学校と比較して悪くなったものは？（①～⑭で記入）
（ ⑫ ）
合計（ １ ）個
◇中学校と比較して変わらないものは？（①～⑭で記入）
（ ⑩ ⑬ ⑭ ）
合計（ ３ ）個
◇中学校と比較して良くなったものは？（①～⑭で記入）
（ ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑪ ）
合計（ １０ ）個

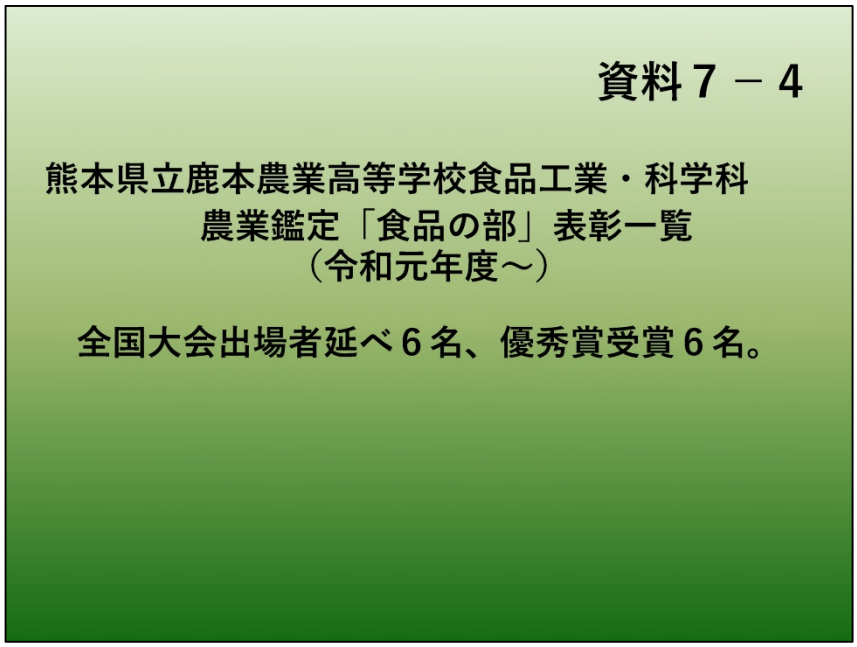
他にも，欠席・遅刻・早退に加え，生活態度など，高校生になって大きな改善が見られました。そういった集計結果をここに記しています。



次にクラス全体ではなく，「心幹を育む指導の効果」が特に浸透した生徒の各種競技大会の結果になります。最初に少しお見せしましたが，農業鑑定競技は全国大会までつながっていると言いましたが，私が勤務していた菊池農業高校食品科学科から全国大会に行った生徒が延べ 30 名で，そのうち優秀賞を受賞した生徒が 28 名ということでありました。



菊池農業高校の後，２年間の教育委員会勤務を経て熊本農業高校というところに赴任したのですが，ここには３年しかいませんでした。もともと学力が少し高めの生徒が入ってきますので，農業鑑定競技で日本一になった生徒が３名います。平成 28 年度に日本一になった生徒は，先日（令和６年３月），九州大学大学院を卒業し，優秀論文賞のようなものを頂いたそうです。



今，私が勤務している鹿本農業高校（６年目）でも全国大会に６名，優秀賞も６名，去年も２人が全国大会に出場して，優秀賞を取ってくれました。こういうところにも「書かせる指導」が指導の根幹としてつながったのではないかと考えています。

また，せっかく「書かせる指導」で文章を書く機会が多くなりましたので，いろいろなコンテストに参加しました。菊池農業高校時代に松下政経塾が，中高生向けに立志論文コンテストを開催していたのですが，そこで日本一の最優秀賞を２回取らせていただきました。また全国大会レベルでも幾つか，賞を頂きました。

熊本農業高校でもそのようなコンテストに応募して，いくつかの表彰などを受けたりしました。



年度卒 / 学科名		97 H９	98 H10	99 H11	00 H12	01 H13	02 H14	03 H15	04 H16	05 H17	06 H18	07 H19	08 H20	09 H21
菊池農業高校	農業科	27	19	31	28	25	32	30	29	35	30	37	33	
	園芸科	26	30	24	26	19	32	33	34	33	31	32	38	
	畜産科学科	20	28	36	35	33	37	32	39	38	34	40	28	
	食品化学科	28	30	36	30	35	40	37	41	39	38	36	39	
	生活文化科	22	27	24	23	31	32	39	38	29	33	33	34	
	合 計	123	134	151	142	143	173	171	181	174	166	178	172	

次は卒業生数です。菊池農業高校の定員は１学年 200 名（40 名×５学科）ですが，スラ

イドを見ていただくと，1997 年度の卒業生は 123 名で，60～70 名が辞めていることがわかります。私が担任をした生徒が卒業したのは 2002 年度ですが，この年は 173 名が卒業しています。辞めている生徒もいますが，それでも数字の改善はかなり見られました。



	年度卒 / 大学名	98 H10	99 H11	00 H12	01 H13	02 H14	03 H15	04 H16	05 H17	06 H18	07 H19	08 H20	09 H21	合計
国立	筑波大学							1		1		1		3
	熊本大学				1									1
	宮崎大学					1	1	1		1				4
	鹿児島大学							1	1	1		1		4
	長崎大学								1					1
	琉球大学					1	1		1			1		4
	岡山大学		1											1
	島根大学								1					1
	黒龍江大学(中国)						1							1

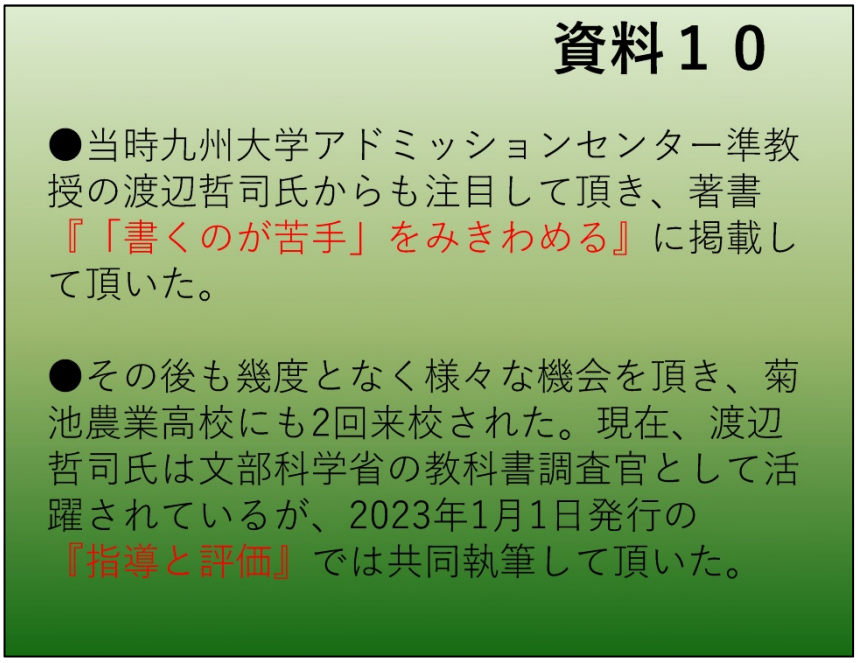
次に四年制大学への進学者数です。菊池農業高校食品化学科は 1964 年に設置された学科ですが，それまで国公立大学には 1 人も合格者がいませんでした。ですが，2002 年に私が担任し，「書かせる指導」を 3 年間おこなった生徒の中から琉球大学に 1 人合格しました。そこから毎年，食品化学科から，1 人，2 人，多い時には 3 人合格するという流れができていきました。



	年度卒 / 大学名	98	99	00	01	02	03	04	05	06	07	08	09	合計
私立	東京農業大学		1	1	2	2	2	1	1	1	2			13
	東海大学					1	3	2	2		3	2		13
	熊本学園大学					3	4	4	2	5	4	7		29
	崇城大学					2	2		1		3			8
	九州看護福祉大学			1		1	1	1	2			1		7
	九州ルーテル大学		1											1
	尚絅大学									1	1	2		4
	南九州大学			1										1
	日本文理大学						1							1
	日本獣医畜産大学						1							1
	東海大学								1					1
	帝京科学大学						1							1
	中部大学								1		1			2
	酪農学園大学		1				1			1	2			5
	函館大学	1		1		1								3
	福岡経済大学										1			1
	聖学院大学										1			1
	立正大学								1					1
	九州産業大学											1		1
合計		1	4	4	3	12	19	11	15	11	18	16		

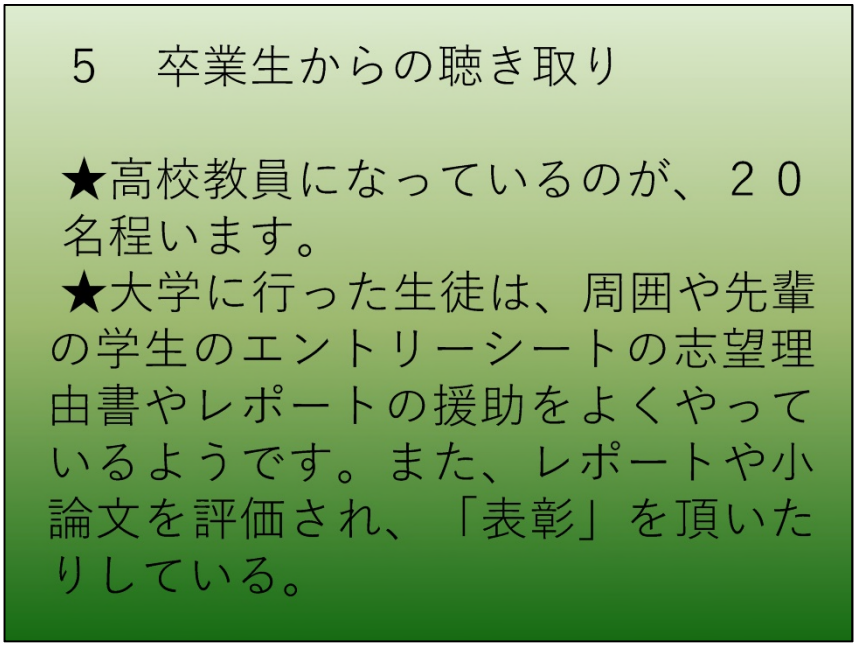
そして次に示しているスライドは私立大学も含めた四年制大学への進学状況です。1998

年から 2001 年の 4 年間の私大合格者は，1，4，4，3 人です。それが，私が担任をした学年から 12 人と 2 桁に届くようになりました。このように全体的な効果にも繋がったのではないかと思います。もちろん私 1 人によるものだけではありませんが，波及効果はあったのではないかと思います。



「心幹を育む指導の効果」についてでありますが，もともとはクラス独自の取組みだったのですが，思わぬ成果の拡がりから，講演会や，いろいろな講話とか，本日もそうですが全国で開催されるさまざまな研修会や研究・実践発表等に声をかけていただくようになりました。もう 100 回を超えるような依頼を頂いています。去年は特に企業経営者の研修会で 10 回ほど,「高校における人材育成」というテーマで講話をさせていただいたりもしました。

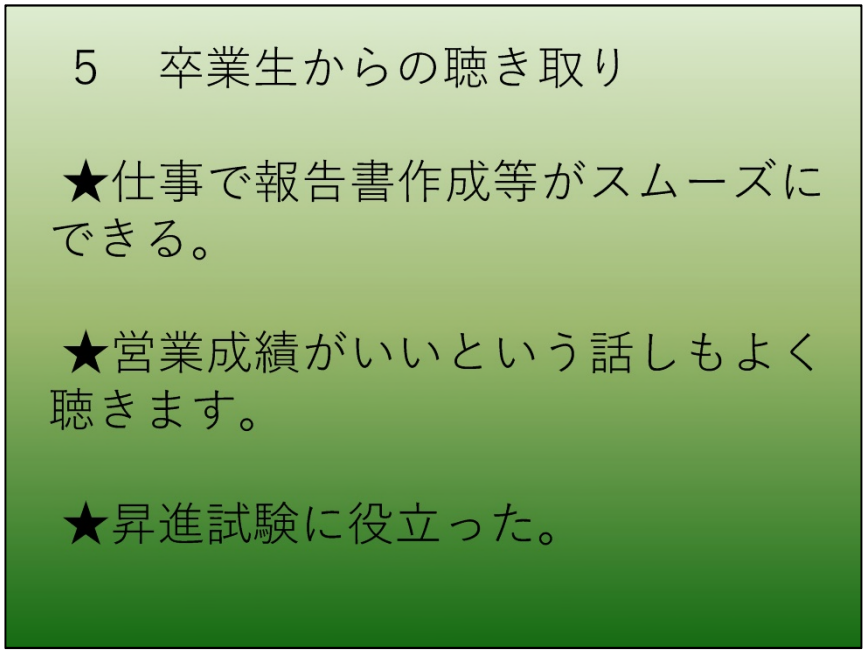
今，文科省におられる方ですが，九州大学でアドミッションセンター准教授をされていた渡辺哲司先生から，著書である『「書くのが苦手」をみきわめる』に少し紹介していただきました。また『指導と評価』という教育雑誌に共同執筆をさせていただいたりもしました。このようなことは全然思いもしないところでした。



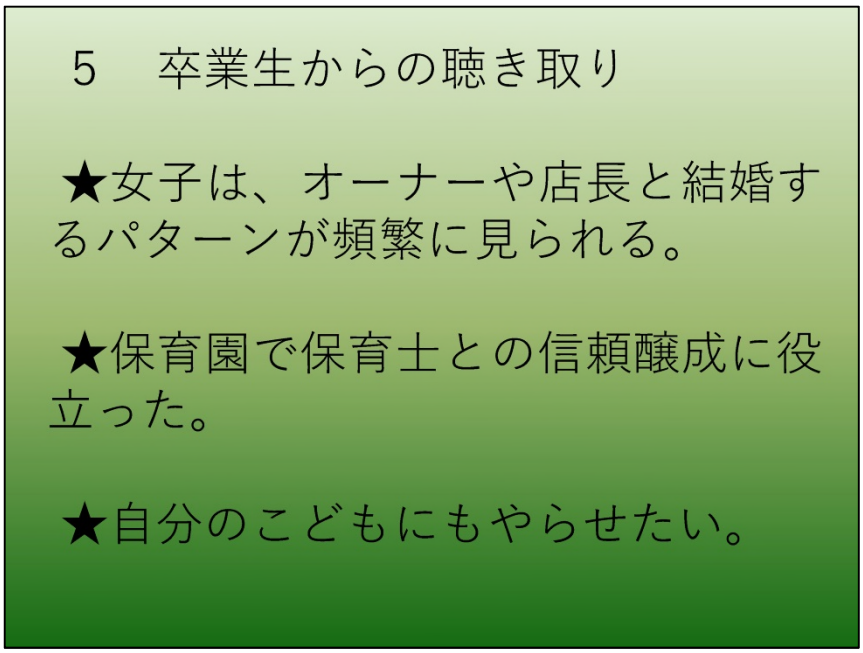
最後に菊池農業高校で「書かせる指導」をおこなった生徒から 30 歳になった時点で聴き取った声を紹介させて頂きます。

菊池農業高校の卒業生が「あの時はきつかったが，先生の『書かせる指導』を受けて非常に良かった」と耳にすることが頻繁にあったことから，彼らからアンケートを取ってみることにしました。その際，就職した生徒，大学に進学した生徒など，進路先は偏りがないようにまんべんなく取るようにしました。卒業生の 3 分の 1 ぐらいから回答がもらえましたので，特に代表的なところを挙げさせていただきました。

菊池農業高校に 14 年いましたが，「書かせる指導」をおこなった生徒で，後に高校教員になった生徒が 20 名ほどいます。また大学に進学した生徒は，周囲や先輩の学生のエントリーシートや，志望理由書，レポートの指導や援助をやっていたとよく耳にしました。また，筑波大学に行った生徒が「あまり周りの人は文を書けないのですよね」というようなことを言っていたのは驚きました。大学に進学した生徒はレポートや小論文の評価が非常に高く，いろいろと大学の表彰等も頂いたという話もよく耳にしました。

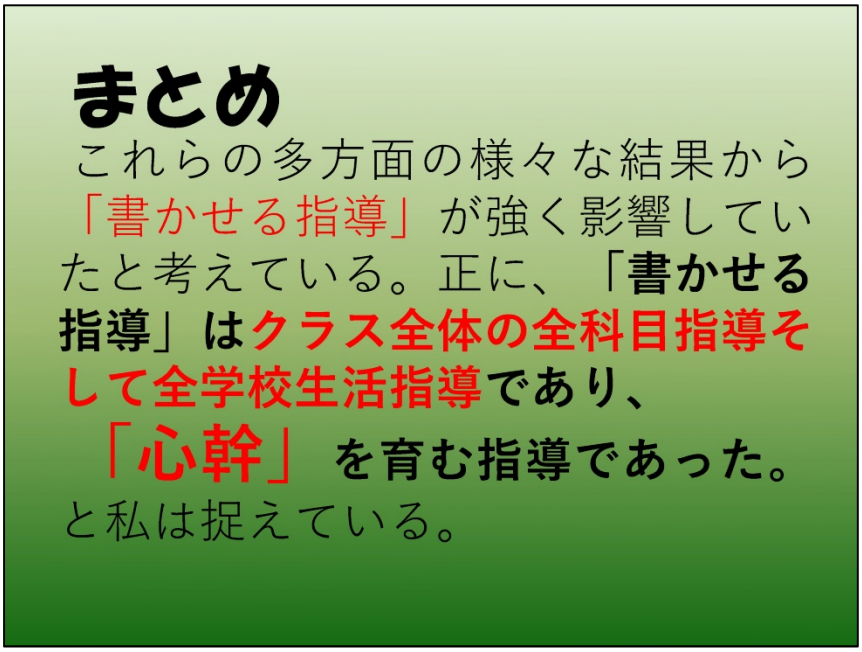


私が 3 年間担任した生徒については，留年することなく 4 年で大学を卒業しています。就職した生徒からは，仕事で報告書作成がうまくいったとか，営業成績につながっていますとか，昇進試験に役立ちましたという連絡をもらったり，女子生徒の結婚式（今まで 110 回程度出席）に行くと，勤務先のオーナーや店長の方と結婚しているケースが非常に多かったです。仕事をしっかりするので，かわいがられるようになり，認められてお付き合いをするようになるというパターンがほとんどだったようです。



また保育園では，保護者と保育士の間で連絡帳のやりとりをしますが，他の保護者さんは「よろしくお願いします」など，1 行ほどしか書かないそうですが，私が担任した生徒は，記入欄があったら絶対埋めなければいけないということが頭にあるので，保育士との信頼

醸成に大変，役立ったと耳にすることも多々あり，これも驚きました。自分の子どもにも先生の「書かせる指導」を受けさせたいということもよく言ってくれます。



まとめですが，これらの多方面のさまざまな結果から，私がやっていた「書かせる指導」が強く影響していたのではないかと考えています。「書かせる指導」は，クラス全体の全科目指導，そして全学校生活指導であり，「心幹」を育む指導と確信できるようになりました。

菊池農業高校から異動し，教育委員会に行ったり，熊本農業高校では同窓会の事務局の仕事を主でやったりなど，これまでとまったく違い，生徒との関りが薄い仕事内容が多くなってきました。また，現在は進路指導部長という仕事を主にやっていますが，これも担任ではない為，フルスペックでの指導が難しくなっています。クラス経営で３年間同じクラスを持ち上がって，指導をしてきたことが効率的に指導できた理由でもあるので，現在の置かれた状況は「書かせる指導」を実践するうえでは難しい環境となっています。しかし，さきほど紹介した教え子で教員になり，同じように「書かせる指導」を継承している者が一人はいることから，今後は後につながるようなことができればと思っています。また，教育現場以外での活用に最近は重きを置いています。

本日，お話しさせていただいたことは一学校，一教員のやったことで，視野が少々狭いものかもしれませんが，これで私の発表を終わらせていただきます。ただ，一教員でもこれくらいの成果を上げることができることも事実ではあります。

ご清聴ありがとうございました。

【山地・司会】　宮田先生，どうもありがとうございました。それでは最後に杉森先生，ご準備をお願いします。■

全体会２　◉ 報告４

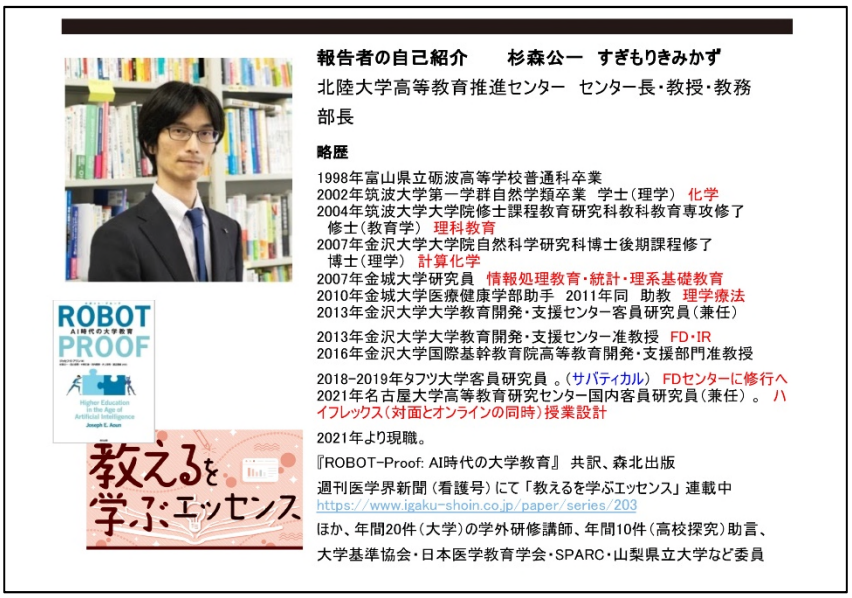
学生の成長を最優先する大学へ：入学前教育，自校教育，：初年次教育の包括的な取組み

■杉森　公一（北陸大学 高等教育推進センター長，教授，教務部長）

どうぞよろしくお願いいたします。

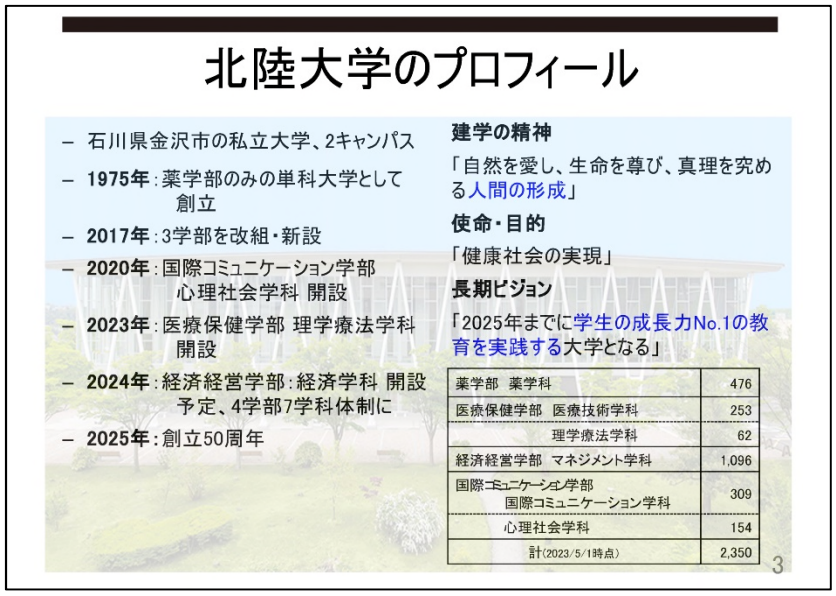


本日は「学生の成長を最優先する大学へ」という演題でご依頼をいただいていますが，私からは本学でどのような取り組みをしているかという大学の現場からのメッセージをご紹介させていただきたいと思います。



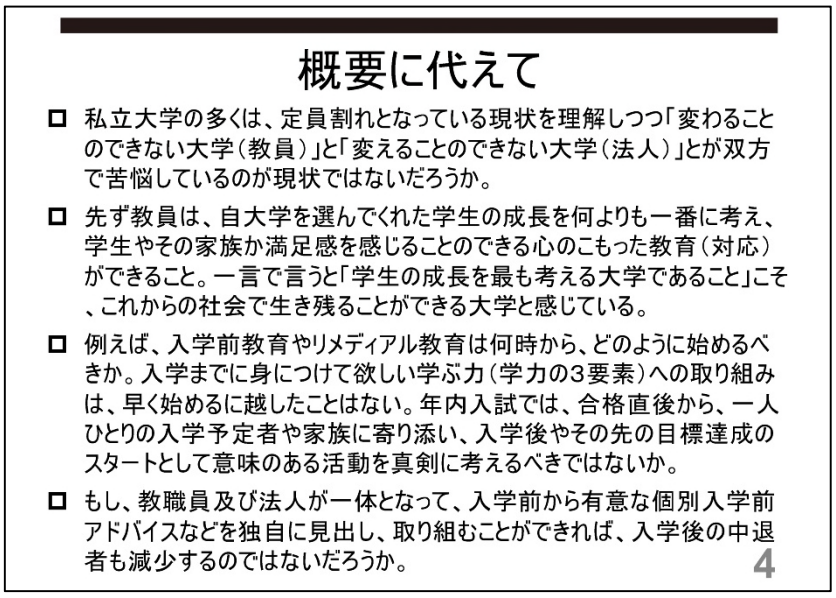
私自身の自己紹介を少しさせていただきます。先ほど，山地先生からは過分なご紹介をしていただきましたが，私自身は富山県出身で，大学時代を除いては北陸 3 県から動いていません。富山県の地元の中学，高校の化学の教員を目指していたのですが，2000 年代というのは就職氷河期で，教員採用も大変厳しい時代でした。2 回受けて，2 回とも落ちて，地元の大学院に進学をして，縁があって，金城大学，金沢大学で，こういった仕事をさせていただきました。

私に縁があったのは理学療法教育です。情報処理教育ということで，コンピューター室の教務助手から始まり，進めていましたが，途中，大学院の母校である金沢大学では FD，データ分析の専門家としてオンライン教育の実施を支えることや，『ROBOT-Proof: AI 時代の大学教育』という本を共訳させていただいたり，保健系の教育に関与していたという縁で，週刊医学界新聞というところで，私がやってきた教育支援，大学の授業作りについて連載をさせていただいたりもしました。高校でも探究学習の支援が 2014 年ぐらいからずっと続いていて，県内を中心に年間 10 校ほど支援をさせていただいているところです。



次に本学のプロフィールを簡単にご紹介します。石川県金沢市にあります私立大学です。初めは薬学部のみの単科大学として創立して，先ほど倉部さんからのご指摘にもありましたが，薬学部が 6 年制になった時に，大変多く設置されたこともあり，国家試験合格についても苦戦をしているところです。しかしもうすぐ 50 周年ということで，北陸 3 県の薬局，調剤薬局，病院，ドラッグストア等の薬剤師は，本学出身者が大勢を占めるという伝統を持っているという大学です。

国際コミュニケーション学部では留学生も含めた国際教育を行ったり，理学療法学科を新設したりと，本学は医療系を中心としながらも，文系学部として経済経営学部と国際コミュニケーション学部を設置するなど，文理医にわたった総合大学として発展しています。建学の精神は「人間の形成」，そして「健康社会の実現」を目的としています。長期ビジョンとして掲げるのが本日の本題にあたります「学生の成長力 No.1 の教育を実践する」です。



このスライドは「概要に代えて」ということで，このタイトルをどうしようかということを真っ先に相談した，普段高校生や高校の進路指導の教員と相対しているアドミッションセンターオフィサー職員の方からもらったメッセージです。

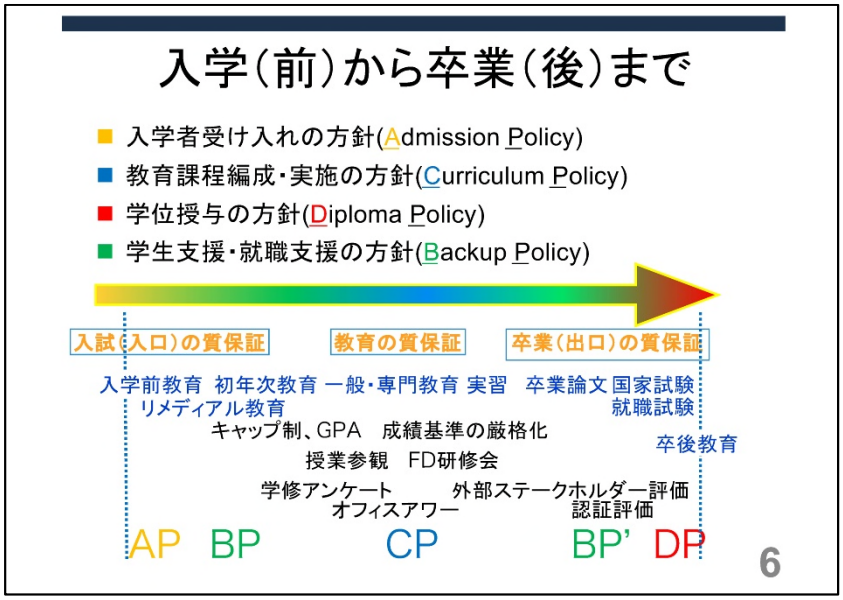
それによると，「私たちはこういう問題を抱えている。私立大学の状況もそうですし，教員は学生の成長を考えている。教育をしていかなければいけない。そうしないと社会で生き残る大学にはなれない」ということでした。ただ対応としては，「入学前教育やリメディアル教育，学力の 3 要素への取り組みに対して，どうにか入学予定者やその家族に寄り添いながら意味のある活動を真剣に考えていく。そのためには教職員と法人が一体となって，アドバイス，取り組みに務めていかなければいけないのではないか」ということです。

このように私は本日参加されているアドミッションセンターの皆さんと同じ立場の方の気持ちを，代弁したいと考えています。



さて，「入学前教育から初年次教育，学部教育と社会の『節目』をつなぐ」ということで，ここでは階段状に示していますが，私立大学，国公立大学はさまざまな差があるとはいえ，入試から入学前教育へ，入学前教育から初年次教育へ，そして初年次教育から高年次，4 年次，6 年次，そして社会への移行という，さまざまな節目があります。この節目節目で，大学生の中退や留年，国家試験の不合格などのさまざまなイベント，学生を支えなければいけないということがあるかと思います。

お手元の資料には写真は載せていませんが，最近では 4 月に富山第一高校で 1 年生 400 名の探究学習支援をしました。車座になっていますが，大学 1 年生も同じです。690 名が体育館に集まって，大学での学びを学部・学科を超えて話をします。ここからがスタートだということで，私の役割として幾つか仕掛けているところです。



この節目を考えるという時に，大学の方針は 3 つのポリシーと呼ばれるものを持っているということはもちろんですが，1 つ足りないと考えてきました。Admission Policy，Curriculum Policy，そして Diploma Policy で，A と C と D があるのですが，以前，松本大学の教務部長からお聞きしてそのとおりだと思ったのは，B が足りないということです。Backup です。

Admission Policy は多様な入試形態を通じ，入口の段階で学力の 3 要素の保証は入試問題で行いますが，その補いとして入学前教育や初年次教育がありますし，リメディアル教育は私も長く担当をしています。

真ん中は Curriculum Policy で教育の中身の保証です。一般・専門教育，実習をどうするかということ。そして Diploma Policy，出口の保証です。卒業論文をしっかりと書いて，国家試験，就職試験に備えて，そして卒後教育にもつなげていくのです。

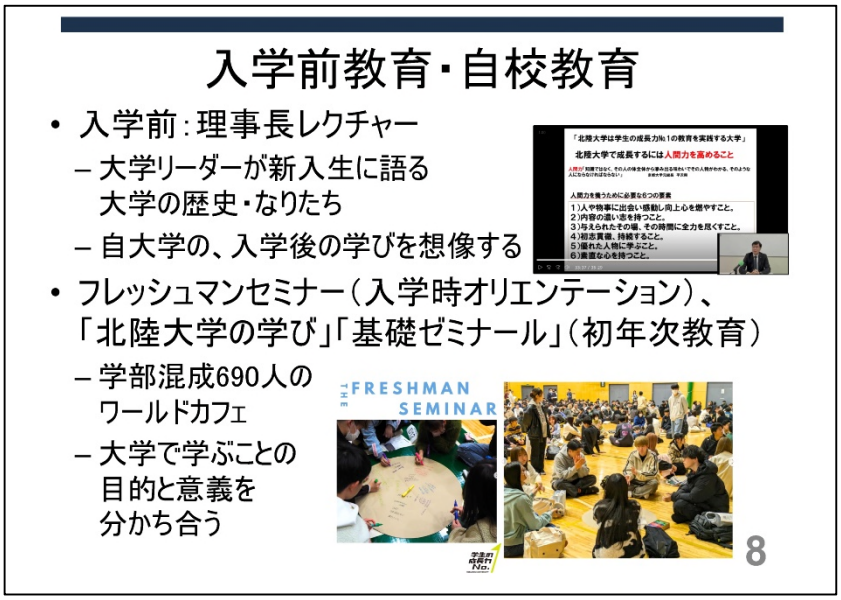
3 Policy それぞれの間（あいだ）には小道具と呼ばれるもの，GPA，成績基準の厳格化，FD 研修会，学生へのアンケート，認証評価など，さまざまなものがあります。しかし，その Backup Policy には，大学生に対して，われわれ教職員がどのような手立て，例えば通常

の正課の仕組み以外に，どのように面談をしたり，サービス・プログラムを提供したりしていくかというポリシー，介入の度合いについては，まだまだ曖昧ではないかと思います。



大学としてはサポートポリシーとして明文化されているところもありますし，ネットワーク組織を形成することで，包括的な支援をされている大学もあるかと思います。

このように A，B，C，D の 4 つのポリシーを提案してきましたが，大学ができることは何でしょうか。本学のキャンパスに来ていただきますと，入った所にこのようなポスターが掲げてあります。大学に入った学生が卒業する時に，どのような像になっているかです。この 1 というフラッグのような物が並んでいますが，ありありと想像できるような形で，一人一人の物語を大切にしていく，まずはこれを示すということが必要ではないかと思います。



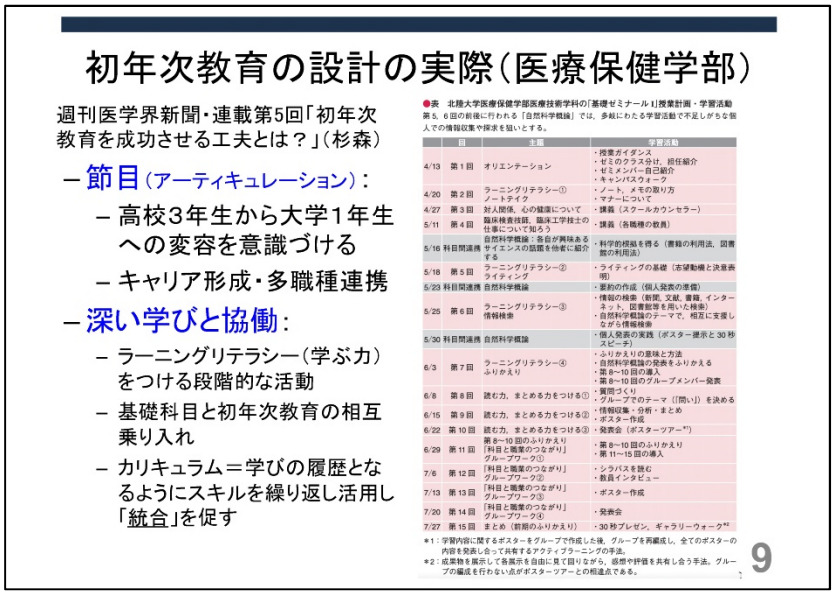
具体的に，入学が決まった学生に大学はどのように支援をしているかと言いますと，入学時には，基礎的な学力に対するプレースメントテストを用意はしていますが，入学前にあたっては，知識面の確認の他に，自校教育に今年度は特に力を入れています。

理事長が直接語り掛けます。これは保護者，保証人の方にも見ていただきたいのです。北陸大学は約 50 年前に立ち上がり，そして加賀藩の松雲公が掲げた医療者教育を借りてきて，人間力を高めることを大切にする伝統を持っていると，リーダーが新入生にオンデマンドビデオで語りかけ，歴史や成り立ちを知ります。大学に入学する前に知らないことは多いと思うので，自大学での入学後の学びを想像することからスタートします。

そして入学後，すぐに 1 週間の入学時オリエンテーションがあります。総合大学ですので，学部混成 690 人が，各学部・学科が混ざった形のワールドカフェと呼ばれる形式のアクティブラーニングの技法を使います。「えんたくん」という東京工業大学で開発された円形の模造紙を使い，言語化をします。

まずは口頭で 4 月から取り組みたいことについて話を聞きながら，見ながら，話しながら，そしてどんどん混ざっていくのです。他のグループに出かけてまた持ち帰ってきます。大学で学ぶことの目的と意義を分かち合っていきます。

そしてこのフレッシュマンセミナー「北陸大学の学び」という自校教育ですが，今週の月曜日に最終回が終わりました。この入学時のメンバーは各学部長，学科長，先輩からの体験談もビデオで学びながら，実は毎週月曜の 1 限に集まっているのです。今週の月曜日には，「学びの指針」，大学で卒業した時にどのような姿をもって，どのようなその目標を，なぜ，どのように達成していこうかということを，ラーニングコンパスとして作成し，グループ内共有を終えたところです。



この自校教育は全学部の学生が集まっているのですが，各学部・学科では，「基礎ゼミナール」という形で，初年次教育を設計し実施しています。これは 1 年間通して，初年次教育を受けるのですが，スライドは一例です。医療保健学部という医療系の学部では，オリエンテーションから始まって，授業ガイダンスなどがありますが，ラーニングリテラシー，つま

り学ぶ力としてノートの取り方とか，対人関係の作り方，そして情報検索の仕方から，読む力，まとめる力，そして科目と職業がどうつながっていくかということで，ここでは教員にインタビューをしながら，自分たちの言葉でカリキュラムマップを作り直します。

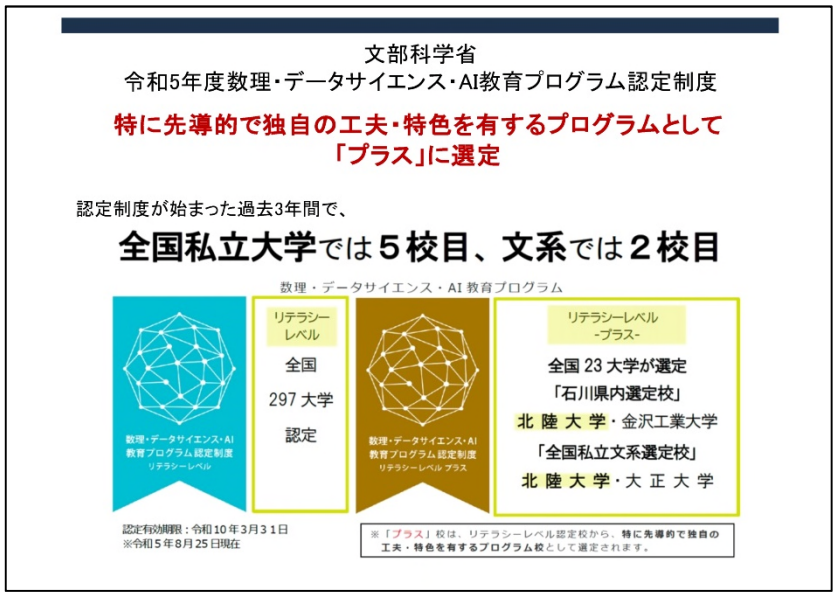
「私が今，習っている基礎の化学や生物学がどのような臨床系の科目につながるのか」ということを描き，ポスター発表をすることで，科目を乗り入れながら，段階的にキャリア形成の力を付けていきます。これは節目，アーティキュレーションといいますが，高校３年生から大学１年生になったばかりの私はまだ高校４年生，または中学９年生ぐらいかもしれません。それが今，大学に来たのだと，大学１年生になるということを目指しているものです。

基礎科目と初年次教育は相互に乗り入れしながら，学びの履歴を作っていく第一歩をいろいろなスキルを繰り返し使いながら，統合していきます。これは学ぶ力の話をしました。



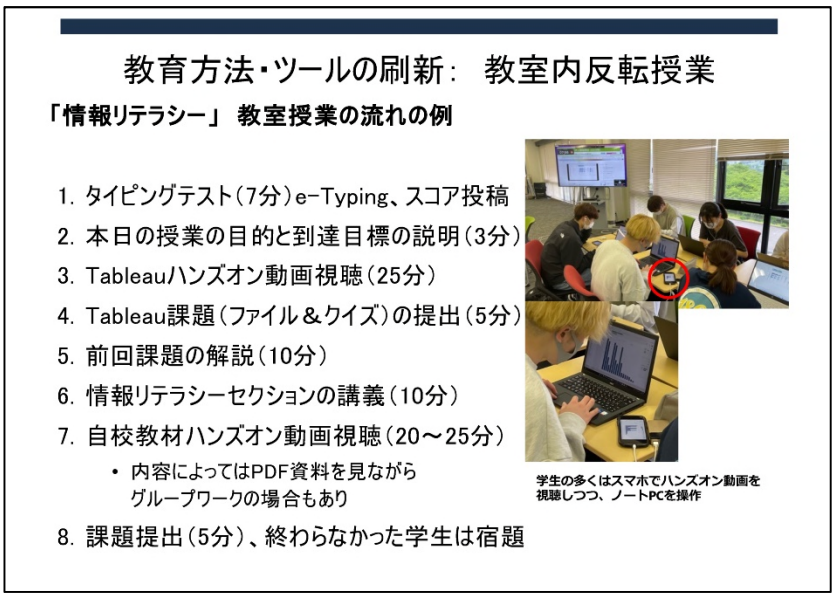
また，本学が一昨年度から力を入れているものにデータサイエンス教育があります。今は１人１台の PC，BYOD （Bring Your Own Device）といいますが，高校でも１人１台の PC が与えられます。GIGA スクール構想などでもあったように，2020 年からは遠隔教育も含めて，小中高も大きく変わってきました。それと同時に，本学でも，１人１台ノート PC の状態で，データサイエンス教育を共通科目で必須化しました。これは医科系だからできるとか，理系だからできるということではなくて，文系も理系も共通のものです。

共訳をした『ROBOT-Proof: AI 時代の大学教育』という本の中で，これから人が AI 時代の中で身に付ける力は，技術を知る力と，データを読み解く力と，人間だけが持つヒューマンリテラシーがないと，打ち勝っていけないということを書かせていただきました。



このデータリテラシー，分析を通じてビッグデータを理解して活用をする能力というのは，Excel とか，統計的な手法が使えないと身に付かないのではないか，日本ではこのデータリテラシー教育はできないのではないかと，私は半信半疑でしたが，あっさりとできてしまいました。

Tableau というソフトを使うのですが，マウスの操作だけで，1 万行から数十万行のデータを扱えるツールが，企業等ではもう標準に使われているのです。文系，理系を含む総合大学，しかも文系では 2 校目として，「リテラシーレベル –プラス–」という認定教育プログラムに選定されました。全国で 23 大学が選定されていますが，本学はそのうちの 1 つになりました。特にどのようにやっているかという一例です。



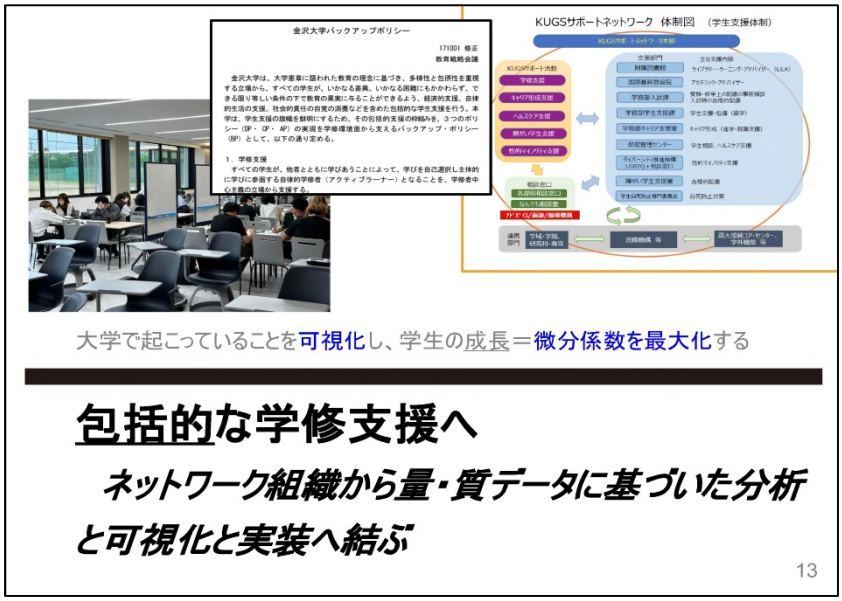
これは 1 年生の授業の様子です。情報リテラシーの科目の中では，教育方法やツールの刷新を行い，Excel 教育から脱却した，教室内反転授業と呼ばれる方法です。もはや学生は講義を受けていません。これは注目です。

タブレットや PC の他に，自分の手元のスマホで何をやっているかというと，ハンズオンの動画を見ています。反転授業というのはお聞きになったことがある方がいるかと思いますが，予習として講義動画を先に見てきて，授業ではグループ学習や復習や宿題をします。授業と講義を反転させるということですが，これは教室内反転授業と呼ばれるものです。

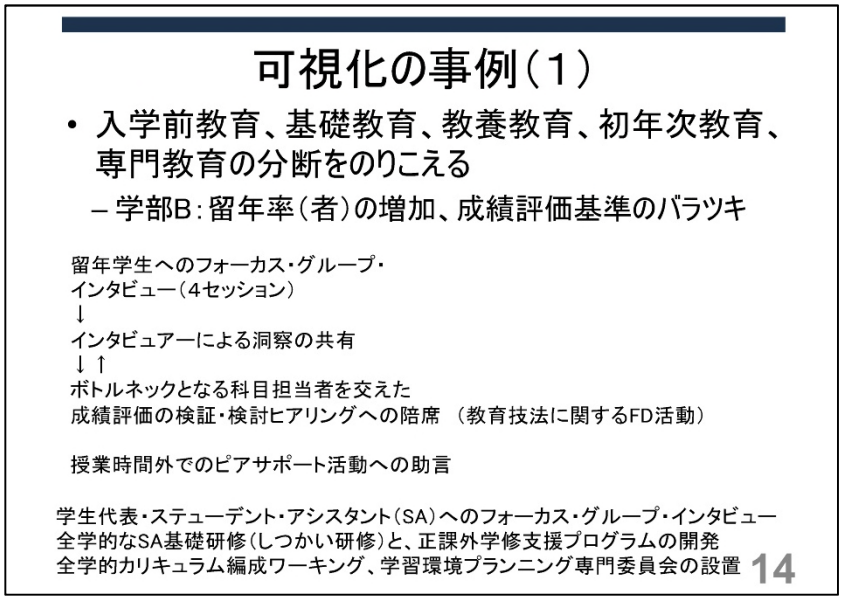
操作のビデオというのは，大きなスクリーンで提示しても細かいところは見えませんし，時間のコントロールも不可能です。学生が早送りしたり，戻ったり，一時停止したり，早く終わった学生は他の学生に自然に教え合っています。終わらなかった学生は宿題ということですが，講義のビデオは改めて割り当てていますので，それを何度でも見返してもいいのです。

達成率は 90%以上，必修ですので，文系の学生たちは特に喜んでいます。今まで Excel が苦手だという学生たちも，学内の売店データとか，食券販売データという手触り感のある自分たちのデータや授業アンケートや学習アンケートなども使います。例えば学生アンケートの匿名化した物をお渡しして，学食がコロナ前後でどう変わっていったのかを調べて新メニューの提案をするとか，それから学内の環境の整備を自分たちはどのように求めていきたいのか，というように具体的な提案や課題解決まで行います。とても巨大なデータを簡単に扱うといった活動をしています。

さて，学生もこれで伸びていくのですが，実際には，全入の状態にありますので，国家試験がある学部もありますし，このような共通の科目群で，初年次教育を手厚くしていったとしても，大学で実際に起こっていることを可視化することが重要です。学生の成長と言いましたが，私は成長圧力や同調圧力を促す強制力を感じさせる言葉なので，実はあまり好きではなく，「微分係数」を最大化すると表現したいところです。4 年後，6 年後で伸びていくその伸び幅が最大の状態で社会につながっていけばいいのではないかと思います。



これは前職の金沢大学で作ったサポートネットワーク図です。そしてバックアップポリシーです。実際にこれは形になったものもあります。こういったネットワーク組織から，量・質データに基づいた分析はどうすればいいかの事例を２つお伝えします。



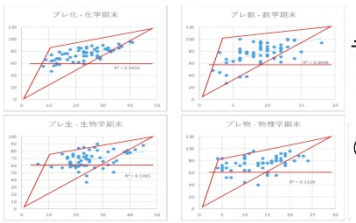
今，私たちがやっている幾つかの事例をお見せしようと思います。入学前教育でやっていること，基礎教育でやっていることが専門教育や初年次教育につながっていく時に，留年率が増加します。成績評価基準にもばらつきがありました。

実際に何が起こっているかを検討するために，留年学生のフォーカス・グループと呼ばれるインタビューセッションをやり，インタビュアー，私の洞察を加えます。全てのインタビューは文字起こしをしますが，それはそのままの状態では提供しません。インタビュアーによる洞察としてお返しするのですが，ボトルネックとなった科目担当者を交えた成績評価検証や，ヒアリングや陪席をしながら，実際にどのような評価をしていけばいいのかというFD 活動とセットで行います。

そこで生まれたことは，授業だけではこれは到底難しいのではないか，授業時間外でのピアサポート活動をしていかなければいけないのではないかということで，スチューデント・アシスタントの制度を使いながら，私は基礎研修を行っていったりとか，正課外学習支援プログラムを実際に開発したり，学習環境の整備を行っていくという課題解決につなげていきます。

可視化の事例（2）

- 入学前教育、基礎教育・教養教育、初年次教育、専門教育の分断をのりこえる
  - 学部A：入学前教育・リメディアル教育・基礎教育の連携の不足



データ統合（入学前教育の効果測定）
→ ワーキンググループでの合意形成
→ SAによる定期的な学習助言・補習

（学習環境の整備に関するSD活動）

学生代表・SAへのフォーカス・グループ・インタビュー
全学的なSA基礎研修（しつかい研修）
全学的カリキュラム編成ワーキング、学習環境プランニング専門委員会の設置

15

また，事例（2）は別の学部ですが，入学前教育やリメディアル教育をやっていても，その後の国家試験につながっていきません。では実際どうなっているかというと，これは横軸がプレースメントテストの結果で，縦軸が 1 年生科目の点数です。この 2 つの相関関係を見ています。これはなぜ逆三角形にしているかというと，初めは低かった学生が，ちゃんとこのリメディアル教育や学習支援のプログラムによって伸びていることが可視化されたのです。しかし伸びていない学生というか，しっかりと取得できない学生はどうすればいいのでしょうか。

これを見た上で，入学前教育の刷新，それから学習支援プログラムは個別からグループに変えました。このように分散しているデータを統合しながら，実際にワーキンググループで合意形成を図っていきます。

学修支援（SA・ピアサポート）

- 従来の補習教育
  - 成績下位or未履修科目に対するリメディアル

↓

- 学修支援
  - 所定の研修を受けた上級生（SA、ピアサポーター）が相談や質問対応を担う
  - 出張オフィスアワーとして、複数教員が自習スペースに待機
  - 演習課題、授業時間外学習の構造化
    「わかったつもり」から「わかった」へ
    ＝　頭に汗をかく、認知プロセスの外化（アウトプット）

16

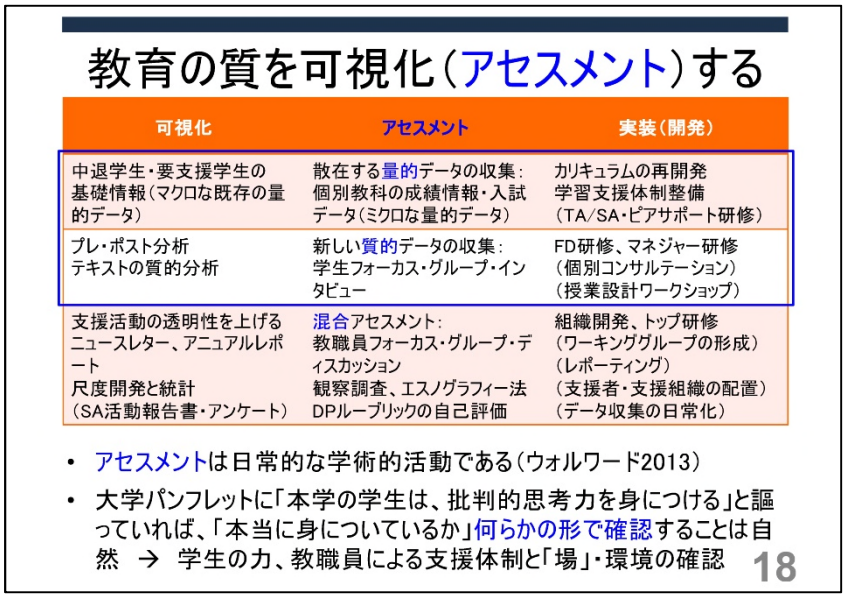
従来は補習教育として成績下位者や未履修科目に対するリメディアルをベースに実施し

てきました。それを学修支援としてどのように変えてきたかについてご説明しますと，私が担当する所定の研修を受けた上級生が相談や質問対応を行ったりとか，他には出張オフィスアワーの形でピアサポーターや SA に任せるのではなく，複数の教員が自習スペースに待機したりといった形でサポートするようになりました。

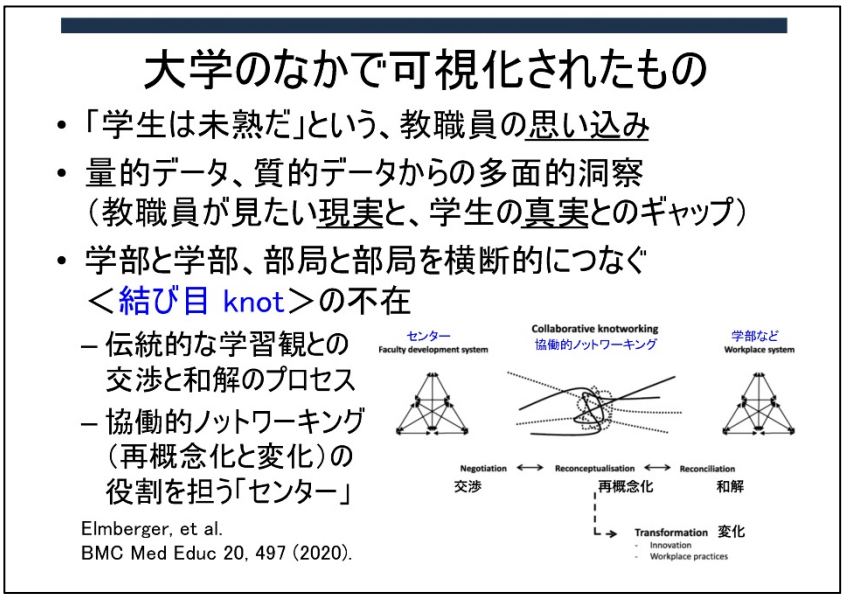
演習課題や授業時間外学習を学生任せにせず構造化することで「わかったつもり」から「わかった」に変えていきます。頭に汗をかくこと，実際に演習をしていくことが大切なのです。いくら講義や研修や授業が良くなっても，アウトプットがないと，書いていかないと，これは実質化していきません。そして学生と共にこれは変えていきます。



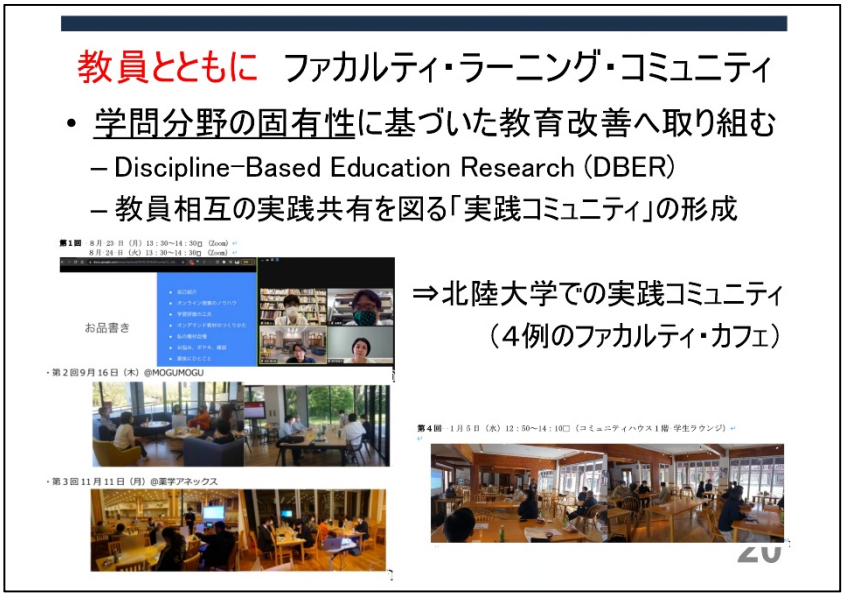
学生と共につくる学習支援や授業ですので，SA 研修やピアサポートの場を提供します。これは 2 年生や 3 年生の SA が著しい伸びを見せます。こういった研修，ロールプレイをしたり，一緒にどのようなプログラムを作っていけばいいのかを検討したりしていくのです。



教育の質を可視化することが大切です。中退学生や要支援学生の基礎情報や，新しい質的データの獲得です。私は学生がどうなっているのかというフォーカス・グループ・インタビューをよく実施しますが，この量的なデータと質的なデータを組み合わせた混合アセスメントです。特に教職員へのフォーカス・グループ・ディスカッションとか，実際に得られたデータというのは，IR 室がまとめて，日常的にデータを使って検討をするということはありますが，データからは過去しか分かりません。それを使って実際に何らかの形で確認をしたら，学生の力をどう捉えていくのか，そして支援体制をどうしていくのかをカリキュラム開発，FD 研修，組織開発とトップ研修と組み合わせていかなければいけないのではないかと考えています。

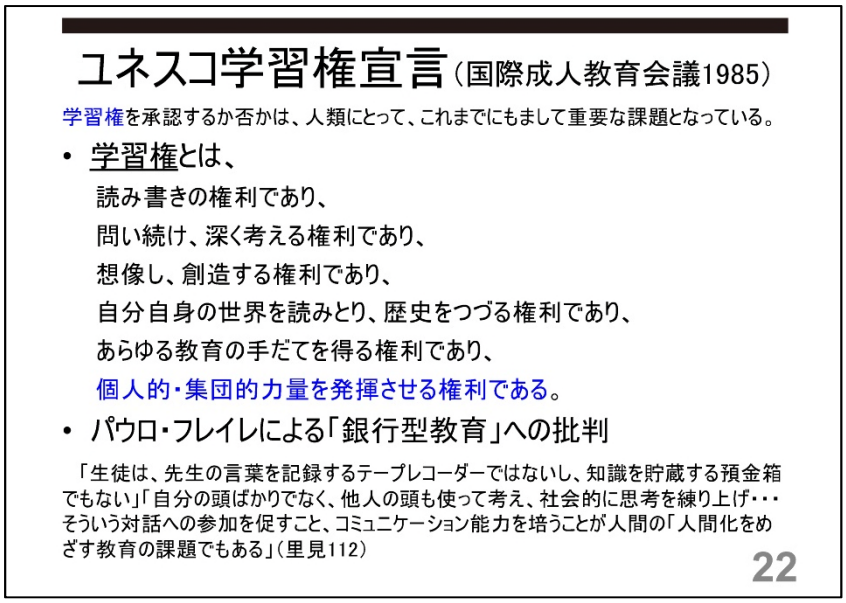


今までの言説というものがあります。「学生は未熟だ。授業だけではなくて，入試でどのような学生でも入ってきているではないか。だから未熟だから私の授業ではもうこれ以上できません」という，実は思い込みがかつて教員にはありました。しかし実際に学生支援，学習支援で伸びたというデータを示しながら，教職員が見たかった現実と，学生が実際伸びていたりとか，獲得していたり，どこでつまずいているかという学生の真実とのギャップというものを多面的に見せていくのです。学部・学科も今までは分断されていました。



私はセンターの人間で，唯一の学部外組織に所属しています。伝統的な学習観に対して，学部のセンターや専門家が交渉と和解をしながら，再概念化して変化をもたらすのです。これはノットワーキングという考え方ですが，やはり会話とか対話の場がないとなると，思い込みで学生のことを断定してしまいます。教員と共にファカルティ・ラーニング・コミュニティということをやっていますが，学問分野の固有性に基づいた教育改善に取り組んでいます。

こういった実践コミュニティーの形成とか，私は教員向けのコンサルテーションという相談をする専門家になっていますが，年間で延べ約 90 件，100 時間以上のコンサルテーションを引き受けています。そしてこういった４件から６件ぐらいのカフェイベントですが，このようなことをしながら，具体的に私たちはアクションを作っていっています。



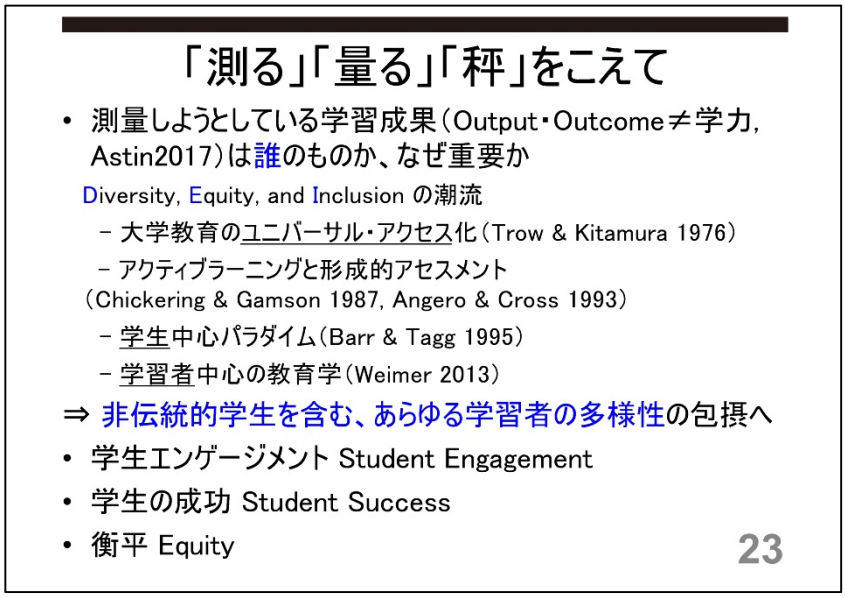
「まとめに代えて」です。大学ができることは何でしょうか。高校に押し付けるわけでもありません。「いや，待ってほしい。家庭からの問題だろう」ということもありますが，キ

ンダーガーデン（K，幼児教育）から K-12 年，K-16 年，大学院まで含めれば 21 年ですか。K-21 年に向かって，生涯を通して学び続けて，社会を形成する者をライフロング・アクティブラーナーと言います。私たちは学びの在り方を変えていかなければいけないと思います。

ユネスコの学習権宣言を紹介したいと思います。「学習権を承認するか否かは，人類にとっても重要な課題となっている」という，これは 1985 年の宣言です。学習権とは，「読み書きの権利であり，問い続け，深く考える権利であり，想像し，創造する権利であり」ということが書かれています。これを裏返してみてください。これが保障されない学校や世界や社会があるから，これの宣言があったのです。

自分自身の世界を読み取る力もなく，歴史をつづる権利を保障されず，あらゆる教育や手立てを得る権利が与えられない，サービスもないというか，考えられていないのです。個人的な力量や集団的な力量を発揮させる権利を保障するようなさまざまな学びの機会を，大学や高校や，あらゆる生涯学習の機会は提供できているか，考えられているでしょうか。

「生徒は，先生の言葉を記録するテープレコーダーではない」とは，学習権宣言のベースにあるパウロ・フレイレによる「銀行型教育」への批判です。人間化をしていくというプロセスにどうやって私たちが向かっていくかです。これは大きな話です。

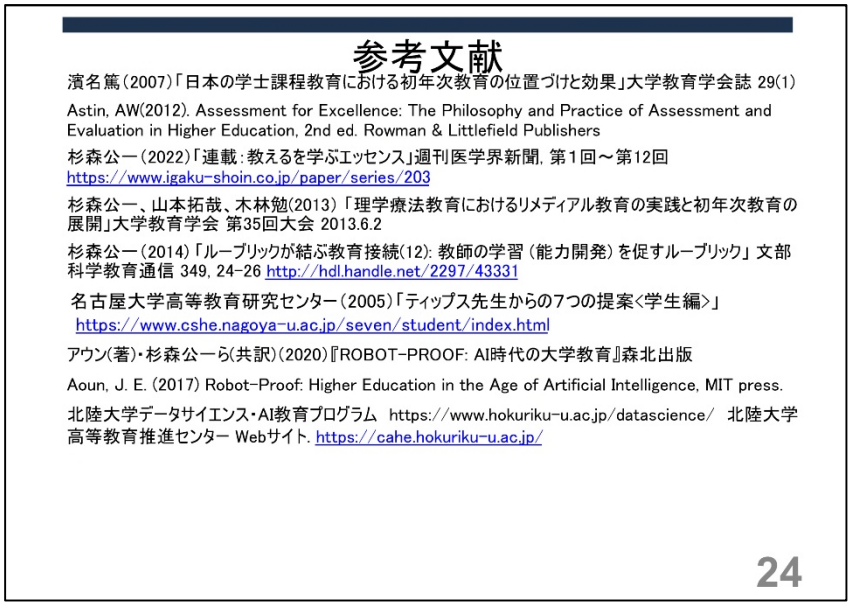


ここには入試に関わる方がお集まりになられていますが，測量しようとしている学力とは何でしょうか。基礎的な力，知っているかどうかだけではないですよね。「学力」というのは，私は誤訳だと思います。学びの力，アチーブメントというのは，さまざまな多様な多面的な力であるということで，3 要素と拡大しましたが，先ほど倉部さんからも提供があったフォロー，ユニバーサル・アクセス化です。これにはあと 2 つあります。

万人に開かれているアクセス化だけではなくて，これはトロウとその訳者である喜多村和之はあと 2 つ言っています。ユニバーサル・パーティシペーション型と，ユニバーサル・アクセプターンス型と言っているのですが，誰しもが大学に進学しなければいけないと強

制されるという後者のパターンは実は紹介されていないのです。

今はどうなっているでしょうか。アクティブラーニングと形成的アセスメント，学生を中心にするパラダイムとか，その中心とする教育学には非伝統学生を含む，さまざまな学生が包摂されなければいけないということで，日本には導入されていないエンゲージメントや成功という考え方や，Equity，いろいろな段階のある学生をいろいろな手立てによって，イコールアクセスだけではなく Equity の状態，「衡平（こうへい）」の状態に持っていくということです。私たちが知っている「公平」と字が違うことに気を付けましょう。



「『測る』『量る』『秤』をこえて」，私たちが入試をきっかけにして，どのように学生に学ぶ力を，手立てを一緒にはしごをかけていくかということを考えるきっかけにしていただけたらと思います。

それでは私からの話題提供は以上としたいと思います。ありがとうございました。■

【山地・司会】　杉森先生，ありがとうございました。非常に密度の濃いご発表でした。ここから先は竹内先生，全体討論をよろしくお願いします。

全体会 2　◉ 全体討論

見過ごされがちな高大接続課題：
不本意入学，ミスマッチ入学，学力不足

■朝比奈　なを（元高校教員，教育ジャーナリスト）/倉部　史記（追手門学院大学客員教授，高大共創コーディネーター）/宮田　晃宏（熊本県立鹿本農業高等学校　進路指導部長）/杉森　公一（北陸大学　高等教育センター長，教授，教務部長）/竹内　正興（香川大学 アドミッションセンター長■司会）/山地　弘起（大学入試センター　試験・研究統括官■司会）

【竹内・司会】　香川大学の竹内です。それでは，ここからは全体討論の時間とさせていただきます。まず初めに繰り返しになりますが，4 人のパネリストの先生方，本日は大変中身の濃い発表をしていただき，ありがとうございました。もう議論を始めたら，尽きることなく，今日は日が暮れてしまうかと思います。時間も限りがありますので，討論会の進め方としては，まず 4 人のパネリストの先生方で，それぞれご質問があれば，それにお答えいただき，その後，時間があれば，視聴者の皆様から頂いたご質問について，先生方にお答えいただくという形にしたいと思います。

それではまず，パネリストの先生方から，他のパネリストの先生方に，ご質問・ご確認や，議論を深めたいということがありましたら，お願いできますか。

【倉部】　杉森先生にお伺いしたいのですが，本当に頭が下がる思いというか，非常に素晴らしい，いろいろな教育をされています。その教育の中身を例えば，地元の高校の先生や，高校生に伝えるための工夫のようなものはされていますか。自分の発表内容にもつながるかと思いました。

【杉森】　やはりオープンキャンパスや，進路指導の方への説明会，生徒への説明会が一番だと思いますが，全く伝わらないです。というのは，文科省の認定を取りましたとか，アクティブラーニングを推進しているということも，先ほど，スライドでお見せしましたが，高校の進路指導の方はあまり関心がありません。「Tableau を使ってこのようにできます」とデータサイエンスのシンポジウムをしたのですが，私が持っている 200 名のリストに呼び

かけても，高校からは 3 名しか参加されませんでした。理由は「高校だとできない。GIGA スクールが始まったばかりだ」とのことのようでした。リテラシーレベル −プラス− を取ってから 3 年ぐらい遅れて，ようやく探究学習で Tableau を使いたいと，この 4 月になって 2 件連絡がありました。

探究学習支援が始まってから，2014 年ぐらいから年間 20 校から 30 校の高校を回っているのですが，単発で呼ばれて話をさせていただいても，「大学は本当に変わるのか」と半信半疑です。今になって，やっと高校生全体に探究学習を体験してもらうということができていますが，まだ時間がかかります。

【倉部】　ありがとうございます。探究については高校の先生もやはり困っていらっしゃって，いろいろと情報を欲していることでしょうから，それとちょうどマッチした時に，結果的に大学でのいろいろなノウハウが伝わるということはあるかもしれません。ありがとうございました。

【竹内・司会】　今，関心がある高校の数が少ないという杉森先生からのご回答でした。これについては本当に感覚的なことで恐縮なのですが，数が少なくても関心のある高校があったということは，そこから少しずつ広がっていくのではないかというイメージを持ったのですが，その点はいかがですか。

【杉森】　私たちは，付属高校を持っていません。私立高校を中心に連携校を持っていますので，探究学習の時間に，大学教員がゼミの担当として入り込んで，毎週通ったりとか，また逆に来ていただいて，探究学習の導入，仮説作りを私がサポートしたりしています。特に教員のサポートを中心にしていますが，コーディネーターを担当する教員は本当に悩まれています。私はその伴走支援をするという形になります。

また遠隔ですが，定時制高校での探究発表の講評に行ったりしています。接点は徐々に広がってきているかと思います。ただし，入試難易度が高い大学に一般入試で入学する生徒がいるような進学校からは見向きもされないように感じます。私立大学には触れさせたくないらしいのです。

【竹内・司会】　これは先ほどの倉部先生のご講演ともつながる話ですね。分かりました。ただ，本日のこのような機会を通じて，少しでも広がっていければと考えています。ありがとうございます。他にパネリストの先生方から他のパネリストの先生方に何かご質問はありますか。

【朝比奈】　私も杉森先生にお伺いしたいのですが，入学前教育をいつぐらいからやり始めるのかということについて，アドミッションセンターの職員の方からのご質問があったかと思います。例えば，ある高校では生徒が就職した場合に，モチベーションを上げていき，少しずつ技術を学んでもらうために，在学中の土日を使って，教育，研修を行っている事例

があるのですが，例えばそういうような入学前教育を継続的にやっていく，また合格後に継続してやっていくなどということはお考えになっていらっしゃるのでしょうか。

【杉森】　今，入学前教育は，学習支援業者さんと組んでスクーリングと通信添削と大学の教員が行うオンラインやスクリーニングを中心に，推薦など年内入試の学生に対しては，悉皆（しっかい）で全部やっています。ただ，一般入試だと入学時期まで期間が短いので，自校教育のオンデマンドビデオで本学の成り立ちは先に伝えておこうという形にしています。それは全員を対象にやっています。入学が決まったらすぐです。

【朝比奈】　分かりました。ありがとうございます。

【竹内・司会】　ありがとうございます。他はよろしいでしょうか。それでは，視聴者の皆様から朝比奈先生にいただいたご質問です。「本日の先生のご講演のキーワードの１つに学力不足，ミスマッチ入学というキーワードがあったかと思います。高校から大学へのそういうキーワードがあったのですが，高校の中で基礎学力をもっと付けさせるような政策，場合によっては 3 年間ではなく，留年させてでも高校の中で基礎学力を付けさせるような政策とかそのような取り組みなども考えられるとは思うのですが，先生はどのようにお考えになられますか？」というご質問が来ているのですが，いかがですか。

【朝比奈】　ご質問をありがとうございます。先ほど，お話しさせていただいたように，高校側は独自にやってはいるのですが，高校には大学教育と同じように高校教育がやるべき内容というものが，実際あることになっています。現実には学力が低い学校は，本当はそれをやらずに高校のカリキュラムの中で，徹底して基礎学力の定着を図るための勉強をやりたいと思っても，それは高校教育のカリキュラムの縛りがあるので，なかなかそれができないのです。

例えば先ほどお見せしたような場合ですと，少し余裕のあるような時間，ホームルームの時間とか，総合学習の時間などを作って，カリキュラムの中でシステムとして勉強をさせるという努力はしています。しかし多くの場合，高校のカリキュラムがあるので，それ以外の時間，例えば放課後に補習的な形で行うようなやり方はあります。

加えてもっと言ってしまいますと，やはり 6 年間の積み重ねの中で，この子にはどういう問題があるか，この子にはどういう勉強のつまずきがあるかということを見つけられていなかった場合は，その問題の見つけ方から，つまりどこから間違っているかから始めなければいけなくなってきます。これは先送りというか，下の学校の段階によく言いがちではあるのですが，実は義務教育の段階では，少なくともそのつまずきの原因だけは見つけてほしいと個人的には思っています。

【竹内・司会】　本日は，高校と大学のインクルーシブというテーマなのですが，広い意味で捉えると，やはりずっと教育がつながっているということが改めて分かりました。ありが

とうございます。他のパネリストの先生方はよろしいですか。
　私のほうで，4 人の先生方のご講演を聞かせていただいて，倉部先生の中退という問題がやはりすごく大きいと思いました。その話を踏まえて宮田先生のお話を伺っている時に，「書かせる指導」は本当に現場の素晴らしいお取り組みだと思いました。宮田先生は，これは全員にやらせるということを強調されていたかと思います。具体的に全員に取り組ませる時のポイントというか，先生だからできたのか，それとも組織的にやったのか，その辺りを差し支えない範囲で，宮田先生，お話ししていただけないでしょうか。

【宮田】　全員に取り組ませるというのは，常に私がこだわってやっていたところです。最初はやはり強制的にやらないとなかなか難しいので，例えば 6 限目に私の授業がある時にシートを配布して,「今日，これを書いたら帰っていい」などというやり方をしていました。
　もちろん，学校全体ではなく，クラスだからやれたところがあるかと思います。今まで講演会などで100回ぐらい話しましたが,私がしたことを,「効果が出るのならやってみよう」と思われる先生は 1 人もおらず，いつもご質問を頂くのは,「そんなに時間をかけて家族は大丈夫ですか」という働き方改革的なご質問です。「自分はしませんが，あなたは勝手にやってください」という感じのことが非常に多いです。
　だから自分がやっていることを押し付けようという気もありませんが，もう少し効率良くやらなければいけないという点はあります。ただ，最初はやはり少し強制的なところがあります。そのうち 1 年生の半年ぐらいを過ぎると，書く楽しさとか，自分のことをちゃんと考えて文にすることに慣れてきますので，生徒にやる気を出させるための工夫や力を注ぐという労力はかなり減ってきます。2 年，3 年生になると結構自然になっています。
　四則演算もよくできないような生徒がたくさんいますから，そういう子たちでもどうにかクリアできる物を，最初の 1 カ月ぐらいは，少々嫌な顔をされても，こちらが用意してやらなければいけないのではないかと思います。そんな大それた仕組み，仕掛けというのではなく，少し強制力を働かせて最初はやっていますというぐらいです。

【竹内・司会】　ありがとうございます。そういった取組の中でも当初は 60～70 人の中退者いたということで，そうすると捉え方次第だと思うのですが，朝比奈先生が先ほどお話ししていただいた生徒たちは，その前段階といいますか,「置き去りにされた生徒たち」というのは少なくとも高校は中退していないので，それだけでもすごく頑張ってやっているような印象もあるのですが，宮田先生はその辺りの高校中退率などの問題はどういうように捉えられていますか。

【朝比奈】　すみません。高校中退者ですが，多分，現職の宮田先生はお答えづらいと思いますので，私が代わってお答えさせていただきたいと思います。実は高校の中退者を減らそうという国の動きがあります。そして，高校はかなり頑張って学力や生活面で中退する可能性がある生徒を抱え込んでいます。抱え込まないで，高校を中退させてしまうと，彼らの将来に影響するからです。今，高校卒業というのは 1 つのパスポートのような感じになって

いますので。だからなるべく中退者を出さないでおこうと，各高校は頑張っています。
ただありがたいことに，先ほど私立の広域通信制高校のお話をしましたが，勉強をどうしてもできなくて，3 年では卒業できそうもない，そのような生徒たちの受け皿にも，大学の 1 つ下のバージョンのような感じになりますが，私立の広域通信制高校がなっているのです。
中退率の細かい数字は，間違いがあるといけませんので，今は言いませんが，おそらく高校の中退率は減っています。しかしその子たちは多分，より学校に行かないで，より自由度が高く，あまり熱心な指導をしていないような高校に転校をしています。現実にそういう例を私自身ももちろん知っていますし，多分全国で行われていることだと思います。

【竹内・司会】　ありがとうございます。高校は中退者を減らす取り組みを政策的にもされているという話がありました。大学でも，先ほど杉森先生からも大学としても学生支援で中退者を減らす取り組みというお話もあったかと思います。大学に置き換えて，倉部先生，杉森先生，何かコメントがありましたら頂きたいのですが。

【倉部】　中退を減らす仕組みは，個別の高校や大学でできることもあれば，やはり公共で用意をしなければいけないこともあると思います。
私の話の内容で言うと，中退のデータベースという物は，本当は新聞社のような企業さんだとか，個々の学校がやるべきものの範疇（はんちゅう）を超えている気がします。やはり出しにくいです。あのようなデータを大学や高校もどのような形で出すかというのは，いろいろ配慮は必要だと思いますが，問題が起きているということをちゃんと知る権利が，学校を選ぶ側にはあると思います。「ここについては国が整備」，「でもここは個々の学校で取り組む」という議論は必要ではないかと思います。

【竹内・司会】　ありがとうございます。杉森先生から，この中退を減らすということについて，補足はありますか。

【杉森】　朝比奈先生がおっしゃった，カルテというのは 1 つ大切なことかと思います。ただ本学では，例えば 78％が北陸 3 県から入学をしてきています。本学から中退してしまっても，家業を継ぐという学生さんたちはそれで戻ればいいかもしれないと思いますが，中退した結果として非正規雇用になっていくと北陸 3 県がつぶれてしまいます。教育の質保証のためには，マルチステークホルダー・アプローチというのですか，教育のカリキュラムがどうなっているかを集めたデータは地元の企業さんと高校の先生方に第三者評価で入っていただいています。
これは集合的に社会全体で，大学全体で考えなければいけないと思います。学生個人のカルテ情報を個々の教員が抱え込むのではなく，教員集団で見るということです。分散型で私たちは IR 分析をしているので，ほぼ全教職員が実は小さなデータから大きなデータまで共有をしているのです。個別の支援ではなく，総合統括的なアプローチをした上で，どうなっているかについて，地域の方たちと一緒に地域で育てていくのです。これが小中高大で，何

とか 7 年間，9 年間ぐらいで高校と一緒に組めればもっといいと思っています。前の前の職場では，高大一貫の担任制を敷くなど，かなり仕掛けを工夫しました。個別のアプローチで中退を悪として見るのではなく，4 年間，6 年間の失業率で判断するのではなく，1.5 倍卒業率といいますが，4 年制であれば 6 年間卒業率とか，6 年制であれば 8 年間卒業率がアメリカの基準でしょう。なぜ日本は 4 年間の失業率でみるのでしょうか。基準が間違っているのではないかと思ったりもします。

そういうことも含めて，もう少しアプローチを変えなければいけないのではないかと思っています。

【竹内・司会】　ありがとうございます。このような話をしている間に，お時間が来てしまいました。冒頭で山地先生からもあったのですが，いただいた Q&A にやはり，全てお答えすることができませんでした。これについては今後，制作する『大学入試研究の動向』に反映させていきたいと思いますので，ご了承していただければと思います。

それでは本当に中途半端な状況だとお感じになられるかもしれませんが，お時間が来ていますので，最後にパネリストの先生方から，お 1 人ずつ，今後の高大のインクルーシブに向けてのまとめをお願いいたします。改めて重複しても構いませんので，一言ずつメッセージも頂けたらと思います。よろしくお願いします。それではご講演の順番で，朝比奈先生からお願いします。

【朝比奈】　私自身は実はこのようなテーマで大学関係者，高校関係者がみんなで 1 か所に集まってお話ができること自体が非常にうれしく思っています。

先ほど，杉森先生もおっしゃられておりましたが，人間を作っていくということはルソーではないですが，ずっと継続していくべきことです。学校段階全てが協力して，そして今の子どもたちをこれからの大変難しい時代に生きていけるだけの力，生き抜く力を付けなければいけないといつも考えています。

ぜひこれを機会に，多くの先生方が高大接続，そしてその中でも特に置き去りにされがちな高校生たちを思い出していただければ非常に幸いだと思います。今日はどうもありがとうございました。

【竹内・司会】　ありがとうございました。それでは倉部先生，お願いします。

【倉部】　今日はありがとうございました。私からは高校と大学，それぞれの関わりの中で，いまひとつかみ合っていない部分の課題をお伝えしました。逆に言えば，かみ合うことで結構解決する余地もたくさんあるような気もしています。

本当にわが国はリソースもないし，人口も減っていくし，お金もないわけで，せっかく学ぼうとしている人たちを放っておくような余裕もないのだと思うのです。生徒・学生さんの成長を願うということは，立場が変わってもみんな同じだと思います。若者たちの長い成長のためにできることをお互いにやれたらいいのかなと思います。今日はありがとうござい

ました。

【竹内・司会】　ありがとうございました。では続きまして，宮田先生，お願いします。

【宮田】　私は農業高校で，朝比奈先生が指摘されたような学力に課題を持っているような生徒たちをずっと預かってきました。

ただ，そういう生徒でも，私はあのようなやり方をしましたが，関わり方によって，ちゃんと大学でやっていけるとか，大学だけではなく，就職や，その後のいろいろなところでちゃんとやっていけるような力を身に付けることができるというところは，少しお知りおきいただければと思います。

また，大学入試センター主催で申し訳ないのですが，よく学力ということをおっしゃられるのですが，私は農業高校ですから，食品製造とか，食品微生物などといった科目を教えています。いろいろ商業，工業，農業という専門科目を教えているのですが，大学入試センターの共通テストは，英国数社理が主です。学力はその５教科です。その英国数社理でないと測れないとか，明治以来ずっとそうだとかという話も聞いたことがありますが，学力というものが何なのかというところがあります。

それで私は先ほどの発表で農業鑑定というものを少し出させてもらいました。その学力というものが何なのかというところを，少し投げ掛けたいというか，そこだけで言われたら専門高校が低く見られるのは当たり前です。例えば私がやっている科目で，学力試験とかをやってもらったりすると非常にうれしいです。農学部であれば，私がやっている科目で一般入試をしていただくとか，そのようなことを少し考えるという割には，相変わらず英国数社理でずっと学力を測って，それで偏差値が出てきてと，教員になった当初からその辺りを疑問に思っていましたので，少し投げ掛けたいと思います。以上です。

【竹内・司会】　ありがとうございました。では最後に杉森先生，お願いします。

【杉森】　参加者の方から「選抜」というのをどう置き換えたらいいのかという質問を頂いて，それが私はずっと引っ掛かっているのです。選抜をするというのは，教員や職員，大学側，または社会側が選抜をしてふるいに掛けるということです。

ただし，今，宮田先生からもご指摘があったように，いろいろな専門性を持っていたら，そのまま専門家につながっていきます。子どもは生まれながらにして科学者だと言われているのに，その興味関心を積んでいくという時期に，ふるいに当てはめるために，既定の学力と呼ばれるものに当てはめていくというところで，置き去りにされていくのではないでしょうか。学びの二重構造と言いますが，１つできなければ，次ができず，次ができなければその次もできずとなると，小学校まで戻らなければいけません。

しかし完全習得ができるならば，全ての授業，講義がオンデマンドビデオでそれを見ながら，その場で，みんなで学び合っていくことが出来ます。そこには地域の方も教員も，大学生も，大学教員も，企業の方も一緒になって学びの場を作っていくのです。私が言っている

のは大学入試の解体と大学の解体をお話ししています。
　そうなってくると選抜から接続へ，接続から，何でしょう。結いというか，つなぎ結ぶ，「中退」の字は入れ替えます。「中退」ではなく，「紐を帯びにする」と書いて「紐帯（ちゅうたい）」です。そういった場に転換していくならば，学習する社会，学び合う社会，全てのあらゆる年代の方が学ぶものになって，学生中心から，学習者の私たちの間に中心がずれていく，「脱中心」になっていくという世界が，これだけ知識社会・AI が進歩していくのなら，もうすぐやって来ると思います。そのような社会を一緒になって作っていかなければいけないのではないかと思いますし，すぐにやって来ると思います。パラダイムはとっくに変わっていると思います。またそういうことを考える機会をどこかで頂けたらと思っています。ありがとうございました。

【竹内・司会】　ありがとうございました。各先生方から今後に向けてさまざまな示唆を頂くことができました。本日は大変密度の濃いお話をしていただき，ありがとうございました。また討論のほうが，時間の関係もあったかもしれませんが，私がうまく回せなかった点はご容赦していただければと思います。
　それではこれをもちまして，全体会 2 を終了させていただきたいと思います。皆さま，どうもありがとうございました。

【一同】　ありがとうございました。■

大会当日に取り上げることができなかったご質問に対する回答

（質問 1）
　倉部先生のご報告につきまして
　オープンキャンパスや模擬講義では，どうしても「よそ行き」の表現や内容になってしまい，通常の授業での雰囲気等は看取出来ないように思います。日常の授業を体験できるようになれば，授業内容の理解は難しくとも，少なくとも周囲の学生の雰囲気等が感じ取れ，自身にあったものかどうか，判断の素材となるように思います。
　余談ですが，いくらオープンキャンパスでの模擬講義等の内容を工夫しても，アンケートの結果では，毎回「トイレが綺麗」などというのが，評価すべき点の上位に入ります。この点，既に行われているかも知れませんが，事前に高校の現場でも，大学のキャンパスでどのような点を見て執るべきか，ガイダンス等でご指導いただければ有難く存じます。

（質問 1 への回答）【倉部】
　おっしゃる通り，事前指導が必要と思います。就職活動では業界研究，企業研究，自己分析，といった指導のスキームがありますね。進学についても学問理解，大学（の特色）理解，自己理解，といったガイドを設けておくと，オープンキャンパスで何を見に行くのか，学習

効果も高まるのかなと思います。
　ウイークデーキャンパスビジットをやって分かったことですが，実際の授業を見た方からは，施設や設備についての感想がほとんど出ませんでした。オープンキャンパスという取り組み自体が，教育内容よりも施設にフォーカスさせてしまう性質を持っている，という点もあるかと思います。

（質問 2）
　杉森先生へ
　高等学校から参加しています。データサイエンスを総合的な探究の学習で学ばせていきたいのですが，ご紹介いただいた Tableau を取り入れることは可能でしょうか。55 分授業だとしたら，何時間くらいで生徒が使えるようになるかなど目安をご教示ください。

（質問 2 への回答）【杉森】
　25 分・4 つのハンズオン講座で習得しています。むしろグループでの学び合いや，課題解決学習の時間に多くかかるかもしれません。Tableau public は無料で使用でき，Tableau Desktop は申請することでアカデミック・ライセンスとして無料で使用できます。

（質問 3）
　杉森先生へのご質問です。教育や学習の主語を転換していく中で，入学者の「選抜」という行為は，どう表現しなおすことが可能か，もしヒントをうかがえたら幸いです。

（質問 3 への回答）【杉森】
　以前まとめたブログ（トロウ・モデルの拡張）では，パーティシペーション型＝参加　ということなのでしょうが，適切な訳語が見当たりませんので，入学者「接続」でしょうか。
　https://ed-science.blogspot.com/2014/01/trow-model-re-revisited.html
　他にも，中退から紐帯へ　教育から発育へ　などいろいろ考えることもあります。
　https://www.igaku-shoin.co.jp/paper/archive/y2023/3511_05

（質問 4）
　入学前教育について，近隣ではない高校からの入学生についてはどの様に対応されているでしょうか？

（質問 4 への回答）【杉森】
　本学は 78％が，北陸３県からの進学者ですので，通信添削やオンライン教育を中心に行っています。スクーリングについては，遠方の高校からは任意またはオンラインで対応しています。

（質問 5）
学生が書いたものに対して，最初は拙いものもあるかと思いますが，どの様に導いて行かれるのかについてはとても興味があります

（質問 5 への回答）【宮田】
まずは，教材を作成する際，そのクラスにおいて一番底辺の生徒が頑張ればできる内容と量にすることが大切と考えていました。このことから，身の回りの出来事を 5 行ずつ 3 項目で書く「今週の出来事」と「最近の出来事」というシートを作成し，入学してすぐの時期はこれから始めていきました。ここで重要なものが最後の行まで必ず書かせるということです。これを徹底してやっておかないと，レベルを上げていったときに「こんなに難しいなら全行は書けない」と言う生徒を増やしていってしまいます。そして，このように楽をする輪は瞬く間に広がってしまい，この指導をやる意義，効果が格段に下がってしまいます。また，義務教育で置き去りにされた生徒をさらに置き去りにすることにも繋がります。
ただ，生徒が何とか苦戦して全行書いた作品に対しては，どのような内容のものでも評価やコメントは 9 割肯定，1 割批判（否定）で返すことは徹底していました。例えば，まったく何も書けないで（書く気がなく），「何も書くことありません」を繰り返して 800 字書いてきた生徒がいましたが，私は「よく 800 字埋めた。普通に書くより逆にきつかったと思う。粘り強さがあることも分かった。嫌だと思うことから逃げずに取り組めたことも素晴らしい。あなたが逃げなかったことでクラスの秩序も維持された。ただ，次回は自分の考えをあと一言くらい入れましょう。」というような評価をして返しました。すると，次回からは繰り返しの文はやめて，一言ではなく，彼なりに考えたことを全行埋めて出してきました。
このような取り組みを粘り強くやっていくことで，どの生徒も成長の階段を少しずつ上っていってくれます。そして，3 年生の 1 学期には，800 字であれば 40 名の生徒が 40 分で全員書けるようになります。平均すると 30 分くらいだったと記憶しています。また，スピードだけでなく，クラス全員が大学入試（総合型選抜や推薦）の小論文にも取り組み，それなりのレベルで書けるようになってきます。中学校では，学力的に厳しく底辺にいて，置き去りにされていた生徒でもそのような成長をしてくれるのです。

全体会３

「入試問題の出題・採点ミスを防止するしくみとは」

司　　会　　：横井 修司（大阪公立大学 教授）
　　荘島 宏二郎（大学入試センター 教授）

コーディネータ：秋田 成司（大阪公立大学 副学長, 教授）
　　大久保 敦（大阪公立大学 特任教授）

趣旨説明　入試問題の出題･採点ミスを防止するしくみとは 169
　　秋田 成司（大阪公立大学 副学長, 教授）

報 告 ①　入試ミスのパターンとその影響度～リスクマネジメントの視点から～ 173
　　西郡 大（佐賀大学 アドミッションセンター長, 教授）

報 告 ②　問題の作成や点検のポイント ―『作題ガイドライン』の概要 ― 187
　　荒井 清佳（大学入試センター 研究開発部准教授）

報 告 ③　入試問題作成の手引きに関する考え方 ― アンケート調査を基に ― ... 198
　　椎名 久美子（大学入試センター 試験･研究副統括官, 研究開発部教授）

報 告 ④　模擬試験の作成･採点(記述)のしくみと大学入試について 209
　　網野 輝也（河合塾 教育企画開発部部長）

報 告 ⑤　「入試過去問題活用宣言」の現状と今後について 222
　　齋藤 敦（岐阜大学 教学事務部門学務部入試課長）

全体討論 231

内　　容：

入学者選抜に伴うミス（以下「入試ミス」）は，受験者の人生が左右されかねない，社会的にも影響が大きいものであるにも関わらず，毎年，多数のミスが発生しているのが現状である。一方，入試ミスという題材が微妙で取り扱いに慎重さが求められる内容であることから，入研協大会の全体会においてもこれまでテーマとして取り上げられることが無かった。

入試ミスの種類は大きく，①試験実施に関するミス，②入試問題の出題・採点に関するミス，③合否判定に関するミス，④その他(事務手続き・コンピュータプログラム設定など)のミスの４つに分けられる。そこで全体会３では，このうち②入試問題の出題・採点に関する

ミスに焦点を当て，本企画を通して，リスクマネジメントの視点からミスの防止の一助となることをねらいとして企画した。

具体的には，まずリスクマネジメントの視点から，入試ミスのパターンとその影響度について報告いただく。続いて，各大学が安定した品質の試験や検査を継続的に実施するための方策として，問題作成や点検のポイントを文書化した作業指針を備えておくことが重要であるという視点から，大学入試センターで作成した『作題ガイドライン』の概要について報告していただき，これを受けて，このような作業指針についての考え方や整備状況が大学の設置形態や規模によってどのように異なるかという実態を，アンケート調査を基にご報告をいただく。一方，民間企業の模擬試験実施の立場から大学入試のミス防止につながる示唆を，さらに入試問題の出題ミスの防止につながる取り組みとして展開している「入試過去問題活用宣言」事業の事例について，それぞれご報告いただく。そして，これらの報告において共有された問題点や課題，あるいは実践事例を踏まえて全体討論を行い，入試問題の出題・採点ミスを防止するしくみに資する議論を深める。

全体会 3　◉ 趣旨説明

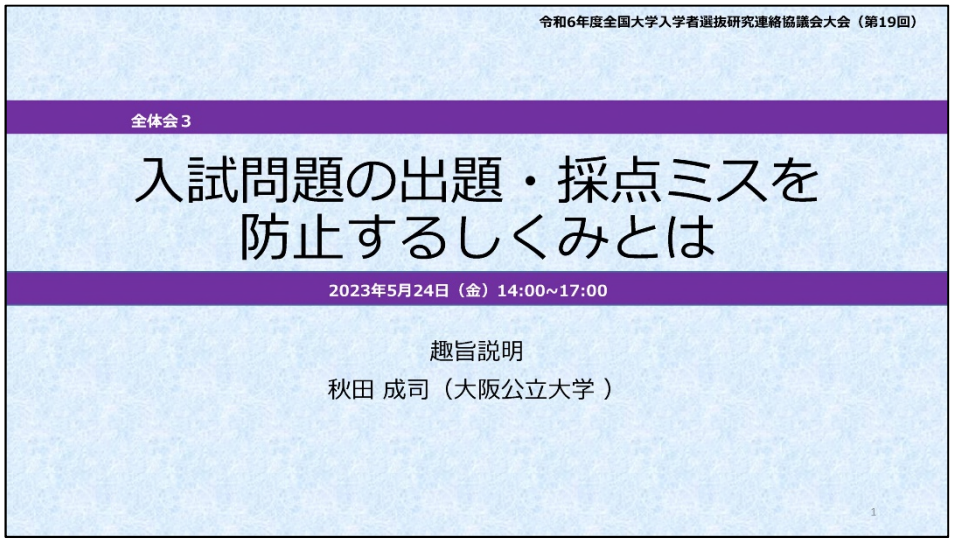
入試問題の出題・採点ミスを防止するしくみとは

■秋田　成司（大阪公立大学 副学長，教授）

【荘島・司会】　全体会 3,「入試問題の出題・採点ミスを防止するしくみとは」を始めます。私は前半の司会を担当しています，大学入試センターの荘島です。どうぞよろしくお願いします。

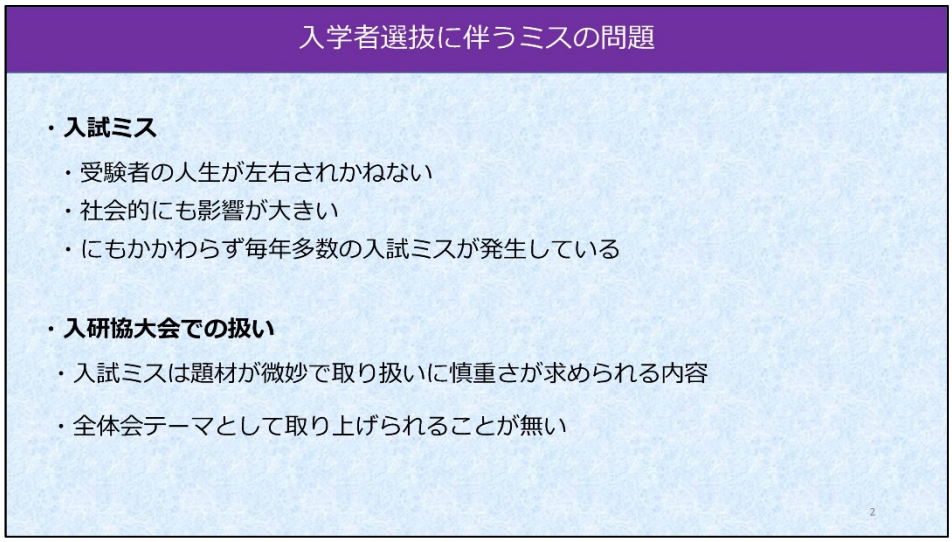
それでは大阪公立大学の秋田先生より，企画趣旨についてご説明していただこうと思います。秋田先生，よろしくお願いします。

【秋田】　それでは趣旨を説明させていただきます。ただいまご紹介いただきました，大阪公立大学の秋田です。



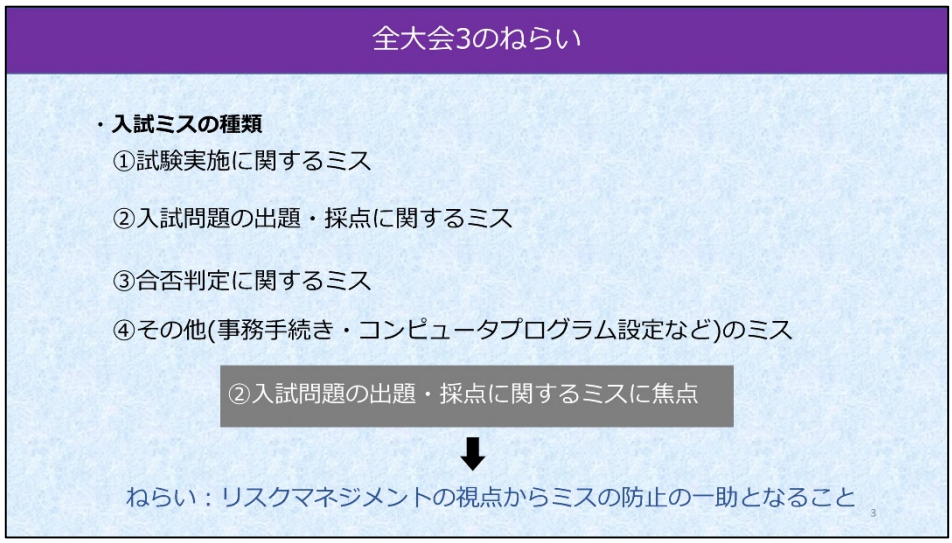
本学が共催校として，「入試問題の出題・採点ミスを防止するしくみとは」というテーマで企画しました。

かなりデリケートな問題と言いますか，人には聞きたいが，答えにくい部分もあるというテーマになっています。ですから本日もなかなか答えられないようなこともあるかもしれません。そういったことも含めて，活発なディスカッションをしていただけたらと思っています。



いわゆる入試ミスは，皆さんもご存じのとおり受験生の人生を左右しかねませんし，社会的にも大変影響が大きいです。一歩間違えますと，大学にとっても信用問題，致命傷になりかねないような問題になります。

それにもかかわらず，毎年かなりの数の入試ミスが発生しています。本学も何年かに一度入試ミスをして，皆さんにご迷惑をおかけしているわけです。こういった入試ミスという題材が取り扱いに慎重さが求められる内容であることから，入研協大会の全体会においても，これまでテーマとして取り上げられることはありませんでした。今回，あえてこのテーマを取り上げさせていただいています。



次に入試ミスの種類です。１つ目は試験実施に関するミスです。試験監督者や実施要領等の読み込み不足でどうしてもミスが起きてしまったということです。

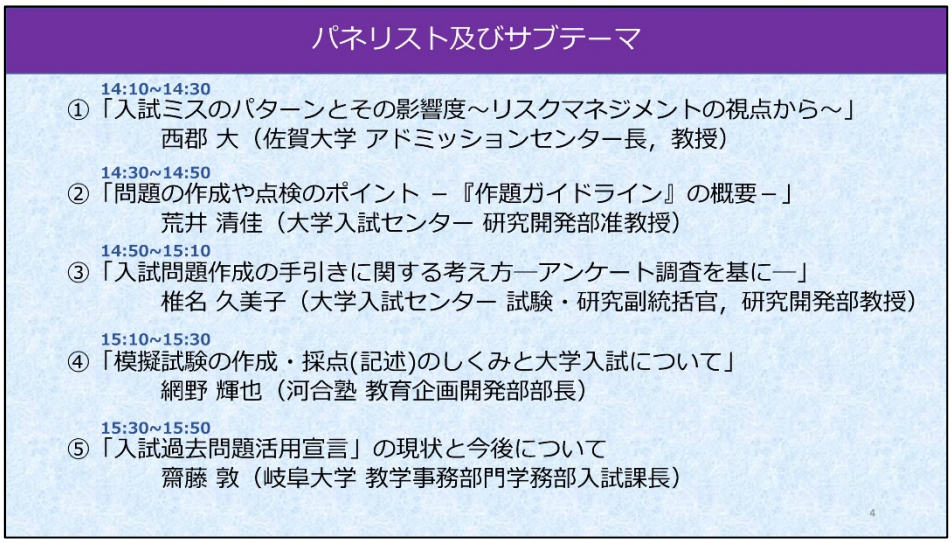
もう１つが入試問題の出題・採点に関するミスです。誤字・脱字程度から，学習指導要領を逸脱したような出題まで，さまざまなレベルのものがあります。こういった出題ミスが年度をまたぎ判明した場合には，入学者に対する賠償責任が生じるなど，入学者そのものに多

大な被害があります。

次が合否判定に関するミスです。

最後に④のその他（事務手続き・コンピュータプログラム設定など）のミスです。点数の配点を誤ってプログラムをして，合計点が間違っていたということもあるかと思います。そういったミスを含めて，こういった類型に分けることができると思います。

この全体会では②の「入試問題の出題・採点に関するミス」に焦点を当てて，リスクマネジメントの視点から，ミスの防止の一助となることを目的として，本共催企画を企画しました。



こちらが本日のプログラムです。まずリスクマネジメントの視点から，「入試ミスのパターンとその影響度」について，佐賀大学アドミッションセンター長の西郡先生からご報告いただきます。

２番目に，各大学が安定した品質の試験や検査を継続的に実施するための方策として，問題作成や点検のポイントを文書化した作業指針を備えていくことが重要であるという視点から，大学入試センターでも策定されている『作題ガイドライン』の概要について，大学入試センター研究開発部准教授の荒井先生からご報告いただきます。

３番目に，これを受け，このような作業指針についての考え方や，整備状況が大学の設置形態や規模によってどのように異なるかという実態について，アンケート調査を基に大学入試センター試験・研究副統括官，研究開発部教授の椎名先生からご報告いただきます。

続いて，問題作成や採点方法について，民間企業の模擬試験実施の立場から，大学入試のミス防止につながる示唆を頂きたく，河合塾教育企画部開発部長の網野先生よりご報告いただきます。

最後に，入試問題の出題ミスの防止につながる取り組みとして展開されている「入試過去問活用宣言」事業の事例について，事務局を務められている岐阜大学教学事務部門学務部の入試課長であられる齋藤課長より，ご報告いただきます。

後半は，これらの報告において共有された問題点や課題，あるいは実施事例を踏まえて，

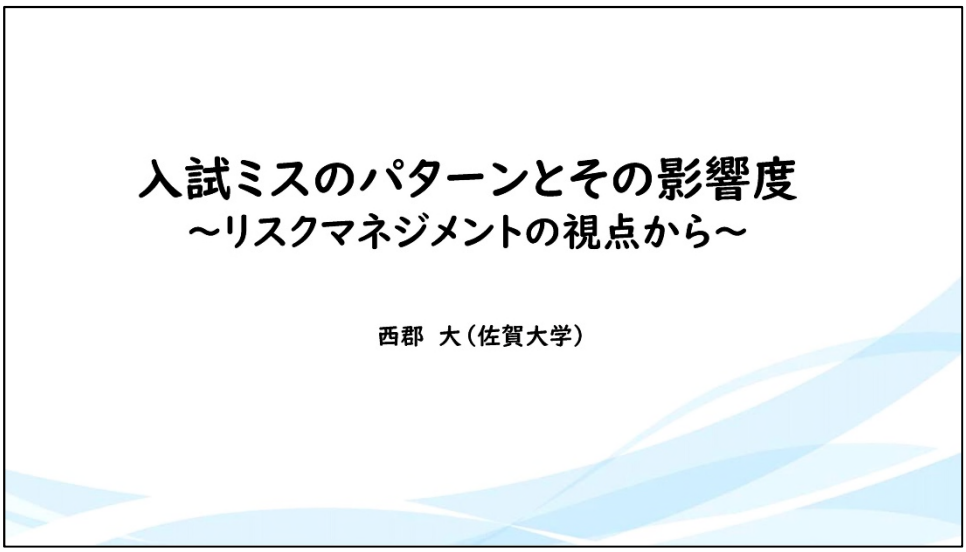
全体討論を行います。入試問題の出題・採点ミスを防止する仕組みに資する議論を深めたいと考えています。皆さまからの活発な議論をお待ちしています。どうぞよろしくお願いします。これで趣旨説明を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

【荘島・司会】　秋田先生，ありがとうございました。それでは，最初の発表に移りたいと思います。佐賀大学の西郡先生より，「入試ミスのパターンとその影響度～リスクマネジメントの視点から～」という題目でご報告いただきます。西郡先生，よろしくお願いします。
■

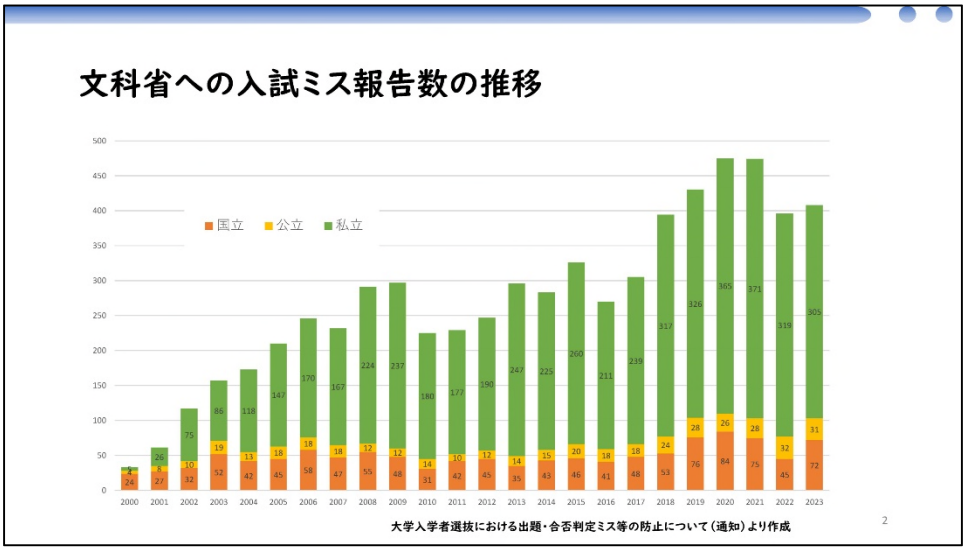
全体会 3　◉ 報告①

入試ミスのパターンとその影響度～リスクマネジメントの視点から～

■西郡　大（佐賀大学 アドミッションセンター長，教授）

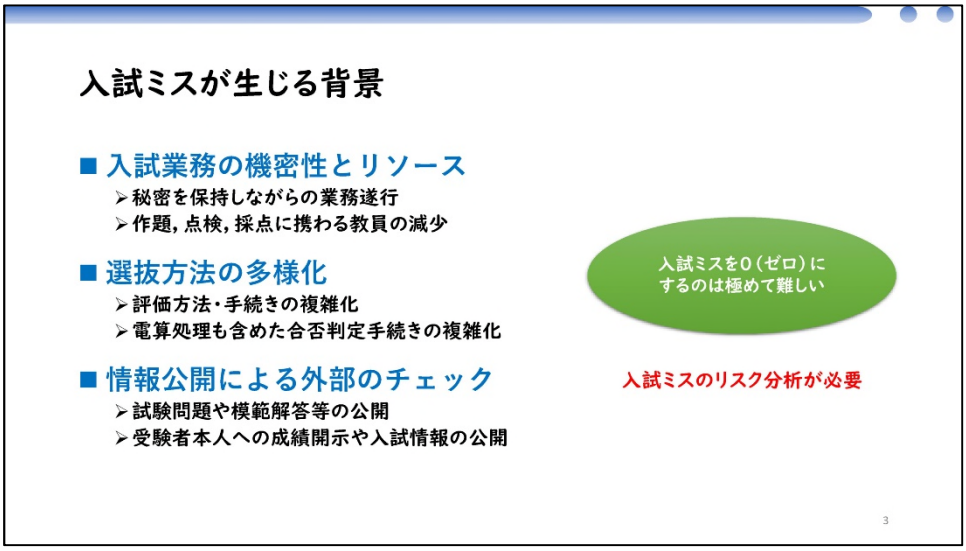


佐賀大学の西郡です。今，ご紹介をしていただいたとおり，このようなテーマでご報告をさせていただきたいと思います。よろしくお願いします。



まず，大学で入試ミスが生じた場合には，文部科学省への報告が求められています。これは 2000 年から 2023 年までの，国立・公立・私立大学の文部科学省への報告数の推移です。年を追うごとにその数は増えています。

ただしこの推移は，小さなものから大きなものまで，全ての入試ミスを報告することがしっかりと定着していることによるものだろうと思います。



どのような背景で入試ミスが生じるのかを整理したものです。まず 1 つ目に挙げられるのが，入試業務の機密性とリソースです。秘密を保持しながら学内で業務遂行をしなければならないため，試験作成を担当する先生たちは，他の人に自分が担当をすることを言えないということがあります。また，作題・点検・採点に携わる教員の数がどんどん少なくなってきており，そういった限られたリソースの中で遂行せざるを得ないため，目が行き届かずミスが生じてしまうという面はあるかと思います。

また選抜方法の多様化によって，評価方法や手続きが煩雑化しています。複雑であるがゆえに，チェックが行き届かないということもあります。電算処理に関しても，傾斜配点，第 1 志望，第 2 志望，学内併願等の複雑な判定処理を行うため，ある時点でルールを変えた時に，その対応が十分に行われないということもあるかと思います。

また 3 つ目に，情報公開による外部のチェック，視点により発覚するものがあります。試験問題や模範解答の公表により，外部から，「ここは少し違うのではないか」という指摘であるとか，昨今一般的になってきた受験生本人への成績開示により，受験生から「これはおかしい。これは合っていますか」というような問い合わせが来ることがあり，それらによって発覚するケースも挙げられると思います。

そうしたことを考えると，入試ミスを半永久的にゼロに抑え続けるというのは極めて難しいため，何がリスクなのかという入試ミスの分析こそが必要ではないかと思います。

新聞記事を素材に入試ミスを分析

◆「聞蔵 Digital News Archives for libraries Ⅱ」
（朝日新聞の記事検索システム）
◆期間：1990年1月1日～2007年12月31日（17年分）
◆検索方法：「入試」と「ミス」のAND検索 ⇒ 1,720件
◆対象入試：大学・短大の学部入試（大学院は除く）
◆対象方法：一般入試，推薦入学，AO入試など
（編入学試験や社会人入試等は除く）



【参考文献】
・ 西郡大・倉元直樹．「新聞記事からみた『入試ミス』のパターンとその影響の検討」『東北大学高等教育開発推進センター紀要』，第4号，pp.39-48，2009年．
・ 西郡大．「大学入学者選抜における『入試ミス』の分類指標作成の試み」．東北大学大学院教育情報学研究部・教育部編『教育情報学研究』，第7号，pp.39-48，2008年．

3つのカテゴリー： 「出題関連ミス」「試験実施・合格発表手続きミス」「合否判定ミス」

ここで紹介をしたいのは，以前，私が行った，新聞記事を素材に入試ミスを分類した研究です。当時，大学入試の公平性に関心があり，その公平性が揺るがされるような１つの場面としての入試ミスをテーマに研究を行いました。朝日新聞の記事検索システムを用いて，1990 年から 2007 年までの 17 年分の記事を対象とし，「入試」と「ミス」の AND 検索で，1,720 件の記事を抽出して，それを一つずつチェックしていくという非常に大変な作業をしてまとめたものです。

その結果はスライドに記載した参考文献においてまとめていますが，今日はその内容について簡単に紹介したいと思います。

【出題関連ミス】

分類指標	該当件数
1. 出題者が意図した正答を導き出せない ➢ 正解を導き出せない ➢ 正解が複数ある ➢ 問題文（図や表を含む）に誤りがある ➢ 問題文が不十分である ➢ 「出題ミス」とのみ記事に記されているもの	243
2. 単純な誤字・脱字	38
3. 募集要項で指定した出題範囲を逸脱している	24
4. 学習指導要領を逸脱している ➢ 新旧課程の相違によるものを含む	13
5. 解答に有利・不利が生じる可能性がある ➢ 漢字の書き取りで解答が他の設問等に存在する ➢ 過去に出題した問題と同じ問題を出題した ➢ 同じ問題冊子に綴じられている他教科にヒントが存在する ➢ 一部の教科書に掲載されている問題を出題	13
6. リスニングテストにおける問題テープの編集ミス	7
7. 問題冊子に教示ミスがある ➢ 選択すべき教科の指定など	5
8. 解答用紙にミスがある	3

5

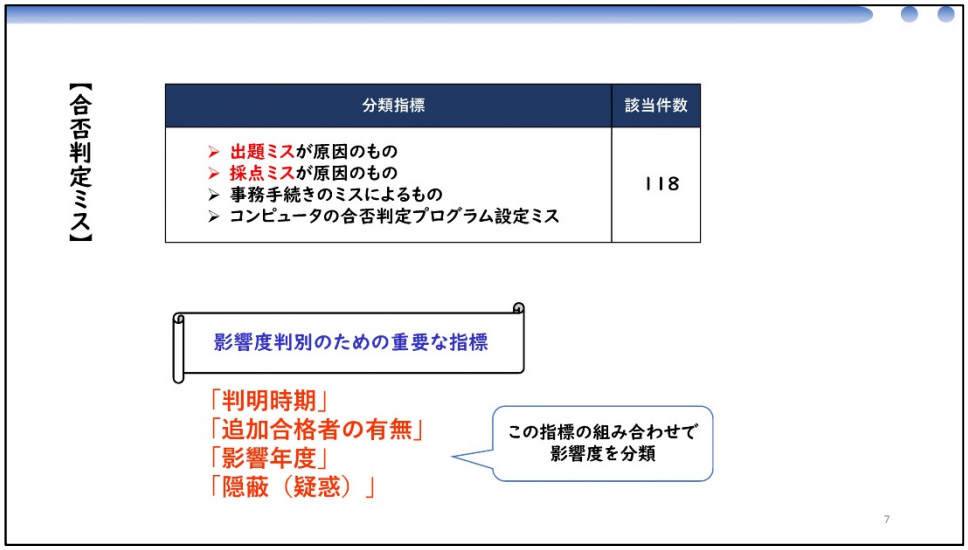
分類の結果，「出題関連ミス」，「試験実施・合格発表手続きミス」，「合否判定ミス」という３つのカテゴリーに分けることができました。

まず１つ目の「出題関連ミス」について，一番多いのは「出題者が意図した正答を導き出せない」というものです。その他，「単純な誤字・脱字」，「募集要項で指定した出題範囲を逸脱している」，「学習指導要領を逸脱している」，「解答に有利・不利が生じる可能性がある」

といったものがありました。リスニングを実施している大学では,「テープの編集ミス」,「問題冊子に教示ミスがある」,「解答用紙にミスがある」といったものが報道されていました。



２ つ目は「試験実施・合格発表手続きミス」です。今日は出題・採点がテーマですので,詳細には触れませんが，こういったものも入試ミスの分類に含まれるということをご紹介させていただきます。



そして３つ目に,「合否判定ミス」です。出題や採点等のさまざまな理由によって，合否判定に最終的に影響をもたらすものです。該当件数は 118 件でした。

原因	判明時期	追加合格者	影響年度	隠蔽疑惑	件数	パターン
・出題ミス ・採点ミス ・事務手続きミス ・コンピュータのプログラム設定ミスなど	入学後	有	複数	有	2	①
				無	9	②
			単数	有	—	3
				無	64	④
		無	複数	有	—	5
				無	—	6
			単数	有	—	7
				無	17	⑧
	入学前	有	複数	有	—	9
				無	—	10
			単数	有	—	11
				無	26	⑫
		無	複数	有	—	13
				無	—	14
			単数	有	—	15
				無	389	⑯

さらに，この合否判定ミスに関する重要な指標として，いつ，そのミスが判明したのか，追加合格が出たのか，単年度なのか，複数年度なのかの影響年度そして隠蔽（いんぺい）疑惑が生じたのか，生じなかったのかということがあると考え，影響度でも分類しました。

全部で 16 パターンあるわけですが，「判明時期」が「入学後」か「入学前」か，そして「追加合格者」，「影響年度」，「隠蔽疑惑」としています。記事として該当したものが，この①，②，④，⑧，⑫，⑯です。

パターン ①：最も深刻なパターン

《事例》 **入学後＋追加合格（有）＋複数年＋隠ぺい疑惑**

2年間に渡り，本来ならば合格であった十数名の受験生を不合格と判定。
採点コンピュータプログラムの設定ミスが原因。
その事実を隠蔽（疑惑）していたとされる。

【記事から読み取れる対応や被害の概要】

- 対象者全員へ一律20万円のお詫び金
- 入学意思のある者には，他大学の入学金，予備校の授業料などを補償
- 入学を諦めた者には，大卒者の生涯賃金との差額の一部を補償
- 在学生の就職活動における風評被害を懸念し，県内企業への配慮要求
- 複数の配分予算がゼロに。

「A大は，入試ミスを隠蔽していた。他の2大学とは状況が違う」（当時の文科省の担当者談）

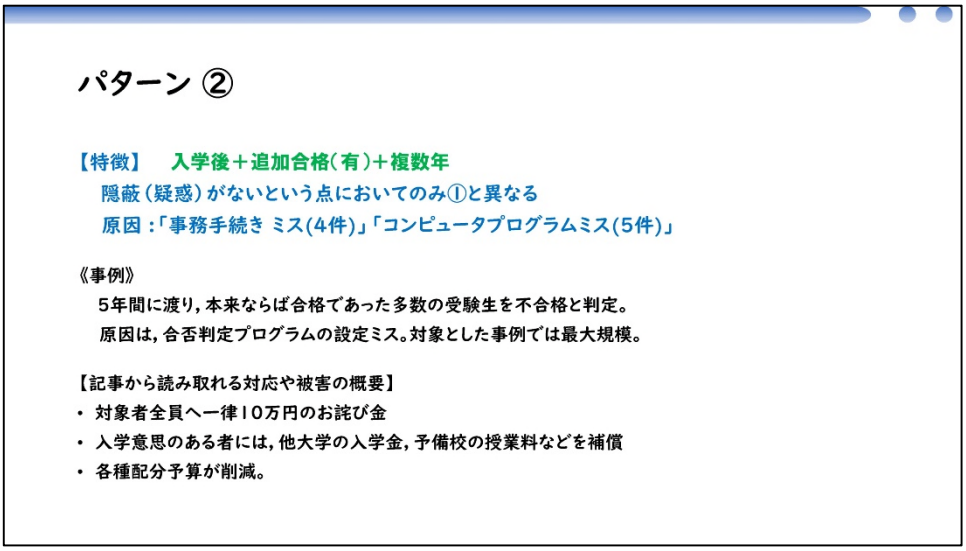
ここではこの中からいくつか事例を紹介したいと思います。個別の名称は入っていません。

こちらは最も深刻なパターン①です。入学後に判明し，追加合格が出ました。そして複数年影響があって，隠蔽疑惑があったものです。事例としては，2 年間にわたって，本来合格であった数十名の受験生を不合格と判定してしまいました。原因はプログラムの設定ミスで，その事実を隠蔽していたという記事でした。

記事から読み取れる対応や被害の概要としては，一律 20 万円のお詫び金，他大学の入学

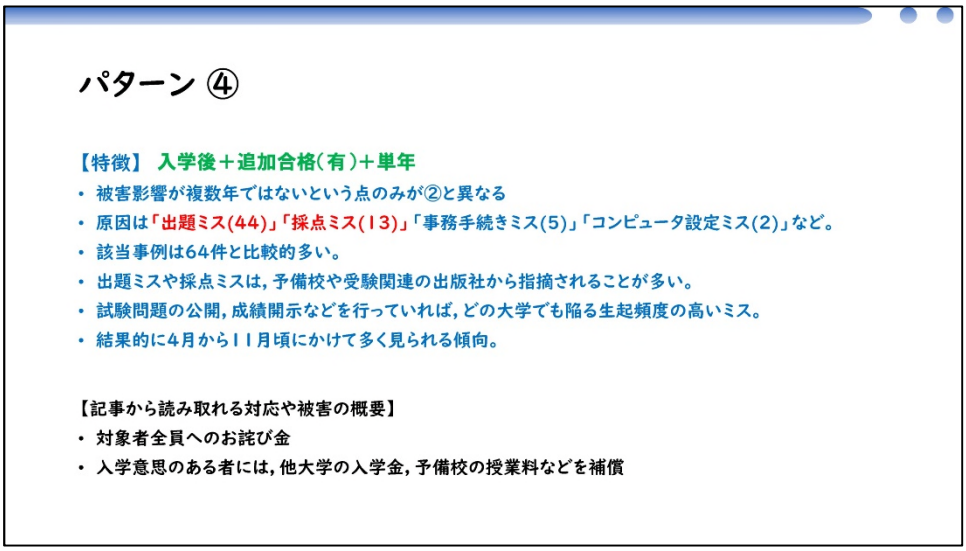
金や予備校の授業料の補償，入学を諦めた者には大卒者の生涯賃金との差額の一部を補償すること，あとは在学生の就職活動における風評被害への配慮を求めること，あとは複数の配分予算がゼロになったということが挙げられます。

入試ミスを隠していたという点で，他の事例とは状況が違うと報道されていました。

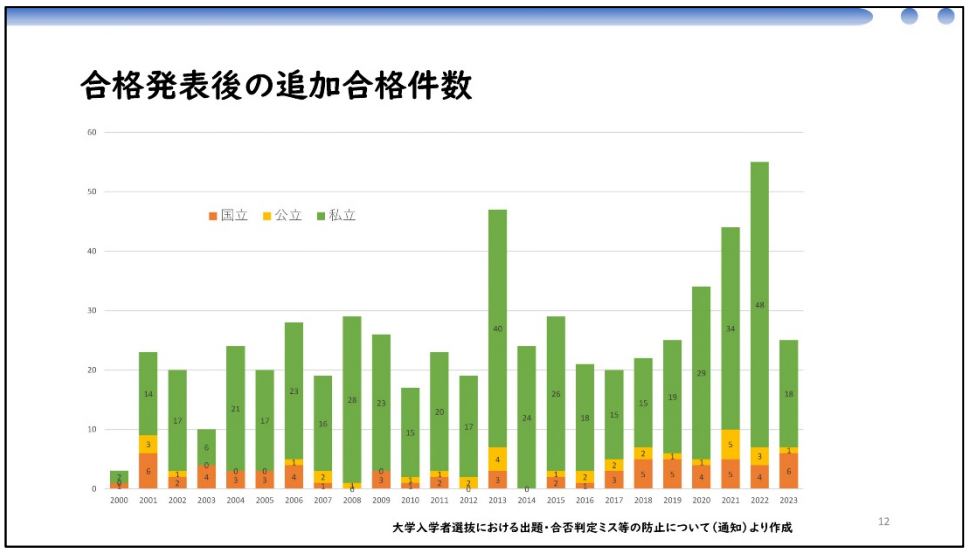


次のパターン②は，入学後に判明して追加合格があり，影響が複数年に及んだケースです。隠蔽疑惑がないという点において，①と異なります。原因としては，コンピュータプログラムミスや事務手続きミス等，複数ありました。

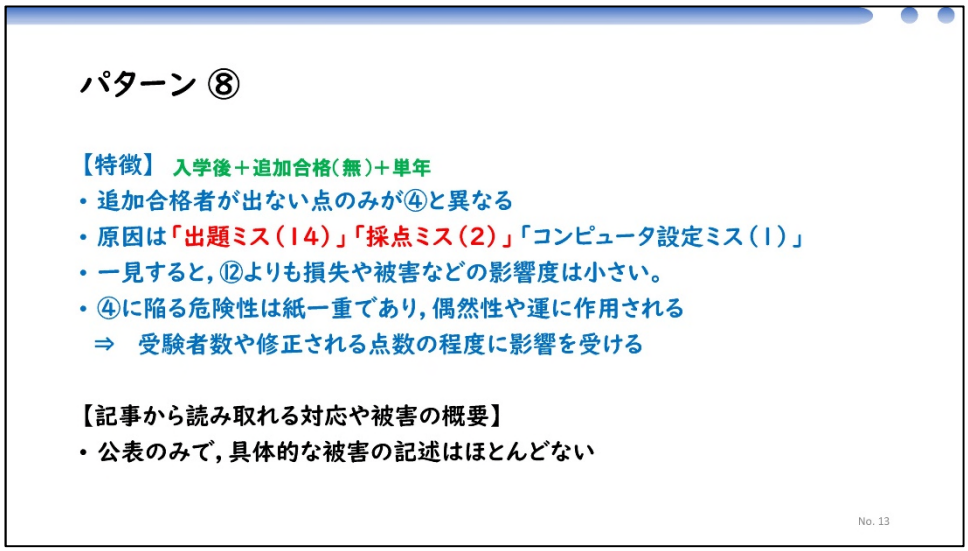
一番大きかったのは，5 年間にわたって，本来だったら合格であった多数の受験生が不合格となりました。400 名程度だったと記憶しています。一律に 10 万円のお詫び金であるとか，先ほど申しました補償であるとか，大学への配分予算が削減されたといったことが書かれています。



パターン④は，入学後に判明して追加合格者が生じて，影響が単年度のみのケースです。現在も比較的多く生じているケースではないかと思います。影響年度が複数年ではないという点が②と異なるということで，出題ミスや採点ミスを原因とするものも多く見られます。出題ミスや採点ミスは予備校，受験関連の出版社から指摘されることが多いです。また試験問題の公開や成績開示などを行っていれば，どの大学でも陥る可能性のある頻度の高いミスになります。結果的に 4 月から 11 月ごろにかけて多く見られるパターンになります。

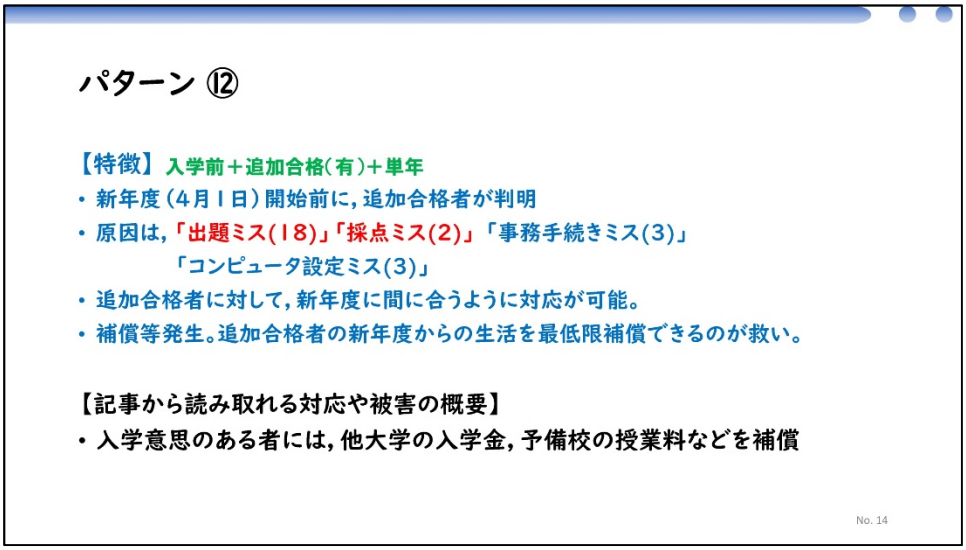


こちらは 2000 年から 2023 年までの追加合格件数の推移ですが，比較的増えているように見えます。近年，50 件を超えるという年もあったりします。可能な限り追加合格は避けたいところです。

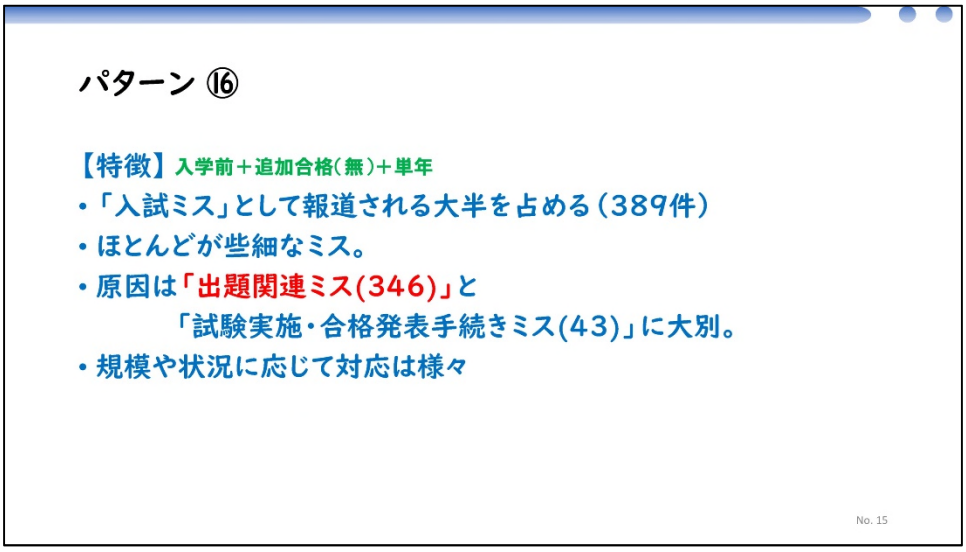


パターン⑧は，入学後に判明して，追加合格が出ない，そして単年度のみというケースです。これも原因としては，出題ミスや採点ミスがあります。一見すると，次に紹介する⑫よ

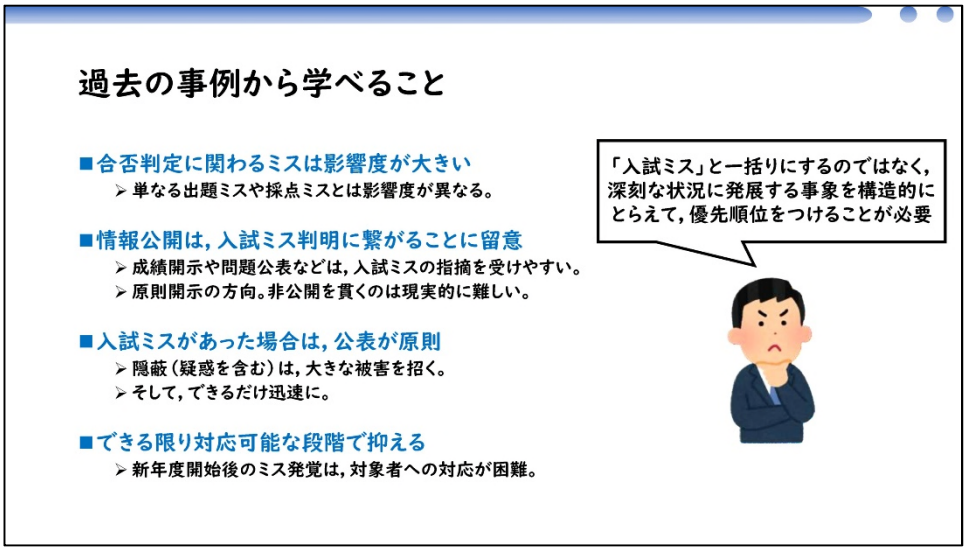
りも損失とか被害の影響度が小さく見えます。追加合格が出ないだけで影響度は小さく見えますが，その前に紹介した④に陥る危険性がありますので，偶然性や運に左右される非常に危ないパターンだと思われます。



そして⑫は入学前に判明して，追加合格が出ている，そして影響は単年度であって，入学前の 3 月までに判明したタイプのものです。出題ミスや採点ミスが原因となっています。追加合格者に対して，新年度の新しい生活に間に合うように対応が可能というところが，入学年度をまたがないというところの１つの特徴になります。補償等は発生します。



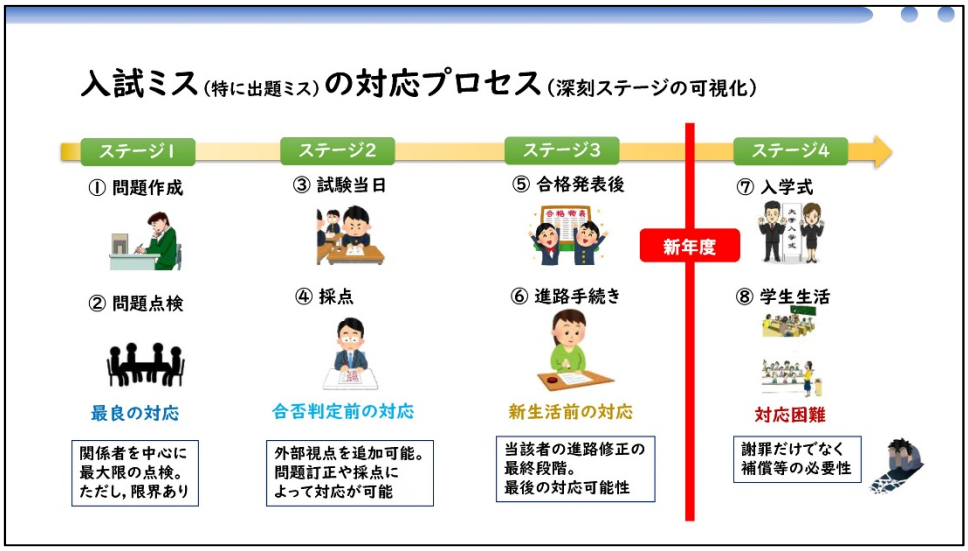
そして最後に最も多いのがパターン⑯で，入学前，追加合格が出ない，そして単年というケースです。入試ミスとして報道される大半を占めていました。ほとんどが些細なミスといえます。



こういったパターンに分けてみると，その性格が見えてくるのですが，過去の事例から学べることとして，合否判定に関わるミスは当然影響が大きいです。単なる出題ミスや採点ミスとはインパクトが大きく異なります。また情報公開というのは入試ミス判明につながることに留意しておかなければいけません。当然のことですが，こういった開示や公表によって外部からの指摘を受けやすくなります。そして原則開示の方向にありますので，非公開を貫くというのは現実的に難しいと思います。

もし入試ミスがあった場合は，公表が原則です。受験生に配慮すると公表を控えたほうがいいのではないかなど，いろいろな考え方があるかもしれませんが，隠蔽の疑いをかけられることになれば大きな被害となります。判明次第，迅速に公開・公表することが重要だと思います。

そして最後に，できる限り対応可能な段階で抑えたいということです。新年度開始後にミスが発覚すると，その対象者，受験生の対応が困難になります。



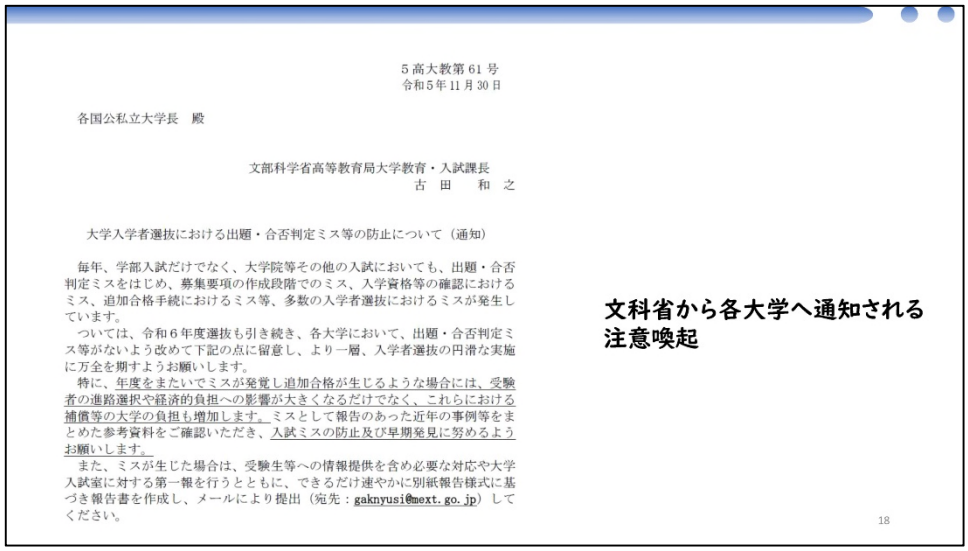
やはり入試ミスとひとくくりにするのではなくて，深刻な状況に発展する事象を構造的

に捉えることが必要だと思います。

そういった入試ミスの対応について，そのプロセスを可視化してみました。

まずステージ１は問題作成・問題点検の段階です。この時点でしっかりと点検して対応ができれば，最良といえます。ステージ２は試験当日や採点の時，合否判定前の対応です。外部の視点を入れること，問題訂正や採点によって対応が可能な段階です。そしてステージ３は合格発表後です。入学手続きを行う 2～3 月の頃であり，対象者の進路修正の最終段階であるため，最後のチャンスと言いますか，対応可能性がある段階です。

しかし年度をまたぎますと，受験生も気持ちを切り替えて，新しい生活に向けて動いている時期での対応となり，困難な部分が多くあります。つまりこの新年度に移っているかという点は非常に重要なポイントになります。



5高大教第61号
令和5年11月30日

各国公私立大学長　殿

文部科学省高等教育局大学教育・入試課長
古　田　　和　之

大学入学者選抜における出題・合否判定ミス等の防止について（通知）

毎年、学部入試だけでなく、大学院等その他の入試においても、出題・合否判定ミスをはじめ、募集要項の作成段階でのミス、入学資格等の確認におけるミス、追加合格手続におけるミス等、多数の入学者選抜におけるミスが発生しています。

ついては、令和６年度選抜も引き続き、各大学において、出題・合否判定ミス等がないよう改めて下記の点に留意し、より一層、入学者選抜の円滑な実施に万全を期すようお願いします。

特に、年度をまたいでミスが発覚し追加合格が生じるような場合には、受験者の進路選択や経済的負担への影響が大きくなるだけでなく、これらにおける補償等の大学の負担も増加します。ミスとして報告のあった近年の事例等をまとめた参考資料をご確認いただき、入試ミスの防止及び早期発見に努めるようお願いします。

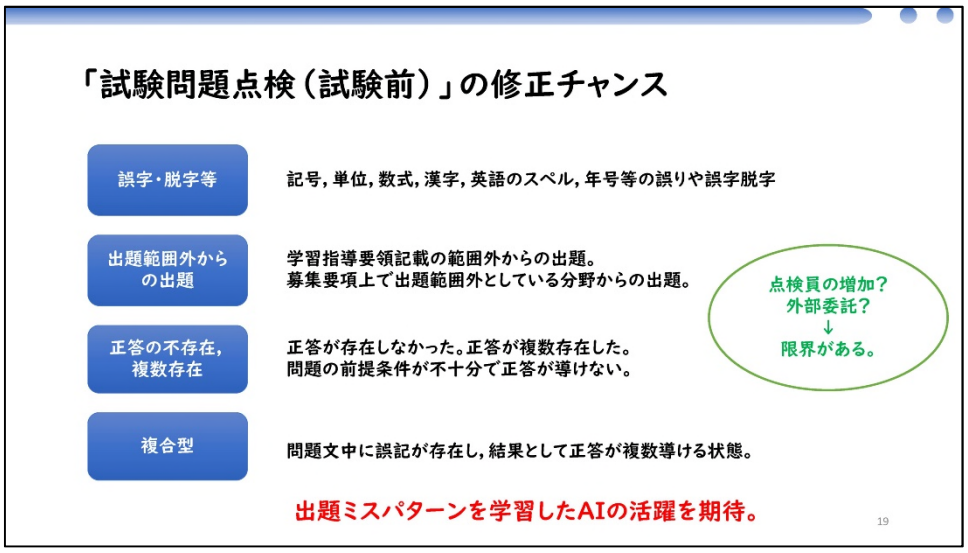
また、ミスが生じた場合は、受験生等への情報提供を含め必要な対応や大学入試室に対する第一報を行うとともに、できるだけ速やかに別紙報告様式に基づき報告書を作成し、メールにより提出（宛先：gaknyusi@mext.go.jp）してください。

18

文科省から各大学へ通知される注意喚起

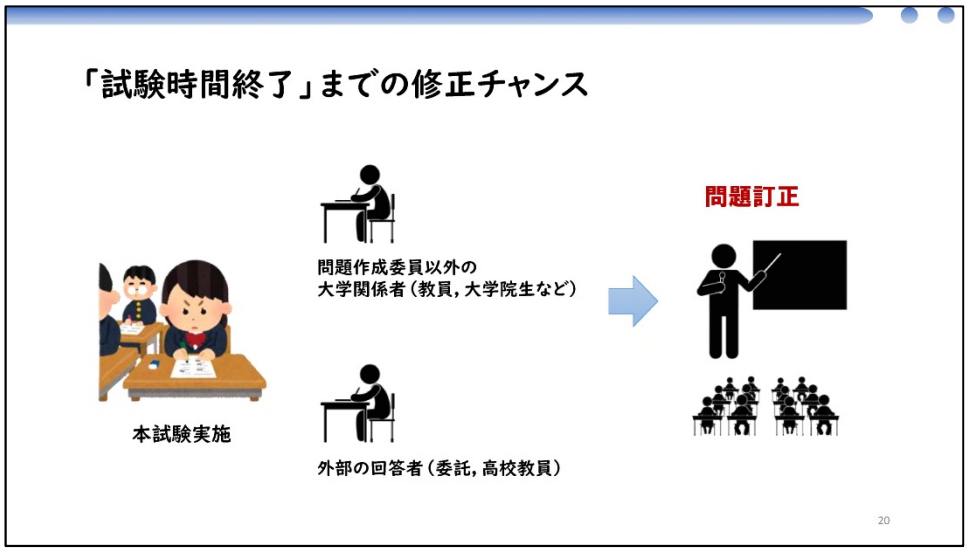
そういったこともあり，文部科学省からも，このようにちゃんと下線を引いて，年度をまたいでのミスには注意してくださいということがしっかりと通知されています。

実は数年前までは，年度またぎを強調した記載はなかったのですが，やはり年度またぎの入試ミスが大きな影響をもたらしているということで，こういった注意喚起がなされるようになったと思います。

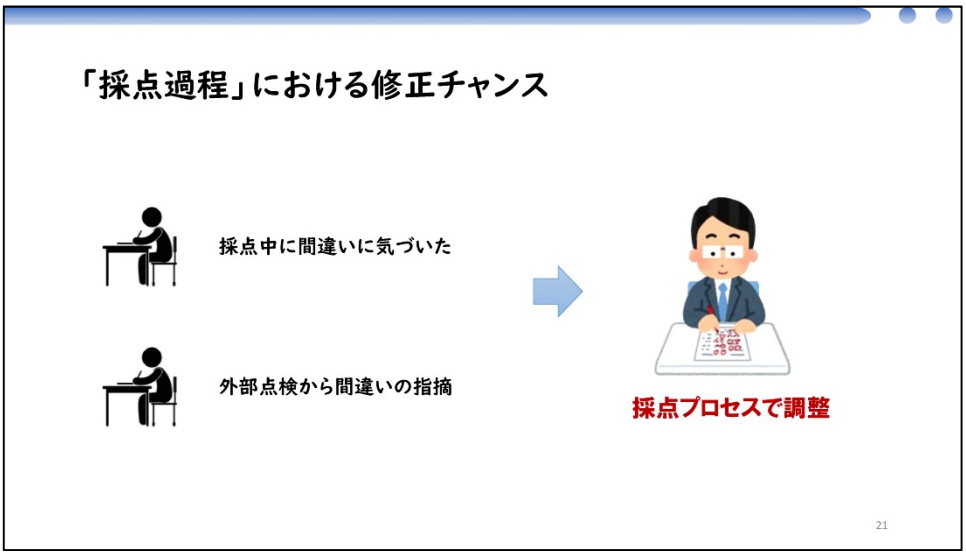


先ほどの入試ミスの対応プロセスをもう少し細かく見ていきたいと思います。試験問題点検，試験前の修正チャンスです。出題範囲外からの出題，正答の不存在，複数存在，複合型といった形式的なものをしっかりとチェックする必要があります。

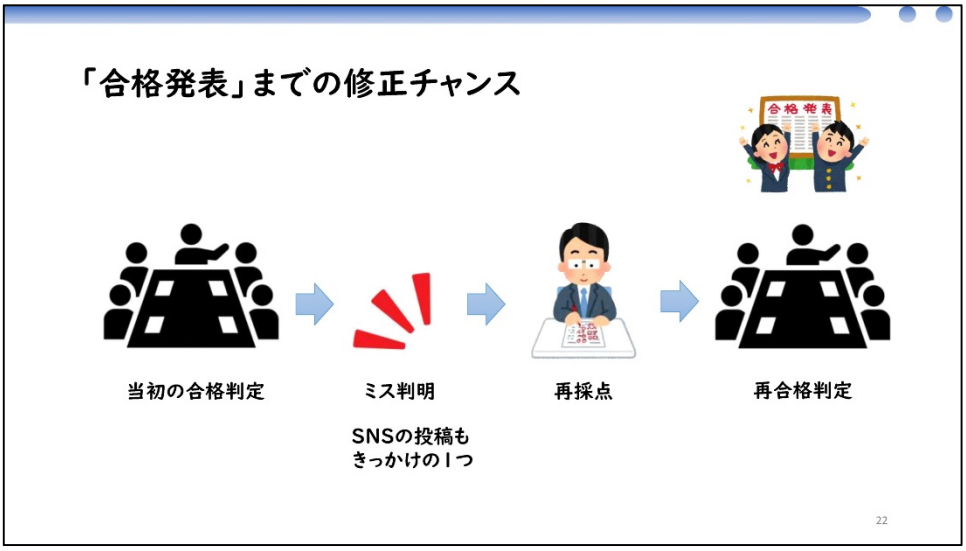
この確認をさらに強化するための方策を考えると，点検員を増加するとか，外部に委託するといった選択肢があるかもしれませんが，これはどこまでコストをかけるかというところとも関わってきますし，やはり限界があります。そういった意味では，出題ミスのパターンを学習した AI の活躍を期待したいと個人的には思っています。



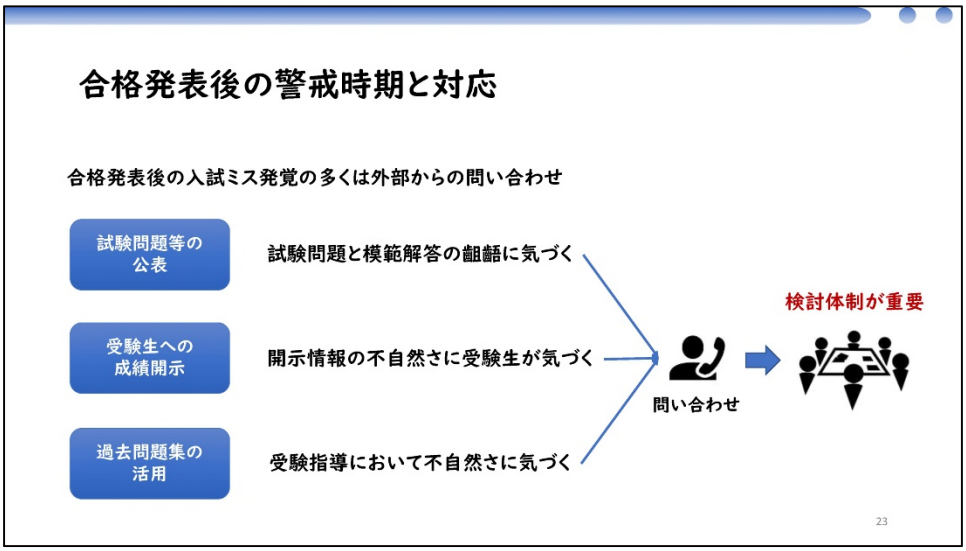
次は「試験時間終了」までの修正チャンスです。本試験を実施しているタイミングであり，受験生が試験問題を目にしています。同じ時間帯に，例えば問題作成委員以外の学内の教員や大学院生，あるいは委託した外部の回答者や連携協定等を結んだ高校の先生に一緒に解いてもらうことができます。そこで試験時間中にミスが判明すれば，問題訂正という形で対応ができます。こういった修正のチャンスがあります。



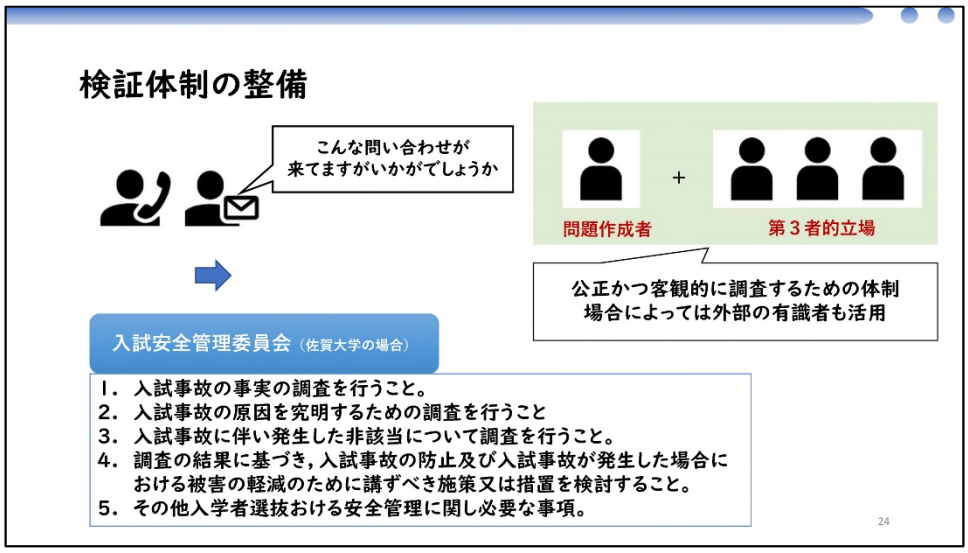
次に採点過程においても修正のチャンスがあります。採点中や，試験終了後に予備校等の外部機関に点検してもらった際に間違いに気付くケースがよくあります。そういった情報に基づいて，採点プロセスで修正するということも１つのチャンスになります。



そして合格発表までの修正チャンスです。当初の合格判定後に，SNS への投稿など様々なきっかけによりミスの可能性が指摘されます。そういったものも重要な情報ととらえて検討し，ミスが確定次第，再採点，再合格判定を行うことができますので，修正チャンスといえます。



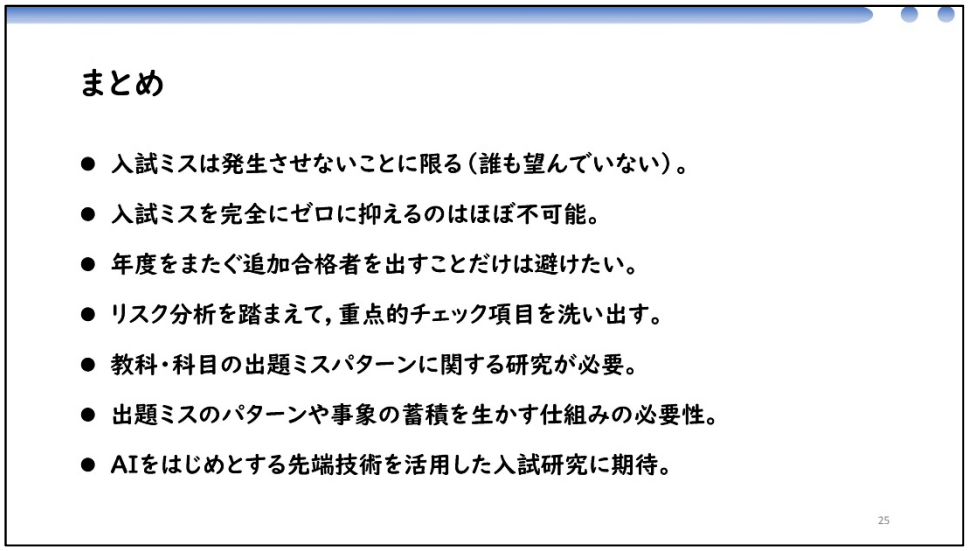
そこまでやっても，やはり合格発表後にも外部からの指摘はあるわけです。試験問題の公表や受験生への成績開示のタイミング，受験指導現場において過去問を活用している際に気付き，大学に問い合わせがあるということはよくあるケースだと思います。



その問い合わせに対して十分検討するための体制づくりが極めて重要だと思います。例えば「入試課にこのような問い合わせが来ていますが，いかがですか」と問題を作成した先生だけに聞いてしまうと，「それは大丈夫だ。問題はないのではないか」ということで終わってしまいかねません。

これは大きな問題につながるリスクがあります。問題作成者以外の第三者的な立場の方にも検討に加わってもらって，できる限り，客観的に調査する体制を整備することが重要になってくるかと思います。

ちなみに佐賀大学でも安全管理委員会を立ち上げて，非常にグレーな問い合わせが来た時にはこういった委員会で検討をすることにしています。



以上のことをまとめます。入試ミスは発生させないことに限ります。誰も望んでいません。誰も幸せにならないし，みんな一生懸命やっているのですが，どうしても生じてしまいます。入試ミスを完全にゼロに，半永久的に抑えるのはほぼ不可能ということです。

しかし入試ミスにも軽微なものから重大なものまであることを考えれば，少なくとも年度をまたぐ追加合格だけは避けたいです。これだけは避けたいという思いで注力して取り組むことが必要だと思いますが，それでもやはり難しい面はあるかと思います。

そういったリスク分析を踏まえて，重点的なチェック項目を洗い出すことが必要だと思います。入試全体という視点だけではなく，科目・教科の出題パターンに関する研究や知見も重要だと思います。

例えば数学の期待値という言葉は，数学 A の範囲になったり，数学 B の範囲になったりして，そのたびに「出題範囲外からの出題」という入試ミスになり得ます。

このような教科，科目ごとの生じやすい入試ミスのパターンという知見の積み上げは必要だと思います。

そして最後に，生成 AI をはじめとする先端技術を活用して，出題ミスを防ぐための技術開発に取り組んでいくことが必要なのではないかと思います。以上で，私の報告は終わらせていただきます。ありがとうございました。

【荘島・司会】　西郡先生，ご発表をありがとうございました。さまざまな入試ミスについての過去の事例の分類とパターン別の対応方法についてご報告いただきました。

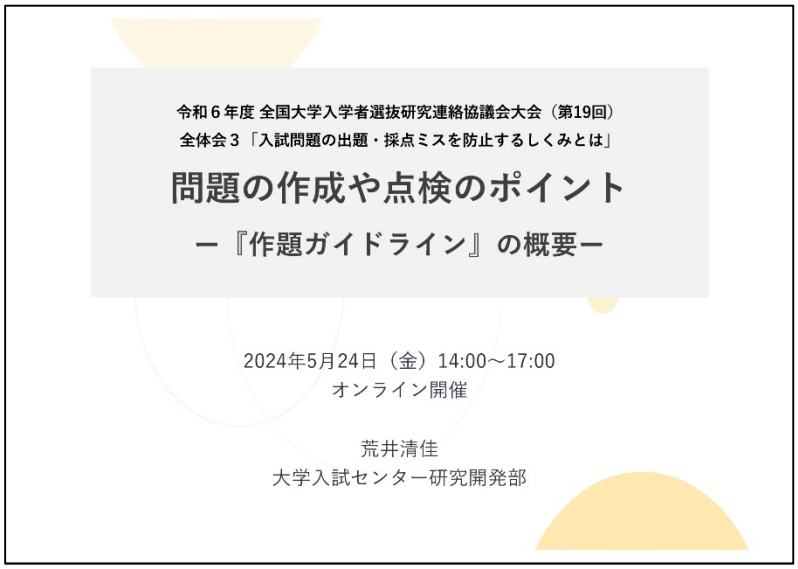
それでは大学入試センターの荒井先生より，「問題の作成や点検のポイント―『作題ガイドライン』の概要―」という題目でご報告していただきます。荒井先生，よろしくお願いします。■

全体会 3　◉ 報告②

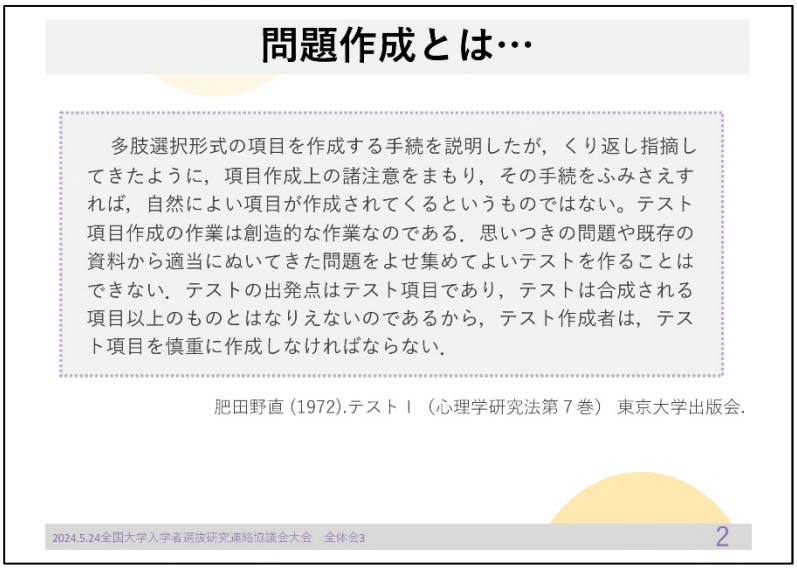
問題の作成や点検のポイント－『作題ガイドライン』の概要－

■荒井　清佳（大学入試センター 研究開発部准教授）

大学入試センター研究開発部荒井です。本日は，「問題の作成や点検のポイント」というタイトルで，大学入試センター研究開発部が作成しました『作題ガイドライン』の概要をご紹介したいと思います。

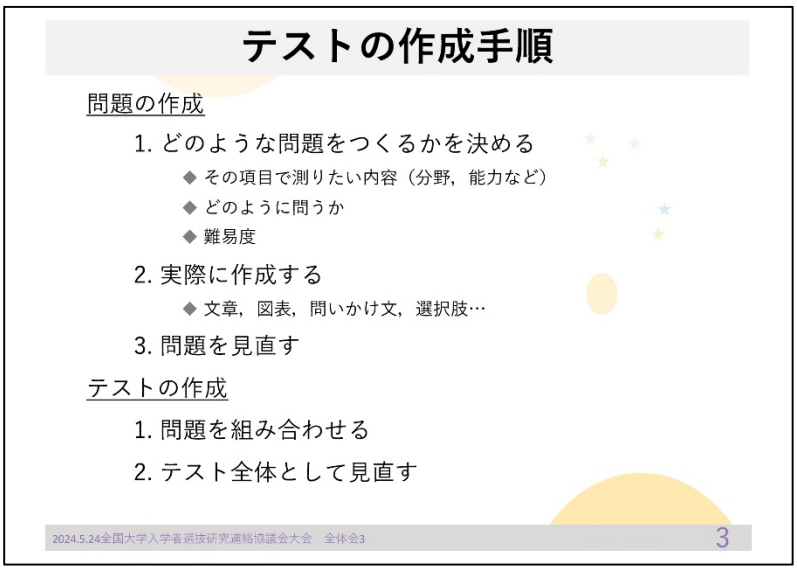


このガイドラインは問題作成や点検のポイントを文書化してまとめたものです。入試ミス防止の一助となればと思い，ご紹介させていただきます。



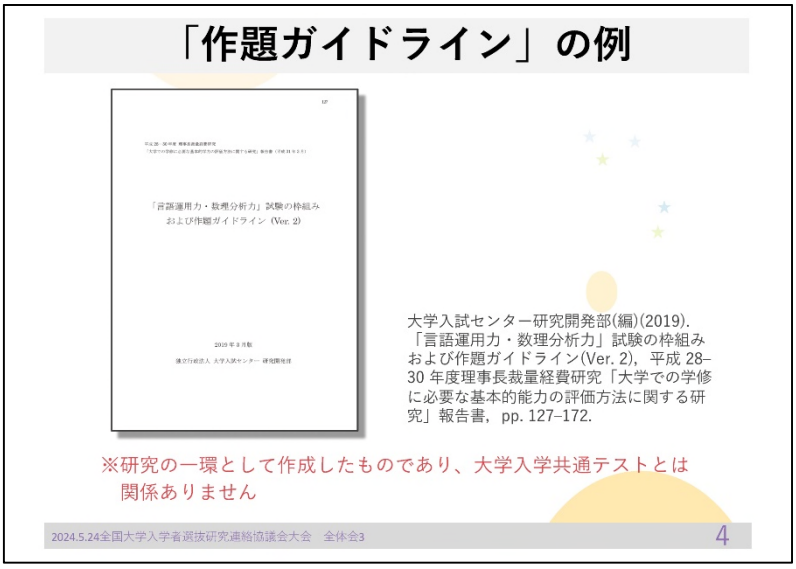
こちらは問題作成に関する『テストⅠ』という本の一節です。本報告は問題作成に焦点を当てたものなので，こちらのスライドを用意しました。2 行目に「項目作成上の諸注意をまもり，その手続をふみさえすれば，自然によい項目が作成されてくるというものではない。テスト項目作成の作業は創造的な作業なのである」とあります。良い問題を作ろうとされた方はお分かりになるかと思うのですが，作成自体に生みの苦しみのようなものがあり，ここの一節にある「創造的な作業」という言葉にご納得いただけるのではないかと思います。

しかし，本日注目したいのはこの文章の前段の部分です。「項目作成上の諸注意をまもり，その手続をふみさえすれば，自然によい項目が作成されてくるというものではない」とあります。言い換えますと，少なくともその諸注意を守る必要はあるということになるかと思います。本日，ご紹介します『作題ガイドライン』はこのような諸注意をまとめただけのものではないのですが，それに近い存在のものと思っていただけたらと思います。

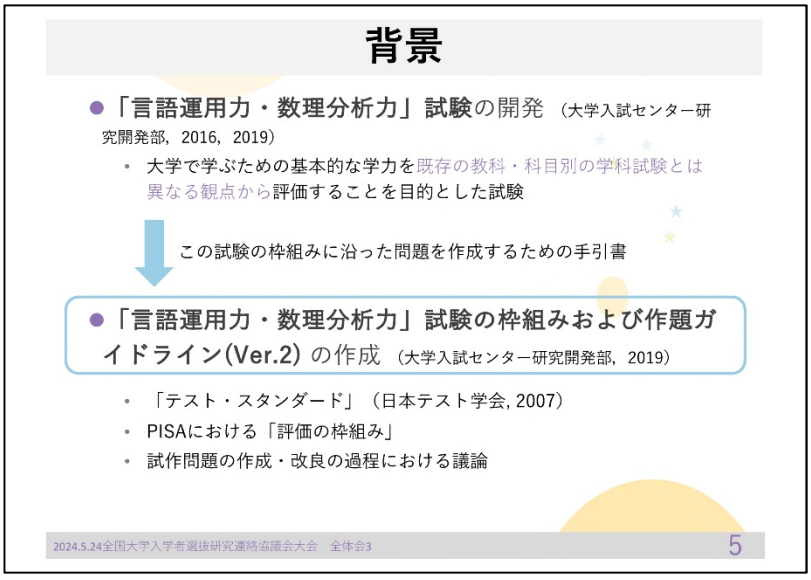


こちらはテストの作成手順を簡単にまとめたものです。問題作成前にどのような問題を

作るのかを決め，作成後には問題の点検や見直しを行います。いくつか問題が出来上がった後には，問題を組み合わせ，テスト全体として見直します。このように，実際の作成作業以外の部分の作業も付随します。これらは全部，『作題ガイドライン』に項目として入っている内容です。



こちらが『作題ガイドライン』です。大学入試センター研究開発部が作ったもので，発行した報告書の一部です。注意書きのとおり，こちらは研究開発部の研究の一環として作成したもので，大学入学共通テストとは関係がありませんのでご留意いただければと思います。



この『作題ガイドライン』の作成についてご説明します。約 10 年前，大学入試センター研究開発部では，「『言語運用力・数理分析力』試験の開発」という研究を行っていました。この試験は，大学で学ぶための基本的な学力を既存の教科・科目別の学科試験とは異なる観

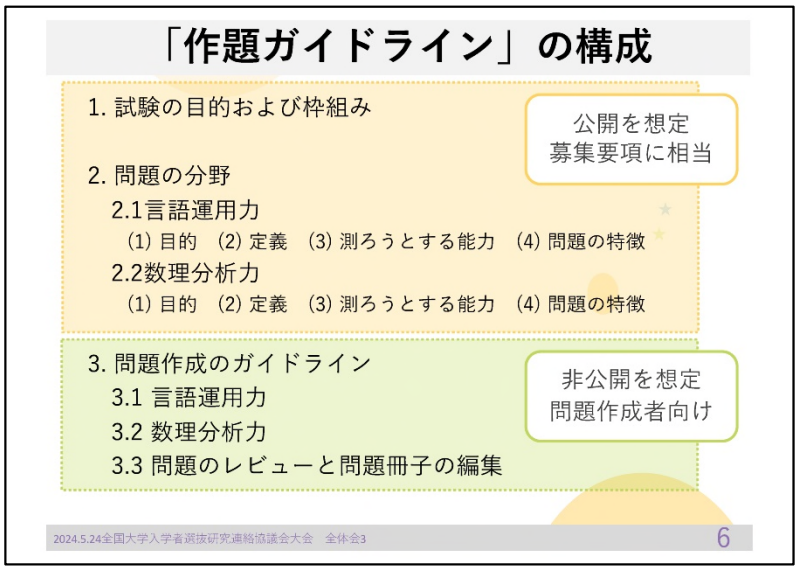
点から評価することを目的とした試験でした。試験というものは継続的に問題を作成していく必要がありますので，この試験の枠組みに沿った問題を作成するための手引書が必要でした。

そして出来上がったのが，「『言語運用力・数理分析力』試験の枠組みおよび作題ガイドライン（Ver.2)』というものになります。本日はこれを『作題ガイドライン』と呼んでいます。

この『作題ガイドライン』の作成に当たっては，日本テスト学会が編集した『テスト・スタンダード』を参考にしました。『テスト・スタンダード』にはテスト開発の際に明確にするべき事項が挙げられています。なお，この『テスト・スタンダード』の基本条項 1.3 には，「質問項目作成のための手引書を用意すること」とも書かれていますので，それにもかなったものになっています。

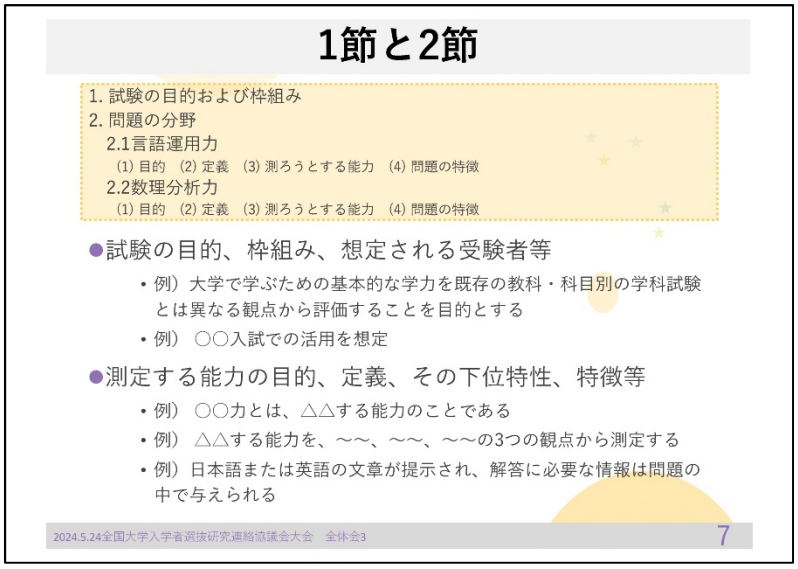
またこちらの「言語運用力・数理分析力」試験は，教科・科目別ではない試験でしたので，PISA テストの『評価の枠組み』という冊子も参考にしました。

『Ver.1』を作成し，その後，作成・改良の過程や，作題に関わった方々の議論などを踏まえ，『Ver.2』が完成しました。



こちらが『作題ガイドライン』の構成です。3 節に分かれています。1 節と 2 節は受験者や外部への公開を想定した内容です。入試で言えば募集要項に相当するものではないかと思います。「試験の目的および枠組み」，あるいは「問題の分野」について書いてあります。3 節は非公開を想定していて，問題作成者に向けた内容になっています。

この『作題ガイドライン』自体は多肢選択式の問題を想定して作成されていますが，内容自体は選択式に限らず，短答式や記述式等の問題にも当てはまる内容だと考えています。本日はなるべく一般化してご紹介し，具体例として，時々この言語運用力のお話を混ぜていきたいと思っています。では次のスライドから各節の中身を見ていきます。

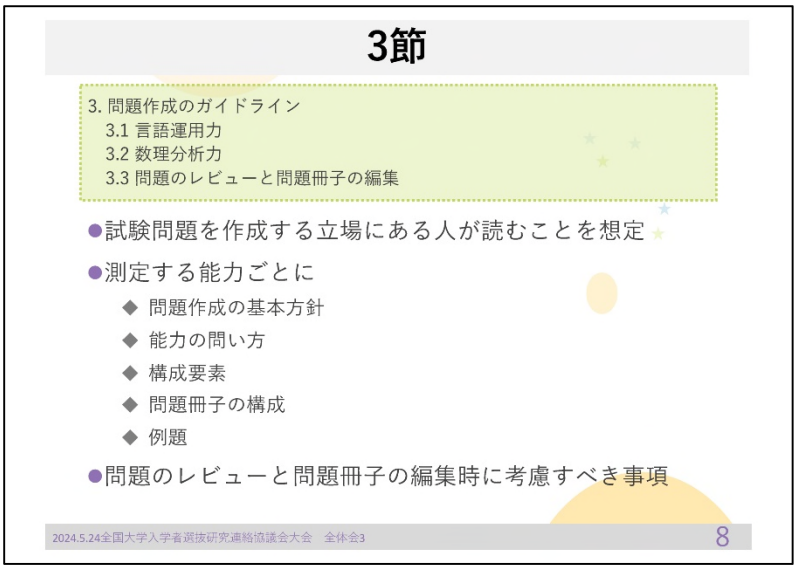


まず１節と２節です。こちらは受験者や大学関係者等への公開を想定しています。１節では，試験の目的や枠組み，想定される受験者等について書いてあります。２節では，測定する能力ごとに，目的や定義，問題の特徴等が記載されています。またその測定する能力をさらに下位の分野に分けて測定する場合には，その下位の分野，ここでは「下位特性」とありますが，その詳細等について書いてあります。

例としてお示ししているのは，言語運用力です。言語運用力とはどのような能力であるのか，目的や定義を示しています。また，言語運用力をさらに３つの能力に分けて測定していましたので，その３つの下位分野についての紹介もしています。

これを読んだだけではどのような問題が出題されるのかが分かりませんので，問題の特徴として，例えば「解答に必要な情報は問題の中で与えられる」ことが記されています。

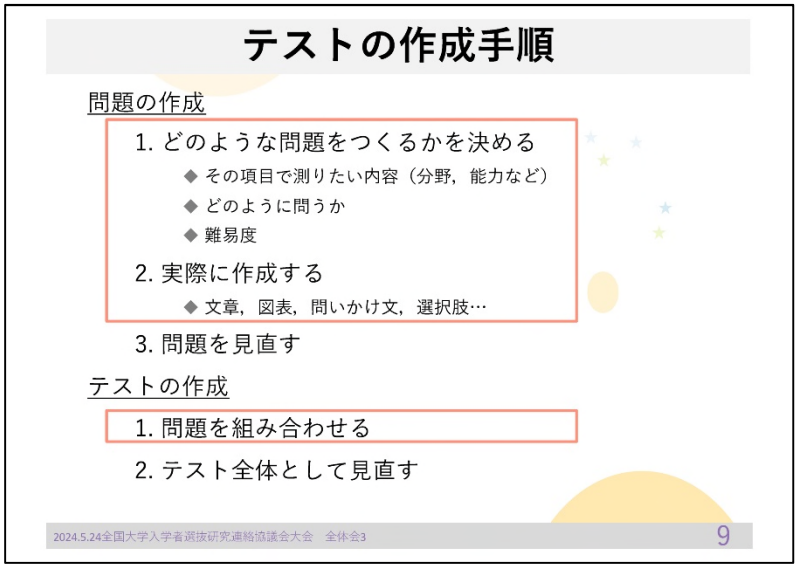
この１節と２節の目的は，受験者が試験に対し不安を抱かないよう，どのような試験であるのかを理解してもらうことですので，サンプル問題を提示することも考えられます。



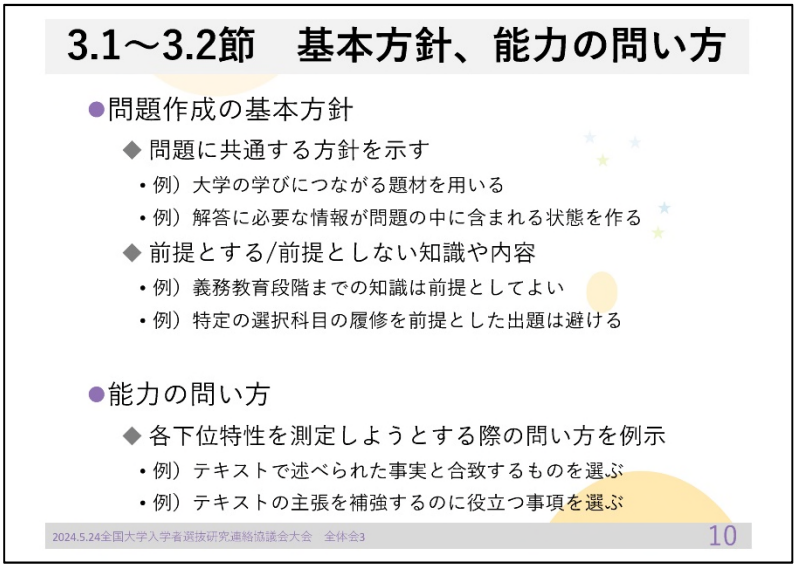
３節は，試験問題を作成する立場にある方が読むことを想定しています。この『ガイドラ

イン』では 3.1 節では言語運用力について，3.2 節では数理分析力について説明されています。測定する能力によって，3 節の内容は異なってくると思いますが，共通する内容としては，問題作成の基本方針，能力の問い方，構成要素，問題冊子の構成，例題などがあると考えられます。

また最後の 3.3 節には，問題のレビューと冊子を編集する際に考慮すべき事項を示しています。



テストの作成手順を再び提示しています。まずは問題作成とテストの作成に関わるところを見ていきたいと思います。

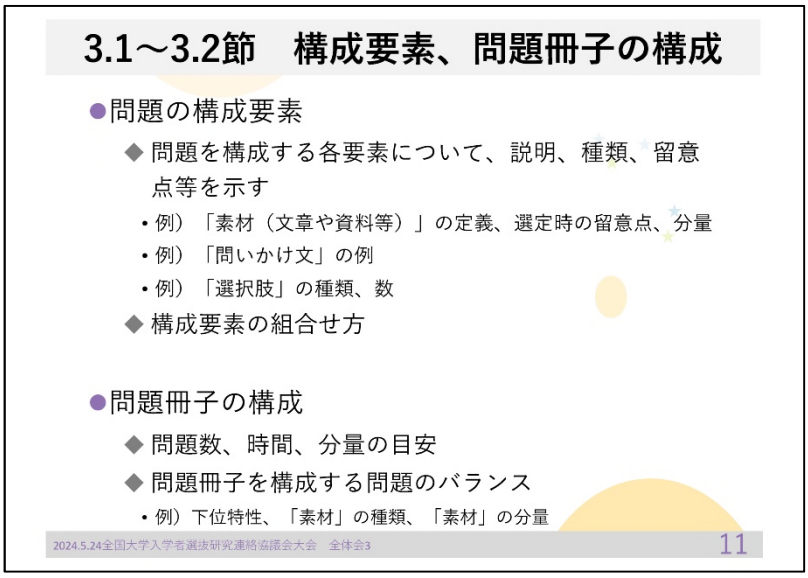


『作題ガイドライン』では 3.1 節から 3.2 節に相当します。まず，問題作成の基本方針が述べられています。その分野の問題全てに共通する方針を示しておきます。

言語運用力の例では，例えば「大学の学びにつながる材料を用いる」,「解答に必要な情報が問題の中に含まれる状態を作る」等, 先ほどの 1 節, 2 節と重複する部分もあるのですが，重要な点を書いています。

また問題を解くに当たり，前提とする，あるいは前提としない知識等を示し，問題作成の際に留意しておくべきことをまとめています。

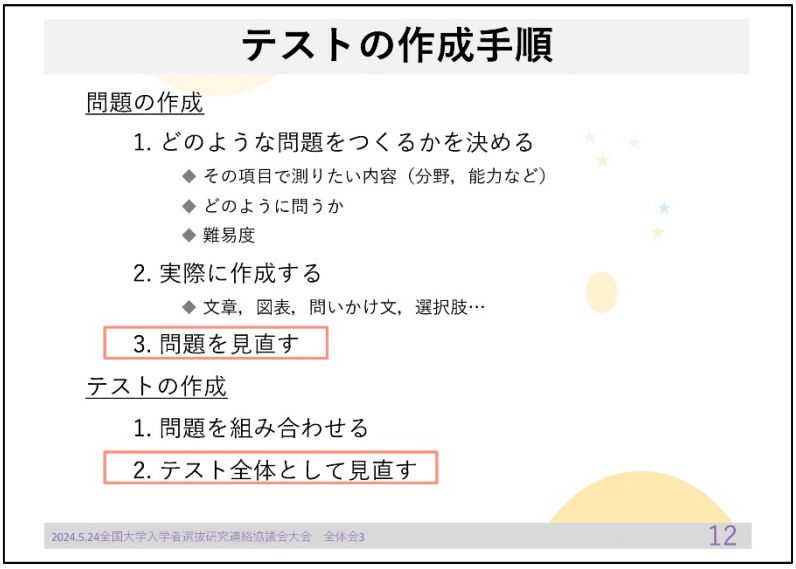
また「能力の問い方」も示しています。下位分野ごとに，典型的な問い方の例が考えられる場合には，それを示しておくものです。この問い方の例があることで，作成する際の助けにもなりますし，また試験を継続的に作成する場合には，試験としての統一感をもたせることができます。



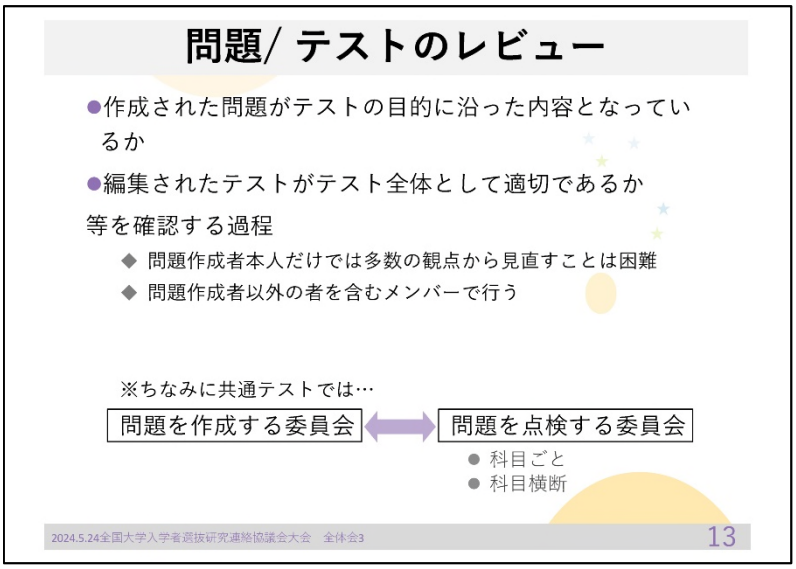
その他に，問題の構成要素があります。問題は，「問いかけ文」,「選択肢」, 問う時の「素材」等，いくつかの要素から構成されています。言語運用力では，文章を読む問題がありましたので，その「素材」の定義，選定時の留意点,「問いかけ文」の例,「選択肢」の種類や数,「構成要素の組合せ方」などを掲載しています。

これらのことは，問題のミスを防ぐという意味で，重要なポイントの 1 つと考えています。問いかけ文が間違っていたり，曖昧であったりすると，答えられない問題になってしまいます。また選択式でマークシートを用いる場合には，マークシートごとに記号の種類や数が異なります。どのようなマークシートを使っているのかを明記しておらず，例えばマークシートにない記号を選択肢として作ってしまった場合には答えられない問題になってしまいます。非常に形式的なところですが，作成・点検の段階で必ず押さえておきたい内容となります。

また最後に「問題冊子の構成」について，問題を組み合わせて冊子を作ることがほとんどかと思います。問題数や時間，分量等の目安を示しておくことで，適切な問題冊子の構成につなげることができます。



続いて，後半になります。テストの作成手順の見直しの部分です。「問題を見直す」，「テスト全体として見直す」という部分になります。

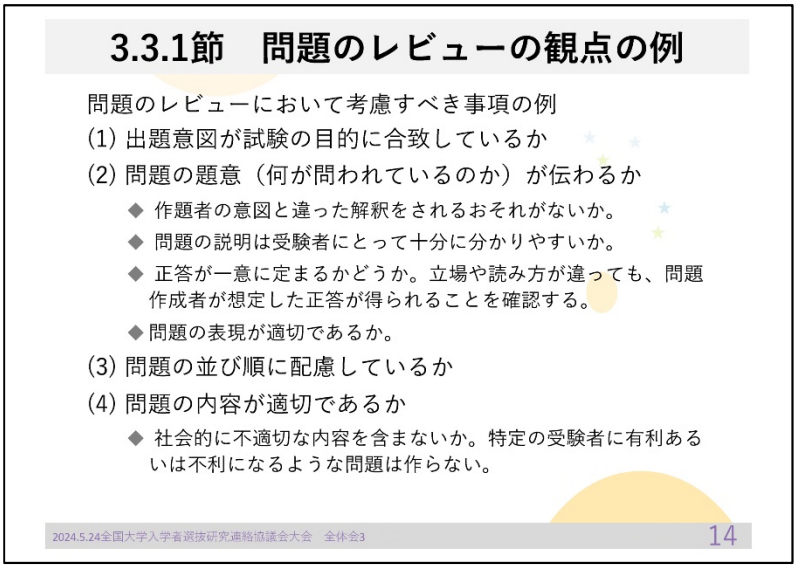


まず「問題/テストのレビュー」についてです。点検というと，作成より簡単な作業のように思われがちですが，むしろ点検と作成が一体になって進んでいくところがあると思います。問題のレビューでは，作成された問題がテストの目的に沿った内容となっているかどうかを確認します。テストのレビューでは，編集されたテストがテスト全体として適切であるかどうかを確認します。

問題を作成した本人は何回も問題を見たり，解いたりしているため，例えば誤字・脱字があったとしても，自分で見つけるのはなかなか難しい状態になります。そのため，問題作成者以外のメンバーで行うことが望ましいと考えられています。

ちなみに共通テストでは，問題作成・点検についてそれぞれ委員会があるとホームページ

上に書いてありました。

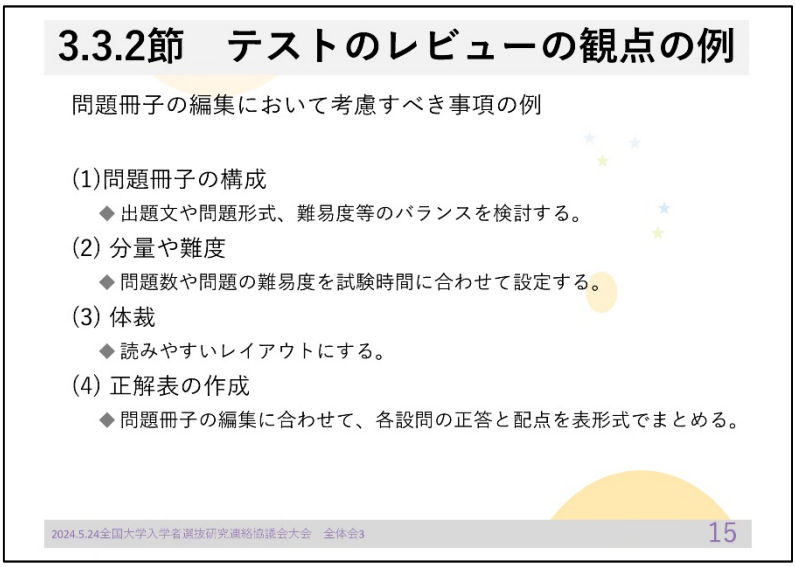


3.3 節の問題のレビューとテストのレビューについての記載は，全体としては 2 ページ少しです。問題の種類や測定する能力によらず，点検の際に考慮すべき観点の例を挙げてあります。

まず問題のレビューの観点として「(1) 出題意図が試験の目的に合致しているか」,「(2) 問題の題意 (何が問われているのか) が伝わるか」,「(3) 問題の並び順に配慮しているか」,「(4) 問題の内容が適切であるか」があります。

これらのうち，問題作成時のミスに特に関連するのはこの（2）ではないかと思います。例として「問題の説明が受験者にとって分かりやすいかどうか」を考えてみますと，たとえ良い問題であっても，作成者の独りよがりで受験者に伝わらない場合には，成立しない問題になってしまうことがあり得ます。

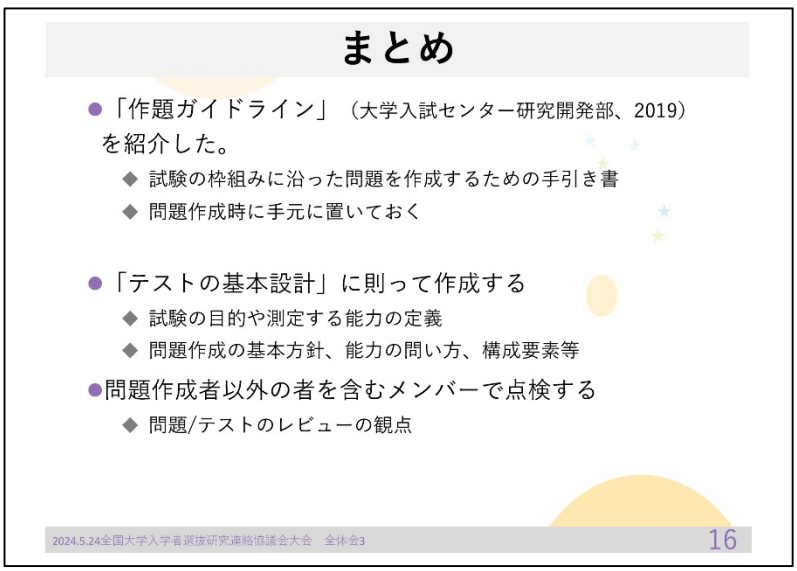
また，「正答が一意に定まるかどうか」も重要です。正答が複数できてしまう，正答がないということがないよう，立場や読み方が違っていても正答になるかどうかを確認する必要があります。例えば言葉の意味合いが年齢層によって変わってきている場合がありますが，そのような単語は避ける必要があります。入試問題であれば受験生の立場からの点検が必要になります。



続いて，テストのレビューです。問題冊子の構成のバランス，分量や難度，体裁，正解表の作成等について書いてあります。入試ミスとの関連を考えると「(4) 正解表の作成」が大切ではないかと思います。

テストは多くの問題により構成されており，配点がそれぞれ異なることがあります。選択式だけならまだしも，記述式や短答式などが混ざっていたりすると，構成が複雑になっている場合があります。この正解表を作成することで，問題数や合計点に誤りがないか確認することができます。

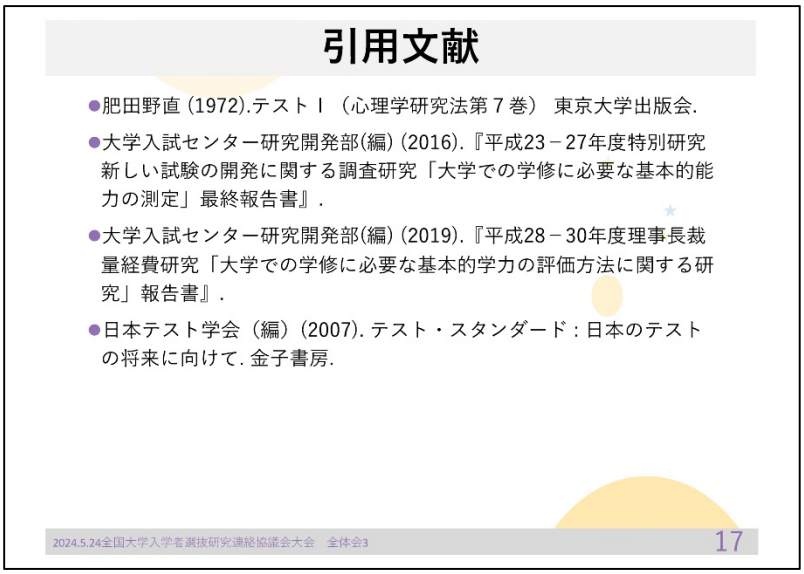
解答用紙を作った場合にも，問題数と解答用紙がきちんと合っているかどうかの確認に役立ちます。従って採点時のミスを防ぐことにつながるのではないかと思います。



最後に，まとめです。本報告では，大学入試センター研究開発部が作成した『作題ガイドライン』を紹介しました。この『作題ガイドライン』は試験の枠組みに沿った問題を作成す

るための手引書に当たります。問題作成時に手元に置いておくようなイメージです。

問題作成時のミスの防ぐ仕組みの 1 つとして，このようなガイドラインを用意し，テストの基本設計にのっとって作成することが挙げられると考えます。また，問題のレビューや点検は，非常に大切です。問題作成者本人による点検には限りがありますので，本人以外の者を含むメンバーで点検をすること，またその際には点検の観点を共有することが肝要ではないかと考えています。



報告は以上になります。ご清聴をありがとうございました。

【荘島・司会】　荒井先生，ご発表をありがとうございました。作題に関する入試ミスをいかに減らすかという観点から，『作題ガイドライン』が入試ミスを減らす下支えになるといったご報告でした。ガイドラインの中でも特に問題作成と，点検のポイントについて，焦点化していただき，ご紹介していただいたと思います。荒井先生，どうもありがとうございました。

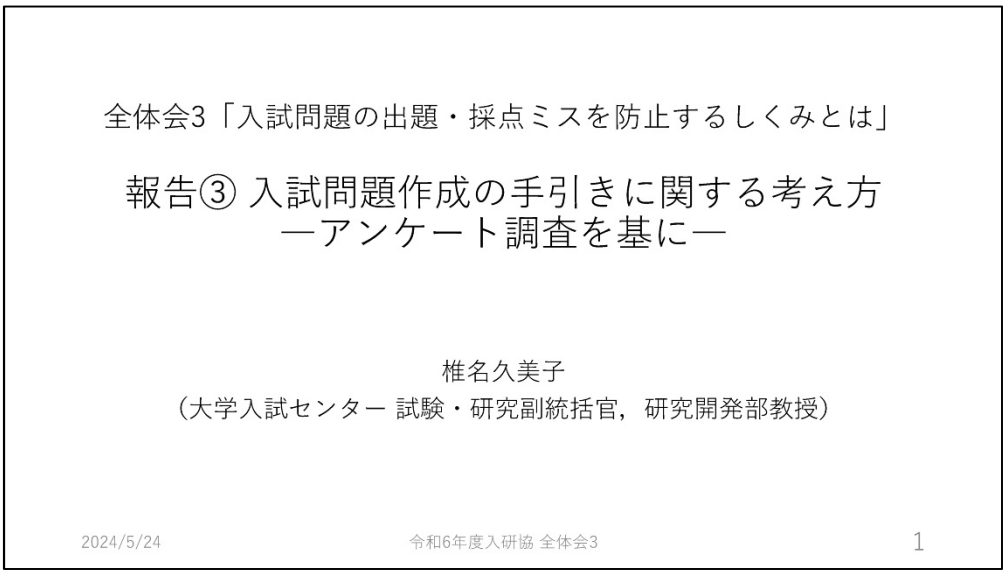
続いて，大学入試センターの椎名先生より，「入試問題作成の手引きに関する考え方―アンケート調査を基に―」という題目でご報告していただきたいと思います。椎名先生，よろしくお願いします。■

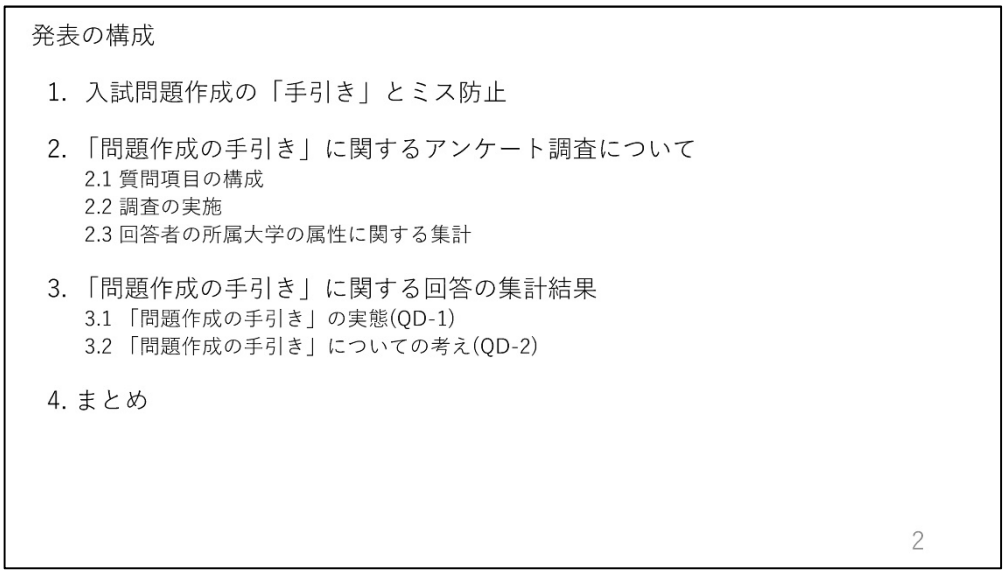
全体会 3　◉ 報告③

入試問題作成の手引きに関する考え方―アンケート調査を基に―

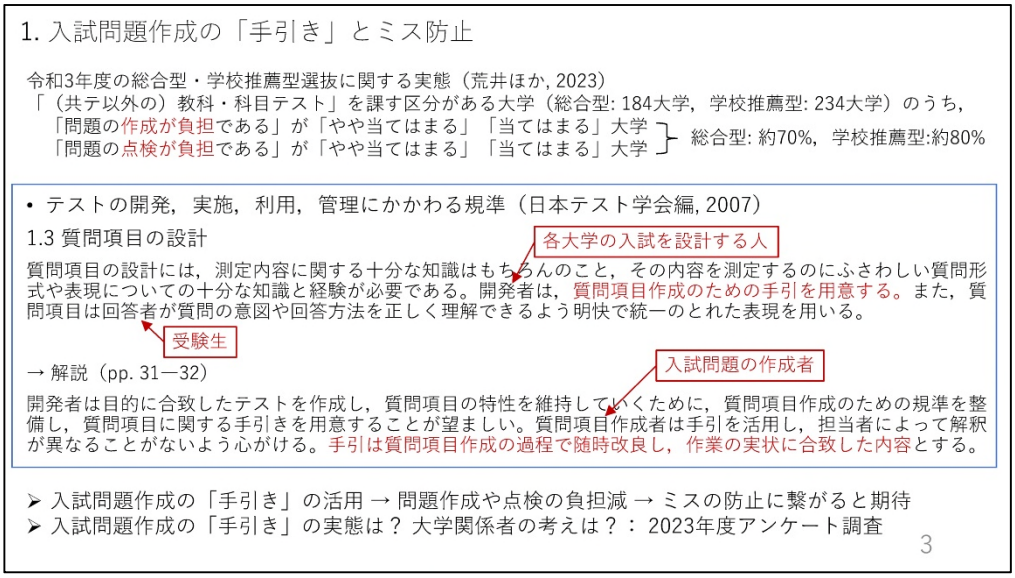
■椎名　久美子（大学入試センター 試験･研究副統括官, 研究開発部教授）

大学入試センターの椎名です。「入試問題作成の手引きに関する考え方―アンケート調査を基に―」についてご報告したいと思います。





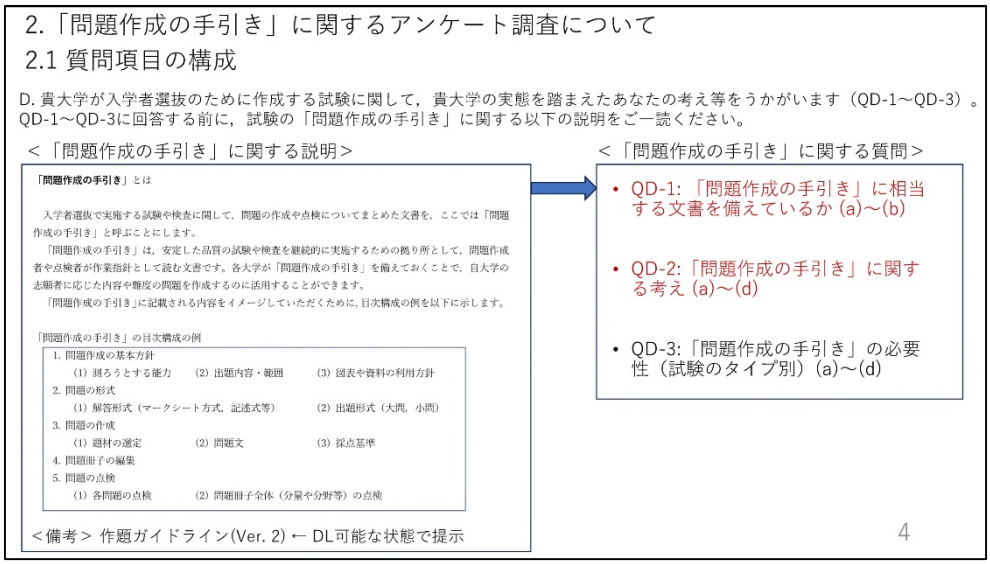
本報告では，この全体会での私の報告の位置付けについてご説明した後，ご紹介するアンケート調査の質問項目とその集計結果について説明します。最後に，全体討論につながるかもしれない観点とともにまとめを示したいと思います。



大学入試センターの研究開発部が 2021 年度に実施したアンケート調査の中に，総合型や学校推薦型選抜における知識・技能，思考力・判断力・表現力等の評価の実態に関する質問項目があります。回答してくださった大学のうち，総合型や学校推薦型選抜において，「共通テスト以外の教科・科目別テストを課す区分がある」という大学が，総合型選抜では 184 大学，学校推薦型選抜では 234 大学ありました。それらのうち，「問題の作成や点検が負担である」と回答をした大学は，それぞれ 7 割，8 割程度を占めていました。

この全体会 3 のテーマは「入試問題の出題・採点ミスの防止」ですが，このアンケート調査で示された問題の作成や点検の負担感は，「ミスを防止せねば」という緊張感にもつながるものと思われます。どうやったらこの負担感を軽減して，ミスの防止につなげられるかという観点から，日本テスト学会が 2007 年に策定した『テスト・スタンダード』の中で参考になりそうな条項を探してみますと，「質問項目の設計」という条項があります。先ほどの荒井の発表でも触れられていた条項ですが，「開発者は，質問項目作成のための手引を用意する」という記述があります。この条項の「開発者」は，入試の文脈では各大学の入試を設計する人にあたると考えてよいか思います。

この条項には「解説」があり，「開発者は目的に合致したテストを作成し，質問項目の特性を維持していくために，質問項目作成のための基準を整備し，質問項目に関する手引きを用意することが望ましい」と述べられています。そして「手引は質問項目作成の過程で随時改良し，作業の実状に合致した内容とする」とあり，手引きを随時改良していく必要性についても述べられています。この手引き，すなわち問題作成の作業指針を文書化したものを活用することで，問題の作成や点検の負担が減り，ひいてはミスの防止にもつながると記載されています。



本報告では，2023 年度に行ったアンケート調査の結果から，入試問題作成の手引きの実態や，入試担当者の手引きについての考えの傾向について，ご紹介します。

本アンケート調査では，個別大学の入試改善に活用可能と考えられる幾つかの方策について，大学の考えや実態を尋ねる項目を中心としています。その中に，「入試問題作成の手引き」に関するセクションがあります。

「貴大学が入学者選抜のために作成する試験に関して，貴大学の実態を踏まえたあなたの考え等を伺います」ということで，QD-1～3 の 3 つの質問に回答してもらいました。

いきなり「問題作成の手引き」について質問をしても，回答をする方によって「手引き」という言葉からイメージするものがかなり違うだろうということで，その左側の枠内にありますように，「問題作成の手引き」がどういうものか，そしてどういう内容が記載されているものなのかを簡単にまとめ，この説明を読んでから右の質問に回答をしてもらうようにしました。左側の枠内の説明は，先ほど荒井から報告された作題ガイドラインに近い内容です。

このアンケートの回答は，ウェブフォームから入力してもらったのですが，右に示した 3 つの質問のうち，この報告では QD-1 と 2 に関する回答の集計結果をご紹介します。QD-3 の「必要性」も含めた分析結果については，明日の研究会で発表します。

2.2 調査の実施

- 大学入試センター研究倫理審査を経て実施

- 調査対象：共通テスト利用大学
- 各大学の入試担当課宛に「入学者選抜の実施方法等を研究・検討している部署の方等，貴大学の入学者選抜を総合的に把握しておられる方」にご回答いただくよう手配を依頼
- webフォームから1大学1通で回答

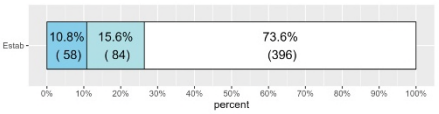
- 回答期間R5年12月1日～R6年1月29日
  （当初予定は1月17日締切→能登半島地震を考慮して延長）
- 有効回答率70.4% （共テ利用大学764大学→有効回答数538大学）

5

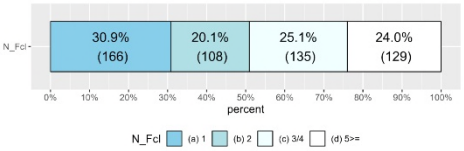
調査対象は，共通テスト利用大学です。各大学の入試担当課宛てに，入学者選抜の実施方法等を研究・検討している部署の方，貴学の入学者選抜を総合的に把握しておられる方にご回答していただくよう依頼し，ウェブフォームから 1 大学 1 通で回答をしていただきました。

回答期間は昨年 12 月から今年 1 月とさせていただきました。入試で大変お忙しい時期に回答をお願いすることになりました点，非常にお忙しい中ご協力いただいた点に非常に感謝しています。有効回答率は 70.4％で，538 大学から回答いただきました。

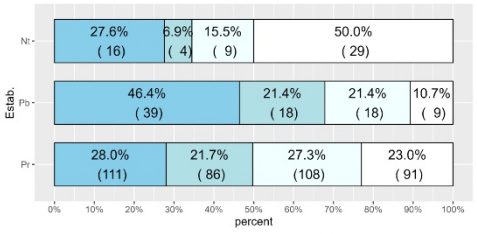
2.3 回答者の所属大学の属性に関する集計



設置形態（国立Nt，公立Pb，私立Pr）



学部数（(a) 1学部，(b) 2学部，(c) 3/4学部，(d) 5学部以上）



設置形態×学部数

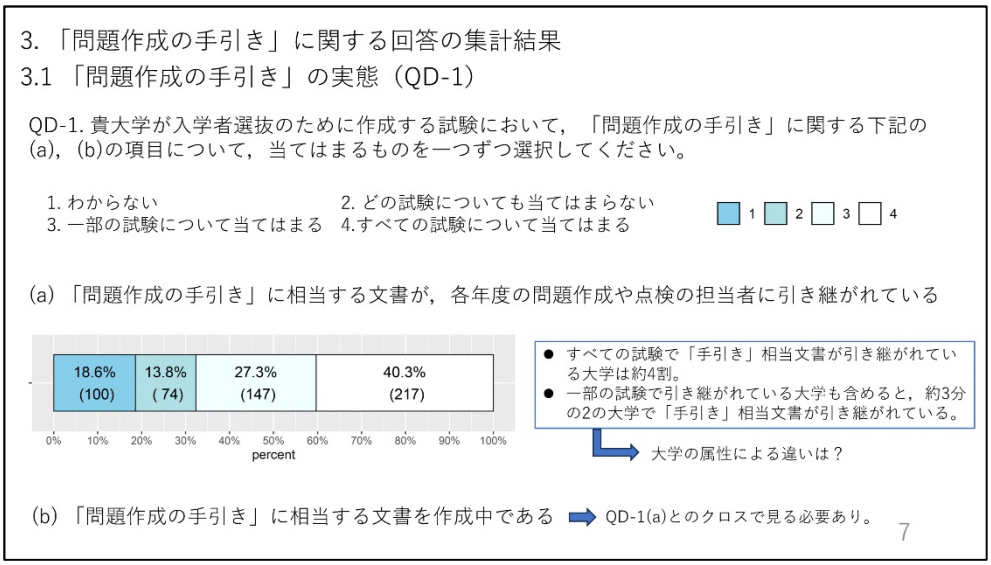
- 国立大学は大規模大学が多め
- 公立大学は小規模大学が多め

6

回答をしてくださった 538 大学について，左上は設置形態別の割合を，左下は学部数の 4 区分の割合を示したグラフです。共通テスト利用大学を対象としたため，私立大学が約 4 分の 3 を占めています。学部数については，4 つの区分の中から 1 つを選択していただいたものです。

右のグラフは，設置形態と学部数区分の組み合わせの割合を示すものです。国立大学は 5

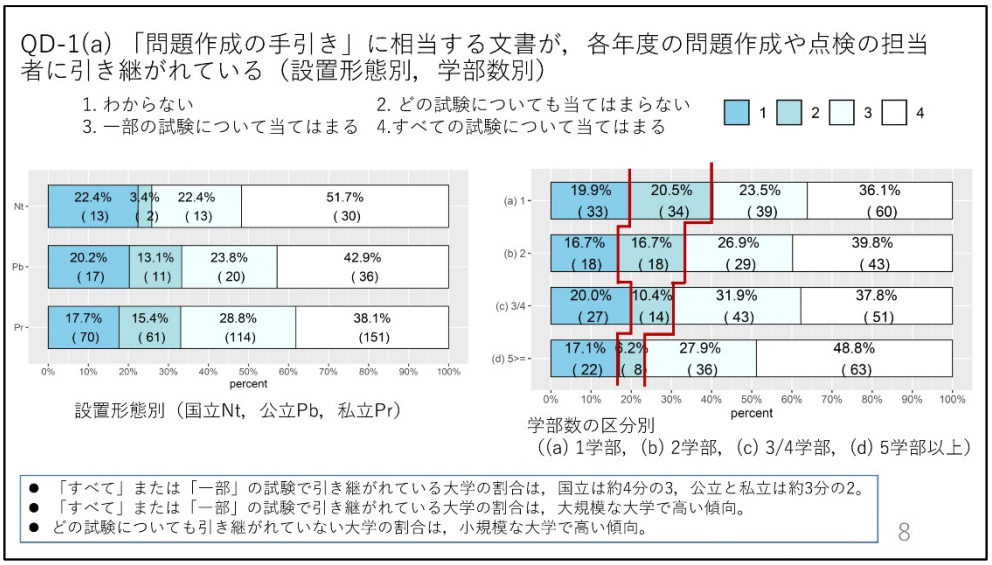
学部以上が半分を占めています。一方，公立大学は 1 学部と 2 学部を合わせると約 7 割を占める構成になっています。



まず，「問題作成の手引き」の実態に関する質問項目の集計結果です。QD-1 には，（a）と（b）という 2 つの項目があります。

「(a)『問題作成の手引き』に相当する文書が，各年度の問題作成や点検の担当者に引き継がれている」という項目については，「4. すべての試験について当てはまる」という回答が 40.3％です。「3. 一部の試験について当てはまる」という回答が 27.3％あるのと合わせると，67.6％の大学が「手引き」に相当する何らかの文書をお持ちで，各年度の担当者に引き継がれていることが分かります。

では，大学の属性による違いはあるのかという点を見ていきます。なお，「(b)『問題作成の手引き』に相当する文書を作成中である」という項目については，項目（a）とクロスで見る必要がありますので，その集計は 2 枚後のスライドでお示しすることにします。

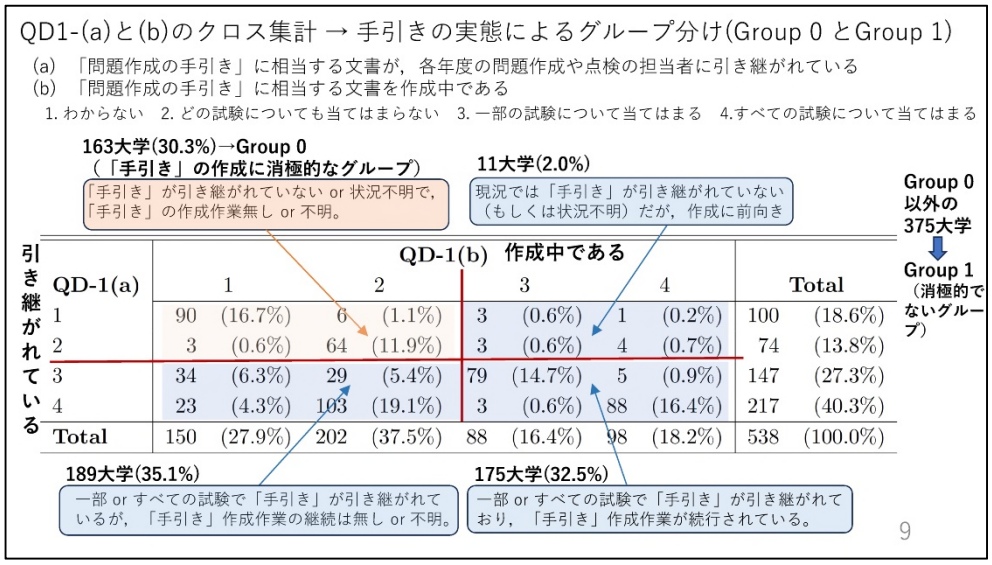


左のグラフは QD-1（a）の質問への回答を国公私立の設置形態別に示すものです。右のグラフは学部数の区分別に回答選択肢の割合を示しています。

設置形態別に見ますと，「すべて」または「一部」の試験で手引き相当の文書が引き継がれている大学の割合は，国立では約 4 分の 3，そして公立と私立では約 3 分の 2 を占めています。

学部数の区分別に見ますと，「すべて」または「一部」の試験で引き継がれている大学の割合は，学部数が多い大学の方が高くなっています。

一方，どの試験についても当てはまらない，つまりどの試験についても引き継がれていない大学の割合は，学部数が少ない大学で高い傾向です。

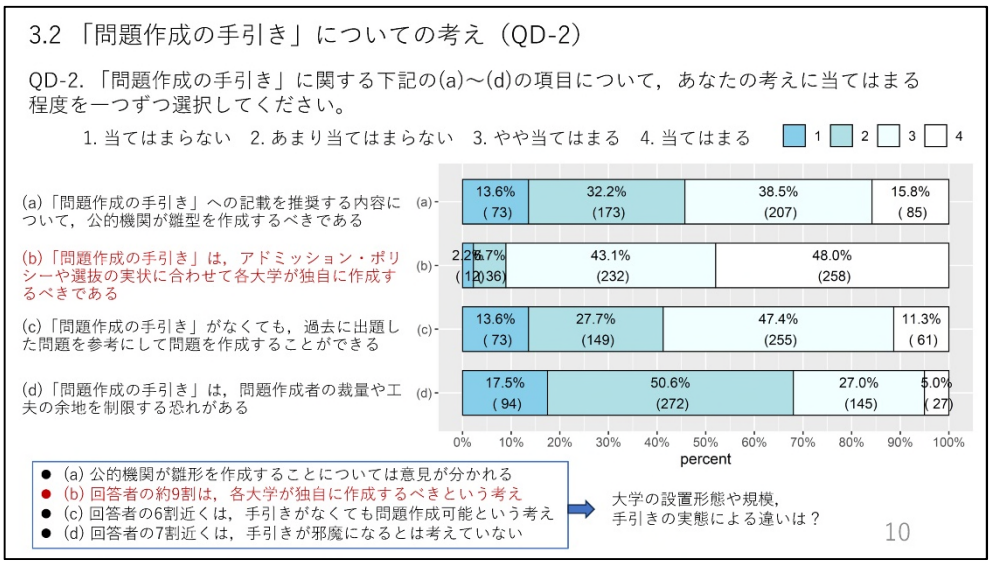


このスライドでは QD-1 の（a）と（b）の 2 つの質問のクロス集計表を示しています。すなわち，「『手引き』が引き継がれている」に関する選択肢と「『手引き』を作成中である」に関する選択肢のクロスになります。「作成中である」という項目は，「手引き」の整備状況と一緒に見ないと実態はつかめないだろうと考えて，両者を組み合わせて集計しました。

4×4 の 16 通りあるわけですが，それぞれの質問で 1・2 の選択肢を選んだか，3・4 の選択肢を選んだかによって，赤線で 4 つの領域に区切って考えました。左上のオレンジの領域の大学は，「手引き」が全く引き継がれていないかあるいは状況が不明であり，作成作業自体も行っていないあるいは状況不明ということですので，「手引き」に消極的なグループとみなせることになります。そういった大学が全体の約 3 割でした。

残りの 3 つの領域のうち，下の 2 つの領域は，「手引き」が少なくとも一部の試験では整備されていて，引き続き作成中のところもあればそうでないところもあるという状況です。

右上の領域は，「手引き」が引き継がれていないかまたは状況不明だが，「手引き」の作成には前向きという大学になります。以降では，左上以外の 3 つの領域の大学と，左上の「手引き」に消極的な大学とで，QD-2，つまり「手引き」についての考え方の回答がどう違うかを比較していきます。



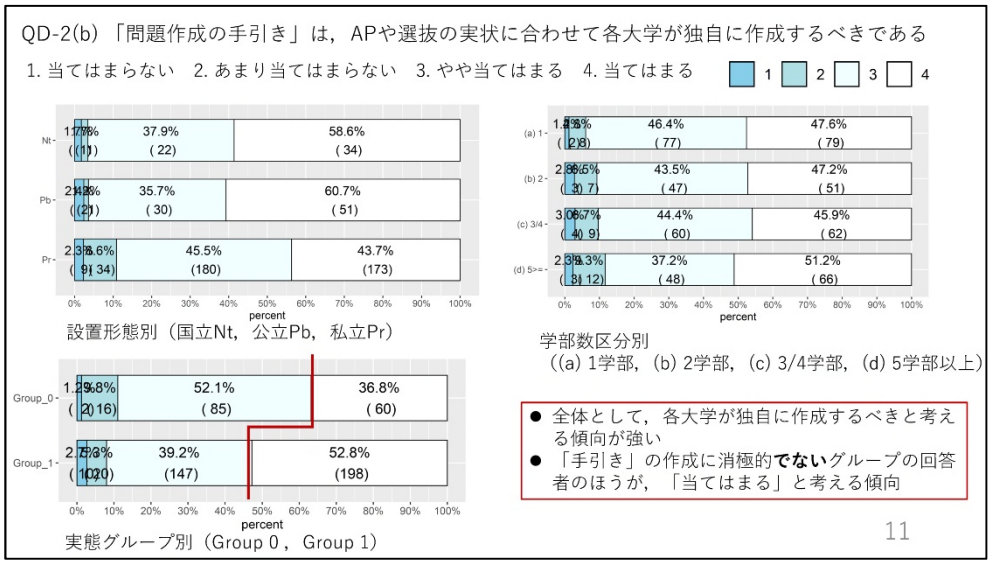
QD-2 の「問題作成の手引き」についての考えを尋ねる項目では，（a）から（d）のそれぞれについて，当てはまる程度を 4 段階で評定してもらいました。なお，これは大学としての公式見解ではなくて，あくまで回答者の考えであることにご留意ください。

こちらが全体の傾向です。「(a)『問題作成の手引き』への記載を推奨する内容について，公的機関が雛型を作成するべきである」については，意見が二分しています。

「(b)『問題作成の手引き』は，アドミッション・ポリシーや選抜の実状に合わせて各大学が独自に作成するべきである」については，「3. やや当てはまる」と，「4. 当てはまる」を合わせると 91.1％になり，各大学が独自に作成するべきという考えがかなり強いことが伺えます。

「(c)『問題作成の手引き』がなくても，過去に出題した問題を参考にして問題を作成することができる」については，「3. やや当てはまる」と，「4. 当てはまる」を合わせると 58.7 ％になり，「手引き」がなくても作ることができると考えている回答者が過半数を占めています。

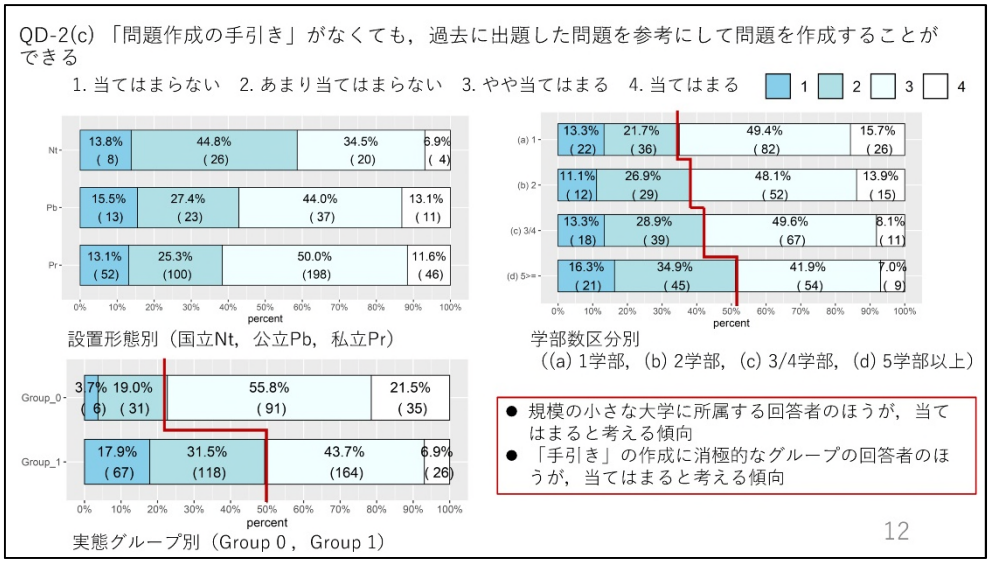
一方，「(d)『問題作成の手引き』は，問題作成者の裁量や工夫の余地を制限する恐れがある」に関しては，「1. 当てはまらない」と「2. あまり当てはまらない」を合わせると 68.1％になり，「手引き」が邪魔になるとまでは考えていない回答者が過半数ということになります。



続いて，大学の設置形態や規模，そして先ほどの「手引き」に消極的かどうかで分けて集計した結果を見ていきます。(a) についてはあまり違いが見られなかったので，本報告では (b)，(c)，(d) について見ていくことにします。

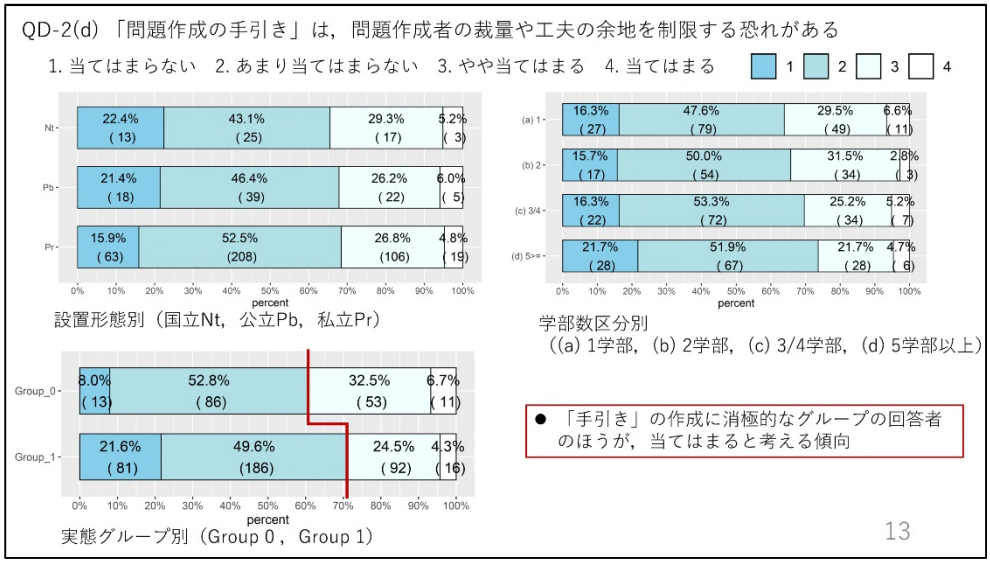
このスライドには，「(b)『問題作成の手引き』は，アドミッション・ポリシーや選抜の実状に合わせて各大学が独自に作成するべきである」についての回答選択肢の選択率を示しています。左上が設置形態別，そして右が学部数の区分別，そして左下は先ほどの「手引き」に消極的かどうかというグループ別の集計です。

左下のグラフに示すように，Group 1，すなわち「手引き」に消極的ではない大学に所属する回答者のほうが，Group 0，すなわち消極的な大学に所属する人たちよりも，「4. 当てはまる」と回答した割合が高くなっています。所属大学において，「手引き」が引き継がれているかどうかという実状と，各大学が独自に作成するべきであるという回答者の考えが対応するような結果となっています。

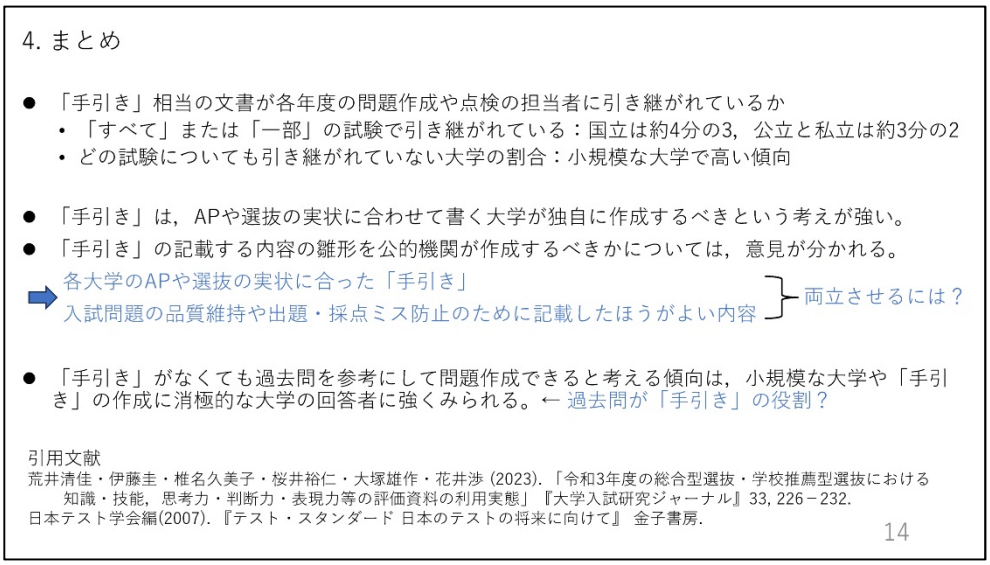


このスライドには，「(c)『問題作成の手引き』がなくても，過去に出題した問題を参考にして問題を作成することができる」という項目に関して，先ほどと同様に，設置形態別，学部数の区分別，「手引き」に消極的かどうかというグループ別に回答選択肢の割合を示しています。右側の学部数規模別のグラフを見ますと，「3. やや当てはまる」と，「4. 当てはまる」を合わせた割合は，規模の小さな大学のほうが高い傾向にあることが分かります。

左下のグラフを見ますと，「手引き」に消極的な大学に所属する回答者，つまり Group 0 のほうが，「3. やや当てはまる」と，「4. 当てはまる」の選択率が高くなっています。「手引き」がないから過去問を基に作るということなのか，過去問を基に作ることができているから「手引き」を作っていないのかという点は分からないのですが，所属大学の「手引き」の実態によって回答者の考えがかなり違っているということがアンケート調査から示されています。



このスライドには，「(d)『問題作成の手引き』は，問題作成者の裁量や工夫の余地を制限する恐れがある」について，設置形態別，学部数の区分別，そして「手引き」に消極的かどうかをグループ別の集計結果を示しています。左下を見ますと，Group 0, Group 1 ともに，「1. 当てはまらない」と「2. あまり当てはまらない」を合わせたほうが多数派です。しかし，「3. やや当てはまる」と「4. 当てはまる」の部分を見ると，「手引き」が問題作成の裁量や工夫の余地を制限するということへの恐れについては，「手引き」に消極的な大学に所属する回答者のほうが当てはまると考える傾向がやや強いことが伺えます。


4. まとめ

- 「手引き」相当の文書が各年度の問題作成や点検の担当者に引き継がれているか
  - 「すべて」または「一部」の試験で引き継がれている：国立は約4分の3，公立と私立は約3分の2
  - どの試験についても引き継がれていない大学の割合：小規模な大学で高い傾向
- 「手引き」は，APや選抜の実状に合わせて書く大学が独自に作成するべきという考えが強い。
- 「手引き」の記載する内容の雛形を公的機関が作成するべきかについては，意見が分かれる。

⇒ 各大学のAPや選抜の実状に合った「手引き」
入試問題の品質維持や出題・採点ミス防止のために記載したほうがよい内容 } 両立させるには？

- 「手引き」がなくても過去問を参考にして問題作成できると考える傾向は，小規模な大学や「手引き」の作成に消極的な大学の回答者に強くみられる。← 過去問が「手引き」の役割？

引用文献
荒井清佳・伊藤圭・椎名久美子・桜井裕仁・大塚雄作・花井渉 (2023).「令和3年度の総合型選抜・学校推薦型選抜における知識・技能，思考力・判断力・表現力等の評価資料の利用実態」『大学入試研究ジャーナル』33, 226－232.
日本テスト学会編(2007).『テスト・スタンダード 日本のテストの将来に向けて』 金子書房.

14

以上の報告をまとめます。

一部の試験で引き継がれているというケースも含めると，かなり多くの大学で，「手引き」に相当する文書が各年度の問題作成や点検の担当者に引き継がれているという実態が示されています。どの試験についても引き継がれていない大学の割合は，学部数の少ない大学で高めという傾向です。

「手引き」はアドミッション・ポリシーや選抜の実状に合わせて各大学が独自に作成するべきという考えは全体として非常に強いですが，「手引き」に記載する内容のひな型を公的機関が作成するべきかどうかという点については，意見が分かれていました。

各大学のアドミッション・ポリシーは尊重されるべきなのですが，荒井からの報告②にありましたように，入試問題の品質維持や出題ミスの防止のために「手引き」に書いておくことが望ましい項目もありますので，そういったことと大学の独自性は両立可能だろうというのが，私の考えです。

また，「手引き」がなくても過去問を参考にして，問題が作成できると考える傾向は，小規模な大学に所属する方や，「手引き」に消極的な大学に所属する方に強く見られました。どの試験についても，「手引き」が引き継がれていない大学の割合が，小規模な大学で高かったという傾向等を考え合わせますと，「手引き」が引き継がれていないと回答した大学では，ある種，過去問が「手引き」のような役割を果たしているのかもしれません。この辺りは，出題や採点ミスを防止するために過去問をどう活用するかという観点からも議論ができるのではないかと思っています。ご清聴ありがとうございました。

【荘島・司会】　椎名先生，ありがとうございました。②番目の発表者である荒井先生からの「問題作成の手引き」や『ガイドライン』といったものが出題ミスを減らす一定の効果があるという報告を受け，それらの有無や，入試担当者の認識等に関する各大学の調査結果に

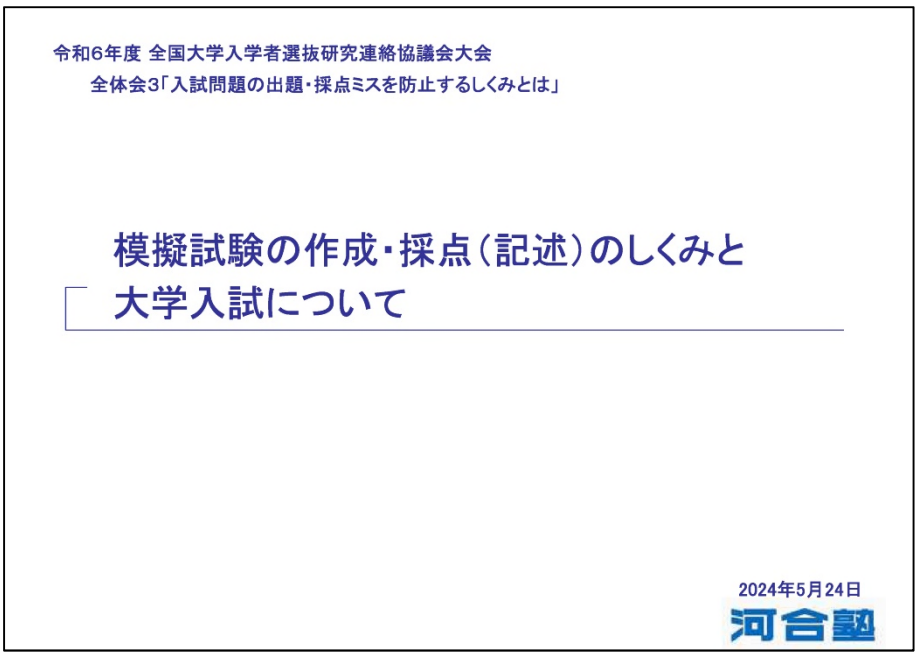
ついてご報告いただきました。椎名先生，どうもありがとうございました。
　続いて，河合塾の網野先生より「模擬試験の作成・採点（記述）のしくみと大学入試について」という題目でご報告いただきます。網野先生，よろしくお願いします。■

全体会 3　◉ 報告④

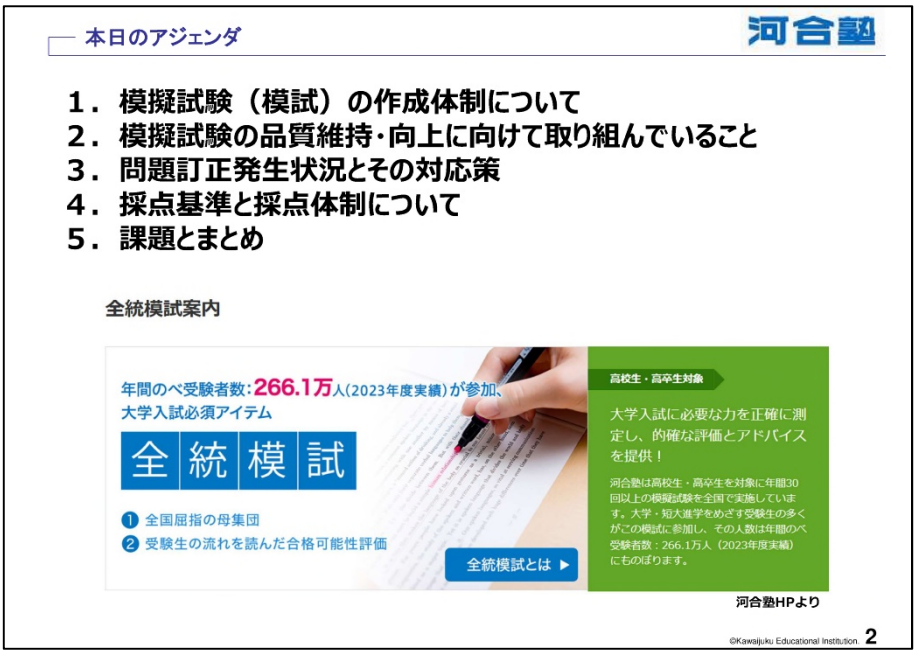
模擬試験の作成・採点（記述）のしくみと大学入試について

■網野　輝也（河合塾 教育企画開発部部長）

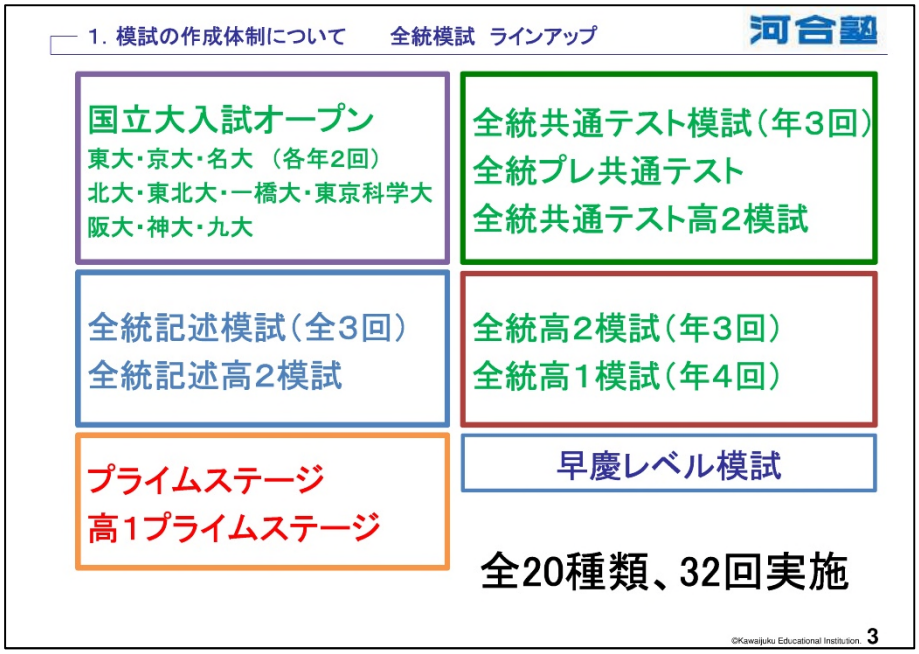
河合塾の網野です。よろしくお願いします。



私が所属する教育企画開発部は，河合塾の教材・模擬試験を作成する部署です。本日は，模擬試験の作成・採点の仕組みについて，お話をさせていただきたいと思います。河合塾での作成の仕方ということで，お聞きいただければと思います。



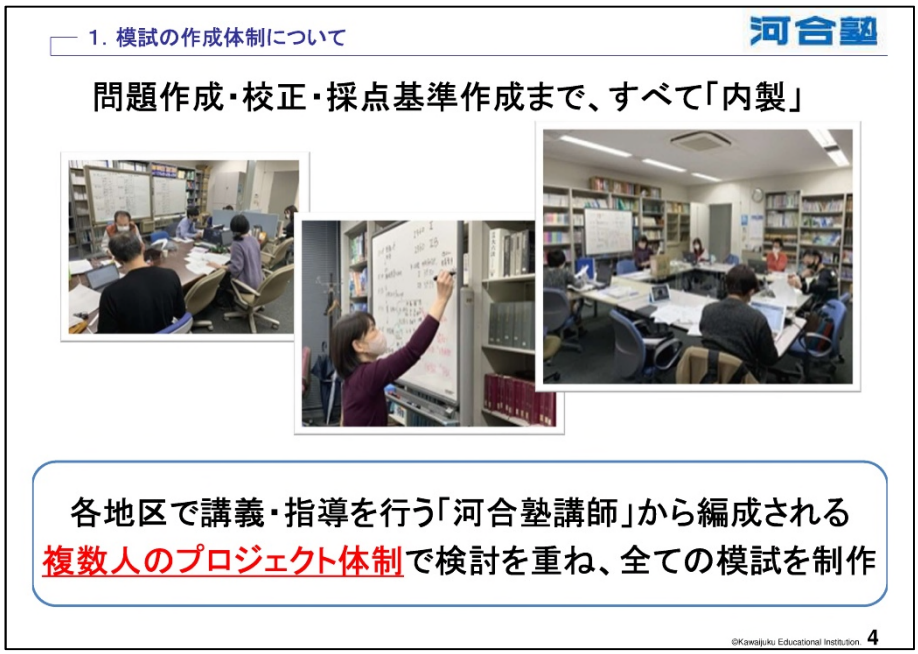
河合塾の模擬試験については年間延べ 266 万人に参加いただいており，全国でも屈指の母集団を誇る模擬試験です。一民間企業の模擬試験ではありますが，この模擬試験の成績や判定結果を，高等学校様で生徒指導・進路指導にご活用いただいていますので，生徒の一生を左右するという責任を持って作成・実施をさせていただいています。



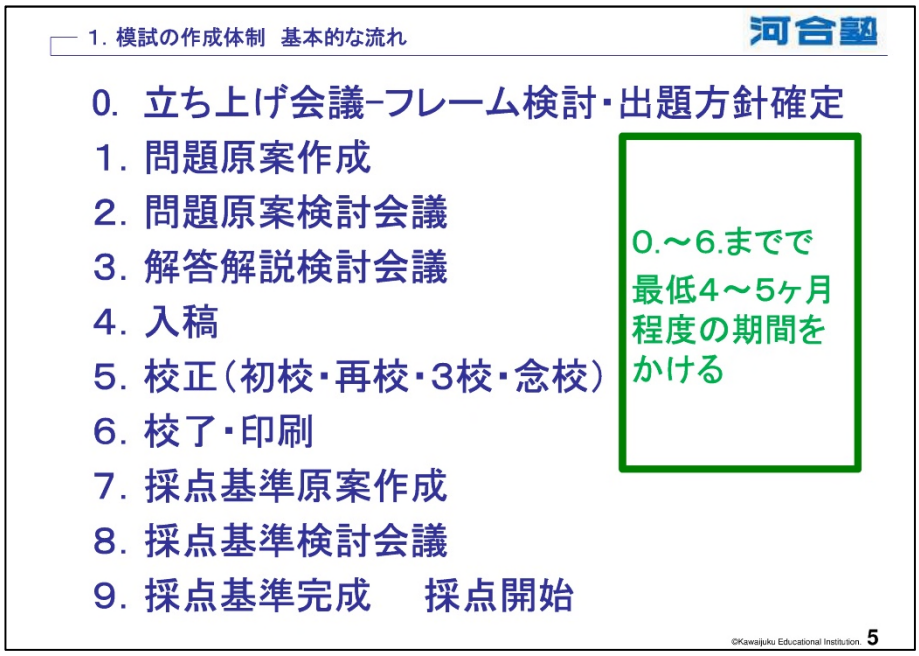
河合塾の模擬試験には様々な種類があります。「国公立大入試オープン」という各大学別の模擬試験，共通テストのための「共通テスト模試」，記述式の模擬試験である「全統記述模試」と「全統高 2 模試」，「全統高 1 模試」を，それぞれ回数が違いますが，実施をしています。またトップレベル生向けの「プライムステージ」，「高 1 プライムステージ」という模擬試験もありますし，「早慶レベル模試」という早慶大を目指す方のための模擬試験もあり

ます。全部で 20 種類，年間では合計 32 回実施しています。

「全統共通テスト模試」だけは客観式問題ですが，それ以外に関しては記述・論述式の問題を含んでいます。



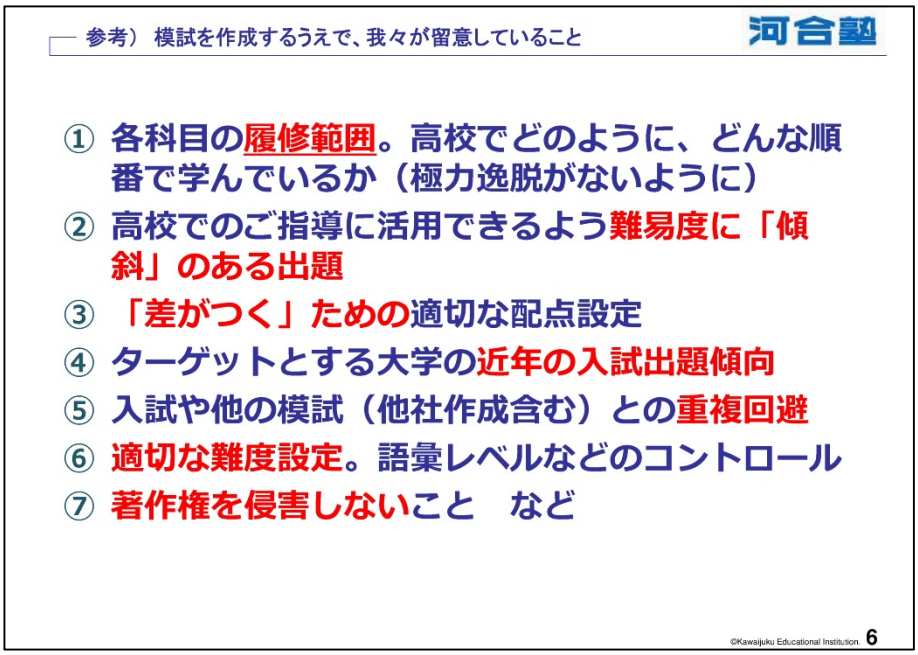
まず模擬試験の問題作成体制について，問題作成，校正，採点基準作成まで全て河合塾内で作成をしており，外注は一切していません。基本的には，各地区で講義・指導を行っている「河合塾講師」から編成される複数人のプロジェクト体制で検討を重ねて，全ての模擬試験を作成しています。こちらの写真は実際の模擬試験の問題を検討する会議の様子です。全国から講師が集まって，何度も会議を重ねて模擬試験の問題を作っています。



最初の立ち上げ会議では，全部で大問が何題か，また出題はどのようにするのかという問題フレームを決定します。それを基に問題の原案を作成し，その原案を検討します。なお，

模擬試験では解答解説を全て公表しますので，この解答解説についても，執筆，検討会議を経て入稿します。そして５番目に校正です。初校・再校・３校・念校くらいまで行います。そして６番目に校了・印刷になります。この０から６までの工程で，河合塾では最低４カ月から５カ月程度の期間をかけています。

校了した後は，採点基準の原案を作成し，採点基準検討会議において採点基準が完成して，初めて採点を開始します。ここまで，問題作成のプロジェクト体制の責任下で実施されます。

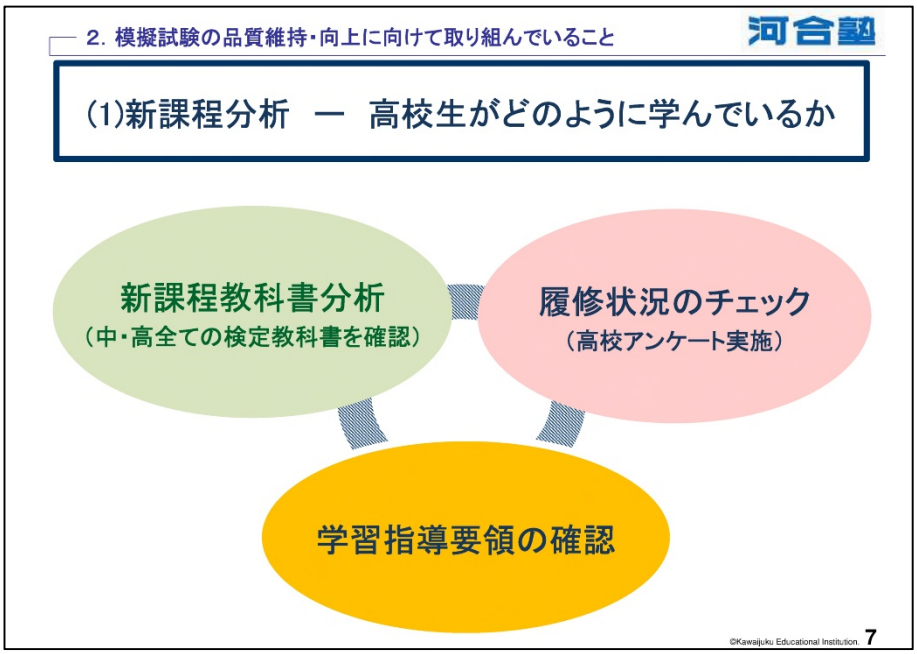


参考として模試を作成する上で，われわれが留意する点がこちらです。これまでのご報告にもありましたが，やはり各科目での履修範囲です。高校で何をどのような順番で学んでいるのかということから，極力逸脱がないように作成をしています。例えば，高校３年生向けの模擬試験のうち６月実施分と 11 月実施分では，数ⅢＣをはじめ，履修の進行度が高校ごとによって違います。極力学習していないものを出題しないよう，範囲を決めて実施をしています。

そして，高等学校さまでのご指導に活用できるように，難易度に傾斜のある問題，そして差が付くための適切な配点設定をして，母集団の点数が平均点を中心にきれいな山を描くように作っています。

また，大学別の模擬試験や共通テスト対策模試等については，近年の入試出題傾向を重視して作成しています。

さらに，入試や河合塾の他の模試，他社様の作成されているものも含めた上で重複を回避するようにしています。適切な難易度の設定においては，例えば英語では語彙レベルなどのコントロールも行っています。そして一番重要な点として，著作権を侵害しないという意識を持ちながら作成を進めています。



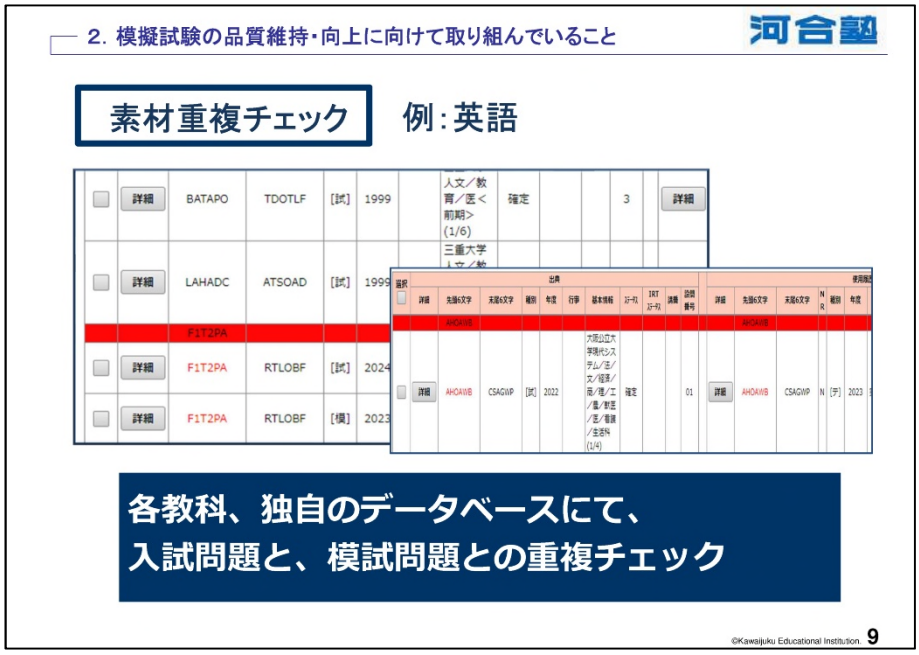
ここからは模擬試験の品質維持・向上のための取組みをご紹介します。まず新課程分析を行っています。模擬試験を受験いただく高校生がどのように学んでいるかということにおいては，中学校から含めて新課程の教科書の確認・分析をしています。

そして履修状況のチェックのために，高等学校さまを対象に，どの範囲を何月に生徒に学習させているかについてのアンケートにご協力いただいています。特に数学，理科，地歴などにおいては，大体何年生の何月までに数Ⅰが終わる，数 A が終わる，この範囲が終わるということをしっかり定量化し，範囲の大きな逸脱がないよう問題作成に活用しています。

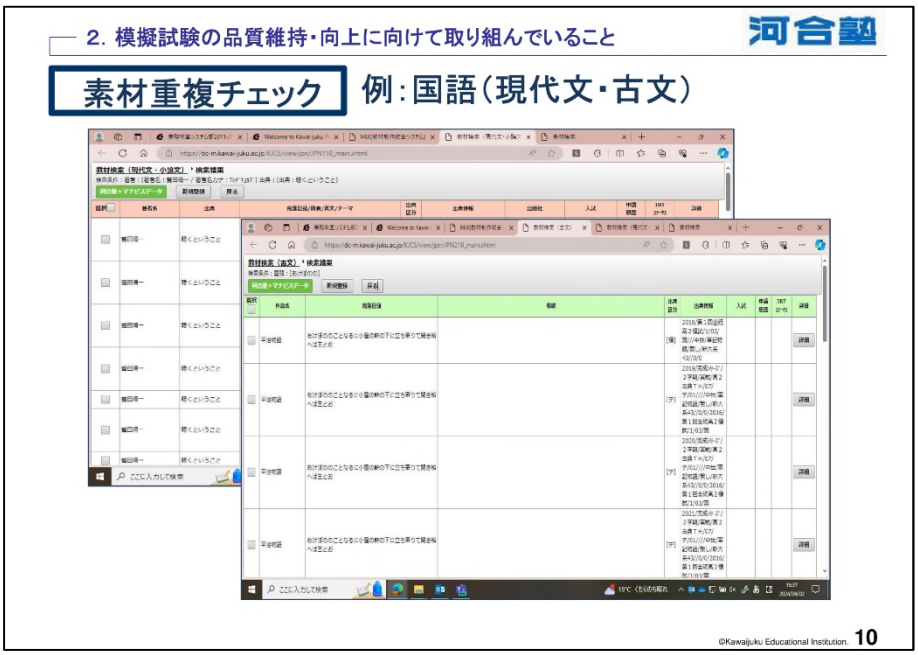
またやはり定期的に行われる学習指導要領の改訂に関しても，適時，それがどのような力を測るのか，また入試に影響するのかを分析しています。



（2）として，大学入試の分析が挙げられます。最新の出題傾向を捉えるため，毎年，全国の講師が分担して入試問題の分析をしています。分析結果は執筆講師に共有することで模試作成に反映しています。昨年度は，英語においては 72 大学 221 学部／日程分を，そして数学については，120 大学の 2,500 問を対象とし，どのような力を測っているのか，もしくは近年どのような範囲，問題が出現しているのかをしっかり分析した上で，模擬試験を作成しています。



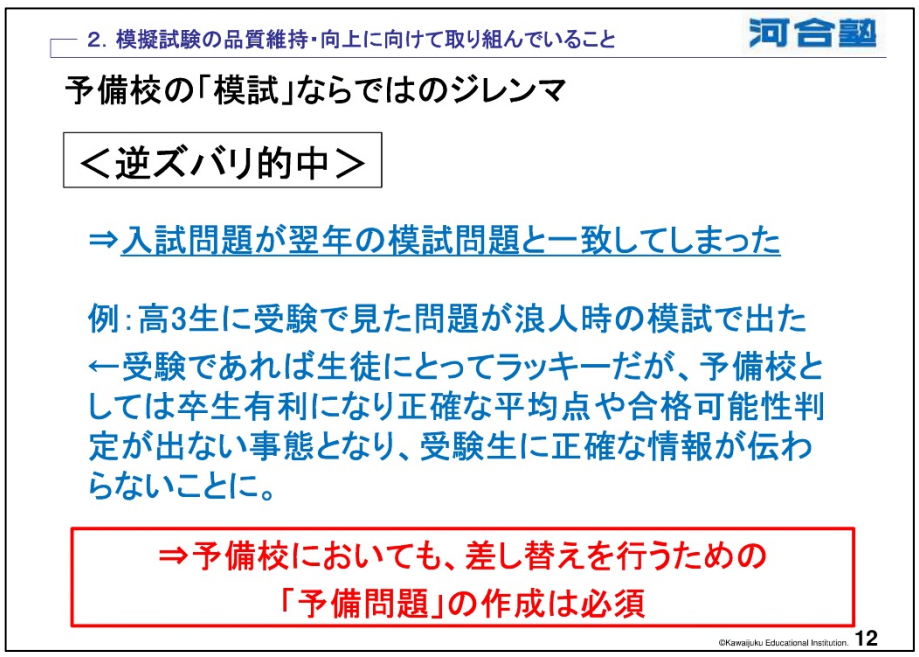
次に，素材の重複チェックです。河合塾では，素材の重複チェックの作業を一部システム化しています。例えばこれは英語の例ですが，データベース化をして，入試問題や教科書・河合塾の教材と模擬試験との重複をチェックしています。



また国語においても，素材の管理を行った上で，入試とのバッティングを避けています。



さらに，英語では，システムによる単語のレベルをチェックしています。使用予定の英文を読み込むと，中学１年生～高校３年生のいつ初出の単語なのか，もしくはどこにも出てこない単語なのかが分かるようになっています。CEFR レベルや，教科書学年レベル等を確認することで，リーダビリティー，いわゆる読みやすさの指標が入試と同じになるようにしています。少し難し過ぎるということが分かれば，高校生に適切な表現に書き替えるなど修正をしています。英語に関しては，こういった単語レベルにも気を配って進めています。



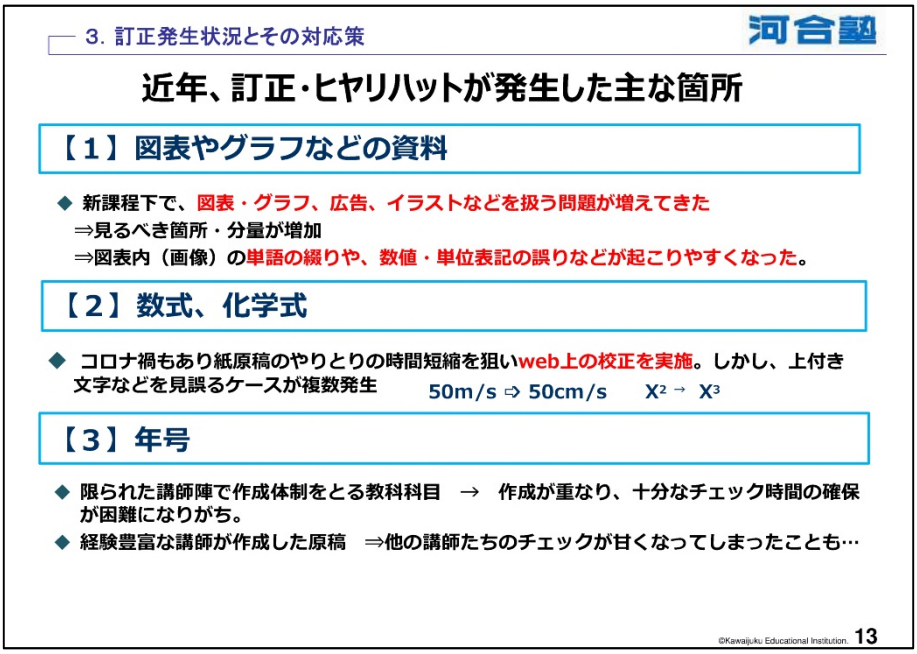
しかし，やはり予備校の模擬試験ならではのジレンマがあります。河合塾では「ズバリ的

中」と呼んでいるものがあり，生徒が 1 年間使ってきたテキストや模擬試験の内容が入試で出題されることです。それについては，生徒にも喜んでいただけますし，河合塾としても模擬試験や教材の信頼性の高さとして PR をさせていただいているわけですが，一方で「逆ズバリ的中」ということも発生します。

これは入試問題が翌年の模擬試験の問題と一致してしまうことです。冒頭でご紹介したとおり，河合塾の模擬試験は 4〜5 カ月かけて作っていますので，1 月，2 月に行われる入試問題を見た瞬間に，素材や問題がバッティングしたため，今まで作ってきた問題が使えなくなってしまうことがあります。

なぜそれが許されないのかと言いますと，高校 3 年生が入試で見た問題が浪人してすぐの模擬試験で同じ問題が出されたとすると浪人生が有利になり，予備校としては正確な平均点や合格可能性を判定できない事態に陥ってしまいます。

そうすると受験生に正確な情報が伝わらなくなってしまいますので，予備校においても，こういった事態が発生した際に差替えを行うための「予備問題」の作成は必須だと考えて実施をしています。特に素材文がある英語や現代文，古文については特に気を使って作成を進めています。



次に近年，訂正・ヒヤリハットが発生した主な箇所です。先ほど荒井先生からもご報告がありましたが，まず（1）として，「図表やグラフなどの資料」が挙げられます。近年の入試では図表・グラフ，広告，イラスト等を扱う問題が非常に増えてきています。そのために，今までと異なる観点からチェックすべき箇所や分量が増加しており，図表内の画像の単語の綴りであるとか，数値や，単位表記に誤りが起こりやすくなりました。このように，問題の作り方やチェックの観点も入試の変化と共に変わってきています。

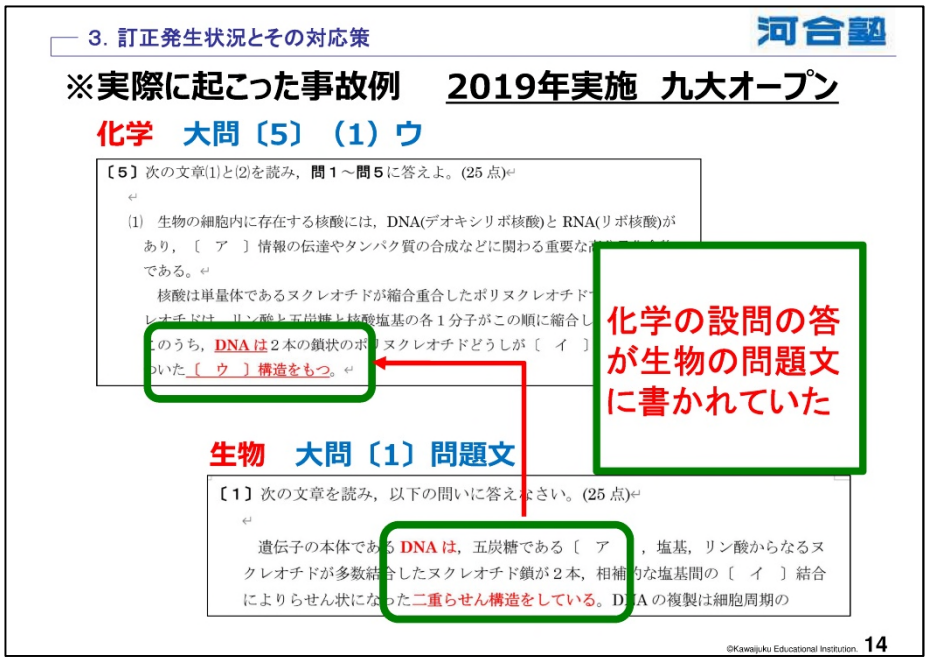
また（2）として，「数式，化学式」があります。コロナ禍において，印刷会社との直接の紙原稿のやりとりを廃止しましたが，時間短縮等のメリットがあることから，現在も

WEB 上で校正作業をしています。これにより，上付き文字や単位等を見誤るケースが複数発生しています。

例えば 50m/s とするべきところを 50cm/s と記載したとか，x^2をx^3と間違えるというようなケースです。拡大をする機能は付いているものの，WEB 上での校正に限界を感じている状況になっています。

そして（3）としては「年号」があります。限られた講師陣で作成体制を取る教科科目においては，十分なチェック時間の確保が困難になりがちで，ミスが発生することがあります。

また経験豊富な講師が作成した原稿は，他の講師が「あの先生が作成したのであれば大丈夫だろう」と考えてしまい，チェックが甘くなったこともあります。こういうところは河合塾としても非常に気を付けて進めています。

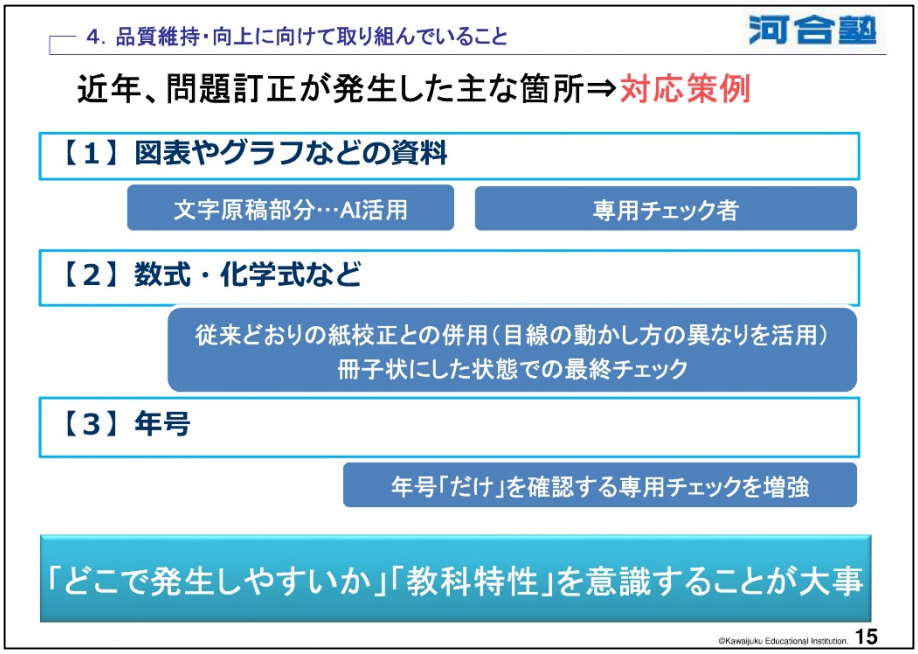


ここで実際に起こった事例をご紹介します。2019 年に実施しました「九大オープン」（九州大学対策のための模擬試験）で起こったことです。化学の大問〔5〕の（1）の本文内のウというこの穴埋め問題の答えが，生物の問題の大問の問題文に答えが書かれていました。

化学，生物でそれぞれ違う講師が集まって作っていますので，科目間のやりとりが不十分だったことが原因です。物理・化学選択者や物理・生物選択者との間で差が出てしまう可能性があるため，この問題は廃問とし，物理受験者全員に一律加点としました。

各教科で，年号が間違っていないか，単位が間違っていないかという確認は常に行っていますが，他科目に答えが書かれていたといった非常に難しいことが起きることがあります。例えば他にも国語の漢字の書き取り問題で，第 2 問目の本文に同じ漢字が出ていたということもあります。どの大学様も気を付けているところだとは思いますが，河合塾でも同様に気を付けて作成しています。

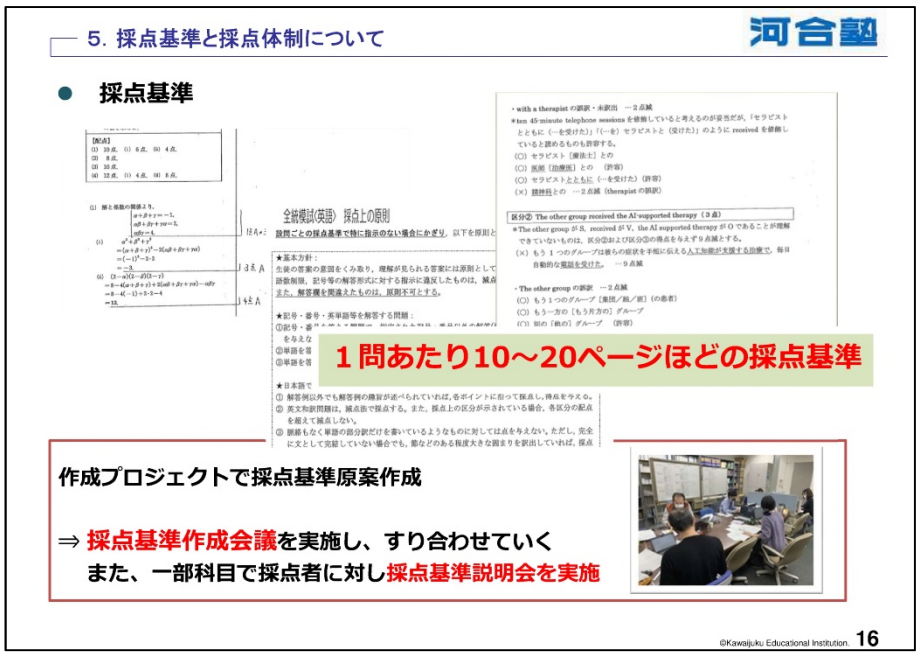
この事故以来，理科科目内ではお互いにゲラをチェックする体制を整えています。



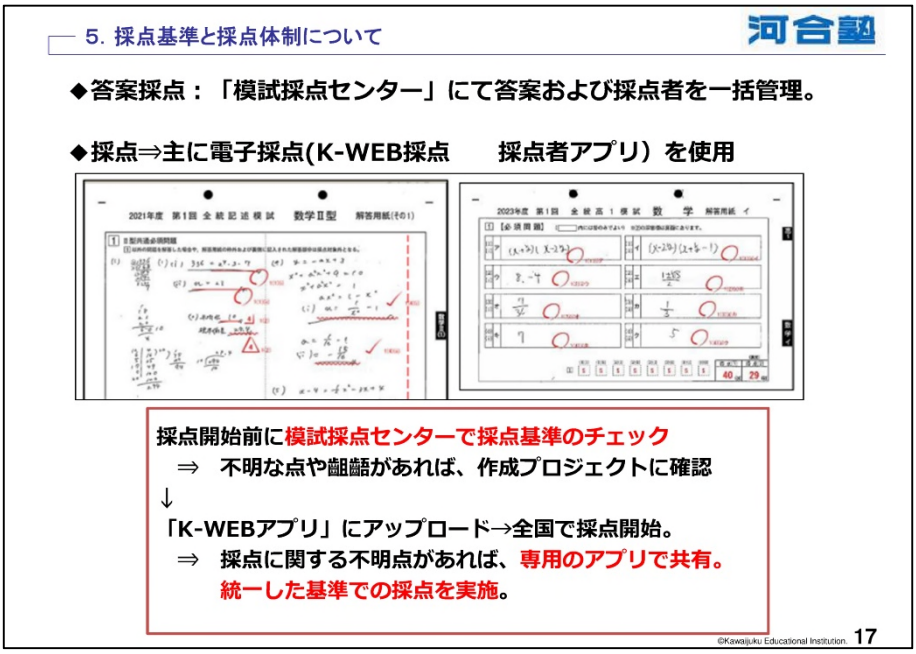
近年，問題訂正が発生した主な箇所への対応事例をご紹介します。まず，図表やグラフなどの資料については，文字原稿部分には AI を活用する，専用のチェック者を別に用意するなどの工夫を行い，品質を高めています。

また数式や化学式などについては，やはり従来どおりの紙校正との併用が重要と考えています。紙の校正に勝るものはなかなか出てきません。WEB だけ，もしくは紙だけということではなく，品質維持のために両方実施しています。

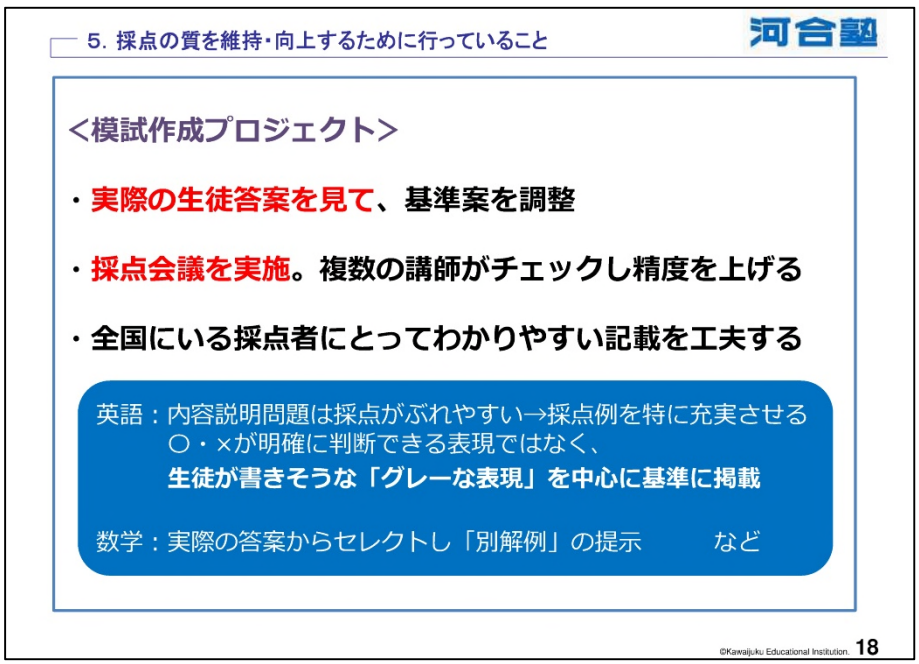
次に年号です。年号だけを確認する専用チェック者を増強するなどもありますが，どこで問題が発生しやすいか，ミスが発生しやすいかといったこれまでの蓄積を踏まえ，教科特性を意識することが大事ではないかと考えています。



次に採点基準です。大問１題あたり 10 ページから 20 ページほどの採点基準を作成しています。作成プロジェクトで採点基準作成会議を実施して擦り合わせていきます。また一部の科目においては，採点者に対して採点基準の説明会をしてから実施しています。

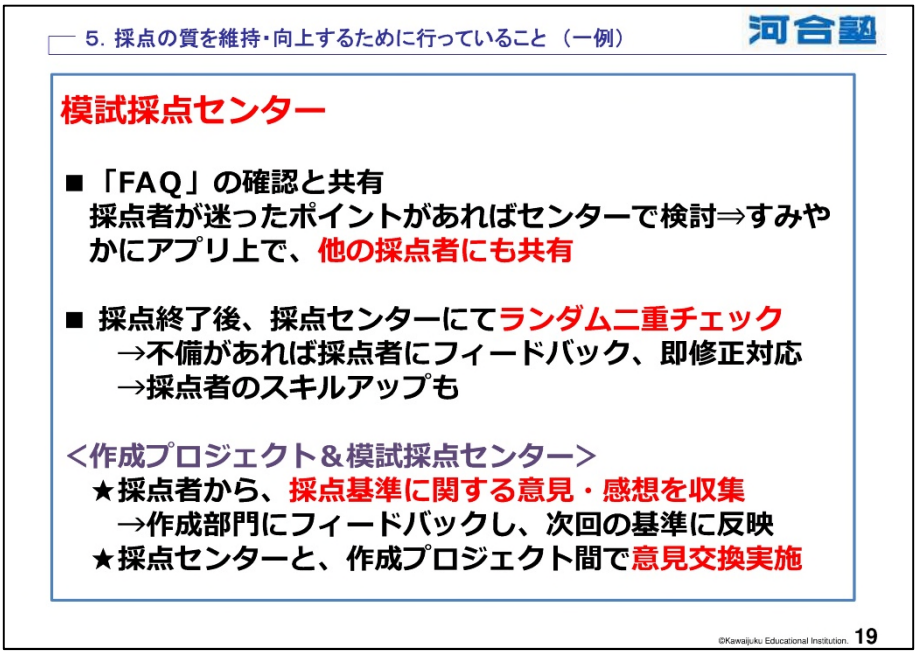


採点については，河合塾の模擬試験専用に開発した WEB アプリを使って，WEB 上で採点をしています。WEB アプリの利点としては，採点者からの質問を他の採点者と共有することができることが挙げられます。なお，採点者からは答案の個人情報を見ることはできなくなっています。



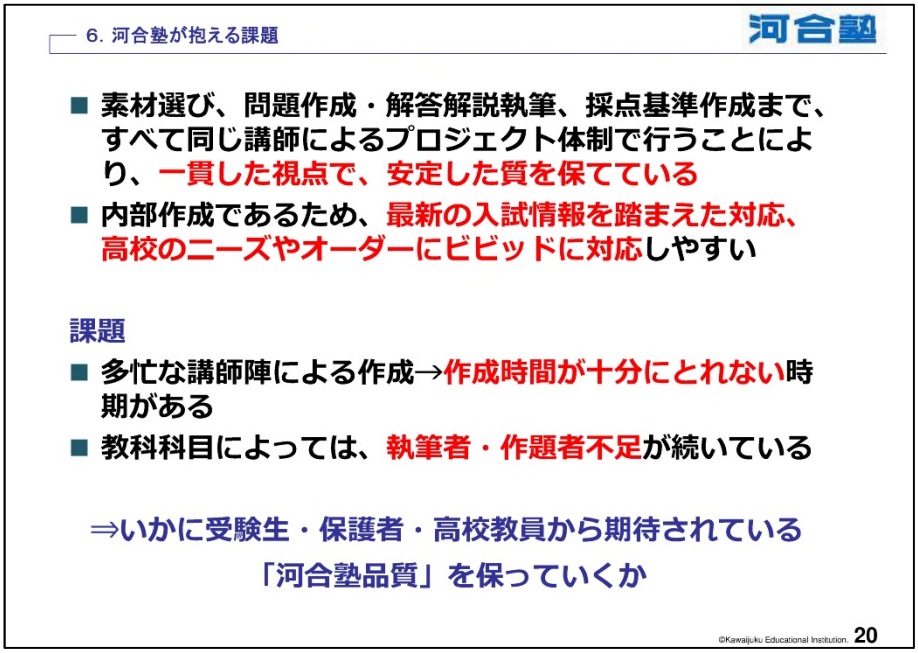
模試作成プロジェクトでは，実際の生徒答案を見て，採点基準案を作成します。全国にい

る採点者にとって分かりやすい記載になるよう工夫していますが，一番重要なのは，受験者が書きそうな「グレーな表現」を中心に基準を作成することです。「これが正解，これが間違い」ではなく，「グレーな表現」をどのように採点すべきか，何点を与えるべきかをきちんと採点基準に示すことが重要になってきます。



また，模試採点センターにおいて，採点者と答案の一括管理をしています。先ほどの説明のとおり，「FAQ」においては他の採点者にも共有しますし，ランダム二重チェックも行い，不備があれば採点者にフィードバック，および再採点を実施しています。

さらに，採点基準については，採点者からの問い合わせ内容や，採点者から意見・感想を収集して，作成プロジェクト間で意見交換を実施しています。



最後に，河合塾が抱える課題です。河合塾では，素材選びをはじめ，問題作成に係る全てを同一のプロジェクト体制で行うことにより，一貫した視点で安定した質も保てています。また内部作成であるので，入試の最新情報を踏まえた対応がしやすい，また高校さまのニーズやオーダーにビビッドに対応しやすいということがあります。

しかし，河合塾は予備校ですので，作成を担当する講師陣は授業を受け持っています。多忙な中で作成時間が十分に取れない時期がありますし，教科科目においては，やはり執筆者・作題者不足が続いています。河合塾としてはいかに受験生・保護者・高校教員から期待されている「河合塾品質」を今後も保っていくかが非常に重要です。

さらには，SNS での発信による事前実施の漏えいも課題の一つです。模擬試験ですので，高校さまの都合に合わせて受験できるように，かなり実施期間に幅を持って実施をしているため，事前実施の漏えいという問題もあります。正確な平均点や合格可能性判定に影響が出る可能性がある悩ましい問題ですが，対策を取ってもいたちごっこが続いています。

以上，私からのご報告とさせていただきます。ありがとうございます。

【荘島・司会】　１年を通して作題を行う河合塾の作題プロセスをのぞき見る非常に貴重なお話だったと思います。とても組織立っていて，われわれ大学関係者には大いに参考になるお話だったのではないでしょうか。ありがとうございました。

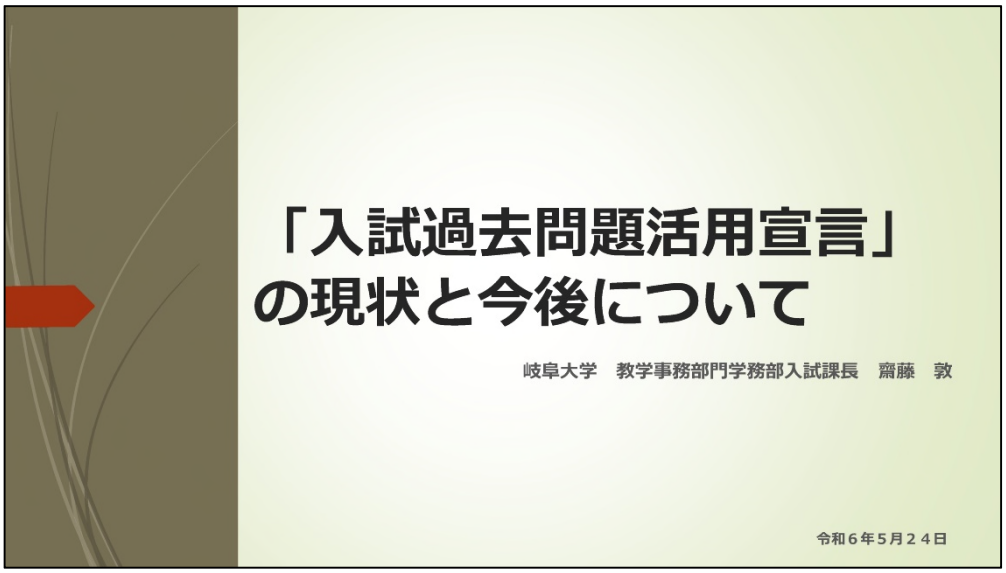
最後は岐阜大学の齋藤先生より，「『入試過去問題活用宣言』の現状と今後について」という題目でご報告をしていただきたいと思います。齋藤先生，よろしくお願いします。■

全体会 3　◉ 報告⑤

「入試過去問題活用宣言」の現状と今後について

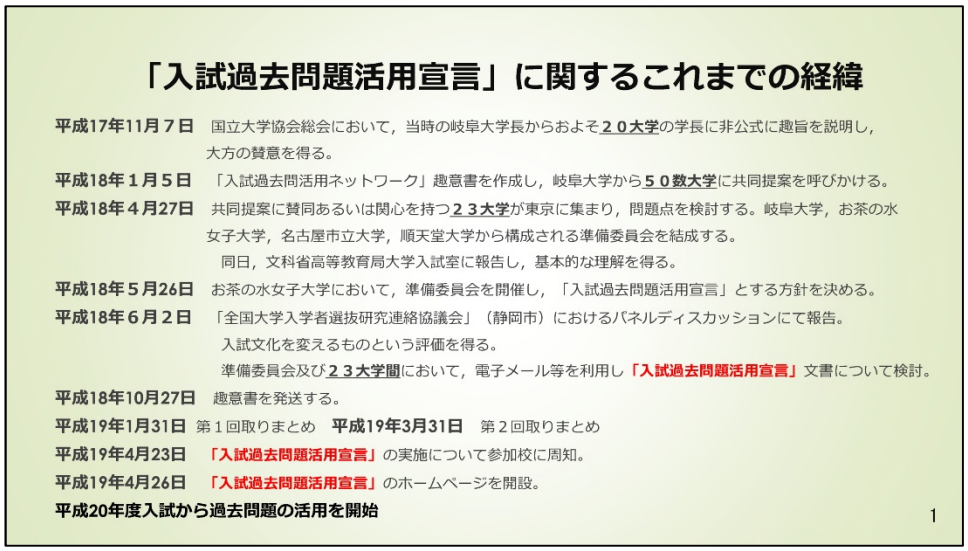
■齋藤　敦（岐阜大学 教学事務部門学務部入試課長）

岐阜大学入試課の齋藤です。このたびは報告・発表の機会を頂き，ありがとうございます。



「入試過去問題活用宣言」の幹事大学として，現状報告・本学の取り組みについて紹介させていただきます。

まず「入試過去問題活用宣言」について簡単にご説明します。これまで多くの受験の場で使用された入試問題は，膨大な数となり，その中には数々の良問が蓄積されているかと思います。これらの入試問題は，各大学に帰属するものですが，同時に大学のコミュニティの共有財産としての側面を持っているのではとの考えに立ち，それぞれの大学の入試過去問題を共有財産として活用しようという基本的な理念から「入試過去問題活用宣言」の宣言をするに至ったというところです。



次に，経緯についてご説明させていただきます。まず平成 17 年 11 月 7 日に，国立大学協会の総会において，これは非公式ですが，当時の岐阜大学長から約 20 の大学の学長に趣旨をご説明した上で，賛意を頂いたところから展開していきます。

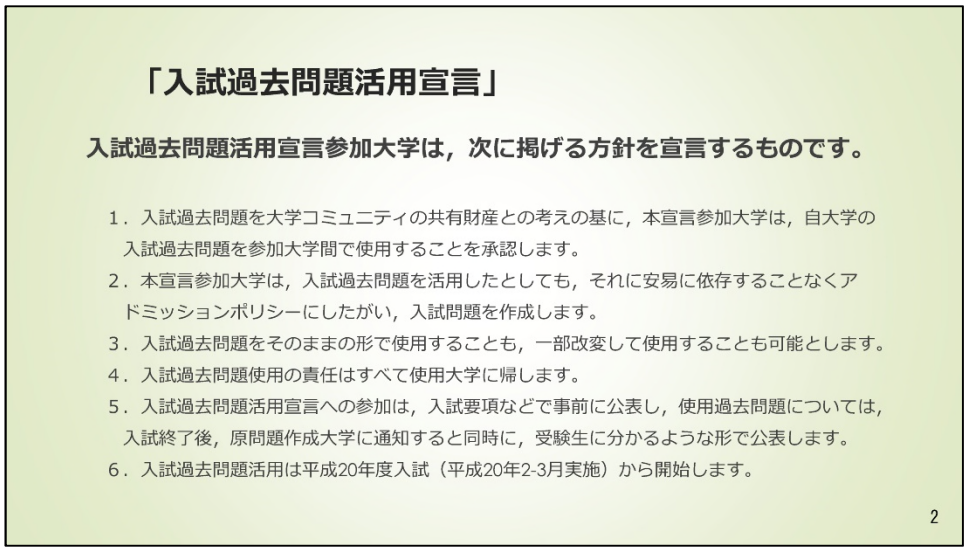
平成 18 年 1 月，「入試過去問題活用ネットワーク」の趣意書を作成し，五十数大学に共同提案を呼び掛けました。平成 18 年 4 月には共同提案に賛同，あるいは関心を持っていただいた 23 大学が東京に集まって，問題点を検討し，本学の他，お茶の水女子大学，名古屋市立大学，順天堂大学から構成される準備委員会を立ち上げて，同日，文部科学省高等教育局大学入試室にご報告し，基本的な理解を得ました。

平成 18 年 5 月に，お茶の水女子大学において準備委員会を開催し，「入試過去問題活用宣言」とする方針を定めました。

平成 18 年 6 月には，まさにこの「全国大学入学者選抜研究連絡協議会」のパネルディスカッションにおいて報告をさせていただいています。

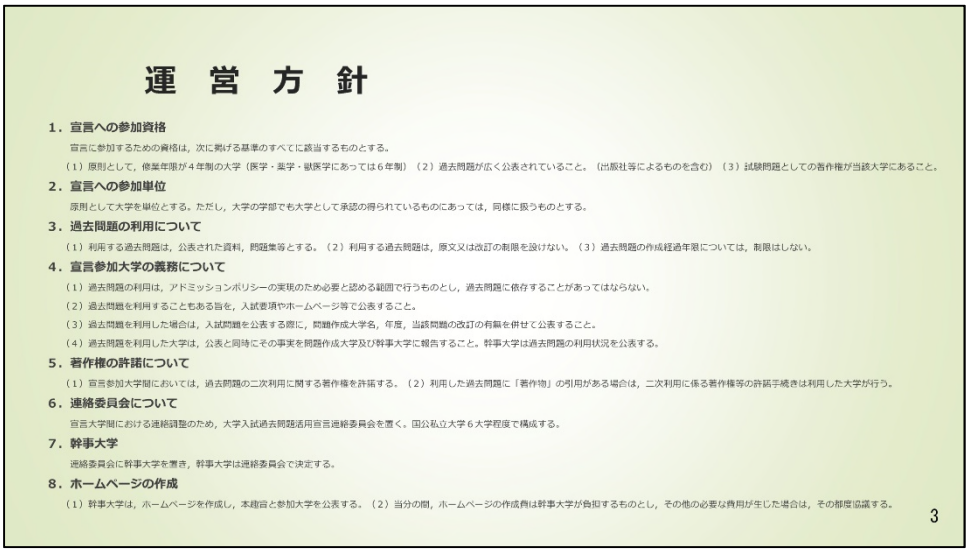
そして平成 18 年 10 月，約 400 の大学に趣意書を発送し，「入試過去問題活用宣言」にご賛同いただいた参加大学の取りまとめを行い，平成 19 年 4 月 23 日に，「入試過去問題活用宣言」の実施について参加校に周知をした上で，平成 19 年 4 月 26 日にホームページを開設しました。

平成 20 年度の入試から，過去問題の活用を開始しましたが，その取り掛かりから活用開始に至るまでに，2 年以上の歳月を費やしています。



続いて，こちらは「入試過去問題活用宣言」の基本方針です。

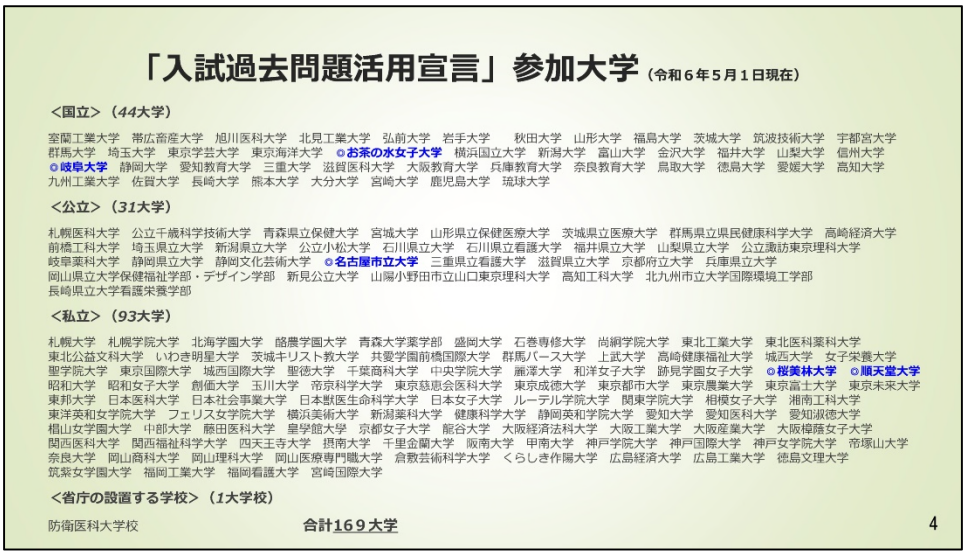
1 つ目が，「入試過去問題を大学コミュニティの共有財産との考えの基に，本宣言参加大学は，自大学の入試過去問題を参加大学間で使用することを承認します」というものです。2 つ目が，「本宣言参加大学は，入試過去問題を活用したとしても，それに安易に依存することなくアドミッション・ポリシーにしたがい，入試問題を作成します」というものです。3 つ目が，「入試過去問題をそのままの形で使用することも，一部改変して使用することも可能とします」というものです。それから 4 つ目が，「入試過去問題使用の責任はすべて使用大学に帰します」というものです。5 つ目が，「『入試過去問題活用宣言』への参加は，入試要項などで事前に公表し，使用過去問題については，入試終了後，原問題作成大学に通知すると同時に，受験生に分かるような形で公表します」というものです。最後が「入試過去問題活用は平成 20 年度入試（平成 20 年 2-3 月実施）から開始します」というもので，以上の 6 つの基本方針に基づき，宣言を行っています。



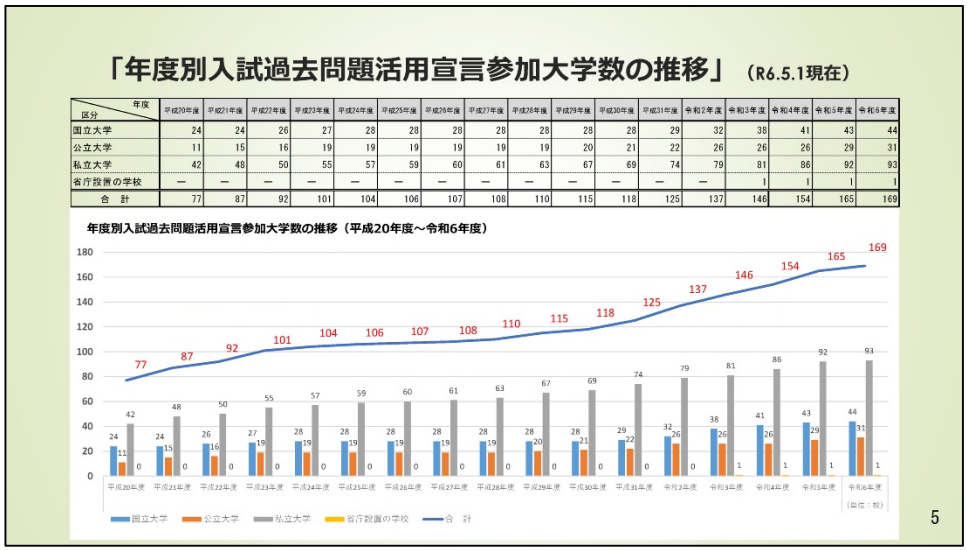
続いて，運営方針です。詳細は省略しますが，大きな柱として８つの項目から構成されています。これも読み上げさせていただきます。１つ目が「宣言への参加資格」です。２つ目は，「宣言への参加単位」です。参加単位は原則として大学を単位とするということです。３つ目が，「過去問題の利用について」です。４つ目は，「宣言参加大学の義務について」です。詳細については，（1）から（4）まで４つの規定が設けられています。続いて，５つ目が「著作権の許諾について」です。こちらも詳細については，(1)，(2) をご参照ください。６つ目の「連絡委員会について」は，「宣言大学間における連絡調整のため，大学入試過去問題活用宣言連絡委員会を置く」ということです。次の説明の中で，今の幹事大学を紹介させていただきたいと思います。

それから７つ目が「連絡委員会に幹事大学を置き，幹事大学は連絡委員会で決定する」というものです。最後，８つ目が「ホームページの作成」です。以上のことをホームページに掲載をした上で，どのような大学が参加しておられるか，どのような問題を各大学が利用したかということを今現在もホームページに掲載しています。

こちらは令和６年５月１日現在の「入試過去問題活用宣言」参加大学の一覧です。国立大学が 44 大学，公立大学が 31 大学，私立大学が 93 大学，そして省庁の設置する学校が１大学校ということで，合計 169 の大学にご参加いただいています。



幹事大学ですが，国立大学ではお茶の水女子大学，それから本学，岐阜大学に，公立大学では名古屋市立大学に，私立大学では桜美林大学と順天堂大学にお務めいただいております。

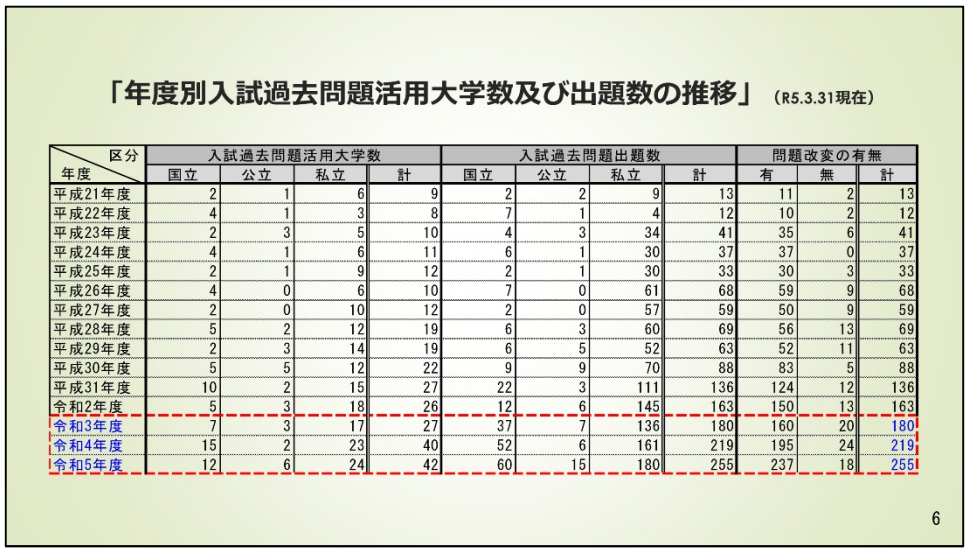


「年度別入試過去問題活用宣言参加大学数の推移」（R6.5.1現在）

区分＼年度	平成20年度	平成21年度	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度	平成31年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度	令和6年度
国立大学	24	24	26	27	28	28	28	28	28	28	28	29	32	38	41	43	44
公立大学	11	15	16	19	19	19	19	19	19	20	21	22	26	26	26	29	31
私立大学	42	48	50	55	57	59	60	61	63	67	69	74	79	81	86	92	93
省庁設置の学校	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	1	1	1
合　計	77	87	92	101	104	106	107	108	110	115	118	125	137	146	154	165	169

5

こちらは「年度別入試過去問題活用宣言参加大学数の推移」です。平成 20 年代から後半にかけては参加大学が極端に増えるということはなかったのですが，令和に入ってから徐々に参加大学が増えてきています。このグラフからそのような状況が分かるのではないかと思います。



「年度別入試過去問題活用大学数及び出題数の推移」（R5.3.31現在）

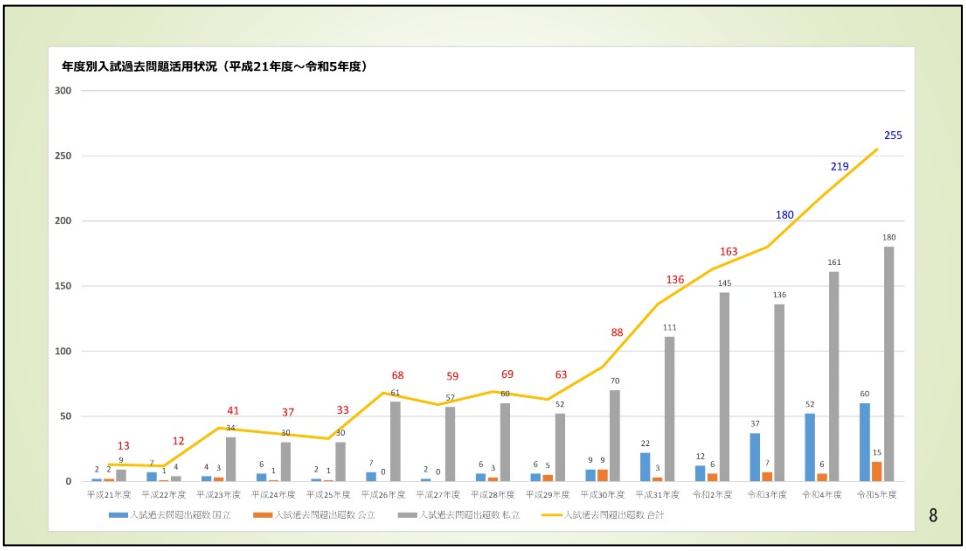
区分＼年度	入試過去問題活用大学数				入試過去問題出題数				問題改変の有無		
	国立	公立	私立	計	国立	公立	私立	計	有	無	計
平成21年度	2	1	6	9	2	2	9	13	11	2	13
平成22年度	4	1	3	8	7	1	4	12	10	2	12
平成23年度	2	3	5	10	4	3	34	41	35	6	41
平成24年度	4	1	6	11	6	1	30	37	37	0	37
平成25年度	2	1	9	12	2	1	30	33	30	3	33
平成26年度	4	0	6	10	7	0	61	68	59	9	68
平成27年度	2	0	10	12	2	0	57	59	50	9	59
平成28年度	5	2	12	19	6	3	60	69	56	13	69
平成29年度	2	3	14	19	6	5	52	63	52	11	63
平成30年度	5	5	12	22	9	9	70	88	83	5	88
平成31年度	10	2	15	27	22	3	111	136	124	12	136
令和2年度	5	3	18	26	12	6	145	163	150	13	163
令和3年度	7	3	17	27	37	7	136	180	160	20	180
令和4年度	15	2	23	40	52	6	161	219	195	24	219
令和5年度	12	6	24	42	60	15	180	255	237	18	255

6

続いて，「年度別入試過去問題活用大学数及び出題数の推移」です。令和 5 年 3 月 31 日現在，昨年度の状況です。平成 21 年度から令和 5 年度までの入試過去問題活用大学数，入試過去問題の出題数，問題の改変の有無について，各大学さまからのご報告に基づき取りまとめた表になります。

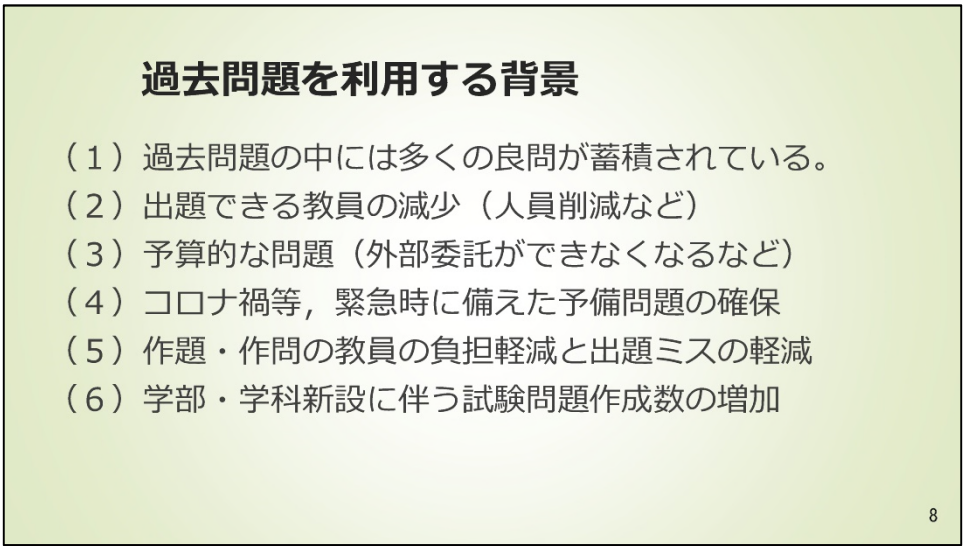
令和 3 年度から令和 5 年度にかけて，過去問題を使われた大学が多いことがお分かりいただけるかと思います。これは皆さまが推測されておられるとおり，コロナ禍が主な原因ではないかと考えられます。コロナ禍にあっては各大学で追試験がかなりの数実施されたことと思います。本学の出題委員からは，追試験に備えた予備問題の作成にあたり，過去問題

を活用したと聞いています。



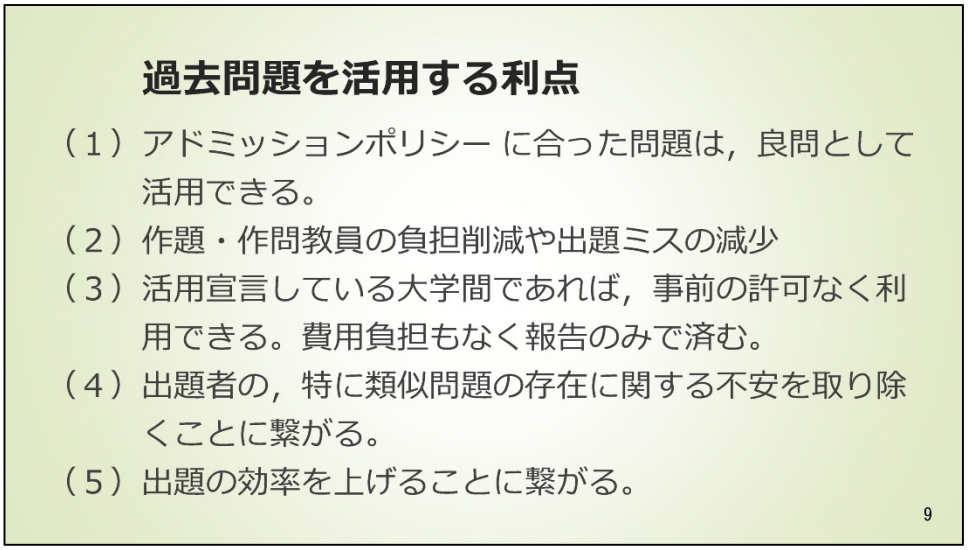
こちらは先ほどの一覧表のうち過去問題の活用状況のみをグラフ化したものです。平成31 年度から令和 5 年度にかけて，過去問題を活用される大学が増えてきていることがお分かりいただけると思います。

先ほどのグラフにも数値を掲載していますが，令和 3 年度は 180 題，令和 4 年度は 219 題，令和 5 年度は 255 題の過去問が活用されました。

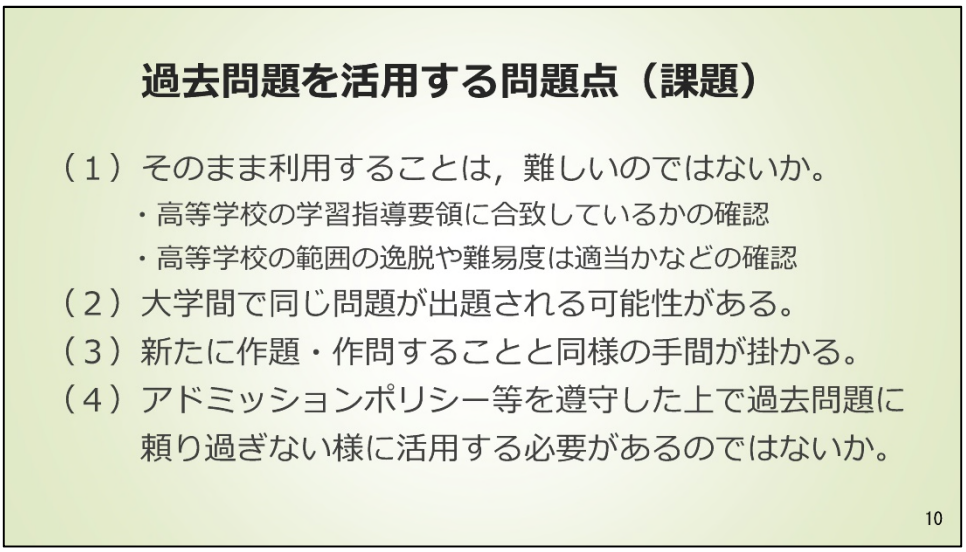


私見も入りますが，過去問題を利用する背景についてご説明します。まず（1）として，過去問題の中には多くの良問が蓄積されていることです。(2) として，大学によって状況は異なりますが，人員削減などによって出題できる教員が減少してきているということです。それから (3)，予算的な問題も影響しているのではないかと思います。これまで外部委託していたが予算面で継続が困難になったというケースも聞いているところです。(4) ですが，コロナ禍等，緊急時に備えた予備問題の確保を目的とする場合もあります。(5) は作題・作

問の教員の負担軽減と出題ミスの軽減につながるのではないかということです。(6) として，これは一部の大学かもしれませんが，学部・学科の新設等に伴う試験問題の作成数増加に対応するために利用したという話も聞いています。



続いて，「過去問題を活用する利点」です。(1)「アドミッション・ポリシーに合った問題は，良問として活用できる」点です。(2) として，「作題・作問教員の負担軽減や出題ミスの減少」につながるのではないかという点が挙げられます。(3) として，「活用宣言している大学間であれば，各大学に事前の許可なく利用・活用できる」点があります。また，費用負担なく，利用後の報告のみで済むところが利点と言えるかと思います。(4) は，出題者の，類似問題の存在に関する不安の解消につながるのではないかという点です。(5) としては，出題の効率を上げることにも少なからずつながる点です。



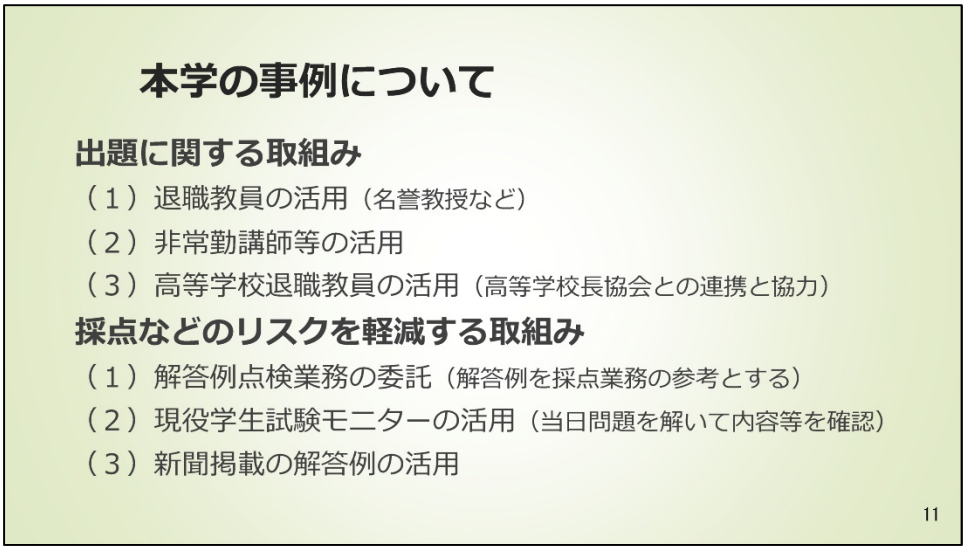
次に過去問題を活用する問題点，課題を挙げています。(1) として，高等学校の学習指導要領に合致しているか，高等学校の範囲の逸脱や難易度などについての確認が必要であり，

過去問題をそのまま利用することは難しいのではないかという点です。

（2）として，大学間で同じ問題が出題される可能性がある点です。これは過去問題の活用に限った話ではありませんが，挙げさせていただいています。

それから（3）として，新たに作題・作問をすることと同様の手間がかかる点です。本学の出題委員の教員に確認したところ，同じとは言わないまでも，それなりの手間がかかるとのことです。

（4）として，問題点というわけではないのですが，アドミッション・ポリシーといった各大学のポリシー等を遵守した上で，過去問題に頼り過ぎないように活用する必要があるのではないかということです。



今回のテーマ，「入試問題の出題・採点ミスを防止するしくみとは」に関連し，本学の主な取組みについて紹介させていただきます。

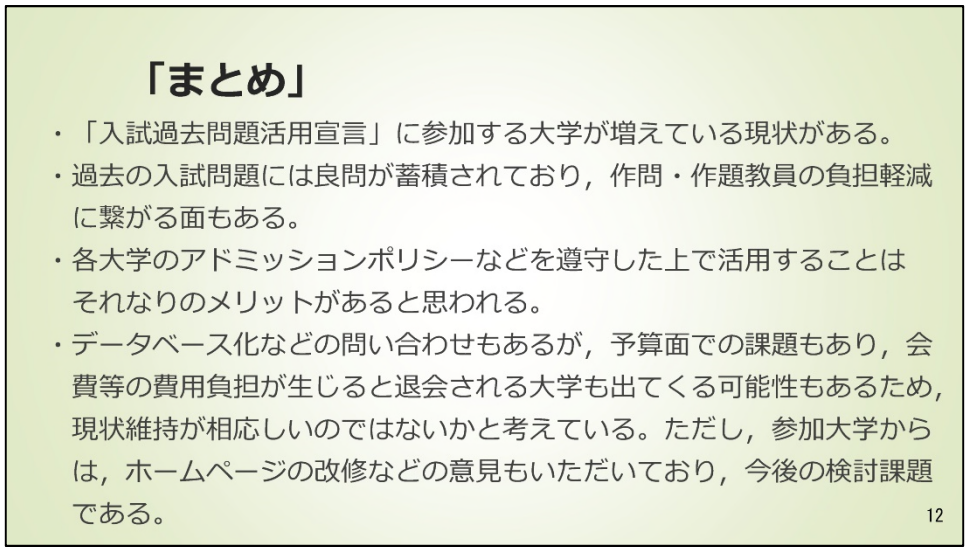
まず，「出題に関する取組み」についてです。本学においても，出題できる教員の数の減少が問題になっています。例えば，ある分野の教員がいないとか，１人しかいないといったことがあります。(1) として退職した名誉教授などにその出題の委員になっていただいているという事例があります。また，(2) として，本学の非常勤講師の先生方に出題委員になっていただいています。(3) としては，「高等学校退職教員の活用」があります。高等学校長協会に協力を依頼し連携しています。

当然，守秘義務等が課されますので，このような取組みがなかなか進んでいないという実態がありますが，近年では，高等学校を退職された教員の先生に出題委員になっていただいた事例もあります。

次に「採点などのリスクを軽減する取組み」についてです。(1) として「解答例点検業務の委託」を行っています。外部機関に作成いただいた解答例を採点業務の参考にしています。

（2）として，「現役学生試験モニターの活用」があります。当日の実施時間のおよそ１時間前に，主に 1 年生の学生にモニターとして当日の問題を解いてもらい，内容等に不備がないか確認しています。

（3）として，新聞に掲載される解答例を採点の時に活用した事例があります。



まとめに入らせていただきます。近年，「入試過去問題活用宣言」に参加される大学が増えています。過去の入試問題には良問が蓄積されており，これらの活用は作問・作題教員の負担軽減につながる面もあるのではないかということです。各大学のアドミッション・ポリシーなどを遵守した上で，活用することはそれなりのメリットがあると思っています。

データベース化に関する問い合わせも頂いているところです。こちらについては予算面の課題もあり，参加大学さまの費用負担も選択肢のひとつになるところです。しかし，参加のみにとどまる大学さまもあれば，多くの問題を活用・利用されている大学さまもおられることから，費用負担によって退会される大学さまが出てくる可能性があるため，現状維持が望ましいのではないかと考えています。

一方で，参加大学からはホームページの改修などの意見も頂いており，これについては今後の検討課題としているところです。

これで報告を終わらせていただきたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

【荘島・司会】　齋藤先生，どうもありがとうございました。入試の過去問題を共有することの取り組みについての現状をご報告していただきました。過去問題は入試ミスという観点からは良問のプールなのかもしれません。

以上，５人の先生方のご発表が終わりました。どうもありがとうございました。■

全体会 3 ◉ 全体討論

入試問題の出題・採点ミスを防止するしくみとは

■秋田　成司（大阪公立大学 副学長，教授）/西郡　大（佐賀大学 アドミッションセンター長，教授）/荒井　清佳（大学入試センター 研究開発部准教授）/椎名　久美子（大学入試センター 試験・研究副統括官，研究開発部教授）/網野　輝也（河合塾 教育企画開発部部長）/齋藤　敦（岐阜大学 教学事務部門学務部入試課長）/横井　修司（大阪公立大学 教授■司会）

【横井・司会】　それでは全体討論を始めます。ここからの司会は大阪公立大学の横井が務めます。よろしくお願いします。基本的には頂いたご質問に対してお答えしていただきながら，コメントがあれば受け付けていきたいと考えています。

早速，１つ目のご質問です。「西郡先生が AI の利用を提案されましたが，入試問題を外部のサーバーにアップするのは機密保持上難しいのではないでしょうか」というご質問です。西郡先生，いかがでしょうか。

【西郡】　私は AI や情報系の専門ではないのですが，技術の発展に期待したいというのが素直なところです。

例えば大学入試センターにおいて共通テストの問題チェックの際に AI を利用するようなシステムができ，各大学も利用できる仕組みが構築されるのが，個人的な理想形です。大学は自分の試験問題を大学入試センターに持ち込み，チェックをかけることが考えられます。もちろん，ネットワーク上でできればそれに越したことはないですが，将来的にそういった仕組みも１つの形ではないかと思っています。

まだ越えなければいけないハードルはあると思いますが，そのようなイメージを持っています。

【横井・司会】　ありがとうございます。入試に対して，コンピューターの力をどこまで借りるかというところの線引きや，さまざまな課題についてはまだまだ議論の必要なところではないかと思っています。他にこのご質問に対して，コメントはありますか。

【椎名】　大学入試センターの椎名です。質問者の方も書いておられますが，外部のサーバーにアップするというところが，最大の障壁ではないかと思います。入試問題についての日本の文化は，機密保持には非常に敏感です。試験問題の作成場所からいったん外に出すというところが，非常に大きなネックになるのではないかと思います。以上，コメントでした。

【横井・司会】　ありがとうございます。外部にあるサーバーに投げて AI に仕事をしてもらうことは，機密上，最大の障壁になると私も思います。

次の質問を頂いています。「入試センターの『作題ガイドライン』のお話がありました。これは，頂けるのでしょうか」というご質問です。

【荒井】　『作題ガイドライン』のダウンロードリンクをチャットに貼り付けますので，そちらからダウンロードをよろしくお願いします。

【横井・司会】　ありがとうございます。

では，次のご質問ですが，佐賀大学の西郡先生へのご質問です。「AI 等の技術によるミス防止への期待とありましたが，実務利用が可能なレベルになるのはいつ頃と考えていらっしゃいますか」というご質問です。

【西郡】　現時点では少し難しいのではないかという印象を受けました。もし河合塾さんのほうで，そういったサービスや仕組みが構築されるのであれば，利用しようかという大学もちらほらと出てくるのではないかと思います。私もこれは網野さんに聞きたかったことなのですが，どういう感触だろうかと思っています。

【網野】　まずご質問にお答えしますと，現在最先端を行っている Chat GPT-4 であってもあまり使えない状況です。特に数学，理科はもう壊滅的なことになります。英語においてもプロンプトを英語で書くと，GPT-3.5 で見つからないものがやっと GPT-4 で見つかるようなレベルです。気軽に AI 万能論には乗らないほうがいいのではないかと思っています。

しかしながら，ミスを素早く正確に発見することを考えると，やはり AI の力というのは非常に期待できますので，AI の専門家や大手出版社などの校閲部などとも協力しながら研究開発ができれば，非常に夢のある話が進むのではないかという感触があります。

【横井・司会】　ありがとうございました。網野先生には次のご質問までお答えしていただきました。私が読み上げなかったのですが，「問題修正の信頼度について」ということで，どの程度のミスを拾い上げられるのかという実感レベルで言うと，基本的には今の ChatGPT-4 のバージョンでも使えないということです。こちら側が相当工夫してやっと初めて答えが得られるかどうかと考えればいいですか。

【網野】　2 つ目の質問になりますと，API の導入はしていないです。ただデータはどのようなものかというと，テーマ英作文の答えに間違いがないかのチェックであるとかの，文章のチェックには少し活用させていただいています。

河合塾の中では，英作文の解答例を幾つか載せなければいけませんので，英作文の解答例を 1 回 AI に書かせてチェックをしたり，英語・日本語の対話文の会話を作ってもらったりします。

設問に沿った日本語の対話を作るのは字数制限などもあり難しいものです。しかし共通テストに代表されるように，対話文を使った問題が非常に増えていますので，それを Chat GPT などに書いてもらう形で活用はしています。

【横井・司会】　ありがとうございます。

続いて岐阜大学の齋藤先生への質問です。「自大学の過去問題を活用した事例というのはどれぐらいあるのでしょうか」ということで，自らの大学が何年か前の問題をもう一度出すといったような事例がどれぐらいあるかというご質問だと思います。齋藤先生，よろしくお願いします。

【齋藤】　よろしくお願いします。これは岐阜大学，本学における入試過去問題の年度別（平成 20 年度～令和 5 年度）の利用状況です。全く使っていない年度もありますが，先ほど申し上げたとおり，令和 3 年度は 11 題，4 年度が 5 題，5 年度は 13 題の利用実績があります。特に本学においては化学，生物といった理科の問題で利用させていただいています。

こちらにつきましては，ホームページで年度ごとに各大学の活用状況を報告させていただいています。

【横井・司会】　ありがとうございます。岐阜大学さまだけでなく，他大学の活用状況についてもホームページで公開されているということです。もしご興味がありましたら，ホームページをご覧いただいて，他の大学の状況も含めて見ていただければと思います。

他の先生方で，これに対してのコメント，あるいは何かご質問，ご議論はありますか。

【西郡】　西郡です。質問者の意図は，自分の大学の過去問を使ったことがありますかという質問だったと思うのですが，そのような事例はないのでしょうか。

【齋藤】　失礼しました。自分の岐阜大学の過去の問題を岐阜大学において使ったかどうかということですね。本学においては，当然使ったこともありますが，本学の申合わせにおいて，本学において使った過去 5 年間の問題は利用しないことが定められています。ただ他大学の過去問題については，5 年という縛りはありません。以上です。

【横井・司会】　岐阜大学の例ということでご紹介をしていただきました。西郡先生，サポートをありがとうございます。他にないようでしたら，次のご質問にいきたいと思います。

次は「大学入試共通テストの過去問利用は，事前許可なく大学入試への利用可能であると聞いたことがありますが，間違いはないでしょうか」というご質問を頂いています。

【大学入試センター事務局】　大学入学共通テスト過去問題の著作権法に基づいた利用について，大学入試センターとして妨げるものではありません。
ただし，入試問題として利用された場合には，試験実施後に大学入試センター試験企画課までご報告いただけますと幸いです。

【横井・司会】　ありがとうございます。
次のご質問ですが，「齋藤先生のお話では，令和 5 年の国立大学は 12 分の 60 ということで 1 大学当たり 5 問も利用されているようです。大変多いと感じますが，問題数をどのように数えられているのでしょうか」というもの。もう 1 つが，「解答例点検業務の委託について，タイミングや委託先等，可能な範囲で教えていただければありがたいです」というもので，2 つの質問を頂いています。齋藤先生，よろしくお願いします。

【齋藤】　どうもありがとうございます。先ほどご説明したとおり，活用されました大学さまから利用した問題を一覧表等にして本学にご提出いただき，取りまとめています。
実際には，10～15 問と利用される大学もありますし，1，2 問しか利用しない大学もあります。単純にその平均を取ると 5 問になりますが，利用数は大学により異なります。
それから解答例の点検業務の委託につきましては，各科目の部会に対して，解答例が必要かどうかを確認した上で，必要がある部会について委託していますので，必ずしも全科目について委託するわけではありません。年度当初から確認を行い，全科目からの回答が出揃い次第，外部の受験産業さまに見積もり等をお願いする形です。当然，守秘義務等を記載した契約書を交わしています。

【横井・司会】　ありがとうございます。
次の質問です。「入試ミスが発生した後の大学の対応事例を教えてください」ということで，西郡先生，よろしくお願いします。

【西郡】　資料に載せていたものは新聞記事で調べたものなのですが，生データまでさかのぼらないと具体的な対応方法まで追うことはできません。今，いろいろ探したのですが，15 年近く前の資料であり探しきれませんので，ここではお答えできません。申し訳ありません。

【横井・司会】　ありがとうございます。確かに少し難しいと思います。
次は荒井先生への質問で，「マークシートの解答選択肢というのは，科目内では統一されているほうがいいのでしょうか。実態として複数人で作問をしており，『ア，イ，ウ』，『①，②』など，整っていない状態です」ということですが，ご回答をよろしくお願いします。

【荒井】　ご質問をありがとうございます。個人的な感覚ではそろえられるならば，そろえておいたほうがいいだろうと思います。さまざまな選択肢があると，点検をする時に目がちらちらしてしまい，ミスを見つけづらくなるので，認知負荷は減らしておくほうが良いだろうと思います。

また，マークシートを利用されている場合には，印刷されている記号がマークシートごとに異なると思いますので，マークシートの記号に合わせておくことも重要です。これについて作題ガイドライン等に明記しておくと，マークシート上にマークする場所がないというミスを避けられると思います。以上です。

【横井・司会】　ありがとうございます。

では次にいかせていただきます。河合塾の網野先生へ，「単語レベルチェックの仕様を独自システムで販売されているのですか」というご質問。もう一つが「採点者は自宅から集まるのですか。どこで丸付けをしているのですか」というご質問です。よろしくお願いします。

【網野】　まず単語レベルチェックの仕様は独自システムです。活用形を原形に直した上で単語を当てるシステムですが，このリストはわれわれが研究，分析した蓄積を入力したものですので，販売はしていないということでお答えします。重複システムの仕様については，申し訳ありませんが，これは部外秘のものになりますので，詳しくお話はできません。著作権の関係がありますので，文章を丸々投入しているわけではないということだけお伝えしておきます。

電子採点については，採点者は自宅からパソコンでログインをして採点を行います。以上，お答えになります。

【横井・司会】　ありがとうございました。

次はコメントのご紹介です。「問題作成のミスを見る時に AI ということでお話がありましたが，外部サーバーにも送らずにスタンドアローンで利用可能な AI も現れつつあるので，それは候補になりそうです」ということです。

次は河合塾の網野先生へ，「大学入試では作題者の確保に苦慮していますが，予備校では講師の先生は模試の作成を快く引き受けてくださるでしょうか。固辞される方は少ないのでしょうか」というご質問です。

【網野】　固辞される方は非常に多いです。その要因としては，報酬に対するタイムパフォーマンスが非常に悪いということがあるかと思います。

【横井・司会】　続けて，「問題訂正，採点基準訂正などはどの程度，発生しているのでしょうか」というご質問も頂いています。

【網野】　およそ十数件程度になります。年によって上下しますので，10 件を超える時と

超えない時があり，廃問は出てしまう年とない年があります。

【横井・司会】　ありがとうございます。「過去問題について齋藤さんに質問をします。教科横断的ないわゆる総合問題にも使える問題が過去問題の中にあるのでしょうか」というご質問で非常に内容に踏み込んだことですが，お答えいただけますか。

【齋藤】　ありがとうございます。過去問題の活用につきましては，今，宣言をしていただいている大学さまにおかれては，例えば小論文なども利用できると認識をしています。
赤本やその大学のホームページ等に掲載してあるものであれば，基本的には利用ができるという認識でいます。以上です。

【横井・司会】　続いての質問です。「齋藤先生へのお伺いです。過去問題とは大問の全体の流れを利用するというのではなく，小問を利用するということなのでしょうか。例えば生物であれば，呼吸に関する大問の流れを全部利用するのではなく，ATP は何に分解されるのかというぐらいでしょうか。それでしたら過去問利用というレベルではないように思うのですが」ということです。齋藤先生，お答えできますか。

【齋藤】　ありがとうございます。大問，小問については，大学さまによって報告時の単位がまちまちではないかと思います。おっしゃられる意味は理解するのですが，そこまで具体的な報告を頂いていないところもありますので，明確な回答は難しいです。申し訳ありません。

【横井・司会】　ありがとうございます。過去問にインスパイアされて似たような問題が作られるということを，過去問利用とするかしないかのご判断になると思います。そういうものは過去問利用には当たらないだろうと考える方もいらっしゃるでしょうし，インスパイアされたのだから過去問利用になるのではないかとご判断をされる方もいらっしゃると思います。
こういった線引きを事務局が決めるというのももしかすると違う話なのかもしれないとも思います。ご理解いただければと思います。
頂いたご質問には大体お答えできたのではないかと思います。パネリストの先生方で，他にご意見・ご質問がある方はいらっしゃいますか。
それでは，私から西郡先生にお伺いします。私が所属している大学もそうですが，短い期間に前期，中期，後期と３つの試験が行われる体制の中で，修正等の作業を行っています。中期のスケジュールのタイトさについて，お考えはありますか。

【西郡】　ただでさえスケジュールがタイトな状態で，中期がある公立大学さんは大変な状況でやっているということがあると思います。われわれは前期と後期だけでも大変な状況で，中期というところまでは考えたことがありませんでした。申し訳ありません。

先ほど頂いた「入試ミスが発生した後の大学の対応事例」について改めて回答します。解答用紙を紛失した場合の対応というのが見つかったのですが，当該科目を 100 点満点で処理して対応したが不合格となったというような内容だったようです。

【横井・司会】　ありがとうございます。

中期を抱える大学は，中期の実施を大きな課題として考えているところだと思います。特に私が所属する大学は中期の規模が非常に大きいため，スケジュールが厳しいといつも思っているところです。

続いて，椎名先生に私からお聞きしたいことがあります。小規模の大学から「手引き」があまり必要ではないということ，あるいは過去問を見るだけで作ることができるというご意見を頂いているということでした。作題を担当する年度の間隔が非常に短い，あるいは「毎年，私が担当で，何なら『手引き』が自分である」という感覚で作題が行われているのかなと想像しました。そういうことが「手引き」は必要がない理由に当たるのでしょうか。

【椎名】　短い期間で担当者の方が変わる中でどのように作問するのかを念頭に作成した質問項目ですので，確かに小規模大学において，限られた作題者がずっと作っているような場合には，必要ないという考えにつながるのかもしれません。

ただ私は，何らかの作成方針を文書にしておくということは，ミスを防止する上では大事ではないかと考えています。

【横井・司会】　私も同感です。どんなに大学の規模や作題部会が小さくても，やはり指針を持ち，その見直し・修正を繰り返した上で作題が行われるべきではないかと思います。「手引き」が自分であると思い込んでしまうのは確かに危険な行為ではないかと思います。

ただそのように思いがちになってしまう面はあるかと思いますので，携わる方々の意識を毎年リセットするような，そういう思いをきちんと持ち直すというようなことはやはり大切なのではないかということを感じました。

終了時間になりました。押し気味で進みましたので，総合討論の時間がうまく取れなかったことと，質問がたくさんあり少し駆け足で進んでしまいました。十分なお答えができなかった部分，あるいは少し意図と違った部分があったかもしれません。

本日は本当にありがとうございました。非常に勉強になりましたし，発表・総合討論を含め今後の参考になりました。本企画をきっかけに，入試の質の向上・作題方法の改善が，負担のない形で進むことを期待してこの総合討論を終わりたいと思います。

これで全体会 3 を終了します。ご発表をしていただいた先生方に拍手で終わりたいと思います。ありがとうございました。■

令和６年度 全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会（第 19 回） 実施結果

１．大会実施概要

期　　日 ：令和６年５月２３日（木）～２５日（土）

主　　催 ：独立行政法人大学入試センター

共　　催 ：大阪公立大学

参 加 費 ：1人 3,000円（税込）

開催形式 ：Zoomによるオンライン開催

参加申込者数 ：496人（令和５年度参加者数 400人）

		国立大学	公立大学	私立大学	高等学校	その他	合計
参加申込者数		156(150)	94(83)	152(108)	60(37)	34(22)	496(400)
内訳	教員・研究者	102 (98)	58(45)	41(35)	59(36)	3 (0)	263(214)
	事務職員等	54 (52)	36(38)	111(73)	1 (1)	31(22)	233(186)

単位：人　　（　）は前回大会の参加申込者数。

２．日程・プログラム

日　　程	プログラム	時　　間
【１日目】 ５月２３日 （木）	○ 自主企画セッション 「個別入試への「情報」の出題」	10:00 ～ 12:00
	○ 全体会１（センターセミナー） 「大学入学者に対する追跡調査研究の現状と展望」	14:00 ～ 17:00
【２日目】 ５月２４日 （金）	○ 主催者挨拶，来賓挨拶	9:40 ～ 10:00
	○ 全体会２ 「見過ごされがちな高大接続課題： 不本意入学，ミスマッチ入学，学力不足」	10:00 ～ 12:30
	○ 全体会３ 「入試問題の出題・採点ミスを防止するしくみとは」	14:00 ～ 17:00
【３日目】 ５月２５日 （土）	○ 研究会（各研究会終了後に交流の場を30間設ける）	
	◆ オープンセッション（第１部）	
	・第１セッション〔志願者動向，入試方式〕	9:30 ～ 12:00
	・第２セッション〔入試広報〕	9:30 ～ 12:00
	・第３セッション〔選抜方法，追跡調査，CBT〕	9:30 ～ 12:00
	◆ オープンセッション（第２部）	
	・第４セッション〔多面的・総合的評価，入試研究〕	13:30 ～ 16:20
	・第５セッション〔高大接続，高大連携〕	13:30 ～ 16:20
	◆ クローズドセッション（第１部）〔選抜方法，入試運営〕	9:30 ～ 12:00
	◆ クローズドセッション（第２部）〔高大接続，追跡調査〕	13:30 ～ 16:20

大学入試研究の動向

42 号

令和 6 年 12 月

発行/独立行政法人大学入試センター

〒153-8501 東京都目黒区駒場 2-19-23

https://www.dnc.ac.jp/ ☎03-3468-3311

編集/試験企画部試験企画課